
ドラゴンクエスト? そして現実へ...

あちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ そして現実へ…

【Nコード】

N6325X

【作者名】

あちゃ

【あらすじ】

DQ?の世界に『友と絆と男と女』のリユカが迷い込みました。チャライノリでなんとか生きて行く…そんなDQ?です。

ヌルい作品ではございますが、ご了承下さい。

今作品の前に私の「ドラゴンクエストV～友と絆と男と女」をお読み頂けると、より一層楽しんで頂けるはずです。よろしくお願い致します。

プロローグ

<アリアハン>

「勇者オルテガの娘アルルよ、よく来た！面を上げよ」

ここはアリアハン城内、謁見の間。

玉座に座るアリアハン国王を前に、少女が一人傳いている。

少女の名は『アルル』

10年前、魔王バラモスを倒すべく一人旅立ち、火山で死亡した『オルテガ』の娘である。

「昨今、魔物の活動が活発になってきていると言う！世界を救う為、人々を救う為！そして志半ばで倒れた父オルテガの為、勇者アルルよ！魔王バラモスを成敗して来るのだ！」

「は！微力ではありますが、全力を尽くします！」

少女は力強く答える。

「うむ！…オルテガと同じ轍を踏まぬよう、ルイーダの酒場へ行き旅の仲間を集めよ」

国王は立ち上がり謁見の間を出て行く。

大臣の一人が少女へ近付き、幾ばくかのゴールドと装備の入った袋を手渡し退室を促す。

アルルは城を出るとすぐに先程手渡された袋の中身を確認する。

中にはこん棒2本、櫓の棒1本、旅人の服1着、50ゴールド…

「何これ！？シヨボ！」

思わず大声を出してしまった自分に驚き、慌てて人気のない裏路地へ逃げ込むアルル。

「はあ〜」

アルルは深い溜息と共に、再度手渡された袋の中身を確認する。

「何度見てもシヨボーいわね…」

満を持してアリアハン王国が、世界へ旅立たせる勇者へ贈る祝儀としては溜息の出るレベルである。

「誰か途中でちよっぱねたんじゃ無いでしょうね！？装備品はともかく、50ゴールドって…その100倍あっても良くない？」

アルルは愚痴をこぼしながら人気のない裏路地から川沿いの小道へと移動する。

幼い頃より『勇者』として使命を帯びた人生を歩んでいたアルル。

剣術も魔法も鍛錬を怠った事はなく、同じ年頃の少女としてはかなりの手練れではあるものの、魔王討伐にたった一人で赴くつもりは毛頭無い。

従って国王に言われるまでもなく、旅の仲間を求めルイーダの酒場へ赴いているのだが…

《この旅は辛く過酷な旅であろうから、最低でも仲間はあと3人はほしい！でも50ゴールドじゃあまともに装備を揃える事も出来ない…1人ぐらいいは装備品の有無に拘わらず、強い仲間が必要ね！居るかしら、そんな都合がいい人？》

アルルが一人先の展望を考え歩いていると、前方の空間に奇妙な穴が出現した！

「な、何よ！あれ？」

地上3メートル程の何も無い空間に何処へ通じているのか分からない穴！

好奇心から穴の側に近付くと…

ドサツ！！

穴から何かが落ちてきて、穴は閉じてしまった…

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって！しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ！！」

穴から吐き出されたのは、一人の青年だった。

20代半ばの青年は、紫のターバンを巻きマントで体を覆っているが、その体軀は歴戦の強者を醸し出している。

手には竜を形取った杖を携え、顔立ちは整った美青年である。

そして何より吸い込まれそうな程透き通った瞳が印象的な青年だ。

その青年がアルルに気付き、視線を向け優しく心地よい声で話しかける。

「やあ、こんにちは」

10人の女性が居たら、10人とも見とれるであろう青年に、アルルも例外なく見とれ呆けている。

「見ていたら分かと思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

ブログ（後書き）

どうもあちゃです。

またやります。

次話の「裏ブログ」も同時投稿。

二つ読んで初めて一つのブログです。

応援よろしく願います。

ご感想お待ちしております。

見切り発車なので間隔開くかも…

裏プロローグ

<グランバニア>

魔界の魔王ミルドラスを倒してから7年の歳月が流れた、ここグランバニアでは国民に絶大な支持を得ている国王が、今日も気ままにメイドをナンパしている。

「やあ、エルフィーナちゃん。今日もキレイだね！今夜あたり僕とどう？」

とても国民に絶大な支持を得ているとは思えぬチャラさで、メイドを口説く国王…

「リュカ！いい加減にしなさい！また愛人増やすつもり！？」

「やや！？違うツスよ、ビアンカさん！！これは僕流の挨拶ツスよ！」

王妃に叱られるも、全く堪えない男…それがグランバニア国王リュカである。

リュカとビアンカの間には3人の子供がいる。

長男のティミー17歳、長女のポピー17歳、そして次女のマリイ7歳。

ポピーは半年前、友好国のラインハットの王子コリンズの元へ嫁いだ為、現在はティミーとマリイが正式なグランバニア王家の血筋である。

現在ティミーは身分を隠匿し、城の兵士として働いている。

またマリイも城下の学校へ平民として通っている。

そのティミーが国王直属の近衛として配属されてから半年、今日も執務室で父親にからかわれていた…

「ねえーティミー…いい加減彼女作れよお…一人で良いからさあー」

「僕の好みの女性が居ないんです！ほつといて下さい」

以前から繰り返されたやり取り…しかし、娘の一人が嫁ぎ親元を離れた事もあり、以前よりしつこく彼女を作る事を進める父…

そんな何時もと同じやり取りに、何時もと違う事態が訪れる。

「あれ？何だこれ！？」

それは、執務机に山積みになった書類の中から出てきた1冊の分厚い大きな本である。

その性格に似合わず綺麗好きなりユカは、整理整頓はきっちり行っていた為、机の上に置かれた見慣れぬ本に違和感を憶えていた。

「何だよ！誰だよ、勝手に置いていったのは！？て言うか、何処から持ってきたんだよ！？」

そう文句を言いながらも、本を開き読み始めるリュカ。（基本、読書好きである）

本には前書きがあり、そこには…

【人生という物語には各々主役が存在する。主役は別の主役と出会い、そしてまた新たな物語が紡ぎ出されて行く。この物語はそんな物語の一つである。】

そして次のページにタイトルが…

【そして伝説へ…】と…

「何だ！？随分と面白そうじゃないか！！」

リュカは書類の山には手を付けず、本の続きを読もうとしている。しかしページを捲り終えた瞬間、大声で激怒し始めた。

「何だこりゃ！？続きのページには何も書かれて無いじゃん！！バカにしてるの！？偉そうなタイトル付けやがって！」

ページを何枚か捲り、全てが白紙である事を確認したリュカはタイトルページに戻り、徐にペンを手にする。

「何が【そして伝説へ…】だよ！現実なんてこんなもんだよ！！タイトル直してやる！」

リュカはタイトルの【そして伝説へ…】にペンで2本線を引くと、自らタイトルを書き直した…【そして現実へ…】と…

すると本が突然輝きだし目の前のリュカを吸い込み始めた！

慌てたリュカは手近にあった物を掴み難を逃れようとしてみたが、掴んだ物が常用している『ドラゴンの杖』だった為、杖ごと一緒に吸い込まれてしまった。

<アリアハン>

ドサツ！！

リュカは地上3メートル程の所に開いた穴から吐き出され、受け身をとることなく地面に落ちた。

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって！しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ！！」

そこは先程まで居た執務室とは明らかに違う。
まずそこは外だった。

そして目の前には16・7歳くらいの少女が驚いた表情でリュカを見ている。

「やあ、こんにちは」

どう見てもそこはグランバニアとは違い、過去の記憶から別世界へ迷い込んだ事を察したリュカは、目の前の少女を脅かさない様に話しかける。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

青年と少女の冒険の物語が始まろうとしている。

旅は道連れ（前書き）

やっときさ、本編突入！

色々書きたい事はあるんだけど…

まあ、ともかくもお楽しみ下さい。

旅は道連れ

<ルイーダの酒場>

そこは大勢の人々で溢れかえっていた。

まだ昼前だと言うのに、酒を飲んでくだを巻く冒険者達で…

「貴女か噂の勇者様ね。ルイーダの酒場へようこそ。ここは出会いと別れの場よ」

酒場の女主人『ルイーダ』が妖しく美しい表情で二人に話しかける。何故この二人が連れ立ってこのような場所に来たかと言うと…

アルルの真剣な思いと、リュカのいい加減な思いが合わさり化学反応を起こした結果である。

簡単に言うと、自己紹介を終えた二人は互いの状況を説明、助力を願ひ互いに承諾。

アルルの願ひは「見るからに旅慣れした屈強な戦士（風？）の男に魔王討伐の手助けをしてもらう事」

リュカの願ひは「ともかく帰りたいけど、どうして良いのか分からないから、どうせなら美少女と一緒に居る方が楽しいし一緒に付いて行こうかな…」

である。

互いの思いの温度差に気付くことなく、状況は変化し更なる仲間を求めルイーダの酒場へやって来た…

「あの、魔王討伐に旅立ってくれる冒険者は居ますか？」

「さあね…そこらに居るんじゃないかねえ」

アルルの真剣な眼差しも感銘を受けることなく一瞥して終わるルイーダ。

「あははは！昼真っから飲んだくれる連中が役に立つのか？まあ…

使い捨ての盾ぐらいにはなるか！あはははは！」

酒場を見渡したリュカが腹を抱えて笑い出す。

リュカの透き通った声はこの喧噪の中でも、人々の耳に届く声の為、酒場内は一斉に静まりかえる…

血の気の多い冒険者達の中、一人の男がリュカの前へやって来る…

リュカの身の丈程あるう戦斧を肩に担ぎ、リュカより頭2つは大きい男…

「聞き捨てならねえな！俺は最強の戦士ボーデン！テメエの様なヒョロ男なんざ、瞬殺してやんよ！！」

「あー…あんまり自分で最強の戦士って言わない方が良いよ…ものつそい格好悪い！」

自称最強の戦士の矜持を傷つけるには十分すぎる発言だった。

「き、貴様ー！！」

自称最強の戦士は手にした戦斧をリュカに向け振り下ろす！

その場にいた誰もが軽口を叩く男の無惨な死体を予想した…

だが現実には、左手の親指と人差し指で戦斧の刃部分を掴み、顔色一つ変えず受け止めている男と、顔を真っ赤にして戦斧を振り下ろそうと藻掻いている大男の姿だった。

周囲の誰もが目を見開き驚愕する…

昼間から飲んだくれてはいるが、実際にその男はかなりの強さではあるのだ。

大男の戦斧は微動だにせず、押し切る事も、引き抜く事も出来ない。

「ぐおおお！は、放しやがれええ！！」

顔を真っ赤にして呻く大男に気付いたリュカは、

「あ、ごめん。忘れてた」

と、手を離す。

その瞬間、全体重をかけ戦斧を引き抜こうとしていた大男は支えを無くし、後方へ大きく吹っ飛んだ！

大男は2メートル程離れたテーブルの上に背中から落ちる…

大量の酒が並んだテーブルを酒瓶やグラスと共に押し潰し、大男の

意識は遙か彼方に飛び去った…

静寂が包む中、緊張感の無い声が響き渡る。

「あー…この中で我こそはって言う人いない？魔王バカボンを倒す旅に協力してくれる人は！？」

「バラモスです！魔王バラモス！！」

「ん？ああ…それぞれ…！で、どう？」

周囲を見渡すリユカ…

しかし先程までの喧噪はなく、酔いの覚めきつた自称冒険者達は俯き眩くのみ…

「アンタ…俺達に死ねと言うのか…」

「言つてないよそんなこと。僕も死にたくないもん」

「魔王バラモスなんて倒せるわけ無いだろ…！だから俺達は現実を忘れる為に、酒を飲み憂さを晴らしてんだ…」

静まりかえり俯く自称冒険者達の中を掻き分ける様に二人の人影がアルルとリユカの前へやって来た。

二人のうち一人は少女で、身長は170に満たない僧侶風の美少女。もう一人は少年で、身長は更に低く160あるかないかの魔道士風の美少年。

「お、俺はウルフ。まだ駆け出しだけど魔法使いだ！」

「あの、私はハツキです。その…見習いですが僧侶として頑張ってます。」

「俺達、絶対足手纏いにならないから連れて行ってよ！」

「私達孤児なんです！バラモスを倒す為なら頑張ります！」

ハツキはアルルと同年齢…ウルフは更に2・3歳年下であるう…

二人の真剣な眼差しがリユカに襲いかかる。

「僕に言わないで！僕に決定権は無いから！アルルに言って！」
リユカはたじろぎアルルに丸投げする。

アルルは少し引いたものの、笑顔で快諾。

奇妙なバランスの4人パーティーが結成された…

<アリアハン近郊>

「なあなあ！アンタ職業は何なんだ？さっき大男を吹っ飛ばしてたし、やっぱり戦士なのか！？」

好奇心旺盛の少年ウルフが、リュカを質問攻めに行っている。

まだ城下を出て、それ程経過はしていない…

「さっきの大男の事なら誤解だよ。僕はあの人を吹っ飛ばしてないよ。振り下ろされた斧を掴んだら、放せって言っから放したんだ！そしたら勝手に吹っ飛んだ！」

リュカは嫌がることなく優しく話しかける。

「それに職業って何？今は見ての通りしがない旅人だけど…」

「え！？リュカさんは職業の事を知らないんですか？」

思わずハツキが質問する。

「リュカはこの世界の住人じゃないのよ！」

堪らずアルルが二人に説明をしてあげる。

・
・
・

「へー！じゃあアンタ別の世界から来たんだ！？」

「別の世界って…何だか不思議ですね…」

ウルフとハツキがそれぞれ感想を述べる…

「あんまこと変わんないよ！」

「じゃあアンタ職業は決まってるのか！？以前は何してたんだ？」

「うん。以前は王様でした」

「アンタ馬鹿なのか？そう言う冗談は面白くないんだよ！」

「さっきから気になってたんだけどさあ…止めてくれない！それ…」

「え！？何？」

「僕、きつと多分ウルフより年上のはずだと思っただよね」

「自身持つてくれ、100%年上だから」

「うん。じゃあ、『アンタ』って呼ぶの止めて！僕『リュカ』って名前があるからさ！」

「あ！ごめんなさい。リュカさん！」

慌てて謝罪をするウルフに、怒る風でもなく優しく微笑み頭を撫でるリュカ……

しかし、ゆつたりとした雰囲気は長続きはしない！

アルル達の前に3匹のモンスターが立ちふさがる。

青く半透明なゼリー状のモンスター……スライムである！

アルルは直ぐさま銅の剣を抜き放ち1匹のスライムAへと斬りかかる！

ハツキは手にしたこん棒を振りかぶり、飛びかかってきたスライムB目掛け打ち下ろす！

ウルフはメラを唱え、スライムCへ打ち放つ……が、命中したもののトドメは刺せず、スライムCは手近にいたアルルへ襲いかかる！

スライムAを倒したばかりのアルルは隙だらけで、スライムCの攻撃をともに食らってしまった！

「きゃ！！」

とは言え多少はメラが効いてたらしく、スライムCの攻撃は大事には至らず、アルルは手の甲を擦り剥いただけで即座に体勢を立て直した。

そして一閃！

最後のスライムをアルルは倒し戦闘は終了する。

「アルルさん！大丈夫！」

ハツキは慌てて近寄りホイミを唱えて傷を癒した。

「ありがとう、ハツキ」

「ごめん！俺がメラをもっとしっかり当てていれば……」

ウルフは申し訳無さそうにアルルに近付き謝罪する。

「そんな事ないよ。ウルフのメラはちゃんと当たってたわよ！あのスライムがタフだっただけよ！気にしないの！こうやってチームプレイで倒したんだから！」

みんな互いの健闘を称えあっている…一人を除いて。

「リユカさん…何やってんの？」

倒したスライムが消え去った跡に落ちてあるゴールドを拾い集めリユカは爽やかな笑顔で報告する。

「スライム3匹で6ゴールド！僕の居た世界より倍だよ！」

戦闘に参加せずゴールドを広い漁るリユカに、何も言えなくなる3人であった…

旅は道連れ（後書き）

これでいいのだ！

反対の賛成の人は居るのかな？

ワシは魔王なのだ！

青春の憤り

<アリアハン近郊>

アルル一行はアリアハンより北に位置する『レーベ』を目指し進んで行く。

途中、スライム、大カラス、一角ウサギなどのモンスターに襲われ戦闘を余儀なくされる！

アルル、ハツキ、ウルフは傷付きながらも勝利を重ね、この新米パーティーの戦い方を実践を持って学んで行く。

そして日は傾き黄昏が空を覆う頃、パーティーリーダーの少女が言葉を発した。

「って言うかリュカさん！貴方も戦って下さい！」
そうなのだ！

4人パーティーにも拘わらず戦闘を行っているのは3人…
リュカは戦闘に加わる意志すら見せていない。

「えゝ！僕、争いごと嫌いだよねえゝ…」

「好き嫌いじゃないんだよ！俺達チームなんだからさあ…リュカさんは強いんだろ…一緒に戦ってよ！」

「僕、強くないよ！『勇者』とかそんな大層なもんじゃないし…でも逃げ足には自身があるから、ヤバくなったらみんなを担いで逃げ出すよ！」

右手の親指を立てて爽やかな笑顔で答えるリュカ…

二人の少女はリュカの笑顔に魅了され顔を赤く染め上げる。

夕日に照らされてなければ気付かれていたであろう…

「それよりさあ…もう日が暮れるよ！一旦町へ戻ろうよ！」

「何言ってるんだよ！早くバラモスを倒して平和な世界にしないきゃ！」
「！」

「イヤイヤ！今日は冒険初日だしさ…そんなに慌てても失敗しちゃうよ」

「そうよウルフ！リュカさんの言う通りよ！今日は一旦アリアハンへ帰りましょ！」

「ハ…ハツキまで…」

世の中、女性の意見は採用されやすい。

そして少女の心を魅了したリュカの意見は採用される。

ウルフは少しふて腐れながらも、姉的存在のハツキに従ってしまうのである…

実のところアルル達は町からそれ程離れてはいない。

町を出たのが遅かった事もあるが、冒険初心者の為進行が遅いのである。

<アリアハン>

日も沈み殆どの商店が店じまいをした頃、アルル達はアリアハンの城下町へ帰り着いた。

「私の家はすぐそこなのよ。あんまり広くはないけれど、みんなが寝泊まりする事は出来るから…きつとお母さんも喜んでくれるわ！」
アルルが皆を自宅へ誘う中、リュカは足を止めアルルの提案を拒否する。

「あ…僕は町の宿屋に泊まるよ！」

「何でよ！？そりゃ、大したお持てなしは出来ないけど…わざわざ宿代を払う事ないでしょ！？遠慮はしないでよ！私達仲間でしょ！」

アルルは今までに会った事のない、この魅力的な男性と少しでも一緒に居たく、必死に我が家への宿泊を薦める。

「分かった分かった…正直言うとな、町で女の子ナンパしてから宿屋へ泊まるつもりなんだ！」

「え…ちょ…な、何考えてんの！？」

ハツキもウルフも頷き呆れる。

「明日から本格的に旅立つのよ！今日はゆつくり休んで英気を養わなければならないのに！そんなの…ダメよ！！」

「うん。それは大丈夫！僕、戦闘しないから！」

言い切るリュカ。

「戦闘はしろよ！」

突っ込むウルフ。

「ともかくダメなものはダメ！」

「そうよ！ナンパなんてダメです！」

我が儘なアルルとハツキ。

「うゝん…困ったなあ…」

リュカは悩み、そしてアルルに質問する。

「じゃあさ、一つ聞くけど…アルルのお母さんて美人？」

「……………宿屋へ泊まって下さい！！」

そしてリュカは夜の町へと消えて行く…

日も昇り、一人別行動の仲間を迎えに宿屋まで赴く3人の若者達。

昨晚この宿屋に泊まった客は一人だった為、迷うことなく目的の客室を見つける事が出来た3人。

しかしアルル達3人は、リュカが居るであろう客室の前で躊躇い戸惑っている。

理由は…聞こえるからである！

安普請の宿屋な為、客室内の音がだだ漏れなのだ！

そして、その客室内からはベットの軋む音と女性の喘ぐ声が聞こえてくる…

「何…あの人！？本当に女ナンパして部屋に連れ込んだの？」

呆れる少女二人とは別に、リュカの行いに怒りを感じる少年。

真面目な旅であるにも拘わらず、常に不真面目な大人のリュカが腹

立たしく思い、思わず客室の扉を勢い良く叩き開けるウルフ！

「アンタいい加減にしろ…よ…！？」

一言で言うと、竜頭蛇尾。

ウルフは威勢良く怒鳴ったのに尻つぼみで言葉をなくしていった。室内にいたのはベットに仰向けで寝そべる裸のリユカ…

そしてリユカの上で裸で腰を振る一人の女性…

ウルフと女性は目が合い互いに硬直する。

「シ、シスター・ミカエル…」

絞り出す様にウルフが呟いた…

「きゃー！！！！」

室内に響き渡るシスター・ミカエルの叫び声！

慌てて扉を閉めるウルフ！

・
・
・

それから1時間…

ウルフは茫然自失で喋る事が出来ない。

アルルはシスター・ミカエルの事をハツキから聞く事に…

シスター・ミカエルはアリアハンの教会で勤めるシスター。

髪はクレイで長いブロンド。瞳は青く肌は褐色。小柄ながら胸が大きい。

教会が運営する孤児院で子供達に人気のシスターである。

そしてウルフの憧れの女性でもある…

やっと服を纏い客室から出てきたリユカ。

その後ろから躊躇いながら出てくるシスター・ミカエル。

シスター・ミカエルはハツキとウルフに誰にも言わぬ様懇願する。

リユカは若者3人に、先に外で待つ様促すとシスター・ミカエルにキスをして一時の別れを告げる。

「ミカエルさん。またアリアハンに来る事があつたら貴方の元へ現

れてもいいかな？」

「はい。リュカさんに会える日を楽しみにしてます」

そして二人は再度キスをして別れた。

このやり取りを物陰から覗く3人の若者。

「いやゝゝメングメング！マジ僕の好みだったからさあゝゝちょゝ燃えちゃってさ！全然寝てないよ！」

シスター・ミカエルと別れたリュカはアルル達と合流し、ヘラヘラ状況を説明する。

「おい！！シスターとは何処で知り合ったんだよ！！」

憧れの女性の閨事を目撃してしまったウルフは、半ば八つ当たり気味にリュカへ言葉を叩きつける。

「何言ってるの！？シスターに出会うには教会に行くしかないですよ？」

ウルフの怒気を含んだ言葉に、不思議そうな顔で答えるリュカ：

「リュカさんは教会でシスター・ミカエルの事をナンパしたんですか！？」

シスター・ミカエルの事を知っているハツキは信じる事が出来ず、思わずリュカに問いつめてしまう。

「あゝあり得ないゝあの真面目なシスター・ミカエルがゝゝ」

「ふざけんなよ！！アンタ、シスター・ミカエルに何て事してんだよ！！シスターに謝れ！！謝れこのヤロー！！」

「ふざけているのは君だ！ウルフゝゝ」

ウルフの悲痛な叫びに穏やかに話しかけるリュカ。

「もし僕がミカエルさんを力任せにレイプしたのなら、ウルフの言いは尤もだけどゝ僕は口説きはしたが、強制はしてない！今のウルフの言いはミカエルさんの自由意志を軽視している事になる」
リュカはウルフの目を真っ直ぐ見つめ優しく語り続ける。

「ミカエルさんは自由なんだよゝ自分で考え、自分で決めて行動する事が出来るんだよ。それを忘れちゃダメだよ！」

リュカに先程までのチャラさはない。

だからこそウルフの憤りは大きくなる。

「うるさい！黙れよ！！お前みたいなチャライ男が、シスター・ミカエルの事を偉そうに語るなよ！！」

そうリュカに吐き付けると、逃げ出す様に町の外へ出て行ってしまった…

「ちょっと！一人で町の外に出ては危険よ！！」

アルルの叫びも思春期の少年の心には届く事は無い…

まだ碌に冒険をしていない魔王討伐一行…

まともに冒険の旅は出来るのだろうか…？

青春の憤り（後書き）

やっちまったよ、この男！

どうすんだよ！

純真無垢な少年少女に悪影響だよ！
なんでこんな奴が主役なんだよ！

おとこ

<アリアハン近郊>

ウルフは走る。

ひたすら走る。

逃げる様に走る。

いったい何から逃げているのか…

旅の仲間からか…

憧れの女性を寝取った男からか…

それとも憧れの女性の自由意志を蔑ろにした自分からか…

もう、何故走っているのか、何故逃げているのか分からないでいる。

そして…ここが何処かも…

気が付けばモンスターに囲まれていた！

大がらすや一角ウサギ、そしてオオアリクイに…

ウルフは慌ててメラを唱える！

メラは一角ウサギに命中！

しかし隙を突かれオオアリクイの爪がウルフの腕を切り裂く！

あまりの激痛にその場に倒れ込むウルフ…

そしてウルフ目掛け突撃してくる大がらす！

何とか身を振り大がらすの攻撃をかわす！

直後、一角ウサギの角がウルフの太腿に突き刺さる！

ウルフは死の恐怖を憶えた。

自分一人では戦う事も逃げ出す事も出来ない…

大がらすが再度ウルフの瞳目掛けて突撃をしてくる！

今度は避けられない…

死ぬ！そう思った瞬間！

「バギ」

強烈なつむじ風が巻き起こり真空の刃がモンスター達を切り裂いてゆく！

「ふう…間に合って良かった」

声のする方を見ると、優しい表情のリユカが近付いてくる。

「……………今の…アンタがやったのか…？」

「まあ、一応…」

リユカはウルフの側にしゃがみ込むと腕と足の傷の具合を確認する。

「リユカさんて魔法使えたんですか！？」

リユカの後ろから現れたアルルが驚き質問する。

「うゝん…まあ、一応…」

ウルフはリユカから目が離せないでいた。

リユカのバギはウルフが知っている…見た事があるバギとは桁が違っていた…

「ベホイミ」

ウルフの傷が完全に治る。

痛みも跡も残らずに！

「べ、ベホイミって高度な治癒魔法じゃないですか！？そんな魔法まで使えるんですか！？」

更に追いついたハツキも驚きを隠せないでいる。

「えゝと…まあ、一応…調子が良ければ…？」

森を出て街道に戻り一旦落ち着いた一行は一斉にリユカへ質問をぶつける！

「何であんなに威力のあるバギを使えるんだ！？」「何で魔法を使える事を黙ってたの！？」「僧侶でも相当修行を積まないと使えないベホイミを何で使えるんですか！？」

等々…

「落ち着いてみんな…一人ずつ答えるから」

「じゃあ俺の質問。リユカのバギは威力が凄すぎる！何で？」

「分かりません！次、アルル」

「何で魔法使える事黙ってたの？」

「言ったら戦闘に参加しろって言われるから！絶対参加したくないもん！次、ハツキ」

「ベホイミってかなり修行しないと使えないと思います。どうして使えるんですか？」

「気付いたら使えてた！以上、質問タイム終わり！！」

リユカは強制的に質問を打ち切る。

「ちよつと勝手「そんな事よりウルフ！！」

真剣な瞳に切り替わるリユカ。

「ウルフ！一人で町の外に出たら危ないだろ！アルルもハツキも心配したんだぞ！」

「うゝ…そ、それは…だって…あの…」

リユカは少し屈みウルフと同じ目線で見つめ続ける。

「……………ごめんなさい……………」

「うん。良い子だ！」

リユカはウルフの頭を少し乱暴に撫でる。

本来ウルフは子供扱いをされるのが大嫌いであるのだが、相手がリユカだと何故か怒りが湧いてこないのである。

「ごめんな…ウルフ…ミカエルさんに惚れてるなんて知らなかったからさあ…」

「い、いや…そ、そんな…惚れてるって言つか…その…」

ウルフは顔を真っ赤にして俯く…

そして、それを年上の女性二人がニヤけながら見守る。

「僕にも経験があるんだ…憧れてた女性の閨事を目撃しちゃった事が…」

「本当に！？」

若者3人は、思春期特有の興味心からリユカの話に耳を傾ける。

「僕が幼い頃住んでいた村に、フレアさんと言うものっそい美人のシスターが居たんだ。でもある日フレアさんを見知らぬ男が、物置小屋でエッチしている所を見ちゃってね…シヨックだったなあ…」

「それで…リユカさんはどうしたの？」

まさに同じシチュエーションのウルフは、心のモヤモヤを打ち払い、たいが為に続きを急かす。

「うん。男の方に石でもぶつけてやろうと思って後を付けたんだけど、見失っちゃってさ…それ以来そのヤローには会った事ないよ」

「じゃあ…そのシスターとはどうしたの？」

「最初は気まずくてさ…余所余所しくしちゃってさ…そうしたらフレアさん…涙目で僕に謝って来たんだ…『私リユー君に嫌われる様な事しちゃったかな？』『ごめんね。謝って許して貰えるか判らないけど…』って…」

「え！？シスターの方が謝っちゃったの？」

「そうなんだ。僕、最低だよ…こんなにも優しいフレアさんの心を傷つけてしまったんだ…フレアさんは何も悪くないのに…」

アルル、ハツキ、そしてウルフはリユカの切々と語る過去に胸が苦しくなる思いで聞き入っていた。

「だからウルフ！どんなに憤りを感じても、大好きな人にその感情を見せてはダメだよ」

《そうか…シスター・ミカエルはリユカさんの優しさを一目で見抜いたんだ…だから好きになっちゃたんだ…俺もリユカさんみたいな男になれる様頑張ろう！！》

ウルフは多少の誤解を脳内で補正し、リユカを目標の男へと昇華させてしまった。

果たしてウルフに幸せは訪れるのでしょうか……？

昨日とは違い、戦闘（リユカ抜き戦闘）にも慣れてきた一行は日が暮れてしまった事もあり、野営の準備を行っている。

戦闘以外の事となると俄然張り切る男リユカ…伊達に幼少期より旅慣れしてきた訳ではなく、テキパキと野営の準備を進めて行く。

野営などした事のない若者3人は、ただ呆然と見続ける事しか出来ず、アルルは思わず…

「戦闘も張り切って戦ってくれると助かるのだけど…」

まあ…言うだけ無駄であるが…

全ての準備が整い、焚き火を囲い食事を始める。

そして今更ながらリュカが疑問を口にした。

「ところでさ…今、何処に向かつてるの？」

「言ったでしょ！レーベよ」

「そこに何があるの？」

「……………リュカさん…私達の旅の目的を理解してる？」

「うーん…概ね…」

ほぼ理解していないリュカにアルルが優しく説明してくれた。

「私達は魔王バラモスが何処に居るのか分かってません。ですから、世界中を旅してバラモスの居場所を探し出そうと思ってます。その為にはこのアリアハン大陸から出なければなりません。そしてこの大陸の東に『いざないの洞窟』があります。その奥にはロマリヤ大陸に繋がる『旅の扉』があります。いま、そこを目指してます」

「へー…じゃ何でレーベに行くの？」

「アリアハン城からいざないの洞窟まで戦闘をしなくても1週間はかかります。その間ずっと野宿はイヤでしょう？だから立ち寄りなんです」

「そっか…レーベには…美人が居るかな？」

《ここに居るじゃない！》

アルルは叫びそうになりながらも冷静な瞳で見据える事で大惨事を回避する事が出来た。

そして夜は更け、各々眠りの体勢に入る。

アルルとハツキはリュカが、寝ている自分の側に来るのではないかと期待を持って横になった為、この晩は一睡もする事が出来なかったらしい…

果たして二人の乙女が、女に変身する日は来るのであろうか…
そして、その担い手は…

レーベ

<レーベ>

アリアハンの城下町を出て3日。

夕方と呼ばれるにはまだ早い時間、アリアハン大陸にある小さな村『レーベ』に一行は到着した。

レーベ…この村には目を引く大きな建物も、人々が集まる酒場もない、極めて質素な村…それがレーベである。

アルル一行はひとまず宿を確保してから村内を見回り出す。

若者3人が、武器屋や道具屋を見て今後の旅に必要な物を購入している中、若干1名は若い村娘をナンパする為、さほど広くない村を探索し歩いている。

「何であの人なんなに元気なの…？」

「俺が知るかよ！アルルの方が付き合いは長いんだろ！」

「数時間の差よ！」

リユカのバイタリティに疲れ切った3人は、早々に宿屋へ戻り旅の疲れを取り去る事に専念した。

翌朝…

まだ人々が起き出さない時間に、目が覚めてしまったアルルは、外の空気を吸いに宿屋から近くの広場まで散歩に出かける。

そこで見た物は…朝靄の中佇む一人の青年の姿だった…

紫のターバンを巻くその青年は、広場の中央に佇み周囲に寄つてきた小鳥達と楽しそうに会話をしている。

その幻想的な光景に見入っていた少女に気付いた青年は、優しく微

笑み少女に語りかける。

「やあ。おはようアルル。今日も可愛いね」

「お、おはようリュカさん…早起きのね」

アルルも分かっているのだ！

リュカにとって『可愛いね』や『キレイだね』は日常挨拶の内なのだと…

それでもこの素敵な青年に、素敵な笑顔で言われると期待をしてしまふ…その言葉の裏を…

アルルはまだ出会って数日のリュカにどうしようもない恋心を抱いてしまっている。

少しでもリュカと一緒にいたい…一緒に会話をしたい…そう思うも、これまで年頃の女の子としての生き方をしてこなかった為、何をしたいのか、何を話せばいいのか分からないのである。

そして永遠とも思える沈黙の後、絞り出した言葉が…

「リュカさん！私に剣の稽古をつけて下さい！」

である。

その日から早朝…可能な限り…アルルとリュカは手合わせをする事となった。

無論、リュカは最初は断ったのだが…アルルの若さ溢れる気迫と、リュカ元来の面倒見の良い性格から、済し崩し的に了承してしまったのである。

キン！ガツ！キン、キン！ガツツ！！

小さな村に早朝から響き渡る金属音。

アルルの銅の剣と、リュカのドラゴンの杖とがぶつかり合う音。

状況は素人が見ても一目瞭然。

リュカの圧勝である。

全力で打ち込むアルルに対し、涼しげな表情で全てを去なすリュカ…

「はあ、はあ、はあ…」

両膝に両手を乗せ肩で息をするアルル。

「今日はもういいだろ？疲れちゃったよ」

疲れるところか汗一つかいてないリユカ。

「ずるい」

そして二人の手合わせを見つめ、不平を言うハツキとウルフ。

「アルルだけズルイです！私もリユカさんと手合わせしたいです」

「俺も！」

「ちょ、僕もう疲れたから…あ、明日からね…明日の朝からにしようよ！」

結局、パーティー全員と朝の特訓をする事になったリユカである。

<アリアハン大陸>

一行は東に位置するいざないの洞窟を目指しレーベを出立する。

途中、何度と無くモンスターの襲撃に会い、戦闘を繰り返す。

無論、3人で…

しかし3人共理解し始めていた…リユカの圧倒的な強さを…

そしてリユカの強さに頼る事の恐ろしさを…

魔王討伐を目的とするアルル達にとって、リユカ一人に依存しては強敵を相手にした時にパーティーとして戦闘が出来なくなるのではないかと言う事の恐ろしさを…

だが…同時に安心もしている。

本当に危険に陥った時はリユカが助けしてくれるであろうと…

根拠はないが3人共、そう信じているのである。

毎度の如く、野営の準備になると張り切るリユカ。

しかし若者3人も手慣れたもので、薪を集めたり食事の準備をしたりと、冒険者として成長していつてる。

そして手慣れてくると生まれるのが余裕で、余裕が出来ると会話も

弾む。

アルル同様、異性として惹かれているハツキがリュカへの質問を開始する。

「そう言えばリュカさん。以前お話ししてた憧れのシスターとはご結婚を考えているのですか？」

ハツキとしては、意中の男性がフリーであるかを確認する為の質問であるが、当のリユカからしてはそんな意識は微塵もなく、また質問者の少女は自分の娘と同年代の為、それ程深い意味があるとは考えず自身の事を語り出す。

「いや！フレアさんとは結婚を考えてないなあ……幸せにしてあげたいけどさ……僕、奥さんの事愛してるから！」

「……………え！？い、今『奥さん』って言いました」

「うん。すごい美人だよ！未だに彼女以上の美人に出会った事ないから！」

[illegible]

突然騒ぎ出す少女二人！

「な、何事！！」

「リュカさん結婚してたんですか!？」

「はい！結婚しました！子供も居ます！」

「こ、子供まで……」

ガツクリと頂垂れる少女二人。

「何だよ！結婚してるのにシスター・ミカエルに手を出したのかよ！」

「おいおい、ウルフ君！お子ちゃまみたいな事言うなよ！僕はこの世界に単身で飛ばされたんだ。従ってこの世界に僕の奥さんは居ないのだ！つまり、フリーダム！」

本来、この様な発言は最上級のドン引き魔法に類するのであるうが恋は盲目と言いますか…

この世界ではフリー……

と言う、我欲丸出しの思考に到達してしまった少女二人。

「じゃ、じゃあ…もし元の世界へ戻れなかった場合は、この世界で新たな家庭を築くつもりですか？」

アルルの希望を込めた質問に…

「イヤ…帰れない事はないと思うよ…なんだかんだ言っても僕の周りの人々が躍起になって僕を連れ戻そうと画策するだろうから…僕の周囲には結構凄い人々が居るからね！」

リュカの答えにかえって闘志を燃やす少女二人。

そんな空気を読めない男二人は、リュカの思いで話で盛り上がる。

「……………でね、プサンはね……………」

そして夜は更ける。

アルルとハツキはどのようにリュカの心を掴むのか…

あのチャライ男の心を掴む事が出来るのか…

……………ムリっぽくない？

レーベ（後書き）

一応アルル達の装備を紹介します。

アルル

銅の剣

旅人の服

ハツキ

こん棒

旅人の服

ウルフ

檜の棒

布の服

リュカ

ドラゴンの杖

王者のマント

アレ？

紹介する程じゃなかったね。

こつ言つの不要ですか？

行き止まり

< いざないの洞窟 >

小さな湖の畔にいざないの洞窟への入口は存在した。

アルル達は警戒しつつも洞窟内部へ下りて行く。

暫く進むと何もない行き止まりの空間に出た。

そして、そこには一人の老人が…

「あの…お爺さん。この洞窟には他の大陸に抜ける事の出来る『旅の扉』があると聞いて来たんですが…それは何処ですか？」

アルルが躊躇いがちに訪ねると…

「お前さん方…『魔法の玉』はお持ちかな？ 持っていないのであれば、これより先へは進めんよ。出直してきなさい」

「あ、あの！魔法の玉って何ですか？」

「…ふう…そんな事も知らんでここまで来たのか…」

《ムカー！！何なのこの爺は！人が下手に出てりゃつけ上がりやつて！》

「あ！僕、聞いた事あるよ。確かレーベにある様な話だった…かな？」

アルルが老人に対して暴言を吐き出す直前、リュカが遮り話を始める。

「リュカさんは何でそんな情報を持ってるんですか？」

「うん。レーベで女の子をナンパしたら教えてくれた。でも『僕の玉の方が凄いいんだよ』なんて事言ってたので、詳しい事は知らない」

一行はリュカの言葉を信じ、取り敢えず洞窟を後にする。

洞窟を出た所でアルル達は多数のモンスターに囲まれてしまった。バブルスライム3匹、魔法使い4体、サソリ蜂3匹…

「ぐつ！ちよつと数が多いわね！」

「愚痴つてもしょうがないだろ！ともかくやるしかない！」

「バブルスライムは私が『ニフラム』で何とかしますから、他をお願いします！」

「じゃあ、私が魔法使いでウルフがサソリ蜂ね…いける？」

「やるしかないだ」魔法使いは僕が相手をしよう」

「「え！？」」

普段、戦闘に参加しないリユカが自ら戦いを申し出た！

つまりそれ程この状況はピンチなのである！

「ほら！呆けてないで…行くぞ！」

慌てて各々の相手に攻撃を開始する。

ウルフが新たに憶えた魔法、ヒヤドで1匹のサソリ蜂を凍り漬けにすると、アルルが直ぐさま2匹のサソリ蜂を切り倒す。

ハツキもまた、憶えたてのニフラムでバブルスライムを消し去る。

その間、時間にして1分弱…

各々の相手を倒しリユカの戦闘を見学しようと振り向くと、戦闘前と同じ状況で立っているリユカが…

しかし、魔法使い4体は既に倒されていた…

《い、いつの間に…リユカさん、強すぎて参考にならない…》

3人共、全てではないにしろ戦闘中リユカの動きに注意をしていたのに、戦った痕跡を残さぬまま4体もの敵を瞬殺してしまったリユカに驚きを隠せない。

「さあ…一旦レーベに戻るんでしょう？誰かルーラとか使える人居る？」

「ル、ルーラなんて高位魔法、使える訳ないよ！それにルーラは術者一人しか移動出来ないんだから！」

ウルフが少しの憤慨を込めて説明してくれる。

リユカの居た世界ではロストスペルであったルーラだが、この世界では普通に存在する様だ…

しかし、かなりの修練を積んだ者にしか習得できない高位魔法で、

基本的には術者のみの有効範囲らしい…

「じゃ、サクサク行きますか！レーベまで5日くらいかかるし…」

5日という具体的な数字に、げんなりする若者3人…

アルルは情報収集の大切さを骨身に染みて理解する事となった…

<レーベ>

辺りが暗闇に覆われる頃、アルル一行はレーベに到着した。

早速宿の確保に向かったのだが、生憎部屋が埋まっていて大部屋を1つしか確保出来なかった。

兎に角疲れを癒したアルル達は大部屋で了承。

部屋に着くなり深い眠りに旅立った………リュカ以外は…

朝、アルルが目覚ますと…リュカが居ない！

また外で小鳥と戯れているのかと思い広場へと向かう。

しかし居ない…

村内を見回ると村外から帰ってくるリュカを発見する。

「リュカさん、何処行つてたんですか！」

慌てて近寄り声をかける。

少し驚いた表情をするリュカ。

そしてリュカからは微かに女性物の香水の香りが…

「ちょ、ちよつとそこまでお散歩？」

《散歩な訳ない！きつと女と会っていたのよ！でも何処で？村の外に居るの？いえ、考えられない…じゃあ何処で？きつと聞いても答えないだろうなあ…》

腑に落ちない点も多々あるが、アルル達は朝の鍛錬を終え村内で情報収集をする。

程なく魔法の玉を制作していると言う老人の家を突き止めた。

向かう一行…

コンコン

アルルは丁寧にノックをして住人を呼び出す………が、出てこない。

「留守…かしら？」

「いや…気配はするよ。人嫌いって言われてたからね…居留守だよ！」

ゴンゴンゴン

今度はリユカが力任せにノックする。

「おい、爺！居んのは分かってんだ！大人しく出てこい！出てこないとドアぶち破って乗り込むぞ！」

ゴンゴンゴンゴン…ガチャリ！

鍵が開く音と共にドアが開き老人が顔を出す。

「やかましい！！いったい何の用じゃ！！用が無いなら帰れ！！」

「痴呆症ですか？用があるからノックしたんです。用が無ければこんな爺の面など見たくない」

この間、リユカの表情はいつも通りの優しい微笑み…若者3人はあからさまに引いている。

「……………で、何用じゃ！」

「うん。魔法の玉を頂戴」

「何で見ず知らずのお前等に魔法の玉をやらにやなんのだ！」

リユカと老人の険悪なムードは続く…（老人の一方的な険悪ぶりですが）

「魔王バラモスを倒す為には必要なんです。お願いします、ご老人！」

堪らずアルルが口を挟む。

「ふん！お前等なんぞにバラモスが倒せるのか！？無駄な事に儂の発明品を渡すつもりはない！」

「そんなのやってみなければ分からないだろ！最初から諦める奴は嫌いだ！」

……
長い沈黙が続く……

「良いじゃろ……交換条件を達成したら魔法の玉をくれてやる」

「あ、ありがとうございます！」

「例を言うのはまだ早い！達成してからにせい！」

「んで、条件って？」

「儂はな『盗賊の鍵』という物を作ったのだが、『バコタ』という盗賊に盗まれてしまったのだ。それを取り返してこい！この玄関もその鍵で開く！取り返したのなら勝手に入って来るが良い！その時は魔法の玉をくれてやる」

ボタン！ガチャリ！

一方的に条件を言って、また引きこもる老人。

「勝手だなあ」

行き止まり（後書き）

あちゃ「今日はリュカさんに質問です。何でルーラを使える事を黙っていたのですか？」

リュカ「だつて言ったら良い様に利用されるじゃん！ちょーめんどくせーじゃん！タクシーじゃねえっの！！」

あちゃ「はい。基本、自分の能力を明かさないめんどくさがりやの主人公、リュカさんでした！」

では、次話もお楽しみに！

空白の二昨晚（前書き）

今作品での勝手に設定。

ルーラ及びキメラの翼は、使用者単体に効果がある魔法（アイテム）です。

ですので、4人がキメラの翼で移動する場合、キメラの翼が4つ必要になります。

今後そのつもりでお読み下さい。

空白の一昨晚

<レーベ>

アルル達は宿屋へ戻り作戦会議を行っている。

「さて、何とか魔法の玉の所在を掴んだけど…今度はバコタね！」
アルルが切り出す。

「バコタって言えば、アリアハンで名を轟かす盗賊だろ…捕まえるのは難しくないか？何処にいるのかも分からないし…」

ウルフが溜息混じりで意見を言う。

「バコタならアリアハン城の牢屋に居るよ」

リユカが状況打開の一言を発する。

「…な、何でそれを知ってるの!?」「…」

驚き詰め寄る3人…

「まあまあ…さっさとアリアハンへ行こうよ！ほら、『キメラの翼』も用意しておいたから」

アルル達は納得しきれないまま、リユカに促されアリアハンへと舞い戻る。

<アリアハン>

一行はアリアハン城下を城に向かい歩いて行く。

すると前方からうら若いシスターが一人駆け足で近付いてくる…胸を盛大に揺らしながら…

「あ！シスター・ミカエル!!」

嬉しそうに声を上げるのはウルフ。

しかしシスターはリユカに抱き付き話し出す。

「リユカさん！昨晚はありがとうございます。それと…楽しかった

です……」

シスターは頬を赤らめ語り出す。

不満顔のウルフ。

シスターからは、今朝リユカから漂ってきたのと同じ香水の香りが……
《まさか……わざわざキメラの翼を使ってアリアハンへ戻ったの？
キメラの翼だって、ただじゃないのよ！……でもおかげでバコタ
の情報が手に入ったし……でも……》

やはり納得のいかない3人を伴い、シスターと別れ城の地下牢へと
向かうリユカ。

「あー！テメーは昨日の晩のー！テメーのせいで掴まっちゃったじ
やねえーか！」

リユカは鉄格子越しにバコタと対面する。

「何言ってるんだよ！ミカエルさんの財布をすったのが悪いんだろ！」
「どうやらリユカは、昨晚シスター・ミカエルとデート中にバコタと
遭遇し、財布を盗む現場を押さえた様である。」

「まあいい……そんな事より、盗賊の鍵を返してよ。本来の持ち主か
ら依頼を受けたんだ！」

「あ……盗賊の鍵？……ああ！アレなら『ナジミの塔』の爺に騙
し取られたよ！」

「ナジミの塔？なんだそれは？馴染みの店みたいなものか？行きつ
けか？……じゃあ、その店の場所を教えるよ！」

「店の名前じゃねえーよ馬鹿！そう言う名前の塔があるんだよ！」

「変な名前！バコタの次くらいに変な名前……！」

「うるせーよ！サッサと行けよ！そして死ね！」

「なんだ？悪い事して掴まったクセに、反省の色が見えないぞ！お
仕置きしちゃう！」

そう言うところリユカは鉄格子の隙間から左手を入れバコタに向かって
魔法を唱える。

「バギ」

ヒュウ、ドゴー！

「うごっ………！」

リユカから発せられたバギには殺傷能力は無い、強力な風の固まりがバコタにぶち当たった！

「ほぐれ、バギ、バギ、バギ！」

「がはっ！……ごほっ！……ちょ、ごめんなさい！も、止めて……うごっ……！」

「うん。勘弁してあげる。悪い事したら反省するのが常識だからね！もうダメだよ、悪い事しちゃ」

「凄……魔法を改造しちゃった……」

只今バギの魔法を懸命に修練中のハツキは、リユカの魔法の才能に心底憧れ、恋心と合わさり、とんでもない感情へと変化し始めている……

大変危険な兆候です！

「んで……そのナジミの塔って何処にあんの？」

「は、はい……アリアハンの西の小島に……あ！でも大丈夫です！更に西の岬に洞窟があって、そこからナジミの塔へは繋がってます！」

「うん。ありがとう。じゃあ、僕達行くね。もう悪い事しちゃダメだよ。出所したら、全うに生きるんだよ」

リユカのバギが堪えたのだろう低姿勢なバコタの情報を元に、件の洞窟を目指すアルル一行。

<ナジミの塔への洞窟>

ジメジメと嫌な雰囲気を放つ洞窟を、度重なる戦闘に勝利しながら突き進む一行。

イヤ……言い直そう……度重なる戦闘に勝利する3人と戦闘をしない1人の一行……

更に言えば戦闘しただけではなく、終始歌を歌いモンスターを呼び寄せるリュカ！因みに曲目は『YOUNG MAN』である！

「ちょ、戦闘しないのはいいとしてもさ、歌うのは止めてよ！」

肩で息するウルフの悲痛な叫び。

「あははは！以前、息子にも同じ事言われた！」

「息子さんも苦勞してるんですね…」

「でもさ…若い内の苦勞は買ってでもしろって言うじゃん！良いんじゃない？」

本人が聞いたら間違いなく激怒するであろう発言をするリュカ。

会った事もないリュカの息子に、心底同情するウルフ。

「じゃあ…そこまで言うリュカさんは、どんな苦勞をしてきたんですか？」

単に歌われるより静かに語らせておく方がマシと思ったアルルの発言は、思わぬ重い話を引き出す結果へと繋がった。

リュカの幼少期の苦勞話…

目の前で父親を…自分が人質になった為殺された話から奴隷時代の10年間…

口調は軽く、爽やかに話すものの、洞窟内と言う雰囲気と話の内容がマッチしてしまい、号泣し始める3人…

アルルにしては、幼い頃より同年代の女の子と遊ぶ事も許されず、勇者としての重荷を背負わされ、この世で最も不幸だと思っていた…ハツキとウルフも同様に、幼い頃から孤児院で生きてきた自分ばかりの不幸だと思いこんでいたのである。

しかし、それでも…親を目の前で殺された事も無ければ、鞭で打たれ過酷な労働を強要された事も無い。

果たしてリュカと同じ人生を過ごしたら、リュカと同じように明るく爽やかな性格になっていたであろうか？

そう思った時、リュカに対する尊敬の度合いが飛躍的に上昇してしまふ若者達…

道を踏み外す事の無いよう祈りたいものである…

空白の一昨晚（後書き）

ルーラ&キメラの翼の件…

クレーム等は受け付けません。

容認をお願いします。

だって…ルーラはともかくとして、キメラの翼って都合良すぎなんですよ！

安価であんな凄い能力って…

困るんですよ！

ナジミの塔

<ナジミの塔>

リュカの過去話に目を真つ赤に腫らす程泣いてしまった若者3人と、そんな事気にもせず歌いまくりモンスターを寄せまくるリュカ達の一行は、洞窟を抜けナジミの塔の1階まで到達する事が出来た…半日以上使つて…

外には黄昏が訪れ、アルル達も疲労のピークに達した為、体を休ませる事に意見は一致した。

「うゝん…何処か身を寄せて休める所は無いかな？」

元気だけは有り余っているリュカが率先して塔の1階部分を探索しに行く。

すると、また地下へと下りる階段があり、その先から人の気配が漂ってくる。

もしかしたらバコタが言っていた老人が住んで居るのかと思い、リュカは3人を抱き抱えるように連れ込んだ。

「いらつしやい」

しかし、其処に居たのは老人と呼ぶにはまだ早い、中年の男性が一人…

にこやかな顔でリュカ達の到来を歓迎する。

「……………あの…ここは何ですか？」

「ナジミの塔特別施設の宿屋だ！お一人2ゴールドでいつでも大歓迎だ！」

「失礼を承知で聞きますが…何でこんな所で経営を？」

さすがのリュカも慎重に質問を続ける…

「良い質問ですねえ！」

ミスター・ニユースが貴様は！と言うツツコミをぐつと我慢するリュカ。

「此処ならライバル店もなくて良いと思っただけ…ライバル店どころか客自体が居ないんだよね！盲点だったよ」

《ヤバイ、コイツ馬鹿だ！まともに相手しない方がいい！》

「大変ですね…4人泊めてもらえますか？」

「もちろんだとも！4人で8ゴールド。前払いで良いかい？」

「食事は……期待しない方が良いでしょう？」

「馬鹿にしちゃいけないよ！こう見えても若い頃は料理人を目指して修行したんだ！周りは海に囲まれているし、庭では野菜も作ってるんだ！私の料理だけを目当てに来る客も居るくらいなんだよ！」

《じゃあ普通に町で経営してもやっていけるだろうに…》

「へー…じゃあ、食事付きでお願いします。…あと幾ら払えば？」

面倒事を嫌うリユカは突っ込まない。ただ流すのみである。

「大丈夫！宿泊料に入っているから」

ウィンクする店主に苦笑いのリユカ…

ともかくは疲れを癒す事が出来るのはありがたい…

思いがけずベットで睡眠をする事の出来たアルル達は、朝から元気にナジミの塔攻略へ出立。

「あの宿屋…料理の腕前は一級品だったね」

リユカの感想に全員頷く。

「絶対、営む場所…間違えてるよね！」

またも全員頷く。

さて気を取り直してナジミの塔攻略！

この塔は2階以上の階に外壁が存在せず、吹き曝しの空間が存在する。

強烈な海風吹き込むそのエリアは、大変危険で気を抜くと外まで放

り出されそうになる。

3人共リユカにしがみつく様に塔内を移動して行く。

「しかしハツキは結構胸が大きいね！今度、直に見せてもらいたいよ！」

リユカ以外の男性が発した言葉なら、間違はなくハツキの鉄拳が炸裂していたであろう。（意外にハツキは腕力があるのだ！）

しかしリユカの発言となると対応が変わる。

更に体を押し付けリユカの腕に胸を押し当てる。

程なく風の吹き込まない空間へ入りアルルとウルフがリユカから離れる。

しかしハツキはリユカの腕にしがみついたまま離れない。

「あの…ハツキさん？…離れて…」

「でも…リユカさん、オッパイ好きでしょ！？」

「うん。大好きだよ！でもね…今は歩きづらいから…離れて…」

そしてハツキも、渋々離れる…

リユカに責任は取れるのでしょうか……………？

『フロツガー』や『人面蝶』と言ったモンスター達と幾度も戦闘をし、アルル達は最上階へと到達した。

其処には一人の老人が…

狭いが整頓された綺麗な部屋…

老人が一人で暮らしているとはいえ、明るい内装の部屋。

リユカは思わず叫ぶ。

「何だ此処！何でこの塔は人気なんだ？そんなに暮らし易いのか？」

「ふおおおお…人嫌いの老人からすると暮らし易い事この上ないぞ！」

老人はリユカの発言に気分を害した風もなく、楽しそうに笑い出す。

「あの、ご老人…実は…」

アルルが意を決して老人に話しかける…が、

「これじゃろ！」

アルルの言葉を聞く前に、懷から1本の鍵を取り出しアルルに見せる。

「儂は夢でお前さん達に盜賊の鍵を渡すのを見たんじゃ…ほれ、持つて行くが良い」

「ありがとうございます」

「うむ。礼はいい…早う世界を平和にしてくれ…」

アルルは力強く頷くと老人の元を後にする。

これで魔法の玉を手に入れば、世界へ羽ばたく事が出来る！
打倒バラモスという目標へ近付く事が出来る！

アルル達の決意は強まった！

アルル、ハツキ、ウルフ、3人はそれぞれ強まった決意を胸に、塔を下りて行く…

リユカは…面倒事に首を突っ込んだ事に少々後悔をしている…

何でこの男がもてるのか些か疑問である？

<レーベ>

バン！

「爺！約束通り盜賊の鍵を取り戻してきたぞ！玉よこせ！」

勢い良くドアを叩き開け不躰に叫ぶリユカ…

「騒がしいのお…ほれ、魔法の玉ならそこの箱の中に入っとる。
勝手に持つて行け！」

そう言い顎で部屋の隅にある箱を刺す老人。

アルルは箱に近付き開けようとする…が、開かない！鍵がかかっている。

「あの！開かないんですが！」

「鍵がかかったままだや開く訳が無かるう！開けて取り出せ！」

「…………あの…鍵は？」

「何じゃ！？取り戻したんじゃ無いのか？それで開けてサッサと立

ち去れ！」

「ん？ちよつと待て爺！それじゃ何か…この鍵が無かったら魔法の玉を取り出す事が出来なかったのか！？」

「それがどうした！？」

「だったら最初から言えよ！『鍵を盗まれて魔法の玉を渡せないんですう』って！」

「ふん！どつちでも同じじゃろ！魔法の玉も手に入ったんじゃ、サツサと去れ！目障りじゃ！」

「このクソ爺…言われんでも立ち去るわ、ボケエ！ほれ、鍵返すよ！」

リユカは老人の目の前に盗賊の鍵を晒す。

「いらんわ！元より世界を救う者達に渡すつもりで造ったんじゃ！持つてけ、馬鹿ガキ共！」

「…………爺さんアンタ……………」

リユカに先程までの剣幕はなく、老人を見つめる。

「もう用は無いじゃろ！こんな所で時間を潰してないでサツサと世界を平和にして来い！」

アルル達は老人に追い出されるように家から出る。

「あのお爺さん…結構良い人…みたいですネ…」

ハツキの感想にリユカは、

「口が悪い、ムカつく！」

そう少し笑いながら答える。

随分と回り道をしたが、やっと魔法の玉を入手した一行。

これでいざないの洞窟の奥へ入る事が出来る…はず。

世界へ羽ばたける事を信じて、今日はレーベの宿屋で疲れを癒す。

リユカを除いて…

…あの男は今夜もコッソリ、アリアハンへ戻っていた…

そして夜は更け、朝が到来する…

ナジミの塔（後書き）

気が向いたのでアルル達の年齢を紹介します。

アルル 16歳

ハツキ 17歳

ウルフ 13歳

リュカ 25歳？（石化時代を加算すると33歳かな？）

ところで、アルル達の性格って、どんなのがしっくりきますか？

旅の扉

< いざないの洞窟 >

かなりの時間を浪費して再度この行き止まりへと戻ってきたアルル達。

此処で番をしているかの様に佇む老人に、魔法の玉を見せつけるアルル。

「どうよ！今度は持ってきたわよ！」

「ふむ…では、魔法の玉を其処の壁にセットして玉から伸びる紐に火を点けなさい」

アルルは言われた通り壁に魔法の玉をセットする。

「火は俺が点けようか？」

ウルフが申し出るが、

「うっん、大丈夫よ！私もメラを憶えたから」

そう言うともメラを唱えて火を点ける。

ジュ~~~~~

そしてリュカが何となく感づく。

「……………なあ、爺さん…あの玉を使った所を見た事はあるのか？」

「壁が崩れて無いだろう！今回が初めてだ！」

「……………！！ヤバイ！！！！アルル、早く魔法の玉から離れる！」

リュカは慌ててアルルに近付く！

そしてアルルの身体を抱き寄せ魔法の玉を背に蹲る！

「みんなも伏せろ！！！！！」

ドガンンンン！！！！！！

強烈な爆発音が洞窟内へ響き渡る！

・
・
・

「み、みんな無事？」

耳鳴りが止まない状態のハツキが無事を確認する。

「お、俺は大丈夫……」

「儂も……大丈夫じゃ……」

そして尤も爆心地に近かったリュカとアルルに視線を向ける……

リュカはアルルに覆い被さるようにして動かない……

慌ててハツキとウルフは駆け寄る！

「大丈夫！？しっかりして！」

「わ、私は大丈夫……」

リュカの下にいるアルルが無事を告げる。

そしてリュカもノツソリと起きあがる！

「……ふ……」

「……ふ？」「……」

リュカが何かを言おうとしている……

「……ふ……ふざけんな！！何が魔法の玉だ！爆弾じゃねえーか！！……だつたら『魔法の爆弾』とか『爆弾の玉』とか『爆』の字を付けとけよ！……だいたい魔法は全然関係ねえーじゃねーか！！……」

リュカの怒りは収まらない。

「……だいたいテメークソ爺！……どういふ物かも分からないで偉そうにしてんじゃねー！死にかけたぞコノヤロー！！……」

一緒に被害にあった老人にまで怒鳴り出す。

「ま、まあまあ……落ち着いてリュカさん！」

宥めるアルル。

「ほ、ホラ、リュカさん……道が開けましたよ！」

宥めるハツキ。

「リュ、リュカさん……先を急ぎましょう！新天地には美女が居ますよ！」

宥めるウルフ。

リュカは怒りが収まらないながらもウルフの『美女』の言葉に反応し、新たに開けた道へ進み出す。

グッジョブ、ウルフ！

いざないの洞窟内部は、所々穴が開いており危険極まりない造りになっている。

そんな洞窟内を進行中、アルルがお礼を言い出した。

「リュカさん。さっきはありがとう。おかげで怪我一つしませんでした」

「うん。アルルが無事ならお礼はいいよ…」

「リュカさんこそ怪我は無いですか？」

「ああ大丈夫…このマントはね『王者のマント』って言ってね、結構丈夫なんだ！『王者』なんて僕には似合わないけどね」

「そんな事無いです！リュカさんにとっても似合ってます！…その…か、格好いいです」

「ありがとう。でも以前、友人が…『王者？お前は違っただろ！』って言うてやがった！」

「その友人て…男の人ですか？」

「ああ、ヘンリーって言う空気の読めない馬鹿だ！」

友人が男だと知って何故か安心するアルル。

そんなやり取りを聞いていてヤキモチを妬くハツキ。

「リュカさん！そのマントは凄いマントなのかもしれませんが、一応怪我がないか見せて下さい！私が治療しますから！ほら、背中見せて下さい！！」

ハツキは此処ぞとばかりにリュカの服を捲る！

そして強引にリュカの服を捲り出てきた背中を見て言葉を無くす…傷だらけ…リュカの背中では傷だらけなのである。

それも全て古傷…鞭で打たれ、木材で殴られた傷…

「ごめんなあ…酷い背中だろ！？君達若者に見せる背中じゃ無いよね…」

言葉を無くし固まる3人に優しく謝るリュカ。

リュカの過去を聞き、酷い時間を過ごしたと想像をしてはいたが、証拠の傷を見て考えの甘さに落ち込む3人…

そんな3人を見て元気づけようと歌い出すリュカ。

そして戦闘が始まり、落ち込む余裕を奪い去られる。

幾度かの戦闘をこなし洞窟内を奥に進むと、3人に別れたエリアに到達した。

進むべき道がどれだか分からない…

「俺は左が怪しいと思うな!」

と、ウルフは左。

「私は真ん中が正解だと思います」

と、アルルは中央。

「うゝん…取り敢えず右から攻めませんか?」

と、ハツキは右。

自動的に決めるのはリュカ。

「別に僕はどの道でもいいよ。違ったら引き返せばいいんだし…」

「いいえ、リュカさんが決めて下さい!」

「そうだよ!戦闘は拒否ってんだから、こう言う所で活躍してよ!」

「さあ、選んで下さい!ウルフかハツキか私か!」

「えゝ…じゃあ、ハツキの選んだ道」

リュカは考えることなく選択する。

「何でハツキなんだよ!」

「そうよ!私、勇者なんですよ!」

「リュカさんは私の事が好きなんですよ!ね!?!」

不満顔のアルルとウルフ、満面の笑みのハツキ。

そしてめんどくさそうな顔のリュカ。

「別にさあ…好きとか嫌いとかじゃ無くて…オッパイの大きい人を選びました。以上!」

リュカは不平を言う3人を無視して、自分の選んだ道へ突き進む。暫くすると行き止まりになっており、其処には旅の扉と呼ばれる青く美しく渦巻く装置が存在した。

「うん。やっぱりオツパイの大きさと物事の真実はイコール関係にある」

リュカの意味の分からない納得に、納得のいかないアルルとウルフは他の通路の確認を要求する。

しかし、

「めんどくさいからヤダ！」

と拒否られ、サッサと旅の扉に入ってしまったリュカを追いかける事で断念せざるおえなかった。

旅の扉を抜け洞窟より外へ出た一行は、辺りが夜の帳に包まれている事に驚いた。

「あれ？もう、夜！？早いなあ……」

「本当ね！そんな長時間洞窟内に居たつもりは無かったけど……」

「夜動くのは危険だし、野営の準備をするか……」

リュカの提案は採用され、一行は野営の準備に取り掛かる。

新たな土地に足を踏み入れた事への感動もなく、ただひたすら休む事だけを考えるアルル達……

リュカの影響力が、それとも天然なのか……

別世界より？（前書き）

リユカがDQ3の世界で大活躍（？）をしている間も、DQ5の世界でも色々な事が起こっております。
これはそんなお話です。

別世界より？

<グランバニア>

リュカが本へ吸い込まれてから2時間程が経過したグランバニアの国王執務室では…

リュカの息子のティミーと叔父で国務大臣のオジロンが、眉間にシワを寄せて黙り込んでいる。

「……………はあ……………困ったもんだ……………」

長き沈黙の後、溜息混じりで口を開いたのはオジロンであった。

「リュカは厄介事を呼び込む体質らしい…」

「あの人が居るがぎりトラブルの種は尽きないでしょう…」

リュカは一応グランバニアの王である…

他国で大臣等が自国の王に対して、このような物言いをすれば不敬罪として処罰されるであろう！

しかしこの国の王はリュカである…

例え本人の前で言ったとしても『あはははは、1個も言い返せない』と言うだけで終わるだろう。

それが良いのか悪いのかは分からない。

それでも、この国の王であるリュカが行方不明になってしまったのは一大事なのである！

バンー！！

乱暴にドアが叩き開けられ、王妃のビアンカが入室してきた。

「リュカが本に吸い込まれたというのは本当！？」

一言で言えば不機嫌…それが今のビアンカの表情だ！

「情報が早いですね、母さん。誰が言い触らしたんですか？」

「マリーよ……」

マリーとはリュカとビアンカの次女の事である。

そのマリーがピアノカの後ろからヒョコつと顔を出す。

「はあ…マリーは誰から聞いたの？」

可愛い…既に嫁いだ妹より遙かに可愛らしい妹に、優しく問いただすティミー。

「うん、あのね…私、お父様にご本を読んでもらおうと思って、この部屋の前に居たの。そうしたらお兄様が大声で叫んでいるのが聞こえてきたのよ。だからお兄様が原因よ」

「…………母さんもマリーも他の人には言っていないですか？」

「はい！お兄様！」

「言う訳ないでしょ。それより私の事は陛下と呼びなさい！貴方、一介の兵士なのよ！貴方が身分隠して兵士になるって言ったんでしょ！自分でバラしてどうすんのよ！」

「す、済みません。王妃陛下」

「お兄様怒られちゃったね。元気出して」

ティミーはこの妹が愛らしくて仕方ない！

もう一人と違い、性格が父親に似なかった事を喜ばしく思っている。

「マリーもお兄様と呼んではダメよ！コイツはただの下っ端兵士よ！」

「！」

「はいお母様。よろしくね、下っ端さん」

ただ少し…言う事にトゲがあるのが難点だ…誰に似たのやら…

「さて、そんな事より…状況を詳しく説明して下さい」

・
・
・

「…………と言う訳で、気付いた時には国王陛下は本に吸い込まれてました…」

「その本には、その後誰も手を付けて無いのね？」

「はい。吸い込まれたく無いですから…」

ピアノカはティミーの言葉を気にもせず、本のページを捲り始める。

「あーちよつと…母さ…陛下！不用意に触つては危険です！」

「触らなきゃ調べられないでしょ！雁首並べて唸ってても、リユカは戻って来ないのよ！」

ペラペラとページを捲り本を調べるビアンカ…

「何これ！？殆ど白紙じゃない！」

「はい。国王陛下もその事に憤慨しておりました」

「で、リユカは勝手にタイトルを書き換えたのね…」

ビアンカはタイトルページに戻るとリユカが書いた『そして現実へ…』の文字を指で撫でる…

そして再度次のページを開き、中途半端に書き綴られた本文を黙読する。

その光景に違和感を感じたティミーはビアンカに近付き本を覗き込む。

「母さん…失礼…王妃陛下。国王陛下はタイトルの続きページには何も書かれて無いと、憤慨してました…ですが、今この本には内容が書かれています。中途半端ではありますが…」

「良い所に気付いたわね。さっきから見てるけど、少しずつ文字が増えてるわ…この本！」

「え！？それって…」

「そうよ。今まさに物語が進行中なのよ。そして進行させているのが…リユカ…」

それは驚愕の事実である！

人間が本に吸い込まれ、その人間が物語を紡ぎ出して行く…

「読んでご覧なさい。登場した人物の描写を…」

ティミーは2ページと書かれていない内容を読みだす。

「確かに…この口調もあの人らしい…」

ティミーには文字を読んでいるにも拘わらず脳内で、あの緊張感の欠落した声が響いていた。

「でも…それなら心配する必要は無いのでは？この物語が完結すれば、戻って来ると思いますが…」

「貴方はこの物語の結末を知ってるの？」

ビアンカの冷たく厳しい口調に、皆緊張する。

「い、いえ…結末は…」

「リュカが物語りの途中…いえ、最後でもいい…死んでしまったらどうするの？此処までを読む限り、魔王討伐という冒険の物語よ！」
ビアンカは恐怖と不安の混じった声で呟く。

思わずティミーはビアンカの顔を見つめてしまった…

青く美しい瞳にはリュカに対する心配と不安で満ち溢れている…

「では救出しないと！」

オジロンが声を震わせ叫ぶ！

「ええ、そうね。異世界へ行く方法を探さないと…ティミー、貴方はこれから特使としてラインハットへ行きなさい」

「特使…？ラインハットへ？」

「どうせ国王不在は知れ渡るわ！だから正式に世界中へ通達します。こうしておけばグランバニアへ侵略しようとしている国に対しての、対抗措置を取りやすいでしょ」

「しかし…可能な限り秘匿した方が…」

「オジロンの心配も分かるけど、何時知れ渡るか分からないと動きづらいのよ！バレないようにと制約がつきまとうから！」

「なるほど…」

「で、王妃陛下は私に何をさせたいのですか？」

「まずラインハットに知らせて軍事、政治両面で支援をしてもらいます。ラインハット以外に此処まで期待できる国はありません。それからポピーを連れてきて下さい」

「………ポピーを…混乱に拍車がかかりませんか？」

「貴方がルーラを使えばあの娘には頼りません！」

「………なるほど…ルーラ…ですか…」

「ポピーに接触したら、直ぐさまマーサ様をグランバニアにお連れして下さい。異世界への門を開くのにマーサ様のお力が必要になるかもしれません…」

テキパキと指示を出すビアンカ…

ティミーはそんな母を見て《このまま女王に就任してくれればいいのに…》と、とんでもない事を考えてしまっていた…

別に父の事が嫌いな訳では無い！

しかし、あの父の部下として日常を送っていると、時折イヤになっ
てしまうのだ…

それがリユカという男である。

「それと！…もう一つ重要な事があります」

「そ、それは？」

「この本の管理です！」

「……………何故…それが重要なんですか？」

オジロンは有能である。

ただそれは政においてであり、軍事や陰謀事には向かない。

「この本が燃やされたらリユカがどうなるのか分からないわ…」

「……………なるほど…では、どのように管理しますか？」

「この部屋ごと管理します。私とスノウとピールで指揮します。

配下はモンスターのみで構成します。私達3人の許可が無い限り、

オジロン…貴方でもこの部屋への入室は禁止します！よろしいです

ね！？」

こうして緊迫した状況のまま事態は進んで行く…

どちらの世界でもリユカだけが緊張感無く事態を受け入れている。

一番の当事者なのに、一番他人事のように…

ロマリア（前書き）

さて、いよいよロマリア編突入です。

ロマリア

<ロマリア>

アルル達がロマリアへ着いたのは、空が黄昏に染まる頃だった。
ロマリア大陸のモンスターは、アリアハンとは比べ物にならない程強く、一行の進む速度は上がらない。
それでもアルル達にたいした怪我が無いのはリュカのスカラのおかげだろう…

「やっと着いたわね…」

「…敵…強いですね…」

「疲れた…早く宿を確保しようぜ…」

アルル達若者3人は、少し離れた所で町娘をナンパしているリュカを無視して宿屋へ入る。

各人、荷物を置いたらロビーに集合。そして近くの酒場へ食事に出かける。

すると其処にはリュカが居た。

先程ナンパしていた女性とは、違う女性を伴ってイチャイチャ食事をしている。

「何であの人あんなにもてるの?」

思わずウルフはアルルとハツキに訪ねてしまう。

「……だって…格好いいじゃない!」

アルルの言葉に頷くハツキ。

男としては少し納得のいかないウルフ…

「…にしても、リュカさんの好みって胸の大きい女性?」

「その様だな。あの人、さっき口説いてた人も胸大きかったな」

「しつかり胸だけはチェックしてんの？エロガキね、ウルフは！」
ハツキのツツコミにむくれるウルフ。

「でも、だとしたら何で私には手を出さないの？」

「胸だけ大きくても、その他がガキっぽいからじゃないの？」

ハツキの嘆きに間髪を入れず突っ込むアルル。

「だとしたら、胸まで父親に似てしまったアルルには、永遠に興味を示さないでしょうね！」

「……………」

険悪な雰囲気になる少女達。

居た堪れないウルフ。

3人が黙々と食事を続けていると、軽そうなノリの青年2人がアルルとハツキに声をかけてきた。

「ねえねえ！君達この辺じゃ見かけないけど何処から来たの？」

と、男A。

「この先にスゲー旨いカクテル出す店あんだけど、一緒にいかない？」

と、男B。

彼らの名誉の為に記載しておく。

彼らはそこそこ美形である。

10人の女性に声をかけたら8人は誘いに乗るぐらい美形である。

しかし彼らの不運は、彼女らの男性基準がリユカであることだ。

「失せろ、不細工！」

ちよいキレ気味のアルルの発言。

「一緒に居る所を他人に見られたくないの！離れて下さい！」

イラついてるハツキの発言。

懷からゴールドを取り出し、勘定を終え店を出るウルフ。

店内の喧噪を見ないようにして酒場の扉を閉める…

その後の事はよく知らない…

怖くて2人には聞けない…

ただ分かっている事は、酒場が営業停止になるほどボロボロになっ

たにも拘わらず、少女達にはかすり傷一つ付いていない事である。

「そなた等がアリアハンから来た勇者達か？」

「はっ！私は勇者オルテガの娘、アルルと申します」

ここはロマリア城の謁見の間。

傳くアルル達の前に、ロマリア王とその王妃が玉座に座っている。

「よいよい…こう言う畏まったのは苦手だな…全員面を上げよ。楽にせい」

その一言を待っていたとばかりに傳くのを止めるリユカ…

その行為に、さすがに驚くロマリア王。

「ま…まあ、何だ…我が国も勇者達一行に援助をしたいのだが、そうもいかん。恥ずかしい事に我が国も苦しくてな。それに、そなた等が本当に魔王を討伐できるか分からぬから…」

「いやいや、王様！何も小遣いやるだけが援助じゃ無いでしょう！通行許可を与えてくれるだけで良いツスよ！西へ東へフリーパスってね」

本当に他国の王と謁見しているのか、疑いたくなるような口調のリユカ。

「貴様ー！！それが陛下に対する口の利き方かー！！」

もちろん激怒する家臣。

「何だよ！王様が楽にしろと言ったから、楽にしてんじゃん！アレだよ、君…王様が許可したのに、家臣がキレると王様の度量の狭さをアピールしている事になるよ。僕、他の国に行ったら言っちゃうよ『楽にしろと言ったから楽にしたら、ブチ切れた小者が納める国だった』って…ベラベラ喋るね！」

リユカは元の世界で、この様な態度で外交問題を悪化させた事が何度もある。

「ふおおおお…面白い！お主、名は？」

「リュカです」

「うむ、リュカよ！余もざつくばらんに話そう。実はな…勿体ぶつたのは、やってもらいたい事があったからなのだ！その為に『援助できん』などと言ってしまったのだ…」

「まあ、こう言うのは駆け引きですからね」

「我々出来る事であれば何なりと！」

リュカのやり取りに胃が痛くなってきたアルルは、リュカが何か言う前に引き受ける事を了承する。

「うむ。カンダタと言う盗賊団が我が国の『金の冠』を盗んだのだ！それを取り返して来てほしい」

「見事取り戻せたなら、褒美を取らせましょう」

王妃がリュカを見つめ妖しく微笑む。

「別に人の女に興味ないから、褒美と言われても…ぐふっ！」

とんでもない発言をするリュカの鳩尾に、アルルの拳がめり込む！

「ご褒美を戴くまでもなく、全力を尽くさせて頂きます！では、早速行つて参ります！」

蹲るリュカを引きずるように、アルル達は謁見の間を後にする。

「信じらんない！私、胃が痛くなつたわよ！」

「まあまあ…落ち着いてアルル」

「そうだよ。リュカさんらしかつたじゃん！」

早々に宿屋へ戻った一行は、リュカを囲み騒ぎ出す。

「リュカさん！不敬罪って分かります！？重いんですよ！！」

「言葉の意味は知ってるけどさあ…でも、僕の国ではあんなもんだよ。不敬罪になった奴いないよ」

「何ですか、そのネジの緩い王様は！」

「あはははは、1個も言い返せない」

笑っている場合じゃ無いはずなのに、大爆笑のリュカ。本当、ネジ

が緩いのかもしれない…

「なあ、アルル。安易に金の冠奪還を受けたけど、カンダタって奴が何処に居るのか分かってるのか？」

「こ、これから情報を集めるの！」

ウルフの冷静な指摘に、焦りまくって答えるアルル。

「僕知ってるよ」

そして何故か情報だけは持つているリユカ。

「此処から北西の山脈の向こうに『シャンパニーの塔』があつて、其処がアジトらしい」

「……………情報源は？」

聞くまでも無い事なのだが、聞かずにはいられないハツキ。

「うん。昨晚、一緒に食事した娘がベツトで教えてくれた。因みに山脈越えはきついから、一度北の『カザーブ』という村に寄つてから迂回した方が良いってさ！」

「じゃ…じゃあ、目的地は決まったわ！出発は明日早朝ね！今の内に装備を揃えておきましょう！」

若者3人は装備を一新する為城下を彷徨い、リユカは今宵のお相手求め城下を彷徨う。

新たな装備は手にはいるのか…

新たな情報は手にはいるのか…

新たな命を紡ぐのだけは勘弁してほしいものである…

ロマリア（後書き）

次回、新キャラ追加です。

5人パーティーになっちゃうけど、

まあ…細かい事は目を瞑って下さい。

商人

<ロマリア領>

首都ロマリアから北へ進むと、木々の生い茂った険しい山道が続く。昨今ではモンスターのみならず、山賊も出没する危険な道。

アルル達は襲い来るモンスターを撃滅しながら突き進む。

彷徨う鎧や軍隊がに、キラービーなど…

敵は強くアルル達は苦戦の連続である。

しかし若さのおかげか、一戦毎に実力は向上している。

日も暮れかけ野営の準備に取り掛かると、不意にリュカが辺りを気にし始めた。

「悲鳴が聞こえた!」

「「「え!?!」」」

リュカの一言にアルル達も耳を澄ます。

・
・
・

「何も聞こえないわよ…」

「いや…美女の悲鳴だ!」

「何で悲鳴だけで美女だと分かるんだよ!」

ウルフのツツコミを無視して、森の中へ走り出すリュカ!

「ちょ、待ってよ!」

慌ててリュカを追いかける3人。

「キャー!?!?!」

「ガタガタうるせー! いい加減観念して犯されろ! 気持ち良くして

やつからよお」

4人のごろつき風の男達が、1人の女性を押し倒し手足を押さえ付けている。

「あんた等ウチのボディーガードやろ！そう言う契約やったやん！」

「馬鹿かねえーちゃん！あんな端金で雇われると思ってるのか？」

「ぎやはははは！謝礼はオメーの身体だよ！」

男の一人が女の服を破り取る！

「キヤーー！！！」

「へへへ、顔はガキっぽいが体は最高だな！」

破り取られた胸元から、かなりの大きさの胸がこぼれ出る。……

巨乳です！

「イヤー！！」

「ここは通常の街道からはかなり外れてんだ！人なんかこねーよ！騒いでねーで、大人しく楽しめよ。最高の時間にしてやつからよ！」

男は徐に女の上に被さり行為を始めようとした、その瞬間……

女の上で四つん這いになっていた男が、大きく吹き飛んだ！

そして他の3人も訳も解らず身体に強い衝撃が走り、後方へ吹き飛ばす！

「美しいお嬢さん。無事ですか？」

衣服がボロボロの女性に、自分のマントを羽織らせ優しく問いかける男、リュカ。

「あ……ああ、平気や……犯される寸前やったけど、まだ処女や。」

それを聞いて優しく微笑むリュカ。

女の方もパニックからか、リュカの魅力なのか分からないが、必要な情報まで伝えてしまってる。

そしてようやく追いついたアルル達3人。

「本当に美女の悲鳴だったんだ……」

呆れ感心するウルフ。

「しかしよくこんな遠くの悲鳴が聞こえたわね！」

呆れ驚くアルル。

「美女の悲鳴だったからね！そうじゃなきゃ聞こえないよ」

「悲鳴に美女も何もないでしょう…」

呆れ疲れるハツキ。

そこへ、ごろつき4人集が復活し戻ってきた。

「テメー！不意打ちとは卑怯じゃねーか！」

「か弱い女性を、男4人がかりで襲ってるヤツらに言われたくない！」

「うるせー！ぶっ殺してやる！」

「おい、よく見りゃいい女を2人も連れてるじゃねーか！」

「へへへ…おい、にいちちゃん！命が惜しかったら女置いて消えな！」
ごろつき4人集は各々武器を手近付いてくる。

「お前等こそ、武器を捨てて消え失せろ！相手するのが面倒だ！」

「てめー、ぶっ殺してやる！」

「それ、さっき聞いた。他にボキヤブラリーは無いの？」

リュカの安い挑発に、カツとなった1人が襲いかかる！

しかし次の瞬間、男の頭はリュカの杖に吹き飛ばされた。

頭部の無くなった体から、勢い良く血が噴き出し辺りを染める。

ごろつき4人集は、ごろつき3人集となり目に見えて怯んでいる。

「テ、テメー…お、俺達が誰だか知っててやってんのか！」

「え！？何？有名な人の？じゃあ、サイン貰おうかな！…ペンが無いから、お前等の血をインク代わりにするけどね！」

脅し文句と共に、1歩踏み出すリュカ。

「お、俺達は、カンダタ一味だぞ！カンダタ親分がオメー等をぶっ殺すぞ！」

腰が引け、声が裏返る男を見てリュカは更に脅しをかける。

「さっきお前等が言ってたろ！ここには人が来ないって。」

「だ、だからなんだよ！」

「誰がカンダタ親分にチクルの？お前等全員ここで死ぬんだから、チクルないでしょ！」

リユカが満面の笑みでごろつき3人集に近付く。

そして……………

「ホンマ、危ない所を助けて頂きありがとう。ウチはエコナ。まだ駆け出しやけど商人や！」

一行は当初の野営場所へ戻り、自己紹介から始めた。

エコナは大商人になる為、世界を旅し修行している駆け出し商人だ。

「ほな、おたく等が勇者様ご一行なん？」

「まあ…便宜上は…」

「ほんなら、ウチも一緒に付いていつてええか？ウチ、目的地があるわけじゃないねん！ただ世界中を巡って、見識を広めたいねん！」
「それは構わないけど、私達の旅はとても危険なものよ！それでもいいの？」

「心配無用や。さっきみたいに4人がかりじゃムリやけど、ウチとて多少は戦えるんや！…それにリユカはんと一緒の方が安全そうやん！」

先程リユカの強さを目の当たりにしたエコナ。

「まあ…そんな訳や。よろしゅうたのんます」

「ところでリユカはん。ウチ、服がボロボロやん…代えの服も無いし、カザーブまでマント貸してほしいねんけど、それじゃリユカはんも困るやん」

「いや、別に「ほんでな、二人抱き合っていればマントを二人で使えると思うねん！」

エコナはここぞとばかりにリユカに色目を使い、落としかかる。リユカを無料のボディガードに仕立てるつもりだ。

「いいね！も、ぎゅーつと抱き合っていようか！」

「良くありません！私の代えの服を使つて下さい！」

「アンタのじゃ胸がきつそうで着られへん」

差し出されたアルルの服を見て言い切るエコナ。

「じゃあ、私を使つて下さい！絶対着れます！」

ハツキは強引に服を渡してエコナをリユカから引き離す。

《男はここにもう一人居るのに、何で俺は相手にされないんだ？》
ウルフが女3人のやり取りを憮然と見つめていると、マントを返してもらったリユカが小声で話しかける。

「ウルフ。女の子に相手してほしいのなら、自分から声をかけないとダメだよ。待ってたって何も起きないよ！」

はたしてウルフは、どんな大人になるのか楽しみである。

商人（後書き）

新規参入キャラの口調について…

今回より新キャラ『エコナ』が登場しましたが、

彼女は大阪弁風の口調をしておりますが、

あくまで『風』…つまり似ているだけです。

「そんな喋り方ない！！」とか「バカにしてるのか」などと言うクレームは、

一切受け付けております。

何度でも言いますが、大阪弁風だけで大阪弁ではございません。

また、方言をバカにする目的で書いてるつもりはございません。

万が一その様に感じられたのなら、それは作者の表現力（力量）不足によるものです。

御不快感をあたえた旨、深く陳謝致します。

蛇足ですが、

エコナはフレアさんレベルです。（例のアレが！）

カザーブ

<カザーブ>

「♪前も後ろも山ばっかー♪」

リュカが勝手な歌を歌いたくなる様な村…カザーブ。
リュカの歌通り四方を山で囲まれている。

アルル達は着いて早々、エコナの装備を揃える為、武器屋や道具屋をハシゴする。

「なあなあリュカはん！これなんてどう？ウチに似合う？」

「うーん…折角胸が大きいんだから、もっと胸を露出した服はどう？僕はそっちの方が好き」

「ほな…これは？」

休日のショッピングモールでキャツキャウフフとイチャつくバカッブルの如く、リュカとエコナはショッピングを楽しんでいる。
それを恐ろしい形相で睨むアルルとハツキ。

更にウルフは女の扱い方の手本としてリュカの言動をメモしている。

（大丈夫か？）

「早くしなさいよ！日が暮れちゃうでしょ！」

「ウチ等には気をつかわんでええよ…アルル達は先に宿へ戻ってて下さい。ウチ等はウチ等で勝手にやりますから」

「うん。自由行動ね」

そう言つてリュカとエコナは別の店に入つて行く。

二人きりにしたくないアルルとハツキは、渋々ついて行く。

ウルフは…言うまでもない…

一通りの物を揃えたエコナは、リュカを伴い村の酒場でディナーデートを敢行する。

だがアルル達も一緒の為、どう見てもただの食事会である。

大して広くない店内には、若いカップルが先客として食事をしている。

5人はテーブル席に座る。

「ウチは取り敢えずビール！みんなは？」

ほぼ座ると同時にエコナは叫ぶ。

「私達は未成年です！お酒は飲みません」

「ウチかて18や！気にしたら負けやで。リュカはんは飲むやろ？」

「お酒嫌いだからいい！」

リュカは表情を渋らせ拒絶する。

「リュカはん、飲めへんの？」

「うゝん…飲めるけど、強くないし…良い思い出が無いから…」

「何や？そのやな思いでって！酔って上司殴ったん？」

下世話な話に興味津津のエコナ。

エコナ程では無いが聞きたがっている他3人。

「うん…実はね…僕に初めての子供が産まれた日に、以前から準備されていたパーティーがあっただんだ…しかも僕が主賓の…本当はパーティーなんて出たくなかったんだけど、出ない訳いけないじゃんで、イヤイヤ出席して無理矢理酒飲まされて、気が付いたら気絶してて奥さんが魔族に攫われてた…」

リュカの話は続く…

身内に居た裏切り者の事、その後8年間の石像化、生まれたばかりの双子は8年間も両親が居なかった事…

孤児として育ったハツキとウルフ、そしてやはり孤児のエコナはリュカの子供に共感を覚え涙する。

アルルもリュカの人生の壮絶さに言葉も出ない…

「おいおい…泣くなよ…今はもう幸せだよ。みんな…」

「そか…子供は親と一緒に暮らすのが一番幸せや!」

「うん。そうね!早くバラモスを倒して、世界を平和にしないとね!」

「あの…すみません…」

アルルの言葉を聞いた隣席のカップル(女)が、不意に話しかけてきた。

「バラモスを倒すという事は…貴女達は勇者様ですか?」

「べ、便宜上は…」

たじろぐアルル。

「ではお願いがあります。ここより北に行った所にある『ノアニール』と言う村をお救い下さい!」

・
・
・

カップル(女)の説明では、10年程前から村人が皆眠ってしまう呪いにかかっているらしい。

何故呪いがかかっているのかは分からない様です。

カップル(女)は幼い時に父と共に村を出たが、弟が村で長き眠りについている…

「お願いします!どうか弟を…」

泣きじゃくりながら懇願するカップル(女)…

「わ、分かりました!ひとまず調査を試みますから…」

辟易するアルル…

一行は逃げる様に宿屋へ戻り、作戦会議を始める。

「どうすんだよ。カンダタから金の冠を取り返す途中だろ!」

「分かっているけど…ほっとけないでしょ!」

「じゃあ…どちらから先に行きますか?」

「そんな簡単やん!寝ぼすけ共にはもう少し寝ててもらって、先にカンダタや!カンダタは遠くに逃げてしまいう可能性もあるかもし

れへん」

「じゃあ決まりね！明日早朝にシャンパニーの塔を目指します」
話が決まった所でリュカが口を開く。

「どうして僕の部屋で作戦会議してるの？」

「だって…他の人の部屋じゃ、リュカさん会議に出席しないでしょ？『僕は決まった事に従うよ』って言うて！」

「うゝん…そうだね。でも、僕が居たって会議に参加しなければ同じじゃない？」

「そんなことはないわ！後で説明するのは面倒なの。一緒に居れば説明を省けるでしょ！」

「なるほど！納得しました。…もう会議終了だよ。解散だよ」

「ええ…お疲れ様…」

「じゃあ、僕…散歩してきます」

「ちよつと！明日は早いのだよ！寝不足じゃ困るんだけど！」

「あはははは、大丈夫だよ！僕は戦わないから！寝不足OKでしょ！じゃあね」

各自が自分の部屋に戻る中、リュカだけが宿屋から外出して行く。

阻みたいが阻む手立てがないアルル…

恨めしそうにリュカの背中を見つめ、大きく溜息を吐く…

自分の部屋に呼ぶ事が出来れば、どんなに嬉しいかと…

翌早朝…

一向に起きてこないリュカとエコナを起こすべく、3人は二人の部屋に突入する。

リュカの部屋はもぬけの殻…

仕方なくエコナだけでも起こそうと、部屋を大きくノックして中に突入すると…

裸のエコナが裸のリュカに重なる様にして寝ていないか！

「な…な…何してるんですか…！」

「やあ…おはよう…もうちょっと静かにしようよ…周りに迷惑だよ」
「ホンマにねえ…もうちょい静かにしてほしいわあ…」

この状況を見られても気にしない2人…

それどころか優雅に目覚めのキスをしてから仕度を始める2人…

「いいなあ…」

ハツキが小声で羨ましがる…

間違った道に進んでいる事に気付いてほしいものである…

カザーブ（後書き）

またかよ、この男！
状況分かってんのかよ！！

シャンパニーの塔（前書き）

久しぶりにリュカがぶち切れます。

シャンパニーの塔

<カザーブより南西>

潮風が心地よい平原をモンスターの雄叫びが轟く。

毒いもむしにギズモ…

襲い来る敵も強力になって行く…

しかしアルル達も成長著しい！

アルルがメラを唱え、ハツキが憶えたてのバギでとどめを刺す。

敵の数が多ければ、ウルフがギラを唱え蹴散らす。

新メンバーのエコナも、鉄の槍で敵を葬り去って行く。

5人パーティーで、1人何もしないのは何時もと同じ…

それでもエコナの参入でフォワード要員が増え、パーティーバランスが向上した事は喜ぶべき事だ。

「お！？見えて来たでー！アレがシャンパニーの塔や」

カンダタ一味が根城にしている塔…

強い潮風に晒されながらも、威風堂々とそびえ立つその塔に、一行は進入する。

<シャンパニーの塔>

塔の内部は何処からともなく腐敗臭が漂っている。

「この匂い…何？」

アルルは顔を顰め、ハツキはいまにも吐きそうだ。

怪訝な表情で進むリユカは、塔の片隅の部屋で不愉快な物を発見する。

其処には大量の死体が無碍に放置されている場所…

「な、何これ…！」

「何でこんなに死体があるんだ？」

100体は超えているであろう死体の山…

既に白骨化しているものから、腐敗の著しいもの…

先程捨てられた様な死体まである。

死体の7割はロマリアの兵士と思しき恰好だが、残りはどう見ても兵士ではない。

中には衣服を引き裂かれ、レイプされた形跡のある女性の死体や、年端もいかない少女の死体…

「酷い…」

あまりの光景に言葉を失っていると、部屋の奥から人の息づかいが聞こえてくる。

「奥に誰か居る様だ…」

リュカが声のする方へ進み行く。

其処には更に不愉快な事を行っている男が1人いた。

まだ6・7歳の少女を犯す男…

その少女も今は息がない…

だが、つい先刻まで生きていたのであろう…

多くの男に犯され息絶えた少女を、ここに捨てに来た…そしてこれで最後とばかりに欲望を少女の死体へぶつけている…この男のしているのは、そんなところだろう！

「いい加減にしろ！」

リュカが男の脇腹に強烈な蹴りを入れる！

「ぐはあ！」

大量の血と共にその日の食事を全て吐き出し男が唸る。

「な、何だ…デメ…!?」

「うるさい！貴様に名乗る名前はない！カンドタはこの上に居るの

か!？」

「へへへ…お前等もロマリアに頼まれた連中か…サッサと上に行つてぶつ殺されてこいよ!そっちの女3人も犯されまくって死体になったら俺が抱いてやるぜ!」

リユカは徐に男の頭を鷲掴みにすると、そのまま力を込めてゆく!「うぎやああああ!」

(ぐしゃ!)

腐ったリングを握り潰すかの様に、リユカは男の頭を握り潰した!そしてリユカは黙って歩き出す。

アルル達は慌ててリユカに続く。

リユカの怒りが伝わってくる為、無言のままついて行く。

塔を上へ進む中、カンダタの子分達がリユカを見つけ襲いかかつてくる。

アルル達は素早く臨戦態勢をとろうとするが、剣を抜く間もなくリユカが敵を蹴散らし、戦闘が終了する。

目の前で目撃しても、リユカが何をしたのか分からない程一瞬で…

《何なのこの強さ…強いとは思っていたけどこれ程とは…》

アルルだけではない…他の3人もリユカの強さに驚かされるばかりだ…

最上階へ着いたリユカ達は、まさに歪んだ欲望の宴を目撃する…

2人の女性を15人が代わる代わる犯しているところだ!

「あ…?何だテメー!何処から入って…ぐはっ!」

15人いた裸のブ男達は一瞬でこの世から消え去り、奥の部屋からカンダタらしき大男が姿を現す。

「な、何だこりゃ!?!?どういう事だ!」

「お前がカンダタか?」

「そう言うテメーは誰だ!?!」

「そんな事どうでもいい…金の冠を返せ!そうしたら一瞬で殺して

やる！」

室内の状況を見定めたカンダタは、慌てて奥の部屋に引き戻りドアに鍵をかける。

リュカは勢い良くドアにタックルするも、意外に丈夫でなかなか突破できない！

「リュカさん退いて！」

ウルフがリュカに退く様に指示する。

「イオ」

そしてドアに向けイオを唱えた！

（ドカーン！）

ドアは吹き飛びリュカが突入する！

まず正面に見えたのは、窓の外で両手を縛られ宙吊りになる裸の女性…

その女性の頭には金の冠…

女性の両手を縛り吊すロープは、室内を通って部屋の反対側の窓辺に立つカンダタの手に…

「おっと！俺様はキメラの翼を使って逃げさせてもらう！俺の事よ、女を気にした方が利口だ！じゃあな！」

そこまで言うつとロープから手を放しキメラの翼で飛んで行く…

女性は支えを失ったロープごと地上に落下し始める！

慌ててロープを掴むリュカ！

「くっ！何てヤローだ！」

女性は2メートル程落下したが、リュカのおかげで大事は免れた。

ひとまずは女性達に衣服とキメラの翼を渡し、各々先に帰らせた。

「カンダタ…逃がしちゃったね…」

「でも、金の冠は取り戻したわ！これでロマリア王に報告できるわ

よ」

アルルは出来る限り明るい口調でみんなに話しかける。
しかしリュカは、一人静かにカンダタの逃げた空を見つめ物思いに耽る。

アルルもハツキもエコナも…何を話しかけていいのか分からない…
でも、何時ものリュカに戻ってほしく、全てをウルフに押し付ける！
《な、何で俺なんだよ…》

「な、なありユカさん…俺…リュカさんが怒るの初めて見たけど…
1階に居た女の子とは知り合いなの？」

振り返ったリュカの表情は何時もの優しいリュカだった。

「僕にもあのくらいの歳の娘が居るんだ…とっても可愛いんだよ」
優しくウルフの頭を撫でるリュカ。

自分の娘と重ねてしまい、激怒する姿を見た少女達…

その底知れぬ優しさに、更に恋心を深めて行く。

悪循環であるにも拘わらず…

裸の付き合い

<ロマリア領・北部>

アルル達はリュカを囲み武器を構えている！

「はぁ！」

アルルは剣で一閃！

（キン！）

「甘いよ」

しかしリュカに難無く弾かれる。

「メラ」

「バギ」

ウルフのメラもリュカのバギで相殺される。

「いくで！」

「おっと！」

エコナが鉄の槍で突くも掠る事すらない。

「マヌーサ」

ハツキがマヌーサを唱えるも、呪文の効果は全くない。

・
・
・

「うん。みんな強くなったね！ただもう少し連携して攻撃した方がいいよ」

4対1でリュカを攻撃したにも拘わらず、リュカは息を切らさず何時もと同じ口調で語りかけてくる。

アルル達は激しい運動量のせいで、喋る事も出来ず座り込む。

リュカはアルル達に頼まれ、完全な実践形式での手合わせを行った。手加減無し（アルル側）の手合わせだった為、魔法も当たれば怪我

を免れなかっただろうし、物理攻撃も当たれば大怪我をするレベルの手合わせだった…当たればだが…

「さあ、ご所望通り一斉に手合わせをしたよ。僕もう疲れたよ！今日はこの辺で野営で良いよね！？」

「…ええ…」

ぐったりしているアルルは、何とか体を起こしリュカの質問に答えた。

「じゃあ僕はご飯の準備に取り掛かるね！そう言えばすぐ其処に小川が流れているから、女の子達は水浴びでもしてきたらどう？大丈夫、覗かないよ！それにウルフが覗かない様に見張ってるよ」

『俺だって覗かないよ！！』

と、突っ込みたいのだが疲れきって突っ込めないウルフ。

何とか体を起こし、着替えとタオルを持って小川へ歩く少女達。

「本当…リュカさんって凄い体力ね…私達がこんなに疲れる程攻撃したのに、汗一つかいてない…」

「まったくや！ベットのの上でも凄かったで！」

「止めて下さい、いやらしい話をするの！」

年頃の女の子が3人集まれば、自ずと話の内容は決まってくる。

「…でも、どうしてリュカさんと…ああ言う状況になったんですか？」

「なんや、ハツキは気になるん？いやらしい話は嫌いなんじゃないん？」

「…い、意地が悪いです！」

「まあええ…ウチな、利用しようと思ったんよ。」

「利用？リュカさんを！？」

「色仕掛けで迫って、ウチの無料ボディガードとして側に居させようと考えてたんよ！」

エコナは豊満な胸を両手で持ち上げ、体ごと左右に振りながら話す。

「ほんで、リュカはんが一人で村を歩いているのを見つけたから、改めてお礼をしたい言って話しかけたんよ！」

アルルもハツキも黙って聞き入る。

「そしたら『別にお礼なんていいよ。下心ありで助けたんだから』って爽やかに笑いよるねん！普通言わへんよ、下心ありなんて…だから聞いたんよ『下心ってなんですう』てな。」

「そうしたら何て答えたの？」

「ごつつあつさりと『うん。エツチ出来ればいいな』って笑いながら答えるねん！ウチも最初は処女を守るつもりやったんけど、あの笑顔に落ちてもうた！気付いたらリュカはんに抱き付き、キスしてたんや…」

エコナは自分の体を抱き締め、クネクネしながら語る。

「あの男ズルイねん！他の飢えきつた男みたいに『やらせろ！』って、がつついて来ないクセに、自身の欲求はストレートに話すねん！しかも最高の笑顔付きで…」

……

幾ばくかの沈黙が流れる…

「リュカさん…格好いいわよね…シャンパニーの塔でも…」

アルルはシャンパニーの塔でのリュカを思い出す。

「怒ったリュカさんは怖かったですけど…優しいからこそ、あんなに怒ったんですね…」

ハツキの言葉に皆頷く。

「奥さんて…どんな人なんやろ…？」

「リュカさんが言うには、すごい美人だそうですよ。奥さん以上の美人に出会った事無いって言っていました…」

「ウチ等かてそう悪くないと思うで！」

「リュカさん…元の世界へ帰っちゃうのかな…？」

「…」

アルルの一言に黙りだす。

「させへん！ウチが色仕掛けで落として、この世界に居たいと思わ

せる！」

「私も協力します！」

エコナとハツキが手を組む！

「アルルはええんか？リユカはん帰っても！」

「……私は……そう言うのイヤ！」

「「そう言うのって？」」

キレイにハモるエコナとハツキ。

さすがにちよつと照れくさかった様で、顔を見合わせ苦笑い。

「色仕掛けよ！私もリユカさんには帰ってほしくないよ！でも、この世界を気に入って帰らないのなら歓迎だけど……女の為にとって言うのはイヤ！それに元の世界には家族が待っているのよ……家族の事を思うと……」

「アルルの言い分も分かるけど、ウチは誘惑を諦めんよ。アルルに手伝えとは言わへんけど、邪魔だけはせんといてね！」

《でも……きつと無駄よ！リユカさんが色仕掛け程度で落ちると思えない……まあ、誘いには乗るでしょうけども……》

奇妙な連帯感が生まれた、かしまし三人娘。（古っ！）

リユカは無事元の世界に戻るのか！？

それより、戻った後が無事ですむのか！？私はそれが心配だ！

「ハツキ達遅いね……」

「じゃあウルフ！『遅くて心配になっちゃった？』とか言って見てくれば」

「殺さるよ！」

「平気だよ。裸の一つくらい見られても」

「リユカさんにはね！」

「みんなの事が心配だったって言えば大丈夫だよ！何だったら、足が滑ったとか言って押し倒しちゃえば？不可抗力なんですぅ……って」
男共は男共で、しょうもない話を続けている……

このパーティーの男女間の温度差は、結構深刻なものかもしれない…

リユカが居なければ、もっとまともな冒険が出来たであろうか？

裸の付き合い（後書き）

サブタイトルからエッチな内容を想像したアナタ！

……………仲良くなれそうですね。

今のところ、パーティー内で手を出した女性は1人だけ…
奇跡みたいな数字ですね！？

ノアニール

<ノアニール>

「ここがノアニール…」

溜息を吐き周囲を見渡すアルル。

人々の生活が途絶え、草木が鬱そうと生い茂る村…

その村の各所に横たわり眠り続ける人々…

「何故…こんな事に…？」

「なあ…ここにいたら俺達も目覚めなくならないのか？」

「それは大丈夫じゃ！」

ウルフの疑問に答えたのは、一人の年老いた男性だった。

「僕は皆が眠りについてから10年間、この村で生活をしておるが、呪いの影響を受けた事はない」

「あ、貴方は？…どうして貴方は呪いにかからなかったのです？」

「うむ。僕はイノック。生まれも育ちもこの村じゃ…僕が呪いにかからなかったのは、村に呪いがかかった時にちょうど居なかったんじゃない…家出した息子を捜す為、村の外に出ておった…」

イノック老人は切々と語る。

エルフの姫と恋に落ちてしまった息子ノイル。

エルフの娘は、エルフの里を捨てノアニールに…ノイルの元にやって来た。

しかし村人はエルフの魔力を恐れ、迫害をした…

一緒に住んでいたイノック老人にも被害が及び、居たたまれず息子にエルフと別れる様説得。

しかしノイルは受け入れず、エルフの娘と共に村を出て行ってしまった…

当初は行く当てなど何処にもない息子の事だから、すぐに帰って来ると思っていたが、1週間たっても戻る気配がなく、心配になり近

隣の村や町を探し回ったイノック老人。

2ヶ月探し回ったが消息すら掴めず、ひとまず村へ帰ると、この有様だった…

「どうか旅の方… エルフの隠れ里に行つて、エルフの女王を説得してはくれませぬか…」

アルルに縋り付く老人。

「勝手な事言うな!!」

静かな村内にリュカの怒号が響き渡る!

「アンタ親だろ! 息子が連れてきた彼女を認めないなんて! アンタが息子達を認め! 応援してやれば、こんな事にはならなかったんじゃないのか!？」

「し、しかし… エルフですぞ!」

「それがどうした! エルフが何だ! 種族の違いがどうした! アンタは自分の事しか考えてない! 他の村人に白い目で見られるのがイヤで、別れる様に言っただんだろ! 息子の幸せなんて考えもせず、愛し合う二人を引き裂こうとしたんだ!」

「エ、エルフと人間で… し、幸せになど…」

「やってみなければ分からないだろ! アンタ、二人の馴れ初めを聞いた事あんのか?」

「……………」

答えようとしないイノック老人…

「ふん! やっぱり… 二人がどれくらい愛し合っているか、どうして惹かれ合ったか知りもしないで… どうしてそれで、幸せになれないって言い切れるんだ!？」

「リュカさん… それくらいで…」

堪らずアルルが止めに入った。

「…確かに… 不幸になるかもしれない… でも、自分たちで選んだ道だ! 他人の言いなりで幸せになるよりも、自分で決断して不幸になった方が…」

「アンタに何が分かる…」

イノック老人が絞り出す様に呟く。

「分かるね！僕にも息子が居る！とても真面目な良い子だが、どこか抜けてる感がある息子だ。いつか、どっかのバカ女に騙される様な気がして、ワクワクしてるさ！でも絶対、『別れる』なんて言わない…僕は息子を…ティミーを信じてる！アイツはきっと良い女を連れてくるって…」

リュカは嬉しそうに、自分の息子の事を語っている。

それをイノック老人は見る事が出来ない…自分の息子を信じる事が出来なかったから…

アルル達は村の宿屋を勝手に借りて、今後の事を話し合っている。

「取り敢えず…エルフの里に行ってみましょうか…」

「でも、会ってくれますかね？いきなり攻撃されませんか？」

「それは分からないけど…でもこのまま、ほっとく訳にもいかないし…」

アルルの溜息混じりの提案に、リュカは何も言わない…

視線を向けても優しく微笑むだけ…

「あの…リュカさんは…この村を救うのに反対じゃないの？」

恐る恐るウルフが訪ねる。

「（クス）反対なんかしないよ。さっき怒ったのは、息子の幸せを考えていないジジイに対してだよ。まあ…エルフを迫害した村人達にも、少しは腹が立つけど…誰しも自分たちと違う存在は怖いんだよ……でも、こっちの世界じゃエルフって怖い存在なの？」

「リュカさんの世界じゃ違うの？」

「そうだよ！エルフだよ！人間より遙かに長生きで、とてつもない魔力を持っているんだよ！人間なんて一瞬で滅ぼしちゃうよ！」

ウルフは興奮気味にエルフについての風聞を披露する。

それは、この世界の人々が古くから言い伝えてきた事であり、何ら

確証に基づくものではない。

「でもウルフ……まだ滅ばされてないよ。この村も……人間全ても……」

「それは……その……」

リュカは優しく微笑みながらウルフの頭を撫でる。

「そんな思いこみだけで敵対しないでさ、仲良くなる努力をしようよ。……エルフの里かぁ……楽しみだなあ」

「?……リュカはん……何が楽しみなんや?ウチ、少しばかりビビってるで!」

よく見るとアルルとハツキも、エルフへの恐怖で表情が若干引きつっている。

しかしリュカは気にすることなく語る。

「エルフってさぁ……美人が多いんだよねえ。しかもエルフは男の子の出産率が低いんだって!まあその分長寿でカバーしてるみたいだけど……」

「そのの何が楽しみなの?」

「つまりだ、ウルフ君!そのエルフの里は美女だらけって事だよ!僕の知り合いのエルフも、頭は緩いけどすごい美人だもん!」

常人とは異なる思考回路でものを語るリュカ……

下手に手を出したが為に、物事が厄介にならないか、不安になる4人……

トラブルの予感はいきません。

<ノアニールより西の森>

一行は翌早朝にノアニールを出発し、一路西へ……エルフの隠れ里を目指す。

大勢の美女に出会える事を期待するリュカは、一人ウキウキ気分で『恋のバカンス』を歌い、いつもの様に敵を呼び寄せる。

現れたのは『バリイドック』と呼ばれる、犬のアンデットが4匹。
「あ！ワンコだ！…でも腐ってる。臭いがきついなあ…」

素早く臨戦態勢に入るリュカ以外の4人。

しかし先制したのはバリイドックだ！

バリイドックが遠吠え！

アルル達の体が淡く光る…

「『ルカナン』だ！気を付けろ！」

何故だか動物の言葉が分かるリュカが、アルル達に注意を促す。

それを聞き、ウルフが『スクルト』を唱え、守備力を上昇させた。

「ナイス、ウルフ！じゃあ私も、バギー！」

しかしハツキのバギは効果が薄く、バリイドックにダメージを与えられない。

「ギラ」

続いてアルルがギラを唱える。

真つ赤な炎がバリイドック達を赤く包む。

1匹のバリイドックが炎の中から飛び出し、アルルに襲いかかる！

「甘い！」

だが、アルルの遙か手前でエコナに鉄の槍で突かれ絶命した。

ひとまず戦闘も終わり、再度エルフの隠れ里へと足を進める一行。

ハツキが落ち込んでいるのに気付いたリュカは、彼女に近付き声をかける。

「どうしたのハツキ？何か落ち込んでる？さっきバギが効かなかったから、落ち込んでる？」

「私…全然みんなの役に立ってない…」

「そんな事無いと思うよ。アルルが怪我したらホイミで治してるじゃない！」

「でも、私じゃなくても…アルルだってホイミ使えるし、リュカさ

んなんかはベホイミを使えるじゃないですか！本職の僧侶の私はホイミしか使えないのに……」

「でも回復役は多いに越した事はないよ！それに僕を当てにしないで……常に逃げる準備で忙しいから」

リユカは戯けて見せるが、ハツキは俯き表情は暗いまま……

「アルルのギラ、見ました！？本職のウルフと同じくらいの威力ですよ！それなのに……私のバギは……」

「あのねハツキ……アルルは勇者様なんだよ。何でも出来る……それが勇者様なんだよ」

「何でも……やっぱり私……いらないですよ……」

「何でも出来る人間っていうのはね、一人じゃ何にも出来ない人の事なんだ。」

「え！？何でも出来るのに？」

ハツキは顔を上げリユカの瞳を見つめる。

「うん。腕力はあるが戦士程じゃない。素早く動けるが武闘家程じゃない。攻撃魔法を使えるが魔法使い程じゃない。もちろん回復系の魔法も使えるが僧侶程じゃない。いいかいハツキ……落ち込むなどは言わない……でも『自分は役立たずだ』って落ち込んでも、何も解決はしないよ。それより『どうすれば役に立てるのか』って悩んだ方が有益だ！」

「……………私に、何が出来ますかね？」

リユカの言葉を聞いて、ハツキの瞳に輝きが戻る。

「さあ……僕には分からない……色々試してみるんだね……何か答えが出てくるよ」

人に聞く事では無い……自分の未来は自分で見つける！

リユカの答えは優しくも厳しい。

ハツキなりに答えを見つける事が出来る様、祈るのみである。

ノアニール（後書き）

珍しくリユカがまともな事を言ってますが、一応素面ですので驚かないで下さい。

エルフの里

<エルフの隠れ里付近の森>

「なあ…俺達…迷ってないか!？」

ウルフが額に流れる汗を拭いながら訪ねる。

「大丈夫、迷ってないよ。僕達は美女の群れに近付いてるよ」

「本当かよ!何だか同じ所をグルグル回ってる気がするけど!？」

「本当本当!だんだん美女の匂が強くなってるからね!」

「…なんだよ、それ……じゃあ、その匂いを辿ってみてよ…もう疲れた…」

リュカの言い分に、心身共に疲れ切ったウルフが、やけくそ気味に嫌味を言う。

「ようし!任せなさい!!」

だがリュカは、気にしないどころか率先して森の奥へ勝手に進んで行く。

置いてかれる訳にはいかないアルル達も、慌ててリュカの後について行く。

<エルフの隠れ里>

どンドン進むリュカの後を、見失わない様について行くと、急に拓けた場所へと出る事が出来た!

「……………本当に着いちゃった…」

「だから言ったる!美女の匂いがするって!」

「何だよ、美女の匂いって!?どんなんだよ!」

「そりゃアレだよ!美人ゝって感じの匂いだよ!」

リュカの説明になってない説明で、ウルフはより混乱する…

そんな男二人を無視して、アルル達は村内へと入って行く…そこは…
「ほ、ホンマに美女だらけやん…」

エコナが感嘆の溜息を吐く程、エルフは美人しか存在していない…

近くに居たエルフがアルル達の事に気が付いた。

「キヤーー！！人間よー！！攫われてしまっわー！！！」

エルフの少女が悲鳴を上げて腰を抜かす。

「攫ったりしないよ。触ったりはするかもしれないけど」

リユカは腰を抜かした少女エルフに近付き、優しく立たせてながら話す。

周囲を見渡すと、他のエルフ達は皆逃げてしまった様で、村内を静寂が包んでいる。

立たせてもらった少女エルフも、慌ててその場から逃げ出してしまった…

「やれやれ…『人間より強大な魔力を有する恐ろしい存在』ね…人間見ただけで、ビビって逃げ出しちゃったけど…どうなの？」

この世界の常識で生きてきたアルル達には、リユカの言い様には反感を憶えてしまう。

しかし、現実を垣間見てしまった為、反論する事も出来ない。ただ、

「そう…言われ続けてたんだよ！」

と、子供じみた言い訳しか出来ないでいる。

「ま、いいや…そんな事より、女王様を捜しましょうか。一番でっかい建物に居るのがそうだよ。きっと…」

村内の一番大きな建物の前まで辿り着いたアルル達。

門には10人の戦士風エルフが、剣を構えて進入を阻んでいる。

「あ！間違はなく此処にお偉いさんが居るよ！」

リユカは誰が見ても分かる事を言いながら、戦士エルフ達に近付いて行く。

「ちょっと女王様にお話があるから、退いてくれない？」

「人間が何の様だ!？」

戦士エルフのリーダー格の美女が、リュカの喉元に剣を這わせ言い放つ。

「あれ？君が女王様？」

隊長エルフの瞳を真っ直ぐ見つめながら話すリュカ。

「ち、違う！み、見れば分かるだろう…女王様はこの奥にいらっしやる」

リュカに見つめられ、顔を真っ赤にする隊長エルフ。

「僕達、女王様に大切なお話があつて来たんだ。お願いだよ、お目通りをさせてくれないかなあ？個人的には君ともお話をしたいんだけどね…」

喉元に剣が這つてる事を気にもせず、隊長エルフの腰を抱き寄せ瞳を近付ける。

隊長エルフはどうする事も出来ないでいる…剣で喉を切り裂く事も、押しのけて逃げ出す事も、大声で助けを呼ぶ事も…ただリュカの瞳に心を奪われる…一人の女でしかない。

『人間達よ…入室を許可します…』

何処からともなく声が響く。

「……………どうぞ…お通り下さい……………ただ、女王様に無礼な事はするでないぞ!!」

女王の声を聞いた隊長エルフは、リュカの喉元に這わせてあつた剣を放し、通行を促す。

「ありがとう。君、名前は？」

優しく訪ねるリュカ。

「わ、私は…カリィだ…」

思わず答えるカリィ…リュカの瞳から目を離す事が出来ないでいる。

「うん。僕は、リュカ。よろしくね」

そう言つと、カリィの頬へ優しくキスをするリュカ。

最早、ただの恋する乙女であるカリィを尻目に、女王の元へと歩み

出すアルル達。

カリーはこの先どうなるのだろうか…

アルル達は謁見の間の様な空間に辿り着く。

間の前には玉座に座る美しきエルフが一人…

「貴女が女王様でしょうか？」

「如何にも…私がエルフの女王です。………して、人間…何用で此処まで参った？私達は、人間なんぞとは関わり合いになりたくない！サツサと出て行ってほしいのだが…」

不機嫌な表情の女王は不機嫌な口調で吐き捨てる。

「此処より東に位置する、ノアニールと言う村の呪いを解いて頂きたく、お願いに参りました。」

アルルは可能な限り恭しく嘆願する。

「ならぬ！その村の男は我が娘を誑かし、エルフの秘宝『夢見るルビー』を盗ませた！断じて許す事は出来ぬ！」

「夢見るルビー！？そんな事は一言も言ってなかったな？あのジジイ…」

「あの…私達はノアニールの村人に…難を逃れた村人に頼まれただけなんです…些か情報不足ですので、何が起きたのかをお教え頂けないでしょうか？」

「主等に教えて何になる？娘を連れ戻せるのか？」

「はい。可能な限り尽力致します。」

「……………」

目を瞑り考えるエルフの女王…

「いいでしょう…」

エルフの女王は静かに目を開くと、10年前に起きた出来事を静かに語り出した。

・
・

・
エルフの女王の娘『アン』は、ある日森に迷い込んだ人間の青年に惚れてしまい、毎日の様に村を抜け出し、人間の青年と逢い引きをする様になる。

その事に気付いた女王はアンに『二度と人間の青年と会う事は許さぬ』と言われ、悲観に暮れてしまった。

しかしアンは、エルフの秘宝を持ち出し、村から出て行ってしまった。

「……………質問が一つ」

女王が話し終わるとリュカが手を上げ質問をする。

「何か…？」

「何故、娘の恋路に反対したんですか？」

「人間なんぞ粗野で度し難い生き物！そんな生物との愛など許せる訳がないであらう！」

「それはエルフ族の総意？」

「そうです！エルフ族は人間と違い、同族同士で睚み合い殺し合うなどと言う事はしない！比べものにならぬ程高等な存在です！」

「つまりアンタは、母親であることより、女王である事を選んだ訳だ。見た目美人だが、最低なブスだな！」

リュカは苦々しく言い放ち、唾を吐き捨てた。

「な、何だと…」

エルフの女王は怒りに体を震わせる。

「アンタの娘だって人間という存在については聞いていただろう。

それでも人間に恋をしてしまったんだ！だがアンタは、その人間がどういう人物か知ろうともしてない。もし娘の幸せを願うのなら、娘の恋の手助けをしても良かった！『人間』という全てではなく、その『人間の青年』個人の事を調べ、娘を幸せにする事が出来るか確認すれば良かったんだ。反対するのはその後でも間に合う。」

「そ、それは…しかし、人間は多くの残虐行為を行ってきた歴史が

ある！」

「それは全人類が行った行為ではない！過去の…極めて少数の人々が犯した過ちだ！じゃあ聞くが…今まさに産まれたばかりの赤ん坊が居るとする。その子は極悪人か！？」

「……いや…違う……だが、何れ悪事を働くかもしれない！」

「じゃあ、その赤ん坊がこの村に迷い込んだらどうする？殺すか？言っておくが、赤ん坊を村から追い出したらすぐに死ぬぞ。殺したと同じ事だぞ！」

「産まれたばかりの赤子ならば、我らの手で育てる。赤子に罪はない！」

「では、その子が成長しアンタの娘と恋に落ちたらどうする？人間だから反対するか？何れ大悪人になるかもしれないから拒絶するか？」

「我らが育てなのだ！悪事を起こす訳がない！反対などせん！！」
エルフの女王は立ち上がり、リユカをきつく睨み付ける。

「その通りだ！育ってきた環境によって人間は変わる。優しい人に他人には優しくするようにと言われ育ったのなら、他者を傷つける様な事はしない人物になる。その青年だってそうかもしれないだろう！それを調べもしないで決めつけた！エルフの女王という立場だから、娘が人間と仲良くする事を許す訳にはいかなかったんだ！アンタは娘より、自分が大切だったんだ！」

リユカの言葉に力無く腰を下ろす女王…

「……貴様に…何が…分かる……」

「分かるさ！僕にも娘が居る。もう嫁いってしまったけど…初めて僕の前に彼氏を連れてきた時は、ぶん殴ってやろうかと思ったけど、娘が…ポピーが悲しむからやめた。でも、やっぱり腹立つからね、ちよつと嫌がらせをしてやったんだ。そしたら、その男真に受けちゃってね…本当に危険な地域に赴いて、魔族を倒して来ちゃったんだ。そして娘との仲を認めて貰う為ならって、僕にまで攻撃してきた…これ程ポピーの事愛してるなら、これ以上反対できないでしょ

う…結婚式では凄く幸せそうだったよ」

リュカは嬉しそうに娘の事を語る。

それを見た女王に言葉は無い…

ただ俯き、出て行くようにと手で合図する

エルフの宮殿を後にしたアルル達は、エルフの隠れ里の出口を目指し歩き出す。

「リュカさんの娘さんて、もう結婚してたんだ」

「何だウルフ？僕の娘を狙ってるのか？まだ居るぞ！」

「別にそんなんじゃないよ！ただ、どんな人なのかなと思って…」

「うん。外見は母親似でものっそい美人だよ。性格は僕に似てるってよく言われる。あそこまではっちゃんけてはいないつもりだけどなあ…」

アルル達は想像をして震え上がった…

リュカの様な性格の女が居る事に…

そんな女が存在に…

儚い命、強固な愛

<エルフの隠れ里付近の森>

「しかし探すとしても何処を探します？10年も前の事ですよ！何処か別の土地に渡ってしまっただけかもしれませんし…」

ハツキの嘆きにエコナも同調する。

「そやで！もうほつといてロマリアへ戻りましょ。そない義理を尽くす必要ないやん！」

「そんな訳いかないわ！イノックさんと女王様に約束してしまったんだから」

「うん。それに、そんな遠くには行っていないよ。この森を探せば、二人ひっそりと暮らして居るよ」

「リユカさん、この森に居るってどういう事！？何でそんな事言い切れるの？」

ウルフだけでなくアルル、ハツキ、エコナもリユカの言葉に興味を持つ。

「うん。それはね…あのジジイが言ってたじゃん。『1週間たつても戻る気配がなく、心配になり近隣の村や町を探し回った』って…しかも2ヶ月間も探したみたいだし。自分の息子の事だからね…そりゃ真剣に探したんだと思うよ。それなのに足取り一つ見つからないって事はだ…近隣の村には近付いてもいないって事だよ。なんせエルフは人間達におそれられてるからね。何処にも行く事なんて出来ないよ」

リユカの説明に納得する4人。

「ほな、この森全体を探さなアカンやん！何日かかる事やら…」

「人間が生活する以上、住処から一步も出ないで生きて行く事は出来ない。食料調達等であっちこっち歩き回ってるはずだから、そんなに大変じゃないよ」

そう言っているとリュカはサッサと森の奥へと入って行く…

実を言うとアルル達は、この森に入ってから方向感覚を無くしているのだ。

その為、リュカとはぐれると遭難してしまう恐れがある。

みんな慌ててリュカについて行く。

暫く森の中を彷徨うと、湿っぽい雰囲気醸し出す洞窟が口を開けてるのを発見した。

「さすがにこの中には居ないだろう…」

「甘いなウルフ君。あの二人は誰にも邪魔されない所に行きたいんだ！エルフはもちろん、人間さえも絶対入って来ない洞窟…完璧じゃないか！」

若者4人は不満げだが、リュカがドンドン進んで行く為、ついて行かざるを得ない…

<ノアニール西の洞窟>

此処は有り触れた洞窟だ…

湿気とカビ臭さとモンスターの気配…

テンションの低い4人を励ます為に歌うリュカ。曲目はジュー・デ・オング『魅せられて』。そして案の定4人は戦闘を強いられる。

一行は幾度も勝利を重ねながら、洞窟内を奥へと突き進む。

目の前に奇妙なモンスターが現れた。

まるでキノコのお化け…『マタンゴ』である。

3匹のマタンゴは一斉に『甘い息』を吐き、それを吸い込んだアルル達は簡単に眠り着いてしまった！リュカ以外…

「あれえ…みんなお疲れでしたか？これってピンチじゃ〜ん！」

危機感など感じていないリュカは、ドラゴンの杖でマタンゴを一掃！
眠れる美少女3人と居眠り少年1人を担いで、更に奥へと進んで行く。

最初に目を覚ましたのはアルルだった…

周囲を見回すと、そこは美しい地底湖の畔…

そして少し離れた所にリュカが佇み、何かを読んでいる。

慌てて他3人を起こすアルル。

それに気付いたリュカがアルルに手紙を手渡した。かなり古い手紙だ…

その手紙には【お母様。先立つ不幸をお許し下さい。私達はエルフと人間。この世で許されぬ愛なら…せめて天国で一緒になります。

アン】と…

「これって…」

「…エルフの女王の娘…アンの最後の言葉だ…その宝箱に、ルビィと短剣…それとその手紙が入ってた…」

リュカの頬を涙が伝う…

リュカだけではない…皆、涙がこぼれ出る…

「様子を見守るだけで良かったんだ…誰でもいい、エルフでも人間でも…親が意固地に反対しなければ…そうすれば…死ぬ事なんて…」
「帰りましょ…そして女王様とイノックさんに伝えないと…」

アルル達は洞窟を後にする…沈痛な面持ちで。あのリュカですら…

<エルフの隠れ里>

アルル達は再度エルフの女王の宮殿へ赴いた。

入口にはカリーの姿がある。

「リュ、リュカ…また来たのか…もう、女王様には会わせぬぞ！」

リユカは悲しい表情のまま、懐から古びた短剣を取り出しカリーに見せる。

「これ…君のだろ…君の名前が彫ってあるよ…アンに渡したのかい？」

それは洞窟でアンの手紙と一緒に入ってあった短剣だ。

「こ、これは！？私がアン様にプレゼントした『聖なるナイフ』だ！ど、何処でこれを？」

リユカは事の顛末をカリーに話した…

「そんな！アン様が…（うつ）…アン様が…！」

カリーは短剣を抱き締め、泣き崩れた。

そしてリユカ達は女王の元へと歩み出す。

「また来たのか！？不愉快な人間め！」

不快感を露わにする女王に、アルルは夢見るルビーを差し出す。

「そ、それは！？…いたい何処でそれを？」

リユカは黙って手紙を渡した。

女王は手紙を読み始めると、体を震わせて泣き出した…

「私が認めなかったばかりに…私が…（うつうつうつ）…アン…ごめんなさい…アン…！」

ただ黙っていることしか出来なかった…

女王を責める事も、慰める事も出来ず…

リユカ達は目を伏せ、一緒に悲しむ事しか出来なかった…

「世話になったな人間よ…いや、リユカと申したな。カリーから聞いたぞ」

「…………ノアニールの件ですが…」

「うむ。これを持って行くが良い」

リユカは女王より、粉末の入った袋を受け取った。

「それは『目覚めの粉』よ。その粉を風に乗せてノアニールに撒けば、呪いの効果は消え去り、皆目覚めるでしょう」

「ありがとうございます」

「それと、今宵はこの村に宿泊してゆきなさい。もう夜も遅い…もてなす事はありませんが、寝床を一晚提供しましょう」

女王の突然の提案に、驚きを隠せないアルル達。

しかしリュカだけは驚いた風もなく、優しく礼を告げる。

「ありがとう。女王様」

そのリュカの一言に、顔を真っ赤に染めて女王が呟く。

「べ、別に…人間を許した訳ではありませんから！こ、今回の事への感謝の気持ちですから！」

これは、もしかしたらツンデレというヤツでしょうか？

今後のエルフ族の未来が心配です。

儚い命、強固な愛（後書き）

二人のエルフの心を魅了したリユカ！

そして夜は更けて行く…

今宵、リユカの隣で寝息を立てるのは果たして誰か！？

女の戦いが今始まる！

闘技場でモンスター同士を戦わせるより、こっちの方が面白そうだ
！

目覚め

<エルフの隠れ里>

まだ夜も明けきらぬ前に、リュカの寝ている部屋の前に集まる4人。エルフ達を刺激せぬ様、早めに村から出て行く為、身支度を調えたのだが…案の定リュカが起きてこないのだ…

「なあ…リュカはんの事や、誰が女を連れ込んだるんやないか？」

「連れ込むって…エルフしか居ないのよ！？」

「カリーって女戦士じゃないか？剣を突き付けておきながら、抱き寄せられてたぞ！」

「女王様もリュカさんの笑顔で虜になってた様に見えましたよ！」

ヒソヒソとそんな話をしていると、リュカが部屋から静かに出てきた。

「あれ？みんなどうしたの？」

すぐに扉を閉めた為、中を確認する事は出来なかった…

「リュカさん…中に誰か居るんですか？」

「……………そんな事を聞く必要がある？」

リュカは昨晚の事を教えるつもりはない様だ。

「世の中には知らなくていい事もあるんだよ。それが大人になるって事だよ。諸君！」

リュカは4人を部屋から遠ざけ、退村を促す。

エルフ族と人間との間でトラブルが起きぬ様、祈るしかないだろう…

<エルフの隠れ里近郊の森>

「ハツキ…」

リュカはエルフの隠れ里よりノアニールへと向かう道中、ハツキに

声をかける。

「はい、何ですかリュカさん？」

「これ…カリーから貰ったんだけど…ハツキが使つてよ」

そう言つて手渡されたのはアンが使用してた聖なるナイフだ。

「こ、これって！？アンさんの形見じゃ…！？」

「うん。カリーに渡したんだけど、僕等が役立てた方がアンも喜ぶからって…」

「で、ベットの中で渡されたんですか？」

「…イッテルイミガワカリマセン」

「……………」

ジト目で見つめるハツキ…

視線を合わせないリュカ…

「ふう…そうですね、アンさんの為に私が使用させてもらいます」

「ありがとうございます」

「でもナイフだと攻撃範囲が狭いから、素早く動ける様に特訓しないと…」

「うん。僕も手伝うよ」

リュカの笑顔と一緒に特訓と言うご褒美に、昨晚の事などどうでもよくなってしまうハツキだった。

<ノアニール>

アルル達が村へ入ると、奥の方からイノック老人が小走りで近付いてくる。

「おお…アルル殿！エルフの女王には会えましたか？」

側に立っていたリュカとは視線を合わせず、アルルとだけ話を進める。

「はい。呪いを解く方法入手にも成功しました…」

「なんと…！ありがとうございます！では、早速…」

「アンタ、自分の息子の行方はどうでもいいのか？」

冷たい口調でリュカが問う。

「いいわけない……だが、探しようがないのだ……足取り一つ掴めなかったのだから……」

イノック老人は怒りと悲しみの目で、リュカを睨み付ける。

「何処か別の地で……二人幸せに暮らしていると思い、祈るしかないだろう……」

「僕達は足取りを見つけました……」

「……！本当ですか！？そ、それで何処に……！？」

イノック老人は驚き、絶る様な表情でリュカに詰め寄る。

「……………」

だがリュカは答えない……アルル達も答える事が出来ない。

「……………ま、まさか……………」

「……………この世じゃ添い遂げられないと悟り、二人天国で幸せになる為に……………」

「そ、そんな……（うつうつ）……」

リュカの言葉を聞き、両手で顔を覆い泣き崩れるイノック老人。

「……貴方が……せめて貴方だけでも味方をすれば……父親である貴方が、自分を犠牲にしても守ってやれば……」

リュカは懷から、目覚めの粉を取り出し空中へばらまく。

粉は風に乗る、村の隅々まで行き渡る。

すると、其処彼処から人々の声が聞こえだした！

「ジイさん……村の人達への説明はアンタに任せる。呪いで10年間眠り続けた事を、伝えるか伝えないかは………伝えれば、きっと皆怒るだろう！呪われる原因を造ったアンタの息子と………そしてアンタ自身も……責められるだろう……」

リュカ達は泣き崩れるイノック老人を尻目に、その場を立ち去った。心身共に疲れた為、今日は宿屋で休み、ロマリアへ帰るのは明日にすることに……

村中の人々が、荒れ放題の村を見て驚いている…

そんな中、アルル達は宿屋へ赴く。

数日前に勝手に宿泊した為、アルルは少し後ろめたそうだ。

「あ、あの…5人一晩なんですが…大丈夫ですか？」

「もちろんだとも！5人で25ゴールド。…ただ少し待っていてくれ！何故だか客室が荒れててね…急いで片づけるので時間をください。」

「ぜ、全然大丈夫です！どうぞごゆつくり！！」

客室を荒らしたのは、数日前のアルル達…

そんな事知らない店主は、慌てて2階へ行き部屋を整える。

その間、アルル達はロビーの椅子に座り待つ事に…

其処には一人の若い女性が物思いに耽っていた…

無論リユカがスルーするわけもなく、口説き出す。

「お嬢さん、何か悩み事ですか？僕がご相談に乗りますが…ベットの
の中で」

この男、何時もこんなストーリーレートなんですかね？

「ありがとうございます…私、失恋しちゃった…」

女性は少し微笑むと、悩み事を語り始めた。ベットの中にはないけれど…

「昨晚、あんなに愛し合ったのに…今朝起きたら居なくなってたの、
彼…」

「けしからんヤツだ！貴女のような美しい女性を、黙って捨てるなんて！何てヤツですか！？出会ったらデコピンしてやりますよ！」

「ふふふ…面白いのね、アナタ。」

「ありがとう。僕の名前はリユカ。ベットの中では、また違った僕をお披露目出来ますが…」

「私はジェシカ。そして私を捨てた男はオルテガ…もし、出会ったらデコピンをよろしくね」

「あの…も、もう一度…男性の名前を…」

アルルが立ち上がり、ジェシカへと詰め寄る。

「え！？ええ…オ、オルテガよ…そ、それが何か…」

「ねえアルル…もしかして…あ「それ以上言わないで！」

ハツキの言葉を遮り、考え込むアルル。

オルテガ…それは10年前に魔王バラモス討伐の為に、アリアハンから一人で旅立ち、そして散った男…しかもアルルの父親の名前である！

アリアハン出身のハツキとウルフは、その事を分かっている為、アルルを気遣い心配そうに見守っている。

そんな事知らないリュカは、ジェシカを口説き相部屋の了承を得ていた。

「皆さん、お待たせしました。お部屋のご用意が整いました。どうぞおくつろぎください」

リュカのナンパが成功したタイミングで、店主が2階から下りてきた。

リュカだけが女性を伴い、部屋へと消えて行く…

暗い表情で部屋に入るアルル…

他の3人は、戸惑いながらも旅の疲れを癒す為、各々の部屋へと入って行く。

翌朝、あまり眠れなかったアルルは、皆が起きる前にベットから起き、村内を散歩する事に…

其処には、既に起きていたリュカが小鳥達と戯れている。

父親と関係を持った女性と、昨晚関係を持った憧れの男性…リュカ。アルルの気持ちは複雑になり、リュカにどの様に接しているのか分からない。

「おはようアルル。どうしたの、元気ないね？何か相談事があるなら聞くよ」

「………… オルテガとは…私の父なんです…」

「オルテガ？誰？」

さすがにイラつくアルル。

「昨日出会った、ジェシカさんが言ってた男です！」

「………… ああ！ジェシカさんの元彼ね！へー、さすがアルルのパパさん。趣味が良いね！」

「（イラ）趣味がどうかじゃないです！父は私やお母さんを置いて、旅だったんですよ！それなのにこんな所で浮気をして…」

「イヤイヤ、浮気じゃないよ。ジェシカさんから聞いた話では、モニターに襲われている所を、オルテガさんに助けられて、惚れちゃったジェシカさんが、お礼と称してベットで迫ったんだって。まあ…もちろん、据え膳食わねばってヤツで、やる事はやったみたいだけど…」

「同じですよ！お母さんを裏切ってるじゃないですか！」

「男なんて、そんなもんだよ…」

「父はお母さんの事など愛してないという事ですか？リュカさんもそうなんですか！？」

アルルは泣いていた。

リュカは優しくアルルを抱き寄せ、その場に座ると膝の上にアルルを座らせ宥めながら話す。

「アルルのお父さんは、お母さんの事を愛してるよ。」

「何でそんな事言えるんですか！」

「大好きな人の為に、世界を救う旅に一人で出たんだ！お母さんの事を愛していなければ出来ないよ。」

「じゃあどうして…」

「男ってのはね、欲求を止められないもんなんだ！人によって処理の方法が違うだけで、皆同じなんだよ。」

「処理の方法？」

「そ！自分の手を使う人もいれば、僕みたいに女性をナンパする人も居る」

「そんな身勝手な！」

「身勝手だねえ…僕もビアンカの事を愛してるよ。この世で一番…でも、身勝手なんだ…困ったねえ」

「男の人はズルイです！そんな人、嫌いです！身勝手じゃない真面目な人が私は好きです。」

「うん…じゃあアルルには、僕の息子がお似合いかな？」

「ティミーさんですか？真面目なんですか？」

「うん。父親とは正反対！」

「そうですか…会って見たいですねえ…」

「そうだね、年頃もアルルと同じくらいだし…バカが付くぐらい真面目だからね。もてるのに、摘み食いしようとしらないんだ。男としてどうなの？って思うよ…」

「……（スー）…（スー）……」

気付くとリュカの腕の中で寝息をたてるアルル。

少しだが心の蟠りが解け、安心してしまったのだろう。

リュカが優しく抱き上げ、宿屋までアルルを運ぶ…

どうやら今日の出立は、遅くなりそうだ…

継承

<ロマリア>

「おお！さすがは勇者一行！よくぞ取り戻してくれた！」

アルル達はロマリア城へ入るなり、謁見の間まで急かされる様に通され、今は王様よりお褒めの言葉を賜っている。

「お褒め頂き恐縮です。しかしカンダタ本人は逃してしまいました……申し訳ございません」

「よいよい……女性を助ける為に已むなしと聞いておる！」

「随分と詳しいツスね！？見てたんですか？」

リュカの不躰な質問に、王は笑って答える。

家臣の方々は不愉快極まりない顔をしている。

「お主等が助けた女性から聞いたのだ。窓の外に縛り吊されてた者だ。憶えておるだろ？」

「お元気ですか？」

「うむ。お主に感謝しておったぞ！」

リュカは嬉しそうに頷く。

「……褒美の件だが……話をまとめると、リュカ……お主一人の力で、なし得た様に思えるのだが……」

「そんな事ないツス！みんなの協力でなし得た事ツス！」

「殊勝な事だ。だが、お主が盗賊団を壊滅させたと、報告がきておるのだよ！」

「その通りです陛下！私達は一緒にシャンパニーの塔まで行きましたが、何も出来ずにいました！彼一人の功績です！」

珍しくリュカが辟易している事に、アルル達は少し楽しんでいる。

「ではリュカに褒美を取らせよう！」

ロマリア王は嬉しそうに立ち上がり宣言する。

「リュカ！お主にロマリア王国の王位を譲ろうぞ！」

「あゝ！？何言つてんの？大丈夫？」

アルル達も臣下の者達も言葉が出ない中、リュカだけが無礼極まりない発言をする。

「うむ…もうちよつと分かりやすく言うとな…リュカ、お前が王様って事だよ！わっはっはっはっはっ」

「陛下ー！！何を仰います！？王位をこんな下賤な旅人にやるなど！」

「私の見る目に間違いはない！リュカならこのロマリアを良い国にしてくれる！」

「し、しかし…「これ以上臣下の身で文句を言うのなら、相応の罰を与えるぞ！」

罰と聞き黙り込む臣下の人々…

「ちよ、待てコラ！僕はOKしてねえーぞ！」
100%不敬罪です。

「何だリュカ…断る理由はあるまい！王になれるのだぞ！」

「自由気ままな旅人と制約いっぱい之王様…うゝん、僕迷っちゃうって、ちげーよ！嫌だよ、断る！誰が王になんぞなるか！」

「何ゆうてんの！？王様やで！！絶大な権力やん！」

「あのねエコナ…権力には責任が付いて来るんだよ！権力が大きければ大きい程、責任も大きくなる。自由気ままに生きる方が幸せなんだよ！」

「益々気に入った！お主は王の有り様を心得ている！やはり私の目に狂いはない！リュカよ、お前にこの国を任せたい！是非、王になつてくれ！」

（現）ロマリア王はリュカの元まで近付き、両手を握り締めて王位継承を進める。

「絶対ヤダ！冗談じゃない、今僕は幸せなんだ！その幸せを手放して堪るか！自由こそ我がライフスタイル！」

（現）ロマリア王の手を振り払い、自己の生き方を力説するリュカ。

「……………どうしてもダメか？」

「しつこいおっさんだな！王になって良い事なんか一つもない！」
最早誰も言葉遣いを注意しない。

「……………仕方ない…諦めるとしようか…だがリュカよ！何時でも代わってやるぞ！自由に飽きたら何時でも来い！」

ロマリア王はにこやかに玉座へ戻る。

「飽きないよ！」

「では、他に何か欲しい物はあるか？何も褒美をやらない訳にはいかぬのだが…」

ロマリア王の問いに少し考えたリュカは、アルルを見て問いかける。
「アルルは何か欲しい物ある？」

急に権利を譲られ戸惑うアルル。

「……………そ、そうですね……………あの、可能なら船を頂けますか？今後の旅に必要なと思うので…」

「ふむ…船か…我が国にも無いわけでは無いのだが…我が国の船では、お主等の役には立たんよ」

ロマリア王の言い分では…

船、1隻で大海原へ出ても、海の強いモンスターに沈められるのが落ちである。

船団を組んで航海するのなら何とかなるが、1隻では船自体が丈夫でないと、意味がないと言う。

「そう…ですか…」

「ただ『ポルトガ』なら、造船技術が発達しておる故、強固な船を造る事が出来るであろう」

「ではポルトガへの通行許可を頂けますか！？」

「それには及ばぬ！もう既にお主等はフリーパスだ！ロマリアから何処へ行こうが、私に許可を取り付ける必要はない。だが困った事に、ポルトガへ通じる関所なんだが…」

齒切れの悪いロマリア王。

「何か問題でも…」

「……………鍵が無い…」

「は？」

「モンスターが蔓延っていたのでな…関所の門を閉めてしまったのだが…鍵を無くした…まあ、モンスターの行き来を阻害する為に閉めた訳だから、いいかなと思って合い鍵を造って無い…壊されると困るのだ。鍵を開ける事が出来たのなら、自由に通行してくれ！」
結局、アルル達はロマリア内フリーパスの権利以外、何も貰えなかった。

むしろ問題が山積して行く事に、リユカ以外が頭を悩ます…

「どうしよう？」

宿屋へ戻った一行は、いつもの様にリユカの部屋で作戦会議を行っていた。

「ナジミの塔で貰った、盗賊の鍵じゃ開かないかな？」

「やってみてもいいけど、開かなかった時の為に別の方法も考えとかないと…」

ウルフの提案にアルルは難色を示す。

関所を閉める様な鍵だ。

簡単な造りの訳が無い。

「じゃあ、どうすんのや！」

「……………」

誰も何も思いつかない。

堪らずアルルはリユカに頼る事に…

「リユカさんは…何か打開策がありますか？」

「うん。『魔法の鍵』を探しに行こうよ。『イシス』って国にあるらしいから」

「何でそんな情報を持つてんだよ！」

愚問である。

「ジェシカさんから聞いた。ジェシカさんは元彼から聞いたらしい。その元彼が探しに行つたみたいだよ」

アルルの顔を歪る…

「また女かよ…」

皆、呆れ顔だが他に何も思いつかない為、リュカの情報を頼りにイシスへと向かう事となる。

先ずは『アツサラム』へ向けて…

別世界より？

<ラインハット>

ラインハット謁見の間に、特使として訪れたティミーが傳えている。

「おいティミー！そんな他人行儀に畏まるなよ！」

「いえ、そう言うわけには参りません。私はグランバニアの特使として参りましたので…」

相変わらずバカ真面目である。

「アンタそんなだから彼女が出来ないのよ！もう少し柔らかくなりなさいよ。男が堅いのは一部分だけでいいのよ！」

《この女のこう言う所が嫌いだ！公式の場という事を理解してるのか！？》

イラつきポピーを睨むティミー。

楽しそうに微笑むポピー。

この二人は双子の兄妹である！これでも…

「まあまあ…それでティミー君、どのような用件でいらしたのです？」

国王のデールが場をまとめる。

・
・
・

「相変わらずトラブルに巻き込まれる男だな…」

ヘンリーが笑いながら感想を述べる。

「ヘンリー様！笑い事ではございません！我が国は現在、国内に敵が多数存在します。ラインハットのご助力が無ければ、我がグランバニアは窮地に陥ります」

「貴族から税金を取るからだ。貴族ってのは気位だけは高いからな」
ヘンリーの笑いは止まらない。

「ぶつ殺しちゃえばよかったのよ！拳兵した時に…」

ポピーが笑顔で物騒な事を言う。

「まあ…そう言うわけにもいかなかったのだろう…」

さすがに引くヘンリー…

「（ゴホン）分かりました。我がラインハットは可能な限りグランバニアをご支援致します」

デールの力強い言葉に、ひとまずは安堵するティミー…

そして表情を切り替え、もう一つの難題に立ち向かう覚悟を決める！

「さて…ラインハットのご協力を得た所で、ポピーに頼みがあるのだが！」

ティミーの言葉にポピーの瞳が輝く！

「何？何？何？何？何？愛しのお兄様が私にお願いって？『童貞捨てたいから体かせ』とか言っちゃう！？やだ、ちょく楽しみ！！」

イライラするティミー、ワクワクするポピー。

拳を握り締め、怒りを我慢しつつ話を続ける。

「父さんを助け出すのに、協力をしてほしいんだ！」

少しキレ気味のティミー。

「あゝ！？何言ってるの？わざわざ改まって言う事？言われなくても協力するつもりよ私！この後サントローズへ行くんでしょ！？そしてマーサお祖母様と一緒にグランバニアに戻るんでしょ！？私はそのつもりよ」

完全にキレルポピー。

「あ…ああ、よろしくお願いしたい…」

「あのねえティミー…アンタだけのお父さんじゃないのよ。私にとっても大切なお父さんのよ！」

「うん。ごめんね…じゃあ、早速サントローズへ行こう！」

少し自分の妹を侮っていた事に、反省する…

「ちよつと待って！着替えてくるから！…あ！私の着替え…見たい？」

「本気でどうでもいいから、早くしてくれ！」

やはりポピーはポピーだ…

ティミーはもう一人のトラブルメーカーと共に、サントローズへと向かう…胃に穴が空く思いをしながら。

<サントローズ>

「あらティミー君、いらっしやい。残念ながらリユリユは出かけてるわよ」

ティミーとポピーはサントローズに着くなり、シスター・フレアに出会いリユリユ不在を聞かされる。

「残念ねえ〜ティミー！もう帰る？」

《コイツ、弟だったら絶対殴ってるのに！》

「今日はマーサ様に用がありまして…ご在宅ですか？」

「ええ、マーサ様なら…」

ティミーはシスター・フレアと別れ、サンチョ夫妻と共に暮らす祖母の元へ赴く。

「ティミー様、ポピー様！お久しぶりです。……………ティミー様…リユリユちゃんならご不在ですよ？」

サンチョがティミーの来村を不思議そうにしている。

「何で僕がサントローズへ来ると、リユリユ目当てと思われるの！？」

「事実だからでしょ！」

ティミーの憤慨に爆笑しながら答えるポピー…

「あら？ティミー、ポピー…いらっしやい。……………でもリユリユちゃんは今村に居ないのよ…」

そこに2階から下りてきたマーサも、リユリユ不在を伝える。

「……………いえ、今日はマーサ様に用がありまして…」

「まあ、私に…何かしら…リユカの行動なら止められませんかよ」

実の母親にこんな事を言わせるとは…

「実は…」

・
・
・

「あの子は飽きの来ない人生をおくってますね…」

これまでの状況を聞いたマーサは呆れるばかり…

「それで私の異界へのゲートを開ける力が必要と…しかし、私の力は魔界の門を開ける力…今回役に立つかどうか…」

困り顔で答えるマーサ。

「父さんが言っていました！『行動する前に諦めるのは愚か者だ』と…ともかくグランバニアへ来て頂けませんか？あの不思議な本を調べれば、何か分かるかもしれません」

「行動する前に諦めるのは愚か者ですか…良い言葉ですね」

「お祖母様。お父さんは女性を口説く時に、その言葉をよく使っていましたわ。『口説くだけ口説いて断られたら、諦めればいい。行動する前に諦めるのは愚か者だ』って？」

「なるほど…あの子らしいですね…」

「因みにティミーは、行動する前に諦めるのは愚か者よ。口説こうともしない！」

ポピーの言葉に辟易しているティミーが答える。

「リユリユは妹だ！口説く気は無い！当たり前だろ！」

「あらあら…別にリユリユの事ではないのですが…やっぱり忘れられないんでしょう？」

「こら、ポピー！ティミーが可哀想でしょ！あんまりからかわないの！」

「はい。ところでリユリユは何処へ行ったの？」

ティミーも行方が気になる様で、マーサの答えを待っている。

「確か…リユカに教わって、ルラフェンって町に行ってみたみたい…何か特殊な魔法を憶える為だった…」

「特殊な魔法…？何かしらね！？」

「父さんは色んな事知ってるなあ…ルラフェンかあ…どんな所だろ？」

「……………さあ、こうしてても始まらないわよ！グランバニアへ行きましょう。困った息子を連れ戻す為に！」

ティミーはポピーとマーサを連れ、ポピーのルーラでグランバニアへと戻る。

リユリユに会えなかった事を、非常に残念に思いながら…

別世界より？（後書き）

みんなのアイドル、ポピー様が久しく登場！！

こんな素敵な妹が居て、ティミー君が羨ましいですよね！

ところで…『ついにアッサラームだ！はっちゃけフェスティバル！

！』を期待されていた方にはごめんなさい。

楽しみは次話に持ち越します。

お友達

<ロマリア〜アッサラム>

アッサラムへと続く大草原に響く歌声…『カントリーロード』を
気持ちよさそうに歌うリユカ。

モンスターの一団に襲われ、戦闘を余儀なくされるアルル達…

「ふう…俺達結構強くなってきたよな！」

戦闘を終え、ハツキのホイミで傷を癒しながらウルフが感想を述べる。

「そうね…戦闘回数だけはい多いもんね…そりゃ強くもなるわよ！」

アルルは、まだ歌い続けているリユカに嫌味を言ったが、気にする様子は微塵もない。

「あ、ある意味リユカさんのお陰で強くなってるんですね！…私達の為に歌ってるのかな？」

自分の歌に浸っているリユカを4人が見つめる…

「…そんなわけないだろ！？」

ウルフの意見が満場一致で可決された。

<アッサラム>

まだ夕方と呼ぶには早い時間、アルル達はアッサラムへと辿り着いた。

一行は何時もの様に宿を確保し、町へと繰り出し旅に必要な物を購入する。

幾つかの店を見回ったアルル達は、1軒の店で足を止める…

「おお、私の友達！お待ちしておりました！売っている物を見てい

って下さい！」

店内へ入った途端、度を超えた愛想の良さで話しかけてくる店主…

「と、友達って…私達の事？」

「そうです、そうです！皆さん、私の友達！」

「イエーイ！僕達友達！友達価格で売ってちょうだい！」

「はい、私と貴方、友達！買っていつてちょうだい！！」

店主と一緒にしゃぐリュカ。

そんな中、売っている物を見るアルル達。

「結構良い物売ってるわね…」

「この杖…『魔道士の杖』か！？」

ウルフは1本の杖を手に驚いている。

「おお！さすが友達、お目が高い！24000ゴールドです。お買になりますよね！」

「に、24000ゴールド！？買えるわけ無いだろ！」

「おお、お客さん。とても買い物上手。私、参ってしまいます。では、12000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょう？」

「おいおい、いきなり半額かよ！」

リュカが小声で突っ込む。

「それだつて高いよ！」

「おお、これ以上まけると、私大損します！でも貴方友達！では、6000ゴールドに致しましょう。これならいいですか？」

「おお、友達！僕達にはこの杖が必要。友達を救うと思って、もっと安くしてえ！」

リュカが調子に乗って値切り出す。

「おお、貴方酷い人！私に首吊れと言いますか？分かりました。では、3000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょう。」

当初の8分の1に値さがった魔道士の杖…

「おお、僕達モンスターと戦うのに、この杖が必要！それなのにこんな高値で売るなんて！アナタこそ僕達に死ねと言いますか！？」
リュカが楽しそうに値切り続ける。

「そ、そんなつもりは…わ、分かりました…1500ゴールドで…
どうでしょう？…こ、これ以上は安く出来ませんよ！」

店主の口調が変わり、表情も引きつっている。

「おいおい！僕達友達だろ！アナタが最初に言い出した…友達だったら、もつと安く出来るよな！？」

リユカは満面の笑みで店主の肩を抱く…ただ、声のトーンが笑って無い！

「し、しかし…私にも生活が…」

「僕達には旅が待っている！旅先では危険が付き物だ！折角出会えた友達だが、今日で最後かもしれない。そんな友達を見捨てるなよ！…安くできないのなら、その『マジカルスカート』を、オマケにつけてよ。いいよね！」

「……………そ、それは……………」

「と・も・だ・ち…だろ…！」

半ば脅しである。

「分かりました…魔道士の杖とマジカルスカート…1500ゴールドです…」

店主が力無く承諾する…しかしリユカの攻撃は止まらない！

「おお、友達！ありがとう、さすが友達！じゃあ、はい。1500

ゴールド！杖とスカート3着貰って行くよ！」

「さ、3着！！？な、何で3着も！？」

「だって女の子3人居るんだよ。3着必要でしょ！じゃあ友達！またね」

「に、2度と来るな…！！！」

店主の悲痛な叫びが店内に木霊する。

「ほらウルフ。大事に使えよ！」

店から少し離れた所で、先程の戦利品をみんなに配るリユカ。

「しょ、商人顔負けの値切りっぷりやな！店のおっちゃんに同情し

てもうたわ！」

「魔道士の杖とマジカルスカート3着を、鉄の槍より安く買っなんて……リユカさん買い物上手！」

「最初に吹っ掛けてきたのはあっちだ！」

「それにしても、やっぱ凄いなリユカさんは！勉強になるよ」

羨望の眼差しでリユカを見るウルフ。

「さあ、取り敢えず買い物は済んだでしょ？一旦宿屋へ戻ろうよ。お腹空いちちゃった」

アルル達はリユカの希望で宿屋へ戻る。

少女3人は、リユカがくれたスカートを穿き、宿屋1階のレストラ
ンへ現れた。

「ど、どうですか……似合います？」

少し恥ずかしそうにハツキが訪ねる。

「このスカート、防御力があるのね……この先、重宝するわ！」

照れ隠しをしながらアルルが喜ぶ。

「戦闘で激しく動いたら、パンチラし放題だな……リユカはん、それが目当てなん？」

リユカの前で一回転してエコナが可愛く微笑む。

「うん。僕の思った通り、みんな可愛い！値切って良かった……！」

「俺の所にはスカート見せに来ないのは何故？」

ウルフの寂しそうな問い掛けにハツキが答える。

「だってアンタ、購入に何も寄与してないでしょ！リユカさんが買っ
つてくれたんだから！」

「出だしは俺の魔道士の杖からだろ！」

「まあまあ……そんなに拗ねるなよウルフ。後で一緒に『ベリーダン
ス』見に行こうよ！」

「……リユカさん、ベリーダンスって何ですか？」

「うん！アッサラムの劇場でね、每晚裸同然のねーちゃんが踊る
んだって！さつき町の人に聞いたんだ！だからさっさと夕飯済ませ

て、町に繰り出さないと！」

「何や！ダンスならウチがリュカはんの上で、幾らでも踊るねんではない！」

「うん。それはまた今度楽しませてもらうよ」

本当にさつさと夕飯を済ませたリュカは、ウルフを伴い町へと繰り出す。

アルルとエコナは夜間営業の武器屋に行く為、男二人のお目付役はハツキになった。

「あー…楽しみだなー！どんなダンスなんだろう？ブルンブルン揺れちゃうかな！？」

「もう！リュカさんエッチすぎです！ウルフもそう言うのが好きなの？エロガキね！」

ウルフは何も言えず黙り込む…

幼い頃から面倒を見てくれたハツキには、やはり逆らえないのだ。

「あーら、素敵なお兄さん！ねえ、パフパフしましよ。いいでしょ？」

リュカ達は不意に女性に声をかけられた。

「…パフパフ…？」

怪訝そうなりユカ。

「…パフパフって何ですか？」

本気で知らない純情ウルフ。

「きつと如何わしい事よ。相手しちゃダメ！」

決めつけるハツキ。

リュカは女性の胸を注視して呟く。

「それで出来んの？足りなくね？」

「な！！失礼ね！」

「あの、パフパフって何ですか？」

「あら、坊やは興味あるの？お姉さんが優しく教えてあげるから、

私の部屋に來ない？」

女性はウルフを妖しく誘う…

「よしウルフ！何事も経験だ！行つてこいよ！僕はベリーダンスを堪能してくるから！」

そう言つとリユカはその場を立ち去つてしまつた…もちろんハツキも一緒に…

そして残されたウルフは、女性に手を引かれ彼女の部屋まで付いて行く事に…

大人の階段を登りきる事が出来るだろうか！？

ウルフに幸せは訪れるのだろうか！？

砂漠

<アッサラム>

まだ日も昇りきらない早朝、ささやかな事件が発覚した。

昨晚の体験を追い払うが如く、一人で魔法の特訓をしていたウルフが、特訓を終わらせ割り当てられた自室に戻ろうと宿屋の廊下を歩いていると、リュカの部屋から1人の女性が気配を消しながら出てきた。

「あれハツキ？何やってんの？…そこ…リュカさんの部屋だろ…え！？ま、まさか…うぐっ！」

リュカの部屋からこっそり出てきたのを、ウルフに目撃されたハツキは、慌ててウルフの口を手で覆い喋れない様に羽交い締めにする。そしてそのまま宿屋を出て、人気のない物陰へと連れ込む！

「…つぶは！ハ、ハツキ…お前もしかしてリュカさんと…」

ハツキの怪力から逃れたウルフが、ハツキに問いかける…

「そ、そうよ…だって…リュカさん…格好いいんだもの…」

俯きモジモジするハツキの顔は、薄暗くてもハツキり分かるくらい真っ赤だ。

「あ、あのね…みんなには…黙っててほしいの…」

「何で？」

「だって…その…恥ずかしいし…」

「俺は構わないけど…すぐにバレると思うけどね…」

「い、いいの！それより、アンタこそ昨日はどうだったのよ！」

ともかく話題を変えたくて、ウルフの昨晚の事を聞き出そうとするハツキ。

「……………頼む…聞かないでくれ…お願いだ…」

どうやらトラウマになる様な事があったらしく、ウルフは半泣きで頼み込む……いったい何が？

<砂漠>

アルル達一行は灼熱の砂漠を突き進む。

サンサンと輝く太陽の光を遮る物は何もない…

ただ、いつの間にも買ったのか、リュカが青く大きなパラソルを差し日陰を作り出している以外は…

しかしパラソルで作られた日陰に居ても、体力の消耗は著しく、リュカに合わせて歩くだけで精一杯の様だ！……………リュカ以外！

リュカは異様にテンションが高く、パラソルを上下に揺らして歌っている。

歌うは『東京音頭』……………ツバメ好きか？

だが誰も文句を言わない…この暑さで文句を言う気力も無くなっているのだ。

小さなオアシスを見つけた一行は、側に生えてある木を利用して簡易テントを作り、休める場所を確保する。

「ちよつと早いけど、今日はここで一晩明かすか…」

木陰でへたばるアルル達の為に、野営の準備を黙々とこなすリュカ。簡易食を手早く作り、皆を起こして食事をさせる。

「リュカさん…ありがとう…でもリュカさんは元気ですね」

「ほんま…何でそんなに元気なの？」

「僕は寒いのが苦手なんだけど、暑いのは平気なんだ！女性が薄着になるしね！それに以前、砂漠より暑いダンジョンを探検した事があるんだ！あそこは凄かったよ！」

昔を語り調子に乗ってきたリュカは、元の世界での冒険談を話し始める。

殺された父の遺志で、伝説の勇者を捜す冒険談を…

攫われた母を助ける為、伝説の勇者を探す…その為に天空の武具を見つけ手に入れる事…そして天空の盾を手に入れる為に挑んだダンジョンの事…

「ほなりユカはんは、盾を手に入れる為にフローラっちゅう娘と結婚したんか？」

「ううん。フローラとは結婚してないよ。滝の洞窟へ向かう前に再会した、ビアンカって言う幼馴染みと結婚したんだ！」

「でもフローラさんと結婚しないと、天空の盾が手に入らないんですよね！？それじゃお父様の遺志を果たせないじゃないですか！？」
「アルルも父の遺志を継いで、バラモス討伐に旅立った為、思わず過敏に反応する。」

「うん。そうだね…でもね、ビアンカが言ったんだ『リユカは沢山不幸な目に遭ってきたから、もう幸せになるべきだ』って…確かにフローラと結婚すれば幸せになったかもしれない…莫大な財産、巨大な権力、美しい妻…そして父の遺言の天空の盾」

「じゃ何で結婚しなかったんだよ！」

「簡単だよウルフ…僕を最も幸せに出来るのはビアンカだけだからね！」

皆がリユカの話を噛みしめている…納得できる部分も出来ない部分も…

「じゃあ…結局、伝説の勇者様は見つからなかったのですか？」
そんなハツキの質問を受け、リユカが笑い出した。

「あはははは！それがさ、笑っちゃうんだけど…もし僕が真面目に勇者様捜しを続けていたら、永遠に見つける事は出来なかったんだよ！」

皆、不思議そうな顔でリユカを見続ける。

「僕が自己の欲望に負けてビアンカを選んだからこそ、勇者様と出会えたんだ！」

「ど、どういうことや？」

「なんと！伝説の勇者様は………僕の息子なのさ！あはははは、ち

よゝつけるゝ！勇者を見つける為に…天空の盾を手に入れる為に、フローラと結婚してたら、伝説の勇者は誕生しなかったんだ！『伝説の勇者なんかどうでもいい！ビアンカと結婚できれば、世界なんてどうでもいい！』って結論に達したから勇者に出会えるなんて…何なのこの嫌がらせ？だから僕は神なんて信じないんだ！」

リユカという男の人となり、皆がそれぞれ驚いている。特にエコナにとっては…

金儲けを夢見ているエコナ…何れは大きな権力を手中に入れたいと思っているエコナには…

「ウチには考えられへん！金と権力を手に入れた後に、愛人にすればええやん！それで全てが手に入るやん！」

「なあリユカはん…こんな事言うたら怒るかもしれへんけど…金と権力を手にした後で愛人にすれば良かったんとちゃう？奥さんもリユカはんの事好きなんやし、問題無かったと思うんやけど？」

人は誰しも、自分の思考の範囲内でしか物事を計る事は出来ない。エコナもまた人である。

「うゝん…出来なくは無かったと思うけど…」

「なんや、煮え切らんない！」

「……………心は…どうなつてただろうね？」

「……………心？」「……………」

アルル達が一斉にハモる。

「僕はビアンカの心も愛してるんだ。でもビアンカを選ばなかったら、彼女の心はどうなつてただろう？その後で『一番愛してるのはビアンカだ』と言っても、愛より金や権力を選んだ僕の事を、心から愛してくれるだろうか？」

リユカは怒るところか、優しく問いかけてきた。

「…そ、そうは言うても、全てを手に入れるなんてムリやん！金、権力、美女…それに伝説の勇者！こんだけ手に入れば十分やん！」

「全然十分じゃないよ…美女の…ビアンカの心が手に入らなければ……………」

エコナの瞳を見つめ、悲しそうに語るリュカ…

「逆に言えば、ビアンカと彼女の心が手に入れば、その方が十分満足なんだ！他の物は…まあ、何とかなるでしょ！？」

そんな満面の笑みで妻の事を語るリュカ…そして話は、惚気話へと発展して行く。

ウルフにはともかく、少女3人には苦痛となる時間だった！

ハツキの後日談だが…

『エツチの時の話まで、する必要は無いと思います！』

……あの男、何考えてるんだ！？

砂漠（後書き）

いったいウルフはどのような体験をしたんでしょうかねえ？
きっと素敵な青春の1ページになったのでしょねえ！

砂漠の王国、砂漠の女王

<イシス>

イシス…其処は大きなオアシスの側に造られた砂漠の町。
町の奥には大きな城がそびえ立っている。

アルル達が到着したのは夕刻だった…

リユカ以外、疲れ果ててはいたが宿を確保すると、町へ出て様子を伺う事に…

「魔法の鍵の事を知っている人が居れば良いけど…」
そんなアルルの不安はすぐに解消される事となる。

曰く、「魔法の鍵？ああ！それなら此処より北の『ピラミッド』に保管されてるらしいよ」

曰く、「『ピラミッド』に入るのなら、女王様の許可が必要ね！勝手に入ったら、墓荒らしとして拘まりますよ」

曰く、「『ピラミッド』には、様々なトラップが仕掛けられている！頼まれたって入りたくないね！」

曰く、「女王様の美しさには、モンスターをもひれ伏すであろう！」
等々…

大まかに情報を仕入れたアルル達は、宿屋へ戻り作戦会議を行う事に。

此処は宿屋のアルルの部屋。

リユカ以外が集まり明日の予定を話し合う。

「これで、目的地が定まったわね！」

「そうですね。では、明日朝一で女王様へ謁見を致しましょう。許可を戴かないとピラミッドへは入れませんから」

「な、なあ…リュカさんは置いていった方が良くないか？」

ウルフが小声で話す。

「そやで！町でも美しいって評判の女王やで！下手したら、下手するやん！」

皆、見つめ合い頷く。

美女で女王…最悪の組み合わせだ。

どう転んでも碌な事にはならないだろう…

（コンコン）

「みんな、明日の予定は決まった？」

其処へ現れるリュカ。

実に良いタイミングである。

「あ！実はリュカさん、あ「僕、明日は町を探索してるよ」

リュカに留守番を頼もうとしたが、リュカの方から残留を表明してきた。

「え！？そう…リュカさん…残るのね…」

「うん。だから4人で謁見してきてよ」

アルル達にとっては願ってもない事だ。

そして宿屋から出て行くリュカ…

いったい何処へ行くのやら…

翌朝、リュカとの鍛錬を終えたアルル達は、女王へ謁見する為に城へと赴く。

城へ着き、係の衛兵に用件を伝えると、

「只今、女王様は別件にて政務中である！暫し此処で待つ様、仰せつかった」

と、待ち惚けを喰らう事に……しかもかなりの時間。

一方リュカは砂漠の美人を求めて、町中を彷徨っている。

《砂漠の国の女王様：きつとアイシスみたいな女だろう…：だいたいイシスとアイシスって似てるんだよね！いくら美人でも、近付きたく無い女だ！町でナンパしてる方が100倍マシだ！》

「ねえねえお嬢さん！僕とエッチしない！？」

「何だコラ！？俺の女房に何の様だ！」

「おおっと、ごめんなさ〜い！素敵な旦那が居るとは知らなかったので〜じゃあね〜」

そんな感じで表通りから裏通りへと…

そんな時！

「きゃ〜！！誰かタスケテー！変な男に攫われるうー！」

すぐ近くで美女（リュカ曰く）の悲鳴が聞こえた！

新たな出会いを求めてリュカがダツシュで赴くと…

其処には、紛う方なき美少女が3人の男に腕を引つ張られ、攫われそうになっている現場だった！

「コラー！お父さんにナンパの仕方も習わなかったのか！？女の子を口説くなら、もっと優しく口説くもんなんだぞ！パパとママに聞いてみる！」

いきなり現れ意味の分からない事を叫ぶ男に、戸惑った男達…

男達が戸惑った隙に、襲われてた少女はリュカの方に逃げ寄り抱き付いた。

「どなたかは存じませぬが、助けて下さいまし！あのぶ男達が『へっへっへっ、ねーちゃんあっちの物陰で良い事してやんぜ！』って言うって、イヤらしい手で私を触るんですう」

「な、何勝手な事を「うるさい！痛い目に遭いたくなければ、今すぐ失せる！僕は暴力事が嫌いなんだ！」

女性を庇う様に立ち上がるリュカ。

「ちい！仕方ない…大事にするわけじゃないな…おい！手早く始末するぞ！」

3人の男のリーダー格が、他2人に指示を出し、リュカに襲いかかる！

「ちょ、女の子1人に大袈裟じゃない？何、殺気立ってんだよオマエら！もしかして地雷踏んじやったのかな、僕…」

3人の攻撃を余裕で躲しつつ少女を守るリュカ。

自身の技量には多少の自信があつた男達は、全く掠りもしない現状に焦りだした！

「メラミ」

そして焦つた男の1人が思わず魔法を唱える！

「バギ」

しかしリュカのバギで四散され実力の差を思い知る事に…

さらにリュカは素早く3人の懷に飛び込み、強烈な一撃を食らわせる！

メラミを放つてから、一瞬の出来事だつた…

「凄い…あの3人を一瞬で…」

少女が驚き呟く。

3人を気絶させたリュカは、少女の元へ近付くと、

「やあ…改めましてこんにちは。僕の名前はリュカです。エッチする事を前提に、一緒にお茶でもどうですか？」

こんな状況でふざけたナンパをするリュカに、更に驚く少女…しかし直ぐにそれが笑いに変わる！

今までこんな男に出会つた事がない…

不思議そうな顔で微笑むリュカを見つめ少女が…

「よろしくねリュカ。私はレイチエル。何処かお茶の美味しいお店、知ってるの？」

こうして2人はその場を離れて行く…

気絶する男3人を置き去りにして…

一方アルル達は、半日待たされ続けたのにも拘わらず、『申し訳ありませんが、本日の謁見は出来ません。また後日お越し下さい』と追い返された。

入城した時は、朝日が眩しかったのに、今では夕日が輝いている…

「ああ…何にもしてないのに疲れたわ…」

「本当だな…」

「でもリュカはんを置いてきて正解やったね！」

「ええ！侍女の方々も美人揃いでしたもんね…」

「一緒だったら、もっと疲れてたよ…きつと…」

みんな溜息と共に宿屋へと戻って行く…

リュカに今日1日は無駄であった事を伝え、明日の予定を伝えねばならない。

今日と同じではあるのだが…

命中率（前書き）

今回は出だしからです！

あの野郎…

初っぱなからやらかしてます！

命中率

<イシス>

「な…何やってんだよ!」

アルル達は宿屋へ戻り、状況説明をする為リユカの部屋に訪れた。ドアを開け入室すると、中ではリユカと見知らぬ少女（レイチエル）が閨事の真っ最中であつた!

「全く!こつちは大変だつたんだぞ!1日待ち惚けで!」

「あはははは。そんなに怒るなよお。…で、女王様には会えたのかな?」

数分後、ともかく行為を止めさせ、二人が服を着るのを待つてから状況の報告に入る。

「会えなかったわ!忙しいんだつて!リユカさんと同じで!」

トゲのある発言をするアルル。

「へー、大変だつたね」

しかし全く堪えてない。

「貴女達は女王に会つて何をしたいの?」

不意にレイチエルが会話に割り込んできた。

「何や!?急に会話に割り込んで!だいたいアンタ何なんや!?」

「ああ、ごめんね。私レイチエル!今日危ない所をリユカに助けられたの!それで、今さっきお礼をしていたところよ」

「何でリユカさんはそうやってトラブルに遭遇するの…凄い命中率よね!」

「何でだろ?面倒事嫌いなんだけどね?」

笑っているリユカに呆れるアルル。

「で、何で女王に会いたいなの!」

「私達、バラモス討伐の旅に出ているんです。その為にピラミッド

にあると言われる、魔法の鍵を入手したいんですけど……」

「なるほど…ピラミッドへ入る許可を、女王に貰いに行ったのね…勝手に入っちゃえば良かったのに…」

「アホか！そんな事したら墓荒らしとして、手配されてまうやん！ウチらは魔法の鍵が欲しいだけや！墓、荒らしたい訳とちゃう！」
エコナはジェラシーから、レイチエルにきつく言い放つ。

「私、城には顔が利くんです！何だったら今から謁見できる様、計らいましょうか？」

「ほ、本当ですか！？しかも今からでも良いんですか？」

「ええ！リュカがどうしてもって言っなら、私頑張っちゃうなあ」
そう言い、リュカの首に腕を回し甘えるレイチエル。

それを見て、一気に苛つくアルル・ハツキ・エコナ！

そんな女性陣に怯えるウルフ。

「じゃあレイチエル…お願いするよ」

リュカは気にもせず、レイチエルにキスをする…

砂漠に血の雨が降るのは、時間の問題だろうか…？

リュカと腕を組み、イチャイチャしながら城内を歩くレイチエル。
そんなレイチエルを見て、啞然とする人々…皆、言葉を失っている様だ。

そんな状況を感じ取る余裕のない少女3人。

そんな少女3人のイラつきに、怯える少年が1人。

この奇妙な男女6人は、誰にも止められることなく、イシス城謁見の間へと入室して行く。

謁見の間に入ると、既に幾人かの側近等が待ち構えており、皆驚いた様子でリュカ達を見ている。

その中にはリュカが昼間に気絶させた3人の男も含まれている。

「ただいまー！久しぶりの城下は凄く楽しかったわ！」

レイチエルはリュカの腕から離れると、軽い口調で今日の感想を語り、玉座へと腰を下ろした。

「女王様！お戯れが過ぎますぞ！」

側近の一人…多分、最も位の高い大臣がレイチエルに向けて苦言を呈す。

「偶にはいいじゃない！」

それを軽い口調で流すレイチエル。

「ちょ…じよ、女王様！？貴方、イシスの女王だったの！？」

「口を慎まんか！」

アルルの発言に激怒する側近達…

「黙れりなさい！この者達は良いのです！私は身分を秘匿して、この者達と接していたのです…」

「し、しかし！」

レイチエルが許しを出しても、不満を口にする側近…恰好からして軍人であろう。

「女王がいつて言っただから、黙れよハゲ！」

「な、何だとお！こ、この無礼者め！」

爽やかな笑顔で無礼な物言いのリュカに、ブチ切れる軍人！

腰から剣を抜き放ち、リュカに襲いかかってくる！

「ブレイザー、お止めなさい！」

ブレイザーと呼ばれた軍事は、リュカまであと3メートルの所で止まる。

そして苦々しい表情のまま、剣を鞘に戻し下がった。

「ごめんなさい、皆さん。ちょっと気が短いよ、彼…」

今にも血管がキレそうな程、顔を赤くしているブレイザー…

「茹で蛸みたいだね」

リュカとレイチエルが揃って笑い転げる！

アルル達は傅き、胃痛に悩まされている！

「さて…十分笑ったところで、本題に入りましょうか！…確か、ピラミッド探索の許可が欲しいんですね！？」

「はい。バラモス討伐の為に、ピラミッドに保管されている、魔法の鍵が必要です。どうか我々に許可を…」

恭しく嘆願するアルル。

「……………条件が1つあります！」

宿屋での気さくさが微塵もなくなったアルルを見て、意地悪をしたくなったレイチエルは、素直に許可を出さない。

「条件とは何でございましょう」

「ふふっ…簡単よ…リユカが私と結婚する事よ！」

一人傳いてないリユカを見つめ、国家の行く末が左右されそうな条件を提示するレイチエル！

「な！！そんな横暴な！」

「せや！そんな認めへん！」

急に立ち上がり、レイチエルに向けて苦情をぶつけるハツキとエコナ。

「ハツキ、エコナ、黙って！！」

「…うっ！」

アルルに怒鳴られ、再度傳く二人。

「女王様…その条件は、私の一存では答えられません…当人の意志を尊重致します」

「……………なるほど…では、リユカ。私と結婚して下さいますか？」

先程までは冗談半分の表情だったが、今は真面目な表情で求婚するレイチエル…本気でリユカの答えを待っている。

「えー？ヤダよ！」

この場にいた誰もが驚く発言をするリユカ…

「き、貴様ー！！女王様の気持ちを踏みにじるとは…「うっさい！

黙れよ！お前には関係ないだろうが、ハゲ！」

また一人激怒するブレイザー！（国家の重鎮だし関係なくは無いいだけだね）

頭皮の事をかなり気にしているらしく、先程よりも勢いを増してリユカに襲いかかる！

レイチエルも求婚を断られたショックで、少し呆然としていた為、今回は止める事が出来なかった！

ブレイザーはリユカに向けて剣を振り下ろす！

しかしリユカは、表情一つ変えることなく、右手の親指と人差し指で摘み受け止めた！

「オイオイ…女王の前で流血沙汰は拙いんでない？」

「ブ、ブレイザー！退きなさい…私の客ですよ！」

しかし退かないブレイザー…いや、退けないのだ…全体重をかけて剣を引き戻そうとしているが、リユカの手から剣が離れない！

「リユ、リユカさん！手を放してあげて下さい！」

気が付いたアルルがリユカに告げる。

「あ！そうか…」

リユカは慌てて手（指）を放す…すると、ブレイザーが勢い良く後方へ吹っ飛んだ！

何やら何処かで見た様な光景だ…

凄まじい勢いで壁に叩き付けられたブレイザーは、そのまま気を失い壁際に崩れ落ちた。

「…やっと静かになったね」

リユカの一言に、騒ぎ出しそうになった側近達を手で制し、穏やかにリユカへと語りかけるレイチエル。

「リユカ…何故、私と結婚してはくれないのですか？私と結婚すれば、イシスの王になれるのですよ？」

「ヤダよ！王様になったら自由に冒険出来ないじゃん！」

「…………では、ピラミッドへの探索許可は認めません！…困るのではないかしら？魔法の鍵が手に入らないと」

レイチエルは少し意固地になっていた。

「僕は困らないよ。ただ、バラモスを倒せなくなるだけだし！」

そう…バラモスが倒されないと困るのは、この世界の人々だ…

イシスの女王として例外ではない。

「……………」

「……………」

リユカとレイチエルは見つめ合いながら沈黙を続ける。

「ふふふ…分かりました。諦めます！あゝあ…私、本気でリユカの事好きになっちゃったのに…」

「ごめんね。初めから敵わぬ恋だったんだよ…僕、奥さん居るし！」

「えゝ！？奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」

謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

それに比例して、アルル達の胃の穴も広がる様だ！

アルル達が胃潰瘍で倒れる前に、ピラミッド探索の許可を貰えるのだろうか？

命中率（後書き）

女王に手を出しといて、無事に城から出れるんですかね？
リュカさんの未来が心配です。

王家の墓

<イシス>

「えゝ！？奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」

謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

「うゝん…まあ…ね！美人に逢ったら口説けて家訓だから！」

「き、貴様！女王様に変な事はしてないだろうな！？」

一番偉そうな大臣がリュカの胸ぐらを掴み問いつめる。

「変な事などしていない！普通にエッチしただけだ！3発程…」

真面目な顔で言い放つ！

「なあ……………！！」

大臣は大きく口を開けて絶句する。

「やっぱりリュカには責任を取ってもらいたいわ！そうでしょ…」

「結婚は出来ん！愛人で良ければOKだけど…ただ、女王を辞める事！必須条件ね」

どう考えても条件を提示できる立場ではないのに、何故か偉そうな男だ。

「うゝん…今、私が辞任したらイシスが混乱するのよねえ…でもリ

ュカの愛人にはないたいなあ…」

「……………じよ、女王様！！……………」

家臣の皆さんが泣きそうな声で叫ぶ！

「冗談よ！残念ではあるけど、女王を辞めるわけにはいかないわ！」

「で、ピラミッド探索許可は貰えるのだろうか？」

リュカは悪びれもせず、何時もと変わらぬ口調で許可をせがむ。

間違いなくイシスのお偉いさん方を敵に回しただろう！

「ええ！勇者アルルとその一向に、ピラミッド探索許可を与えます。ピラミッド内で入手したアイテムは、自由に使って下さい。バラモス討伐に役立てば幸いです」

「ありがとう」

<ピラミッド>

「何や！？アイテムは自由に使って良い言うとして、ダンジョン内の宝箱はカラヤン！あの女、何もないの分かってて言うたんちゃうか？」

エコナはピラミッド内で見つけた宝箱を無造作に開け、不機嫌な声で愚痴をまき散らす！

「そりやそうだろ！王家の墓って言ったら、財宝が沢山ある物だと誰もが思ってるよ！こんな入口付近に残ってるわけないって！」

「ほな『アイテムは自由に使ってえ』とか言うなや！！期待してまうやん！！」

ウルフの冷静なツツコミに、一層ご立腹のエコナ…

「そんな事を俺に怒るなよ！それに、奥の方の超危険な場所の宝は、残ってるかもしれないだろ！女王様はその事を言ったのかもしれないだろ！入口付近如きで結論出すなよ！あと俺に八つ当たるなよ！まだまだ女の扱いが雑である…」

エコナとウルフが口論をしていると、珍しく大人しくしていたリユカがポツリと囁く様に喋る出す。

「宝箱を不用意に開けない方がいいよ…王家の墓って言ったら、トラップが満載だろうから…危険だよ。それに僕達の目的は『魔法の鍵』だろ！墓荒らしみたいな事するの止めようよ。お亡くなりになった方に失礼だよ…」

「何言うてんねんリユカはん！？女王自ら許可したんや！墓荒らしにはならんて！平和の為に使う事こそが、女王の願いや！その思いしかと汲んでやるうやないの！」

「勝手だなあ」

そしてリユカは、また大人しくなった…

普段なら、陰気なダンジョン内では歌い出すはずなのに、終始付近を警戒し歩いている…

モンスターの出現率も上がらず、本来はこれで当たり前なのに、何故だか不安が増すアルル。

「あの…どうかしたんですかリユカさん？何か心配事でも……………」

「ん？ああ…ちょっと……………」

「何や、今更王位が惜しくなったん？」

「うっん、そんなんじゃないよ…ただ、僕…アンデット系、嫌いなんだよね！」

「はあ！？アンデット系が嫌い？」

怪訝な表情で聞き返すウルフ。

「此処…お墓でしょ！出てくるモンスターってアンデット系でしょ！ばく、アンデット系には近付きたくないから、危なくなっても助けないからね。危なくならないでね！」

「何だよ！そんなの何時もの事じゃん！何時も戦闘には参加しないじゃん！アンデットとか関係ないじゃん！」

「……………まあ、そう言う事だから…妙な仕掛けに引っかからない様に注意して進もうよ」

「またカラヤ！」

リユカが注意する様に言ったにも拘わらず、宝箱を開けまくるエコナ。

ピラミッドを奥へ進みつつ、目に付く宝箱は全て開ける。

「お！？あっちには3つも宝箱があるやん！今度こそ何か入ってるかも！」

一人小走りで3つの宝箱に近付くエコナ…

「まったく…あれが商人魂…なのかしら？」

アルルは勝手な行動をするエコナに呆れながら、はぐれない様に彼女の元へ近付く。

同じくエコナの元へ進むリユカは、周囲の異様さに気付कि警戒し始めた…

「エコナ…気を付けろ！何かヤバイぞそれ！」

「何が？…またカラやで！？」

リユカの忠告を気にせず、さつさと宝箱を開け始めたエコナ…しかし、2つ目の宝箱に手をかけた瞬間、宝箱が自ら動きエコナに襲いかかってきた！

「キヤー！！！」

それは鋭い牙を携えた『人食い箱』である！

人食い箱の牙が宝箱を開けようとしたエコナに襲いかかる！

（ガシュ！！）

肉を裂く鈍い音が響き、エコナの顔に真っ赤な血しぶきが飛ぶ！

しかし、その血はエコナの物ではない！

いち早く異変に気付いたリユカの血だ！

リユカはエコナに噛み付こうとした、人食い箱と無防備だったエコナの間に左腕を入れ、エコナの変わりに人食い箱の攻撃を受けている。

「痛いだろ！コノヤロー！！」

リユカは人食い箱ごと腕を壁に叩きつけ、噛み付いた人食い箱を叩き壊す！

「怪我は無いエコナ？」

人食い箱がコナゴナになったのを確認すると、へたりこむエコナに近寄り優しく問いかける。

「ウ、ウチは…へ、平気や……………それよりリユカはんの方が怪我してるやん！」

リユカの左腕から滴る血を見て、血相を変えるエコナ。

アルル達も、泣き出しそうな表情でリユカに近付く！

「そんなに心配しないで大丈夫だから。……………ベホイミ……………ほら」

傷口の塞がった左腕を見せるリユカ。

そんなリユカに抱き付き、泣きながら謝るエコナ。

「ごめんなさい！リユカはんが注意してくれたんに…ウチ…ウチ…」

「うん。これに懲りたのなら、宝箱を開ける時は注意して開けようね。一人で先走らない事！」

エコナの頭を優しく撫で、隊列を乱さぬ様注意を促す。

「でも何で危険だって分かったの？」

ウルフがリユカに疑問をぶつける。

「うん。見てごらん…此処の宝箱の周りには、人骨が沢山落ちてるだろ。他の宝箱の周りには無かったのに…だから、此処で死ぬ人多かったんだと思ってね…案の定、こんな事になったけどね」

「さすがリユカさん！凄いです！格好いいです！」

ハツキがリユカに抱き付き、褒め称えてる！

「そう言う状況の変化を、見逃さない事が重要なんだね！」

ウルフも瞳を輝かせ、リユカを師と仰ぐ！

「そつだぞウルフ！常日頃から変化に気付ける様にするんだ！」

「はい！」

「特に女の子は直ぐ髪型とかを変えるからね…変化に素早く気付き、褒めちぎるんだ！そう言う細かい事に気付く男はもてる！」

「はい！！！」

最早、旅の仲間というより、師匠と弟子の関係になりつつある。ウルフの未来はある意味明るい！

トラップ

<ピラミッド>

アルル達はトラップに気を配りながら、ピラミッドを更に奥へ進んで行く。

火炎ムカデやミイラ男・マミーと言ったモンスターの攻撃を打ち破り、奥へ奥へと突き進む。

言うまでもない事だが、リュカは宣言通り何もしない。何時もと同じ…

エコナも人食い箱を警戒して、宝箱を見つけてもいきなり開けなくなつた。

まあ…人食い箱だつた場合を想定して、身構えながら宝箱を開けるのだが…

暫く進むと、大きな石の扉が一行の前に立ちはだかる。

「なんやここ？随分と嚴重やね！」

「これだけ嚴重にしてるって事は…」

「ええ…多分この奥に魔法の鍵があるのよ！」

少女3人は重厚な石の扉を調べながら言葉を交わす。

「これ、どうやって開けんねん！」

「何処かにスイッチみたいのがあるんじゃない!？」

「そうですね、とても人力じゃ開きませんよね！」

少女3人が扉を調べるのを止め振り返ると、居るはずのリュカとウルフが居なくなっているではないか！

「え!?!ちよつ…リュカさん!」

リュカが居なくなつた事に不安を感じたアルルが、涙声で叫ぶ。

「な〜に〜?」

奥の方からリュカの声が聞こえる…

「どうしたの?」

リュカの声とは別方向からウルフが現れる。

「ちよつと！勝手にフラフラしないでよ！」

「せや！不安になるやん！」

責められるウルフ…

「だ、だってリュカさんが『何処かにボタンがあるから探そうぜ!』
って言うんだもん！」

「……………で、あつたの?」

「う、うん…向こうに2つあつた…」

「あつちにも2つあるよ」

戻ってきたリュカが申告する。

「つまりボタンが4つあるのね…」

「どのボタンが正解やる?」

流石は王家の墓…一筋縄ではいかない様だ。

「リュカさんはどれだと思います?」

困ったアルルは、事態の解決をリュカに押し付ける様に訪ねる。

「さあ…どれだろうね…でも僕が思うに、どれか1つが正解では
なく、4つのボタンの押す順番が重要だと思うよ」

「何でそう思うんですか?」

「だってさ、1つのボタンが正解だったら、偶然に正解する人も居
ると思うんだよね！でも今まで正解した人は居なさそうだし…」

「じゃあ…その順番は?」

「おいおい…幾ら何でもそんなの知らないよ！」

アルルは困るとリュカに頼る様になっている…あまり良い事では無
いです。

「闇雲に試すのは危険だし、一旦イシスへ帰ろうよ。レイチエルな
ら何か知っているかもしれないし…」

「此処まで来て町へ戻んのはシャクやな！取り敢えずボタン押して

みようやないか？偶然正解するかもしれんやん！」

「えゝ…危険だよゝ」

「私もエコナの意見に賛成よ！」

パーティーリーダーのアルルがエコナの意見を推奨する。

「此処まで来たんだもの…何もしないで帰れないわ！」

「じゃあ…どのボタンを押します？」

少女3人はレイチエルに会いたく無いらしく、町へ戻る事を拒否してる。

「ほな、端から押して行くで！」

エコナがボタンを押そうとし、アルル達が敵の出現に警戒をする。

（リユカ以外）

（ポチ）

すると突然床が抜け、一行は一人の例外もなく落下して行く！

「「「きゃー！！！！！！」」」

（ドサ！）

「いてててて…何だ？此処！？」

たいした高さでは無かったが、不意を突かれた為受け身をとる事が出来ず、予想外に痛い思いをしたリユカ…

「みんな…無事？」

ひとまず少年少女を気遣い手を差し伸べる。

「…いたたた…リユ、リユカさん…どうしよう…あ、足の骨が折れちゃった…」

なんと、落下の衝撃でアルルが足を骨折してしまった！

「だ、大丈夫ですかアルル！今すぐホイミを「ダメだ！」

「「え！？」」

ハツキがアルルに近付きホイミを唱えようとしたが、リユカに阻まれてしまう。

「変な状態でホイミをかけると、そのままの状態で骨がくつついて

しまう！先ずは骨を真っ直ぐな状態にしないと……アルル、ものっそい痛いよ！我慢出来る？」

リユカは涙目のアルルの瞳を覗き、優しく脅す。

「お、お願いします……………」

リユカは自分のハンカチを取り出し、アルルに噛ませ骨折箇所に手を当てる…

そして…

（ゴリッ…!）

不格好に曲がったアルルの足を、真っ直ぐに戻すリユカ！

「（ん~~~~~!!!!!!）」

アルルがくぐもった叫び声を上げ、激痛で気絶する。

「ベホイミ」

リユカはベホイミで骨折を治療する……………が、魔法が発動しない…

「な、なに！？ベホイミ！…………ベホイミ！！」

「な、何で魔法が発動せんのか？」

「ウルフ…ちよつとメラを唱えてみる！」

「う、うん…メラ！」

ウルフが通路の奥の方目がけ、メラを唱えてみる…が、やはり魔法が発動しない！

「ど、どうなってるんですか！？」

「…………きつと、フロア全体に『マホトーン』の魔法がかかってるんだ！…このフロアから脱出しないと魔法は使えない…」

「じゃあ早く逃げようぜ！魔法が使えないと、俺何も出来ないんだ！今戦闘になったら俺は戦力外だから！」

「うん。じゃあ、取り敢えず此处から脱出！その後は一旦町へ戻る…いいね！？」

エコナもハツキも黙って頷く。

「…つと、その前にアルルの骨を固定したいな。ウルフ、何が添え木になる様な物無い？」

リユカに訪ねられたウルフは、周囲を見回し大量に散乱している骨

を1本拾い手渡す。

「ちよつと気持ち悪いけど、これで我慢して貰うしか…」

「ありがとう。しょうがないよ……でも…このフロア、骨だらけだな…何があるんだ、此処には？」

気絶したアルルの足を拾った骨で縛り固定する。

戦闘になった場合、参加出来ないウルフにアルルを担がせ、一行は通路を向かって右へと進んでみる…どちらが出口か分からない為、勘を頼りに進み行く。

《あゝ…やだなあ…敵、出てこないといいなあ…特にアレ！腐った系！アレ攻撃すると、杖が臭くなるんだよなあ…そうだ、アルルの『鋼の剣』を借りよう！……ああ…戦うのやだなあ………》

女の意地が招いてしまったこの状態……ある意味リュカのせいなのでは………？

王家の秘宝

<ピラミッド>

珍しくリュカを先頭に隊列を組む一行。

モンスターに発見されぬ様、物音を立てない様に歩く………しかし、足下には大量の白骨体が散乱し、実質音をさせずに歩く事は出来ない。

「しくじったな……」

不意のリュカの呟きがみんなを不安にさせる。

「ど、どうしたんですか？何をしくじったんですか!？」

アルルを担ぎリュカの直ぐ後ろを歩くウルフが、震える声で訪ねた。

「足下を見る……白骨体が増えている」

「そ、それが……？」

「つまり……こつちで死ぬ人が多いって事だよ！」

「じゃ、じゃあ……今からでも引き返しませんか？」

「何言っねん！出口に近付いてるから、トラップが発動してるのかも知れへんやろ！」

「そうだね……ウロチヨロしても危険だ……取り敢えずは進んでみるしかないね」

そしてリュカは進み出す。

トラップが何時発動しても対応できる様に、慎重に……ゆつくりと……

一行は行き止まりの部屋で立ち尽くしている……其処には大きな石棺しかない。

「ちいっ！こつちじゃなかったか！」

リュカが踵を返し、元来た道に戻ろうとすると、エコナが声をあげ皆を止める。

「なあ！あの石棺…怪しくないか！？もしかして出口に繋がる通路になってるかも！」

「何言ってるんだよ！俺達は地下に落ちたんだぞ！更に地下へ潜ってどうすんだよ！」

「アホか！上へ向かうだけが、地上への道とは限らへん！一旦地下へ潜る事も必要かもしれへんやん！」

そう言うところエコナは慎重にだが石棺へと近付き、石蓋に手をかける。しかしエコナ一人の力では動かない…見かねたハツキも一緒に押し始める。

リユカも『通路は無い』と言い切れず、ただ黙って見てるしか出来なかった。

（ズズズズズズズズ……ゴドン！）

石蓋を押し開け中を見ると、其処には2体のミイラがあるだけで通路等は存在しない。

「ただの石棺だ…引き返そ！」

「待って下さい！何か変じゃないですか…このミイラ！？」

トラップの発動しそうな宝箱や棺などには、なるべく触りたくない…触ってほしくないリユカは、石棺に出口への切っ掛けが確認できなかったので、サツサと来た道に戻ろうとしたが、エコナが石棺の中に違和感を感じた為、皆を呼び止め2体のミイラを調べ始める。

「ねえ…何が変なの？棺に死体が入ってたって、変じゃないよお！早く出口探そうよお！」

「見て下さい、このミイラ…1体はキレイに埋葬されてあるのに、もう1体は雑に放り込んだ様に見えます！」

「ほんまやねえ…普通、棺に入ってる遺体って仰向けでキレイに整ってるはずや…でもこの上に乗っかてるミイラは横向きや…しかも背中を丸めてる……ん！？何か抱き抱えてるで！」

エコナは雑に埋葬されているミイラの腕を、無理矢理こじ開けて抱き抱えている物を掴み出す！

《何であの娘ミイラに平気で触れるの？俺、ヤダなあ…》

「おおおお！見てみい！ごっついお宝を抱えてるでコイツ！」

そう言うミイラが抱き抱えていた『黄金の爪』をリュカ達に見せつけはしゃぎ出す。

すると何処からともなく不思議な声が聞こえてきた。

『黄金の爪を奪う者に災いあれ！！』

「な、何や！？何処から聞こえんの！？」

みんなが周囲を見回していると、突然石棺の中のミイラがエコナの腕を掴んできた！

「ぎゃー！！！」

慌てたエコナはミイラの手をがむしゃらに払いのけ、半泣きでリュカの後ろに隠れる。

しかしミイラは執拗にエコナを追いかけてきた！

「ふん！」

しかしリュカが鋼の剣で細切れにし、ミイラはその場に崩れ去る。

「何でウチを狙うねん！絶世の美少女やからか？」

「…………その黄金の爪が目当てじゃないの？返したら？」

「何言うてんねん！ピラミッド内で見つけたアイテムは、ウチ等の自由にしてええねん！女王様のお許しがあつたやん！だからこのお宝は、ウチのや！」

どうやらエコナは黄金の爪を手放すつもりは無い様だ。

（ゴソゴソ…………）

「ん！？」

行き止まりであるはずの石棺の部屋の奥から、何やら蠢く影が…………

「な、何でしょうか？」

奥から現れたのは、火炎ムカデや大王ガマといったモンスター達だった！

しかも途方もない数が…

「げ！！さすがにヤバいつて！逃げるぞ！」

リユカ達は一斉に元来た道を走り出す！

しかし前からもミイラ男やマミーが大量に襲いかかってくる！

「くっそ！」

前方から襲い来る敵をリユカが薙ぎ払い、後方から追い続ける敵をエコナとハツキが連携して撃退する！

ウルフは気絶しているアルルを背負い、敵の攻撃を避けまくる！心なしか動きがリユカに似てきた様な……

「なあ、エコナ！」

「な、何やあ！」

「コイツ等の目当てって、その黄金の爪じゃね？捨てちゃえよそんなの！」

「イヤや！！！！これはウチんや！」

その間もモンスターは絶え間なく襲いかかってくる！

さすがにエコナとハツキは押され気味だ…しかしリユカには疲れが見えない！

既に100体以上ものモンスターを倒してるのに、顔色も変えずに前方の敵を倒し進み続けてる！

刃こぼれの生じてしまった鋼の剣をアルルに返し、ドラゴンの杖でミイラ男やマミーを倒しまくる！

後方からの敵に押し潰されないでいるのは、リユカが前方の敵を駆逐し、逃げ道を作り出しているお陰である。

「おい！逃げ道は僕が作るから、遅れるなよ！」

ウルフ達は必死でリユカについて行く！

<イシス>

「…うつ…こ、ここは…？」

イシスの宿屋でアルルは目を覚ました。

「おはよ。足の具合はどう？」

リュカは優しくアルルの足を気遣う。

アルルは慌てて折れてた足を触り確認する………だが、痛みはなく骨折も完治している。

「私……どうなったの？」

「え……憶えてないのお……結構大変だったんだよ！」

そうは言うが、リュカは笑顔でアルルに説明してくれた。

・

「……………それでみんな疲れ切って寝てるのね……」

部屋の中を見渡すと、ウルフ達が薄汚れた恰好のまま、床やソファにだらしなく眠っている。

「ごめんなさい……迷惑かけちゃったね……」

「うん。大迷惑だよ」

リュカは笑いながらアルルの頭を撫でる。

しかし急に真面目な表情になり、アルルに苦言を呈す。

「アルル！あんまり僕を当てにした作戦を立てないでくれ！確かに僕は年長者の為、君達よりは多少強い……」

イヤ、多少ではないだろう……アルルはそう思ったが、あえて口には出さなかった。

「でも僕はこの世界の人間じゃない！元の世界に帰る術が見つければ、直ぐにでも帰るだろう……もし、あのピラミッド内にそんな装置があったのなら、僕は直ぐさま帰るだろう。僕の事を当てにして、ダンジョンの奥に進んだ場合、急に僕が居なくなったらどうする？僕が居なくても町まで帰れる様にしないと……」

アルルはこの時初めて分かった……リュカが戦闘をしないのは、自分たちがリュカに依存しない為だと……

「焦っちゃダメだよ。一旦退く事も大事だよ。アルルは勇者なんだから、みんなを導かないと……」

そしてリュカは自室へと引き上げた。

床等で泥の様に眠る仲間を…ボロボロに薄汚れるまで戦った仲間を見て、涙を流すアルル…

自分が彼等の命を握っている事に気付き、責任の大きさに涙が止まらない…

アルルは思う…

リュカに出会ってなければ、アリアハン大陸で命を失っていただろうと…

童歌

<イシス>

「♪まん丸ボタンは不思議なボタン。まん丸ボタンで扉が開く。東の西から西の東へ。西の西から東の東。♪」

アルル達はイシス城内を歩きながら、先程子供達に教わった童歌を確認する様に歌っている。

イシスの女王に…レイチエルにピラミッドの仕掛けの秘密を訪ねた所、『子供達の童歌にヒントが隠されていると聞きます』と、ヒントのヒントを賜った。

「♪まん丸ボタンは不思議なボタン。まん丸ボタンで扉が開く。東の西から西の東へ。西の西から東の東。♪」

「変な歌…リユカさんが歌う歌より、変な歌!」

「失礼だなウルフ君!僕の歌う歌は名曲揃いなんだぞ!」

「私、リユカさんの歌は大好きですよ?」

「そんな事より、ホンマにピラミッドと関係あんの?あの女、自分も知らんからって適当な事言ったんじゃ…それとも、結婚してくれへんリユカはんに嫌がらせか!」

「エコナ…お願いだから、せめて城内では不穏な発言は控えて!」

どうもエコナはレイチエルに対して、あまり良くない感情を持っているらしく、ついつい発言が不穏な物になっている様だ。

一行が不毛な会話を続けながらイシス城の入口エントランスに差し掛かると、其処には3人の屈強な男が待ち構えていた。

町中でレイチエルを強引に連れ去ろうとしていた男達だ。(実際は女王直属の護衛官である)

「……………?…あの…何かご用ですか?」

訝しげにアルルが訪ねる。

「お前等に用は無い！そっちの紫のターバンの男に用がある！」

「僕には無い！」

即答するリュカ……

「ふ、ふざけるな！！我々と正式に勝負しろ！！」

3人それぞれ武器を構え、殺気を漲らせている。

「何言ってるの？君達既に負けたじゃん！あの時幼気な少女を守る
と言う名目で、殺しても良かったんだよ。でも君達が悪質なナンパ
野郎じゃないのは気付いてたからさ、命までは取らなかったんだよ」

「黙れ！あの時は町中故、全力を出し渋った結果だ！」

「はあ？さてはお前等バカだろう！女王様を守ろうとする特務部隊
が、全力を出さないで負けてどうする！僕が女王の命を狙ってた
ら、レイチエルは既に死んでたんだぞ！それにお前等、町中でメラミ使
ってたじゃん！大事だよ、町中でメラミって！」

リュカの正論という侮辱に、耐えられなくなった1人が、もの凄い
勢いでリュカに襲いかかる！

しかしリュカはその男の顔面にカウンターで拳をめり込ませる……

その男は、襲いかかった時の倍の勢いで仲間の2人の元へ、弾き飛
ばされる！

「あれえ……今度は城内だった故に全力を出し渋ったって言っちゃ
うう……？おいおい……何時になったら全力を出せるんだよ……女王が死
んだ後か？イシスが滅んだ後か？世界が無くなった後か？おせーん
だよ、それじゃ！」

リュカは3人に唾を吐き付けイシス城を出て行く……

アルル達もリュカに襲いかかった3人を、不安そうに意識しながら
リュカに続く……

男達は力無くその場にへたり込むしか出来なかった……

アルル達はイシス城を出ると、城下にある武器屋へと訪れる。

先のピラミッド探索で、ボロボロになってしまった武具を修繕に出していた。

それを引取に來たのだ。

「おじさ〜ん！出來てるかしら？」

「おうよ！キレイに修繕しておいたぜ！しかし、どれだけ戦闘すればこんなにボロボロになるんだか……」

「それ程、激戦を潜り抜けてきたちゅー事や！」

リユカとウルフ以外がそれぞれ武具を受け取る。

「しかしよお……女の子が武具をボロボロにする程戦ってたのに、男共は何やってたんだ！？安全な所で高みの見物か？」

詳しく状況を知らない武器屋の店主が、推測からリユカとウルフを批判する。

「あはははは……僕、戦うの嫌いなのに！」

「かー！情けねー男だ！」

「ちやうね……むぐう！」

店主に対し異論を言おうとしたエコナの口を手で塞ぎ、エコナの懷から黄金の爪を取り出す。

「おいさん、これ幾らで買ってくれる？」

「むー！むーむー！！……ぱはっ……そ、それはウチんやー！勝手に売らんといてー！」

「でも気にならない？あんな思いをして手に入れた物が幾らするのか？」

「………………おっちゃん……幾らや？」

どうやらエコナも気になる様だ……

「う〜ん……凄い品だが……6000ゴールドだな……」

「た、たったの6000？アホくさ、絶対に売らんで！」

「どもどうすんだよ！それ持ってピラミッドへ入ったら、またモンスターまみれだぞ！売っちまえよ！6000ゴールドでも無いよりマシだろ！」

ウルフが苦々しくエコナに言い放つ。

「うん。僕が預かっておくよ。ピラミッドに持って行かなければ大丈夫だろ！」

「……はあ？」

4人の怪訝そうな反応を無視して、黄金の爪を懷にしまい店を出て行くリュカ。

店に取り残される4人を気にせず、宿屋へと戻るリュカを慌てて追うアルル達……

「なあ……こういう事なんや？リュカはんも一緒にピラミッドへ行くんやろ？せやったら誰が持つてても一緒やんか！」

宿屋へ戻るとみんなリュカの部屋に集まり、先程の続きを始め出す。
「もう……あそこに行きたくないんだ……僕……だから留守番してるよ！」

「何言うてんねん！リュカはんが来てくれんと、ウチら死んでまうかもしれんやんか！」

「そうだよ！この間も、魔法の使えない地下から脱出出来たのも、リュカさんが居てくれたからなんだよ！居なかったら俺達死んでたよ！」

「うん、それぞれ！君達は僕が居るから、敵に襲われても、トラップが発動しても大丈夫と思ってるでしょ……僕に依存しまくりでしょ！」

「そ、そんな事あらへんで！そりゃ、リュカはんが居れば安心感があるけど、リュカはんは相当危なくならないと、戦ってくれへんやんか！せやから自分たちで何とかしようと、何時も思つとるで！」

「そうかなあ……？……気を付けろって言ったのに、気にせず宝箱を開けたじゃん！偶然2個目がトラップだったから良かったけど、1個目だったら僕間に合わなかったからね。それにボタンの事もそう

だよ！一旦帰ろうって言ったのに、偶然何とかなるかもって…僕が居なくても同じ事してたあ？してないよねえ…」

エコナ・ハツキ・ウルフは何も言えなくなる…

「確かに私達はリュカさんに依存してました…でも私達は弱いんです、リュカさんが頼りなんです！」

「アルル…君達は弱くないよ。ピラミッド内であれば、モンスター如きには負けないよ。下手にトラップを発動させなければ…ね！」

「そ、そんな…偶然トラップが発動したらどうすんだよ！」

ウルフはリュカを当てに出来ない事に不安を感じ、泣き言を言い始める。

「そうならない様に気を付けるのが冒険だよウルフ！僕は何時までも、君らと一緒に旅が出来るとは限らないんだ。自分たちで何とかするのも必要だよ」

「…」

リュカはピラミッドへの同行を、頑なに拒み続ける…

「1ヶ月待っても帰って来なければ、みんなは死んだものと考えてからね。そしたら僕は、アリアハンにでも戻って、ミカエルさんとイチャイチャ過ごすよ」

「な！死ぬわけないだろ！トラップを発動させなければいいんだ！簡単じゃねーか！」

アルル達は初めて、リュカという保険を携えず冒険をする事となった。

今回の事はアルル達の成長に寄与するのだろうか？

そして一人残るリュカは、どのようなトラブルに巻き込まれるのだろうか…

狡猾な罠

<ピラミッド>

「な、なあ… やっぱリユカさんが居ないと… 不安だよなあ…」
ウルフが必要以上に警戒しながらピラミッド内を歩いている。

彼だけではない、アルルもハツキもエコナですら、緊張した面持ちでダンジョン内を進んで行く。

前回来た時にトラップは無い事を確認した場所ですら、慎重に慎重を重ねて警戒をしている。

アルルは思う。

《何でリユカさんは何時も平然として居られたの？ 1度来た事がある所なのに、凄く怖い！ どうしてリユカさんは初めて訪れる場所でも、平気なの？》

思いの外、リユカへの依存心が大きかった事に、後悔をしているアルル達…

たいして戦闘は行わなかったけど恐怖と後悔の中、どうにか魔法の鍵が安置されてるであろう石戸の前まで、再び訪れたアルル達。

♪ まん丸ボタンは不思議なボタン。まん丸ボタンで扉が開く。東の西から西の東へ。西の西から東の東。♪

イシス城の子供達が歌っていた童歌を思い出し、ボタンの前へと移動する…

<イシス>

一方そのころイシスに残ったリユカは…

無理矢理レイチェルに呼び出され、女王の自室で甘美で大人な一時をおくっていた。

「ねえ、リユカ…私と結婚できなくても、愛人になれなくても、イスに居る間は、私の恋人でいてくれるでしょ!？」

「それは構わないけどさあ…僕は城に居たくないよ!さっきの見たでしょ…大臣さん達、一斉に僕の事を睨むんだよ!視線で人を殺せるのなら、僕は惨殺されてたよ」

大臣達だけではない…下級兵士もリユカの姿を見るなり、武器を構えて睨み続ける有様だった。

アイドルの女王を寝取った恨みは計り知れない。

「あはははは。私が自由に逢いに行ければ良いんだけど…仕事が忙しくってね!」

「じゃ、忙しい女王様のお邪魔をしちゃ悪いから、僕はこの辺で帰るとするよ」

リユカはベットから起きあがり、自分の服に手をかけると、

「ああん!そんな事言わずに、もう一回だけシよ?ねえ、もう一回だけ…ね!？」

と抱き付かれ、そのまま大人な世界へと旅だつて行く…

男ってヤツは…

<ピラミッド>

(ゴゴゴゴゴゴ………)

重厚な石戸が開き、アルル達は奥に奉られてある魔法の鍵が眼前にある。

「やった!やっぱりあの童歌は、ボタンを押す順番を歌ってたんだ!」

「リユカはんが居なくても、何とかなるもんやな!」

「エコナさん！油断は禁物ですよ！」

「そうね…魔法の鍵を手にした途端、トラップが発動するかもしれないしね！用心しましょ！」

アルル達は四方を警戒しながら、魔法の鍵の元まで慎重に進んで行く。

そして魔法の鍵を持ち上げた途端、先程苦労して開けた石戸が突然閉じてしまった！

「あ！？」

「な、何や！？閉じこめられてもうたのか？」

皆、慌てて石戸へと駆け寄る。

しかし重厚な石戸を人力で開ける事など出来ず、絶望感にさいなまれる。

「みんな落ち着いて！こう言う時こそ冷静に他の出口を探しましょ！」

「あの………」

アルルがリーダーらしくみんなを奮起させたが、ハツキが間の抜けた声で水を差す。

「…何？どうかしたの？」

「あのね…あそこに扉があるんだけど…出口かな…？」

ハツキが指さす先…部屋の反対方向には、やはり頑丈そうな鉄の扉が備え付けられている。

「えらい！さすがハツキ！良く見つけたな！」

「みんな魔法の鍵しか見てなかったんですか？この部屋に入って正面ですよ！見つけるとか、そう言うレベルじゃないと思います」

皆がハツキの言葉に顔を逸らし、石戸の反対側の扉の前に早足で集まる。

そして扉のノブを回し開けようとするが、鍵がかかって開かない。

「何や！結局閉じこめられてるやん！ぬか喜びやん！」

「エコナ落ち着いて！冷静に対処しましょ！焦ったら終わりよ！」
再度叫び出すエコナをアルルが宥めようと声を荒げる！

「なあ…今手に入れた魔法の鍵を使ってみようぜ！」

今度はウルフが冷静に事態を見定め、有効な手立てを提示する。

「ああ…そっか！」

「頼むよリーダー！一番パニックってんじゃないの？」

「せやで！リーダーが落ち着いて対処せなあかんやろ！リュカはんに頼りすぎちゃうか？しっかりしてやあ」

「な…！エコナがそう言う事言わないでよ！貴女が日々金切り声をあげるから、思わず焦っちゃうんでしょ！」

アルルとエコナで口論が始まる！

「落ち着けよ、2人とも！ケンカしてる場合じゃないだろ！エコナも騒ぎすぎだし、アルルも過敏に反応しすぎだよ！リュカさんは何時も冷静だったろ…あれを見習おうよ！」

流石は男の子！最年少ではあるが、皆を纏めようと頑張っている！

<イシス>

そして一方のリュカは、レイチエルと共に豪華なディナーを楽しんでいる。

「うーん…おいしー！」

レイチエルはリュカに寄り添い、食事を口に運び感嘆の声を上げる。

「大袈裟だな…何時も食べてるんだろ！？」

「そりゃ何時もと変わらない食事だけど、何時もは1人で食べるか、私に気を使っている人達と食べるかで、美味しいと感じた事がないの！」

そう言いながらリュカに口移して料理を振る舞うレイチエル。

「そつだ！ねえリュカ…凄く美味しいワインがあるのよ！一緒に飲も！」

「あゝ…酒は…遠慮する」

「あら？飲めないの？そっちも凄そうに見えるけど…」

「うゝん…飲めなくは…ないんだけど…好きじゃないから、お酒…
良い思い出もないしね！」

こうして2人の夜は更けて行く…

アルル達とは対照的に。

<ピラミッド>

新たに入手した魔法の鍵を使い、ピラミッド内を更に進むアルル達は、あからさまに奇妙な部屋に侵入していた。

其処には多数の宝箱と、更に多数の棺桶が整然と並ぶ空間。

部屋の奥には上階へ登る階段があり、アルルは迷わず階段へと移動する。

「な、なあ…一個くらい開けてもええんちゃう？」

「はあ？バカなの？どう見たって罨じゃない！」

「確かにあからさまに罨や！でもな、罨を仕掛けるのに、こないあからさまなのも変ちゃうか！？第一この部屋に入る事の出来る人間は居ないはずや！そんな所に罨を仕掛けて何になるんや！？それに、ごっついお宝があるかもしれんやろ…伝説の武器とかが…」

「うゝん…」

悩むアルル。

「何、悩んでんだよ！罨に決まってんだろ！早く行こうぜ！」

ウルフは先を急がせる。

「でも確かに、こんな所に罨を仕掛ける意味が分かりませんよね…」

それに凄いアイテムがあつたら嬉しいですよね！」

ハツキも宝箱を開けたい様だ。

実はアルルも宝箱を開けたいのだ…でもトラップが怖い…何より先

日リユカに言われた事が、脳裏にこびりついている…

『僕が居なくても町まで帰れる様にしないと…』

今、パーティーの命を握っているのはアルルなのだ！

アルルの判断一つで、生死が決まるかもしれないのだ！

もしリユカだったらどうするだろうか…しかし、それは明白だ！リ

ユカだったら宝箱には手を付けない！

それはリユカにとって、宝箱の中身は必要ない物だからだ！

リユカはバラモスを倒す事への執着はない。

何故なら、この世界の住人ではないから…

しかしアルルにとっては重大な事だ！

少しでも強い武具を手に入れ、少しでも早くバラモスを倒さなけれ

ば…

自分と家族の住むこの世界に、少しでも早く平和を訪れさせなけれ

ば…

アルルは悩む！

アルルは迷う！

世界の為に、仲間の為に、そして自分の為にはどうすれば良いのか…

果たしてアルルはどうするのか…

大人な事情

<イシス>

「ねえレイチエル…僕、もうそろそろに町へ帰ろうと思うんだけど…」

自分の膝の上に座り、国家の重要書類を決裁しているレイチエルに、リユカが提案したのは、アルル達と別行動を始めて5日後の事だった。

「ええ！何で！もっとイチャイチャしましょうよぉ！」

イヤ…正確に言くと、4日前から毎日の様に、宿屋待機への申し出をしていたリユカなのだが、その度にレイチエルが男の第2の脳を刺激し、肉欲に溺れる日々を過ごしていたのだった。

そして今日もリユカの言葉を聞くなり、羽織つてあるだけのローブを脱ぎ、豊満な胸を、リユカの第2の脳へと押し当て始める。

「ちょ、ああ…あ、もう…いいから！もういいからぁ！」

リユカが力づくでレイチエルを引き離す。

この5日間、飯を食うか女を喰うかの、どちらかだったリユカには効果が薄れてしまった様だ。

「何でえ…もっとシようよぉ…リユカだって気持ち良いんでしょ？」

「僕この5日間、ずっと城に引き籠もってたけど、もうヤダ！町をブラつきたいし、女の子をナンパしたい！何より外に出たいんだ！」

「そんなぁ…だってアルル達が戻ってきたら、イシスから出て行っちゃうんでしょ！少しの間くらい私の彼氏で居てくれても良いじゃない！」

そう言いながらもリユカを押し倒し、第2の脳を自らの中へ包み込むレイチエル！

「くっ…こういうテクニクばかり上手くなっていくな…」

そして快楽に負けるリュカ。

「ふふふ…5日間でしたっかりと学んだから！」

・
・
・

凡そ3時間後…

レイチエルから離れ、そそくさと服を着るリュカ…それを恨めしそうに眺めるレイチエル…

「ともかく、僕は町に戻るから！もうそろそろアルル達も戻って来るだろうし！」

「もう2度と戻って来ないかもしれないじゃない？」

「だとしたら、ピラミッドへ探しに行かないと…」

「あら？1ヶ月で戻って来なかったら、見捨てるんじゃないの？」

「あれは脅しだよ…ただの。…見捨てるわけにはいかないだろ！あのダンジョンは、トラップにさえ気を付ければ、モンスターは大したことはないんだ。今のアルル達でも問題はない！でも欲を出して宝箱などを開けまくっていると、痛い目に遭うだろうね！」

「お優しい事で…それとも私から逃げたいから、そんな事を言ってるのかしら！？」

体中に付着したリュカの体液を、拭き取ろうともせず睨み続けるレイチエル。

リュカを手放したくない一心の様だ。

「美女から逃げたいと思った事はないよ。でも僕は、自由が好きなんだ！贅沢でも束縛されるのはイヤなんだ！」

そしてリュカはレイチエルの自室から出て行った。

一人残されたレイチエルは、リュカが出て行った扉を見つめ涙する。そして、その涙は次第に量を増し、レイチエルの顔を濡らして行く。本当はリュカの後を追って行きたい…全てを捨てて、愛する男と共に

に自由になりたい…

しかし国民を見捨てて、自分だけの幸せを求める事は出来ないのだ…そんな事、彼女には出来ないのだ！

だから我が儘を言つてリユカを束縛した！

そしてリユカは、それを承知で付き合ってくれた。

そんなリユカの心が、嬉しくて…悲しくて…切なくて…もどかしくて…

一頻り泣いた彼女の顔は晴れやかだった。

彼女はある決意を胸に宿していた。

それはリユカへの愛を貫く事…

たとえ結ばれる事がなくとも、彼の為に尽力しよう！

女王の地位を最大限に活用し、リユカの為に情報を集めよう！

彼女の決意がアルル達を救うだろう…

<ピラミッド>

「たあ！」

(ザシュ！)

襲いかかってきたマミーを切り捨て、アルルが息を乱しながら呟く。

「はあ…はあ…い、今ので…何体目…」

「せ、せやな…50体までは…数えとつただけど…はあ…はあ…」

アルル達は、この部屋に入って丸1日経つ…

多数の宝箱に目が眩み、思わず開けてしまった為、多数の棺桶から

ミイラ男やマミーが襲いかかってきたのだ！

宝箱を1つ開けると、棺桶から10体前後のミイラ男やマミーが起きあがり、襲いかかってくる！

「も…もっ、いいだろ！宝箱は諦めて、先に進もうよ！」

竄れきつたウルフが、涙声で嘆き嘆願する。

「何言うてんねん！まだ半分しか開けてへんやんか！こんなに嚴重に保管してんのや、ごっついアイテムがあるんやで！」

「まだ開けるのかよ……俺もう魔法力が底をついたぜ……」

「そうね、少し休んでからにしましょうか。幸いな事に、ここは宝箱さえ開けなければ、モンスターは出てもないみたいだし……」

アルル達は宝箱と棺桶が安置される部屋でキャンプの準備を進めている。

準備と言っても、携帯食を食べ、眠るだけだ。

さすがに全員で寝るわけにもいかないので、交代で1人ずつ見張りながら……

最初の見張りはエコナ……

「エコナ……絶対に宝箱を開けないでよ！触るのもなしよ！ともかく今は休憩するんだからね！」

「分かつとるって！」

「もし万が一モンスターを起こしたら、先に貴女を殺すわよ！脅しじゃないからね！本気だからね！絶対宝箱には触らないでよ！」

「…………信用ないなあ……ウチ……」

そして数時間後……アルル達は宝箱開けを再開する……

順調に宝箱を開け、戦闘に勝利し、大したことのないアイテムを手に入れ続け6時間……

残り宝箱が2つになった時に、事件が起きた！

2つの内1つを開けようと、エコナが宝箱に近付いた時、タイムラグ（出遅れた）でマミーの不意打ちを食らい、派手にスッ転んでしまった！

そしてその拍子に宝箱を2つとも開けてしまったのだ！

それにより20体以上のミイラ男とマミーが棺桶から蘇り、襲いか

かっ てきた！

「こ、このバカ女！何してんだ！」

「しゃあないやん！いきなり攻撃されて転けてもったんだから！ワザとやないで！」

「当たり前です！ワザとやってたら殺してやるところです！」

ウルフがブチ切れ、エコナが言い訳をし、ハツキが物騒な事を言う。

「そんな事はいいから、逃げるわよ！」

「に、逃げるって何処へ！」

しかしウルフが訪ねた時には、既にアルルは逃げ出していた！

元来た道を逆送する様に…

重厚な石戸が閉まった、行き止まりのあの部屋へ…

安心感

<ピラミッド>

アルル達の逃亡は短時間で終わった。

何故なら、直ぐに行き止まり追い詰められたからである。

もう既に、体力も魔法力も尽き、戦う気力も尽きかけている状態だが、容赦なく襲い来るモンスター達に向け剣を構えるアルル。重く閉ざされた石戸を背に、最後まで抗ってみせるつもりだ。

「みんな…私が敵を引き付けるから、隙が出来たらさっきの部屋の更に奥まで逃げて！」

満身創痍…今のアルルがまさにこれだ！いや、アルルだけではない…みんな戦える状態ではないのだ…

「アルルを置いて逃げ帰ったら、リュカさんに殺されちゃうよ！最後までみんなで頑張ろうぜ！」

「ウルフ…」

「そうよ！私達は仲間なのよ。見捨てる事なんて出来ません！」

「ハツキ…」

「元はと言えばウチが招いたピンチや！逃げる訳にはいかんやろ」

「エコナも…」

全員が見つめ合い頷く。

「じゃあ、行くわよ！！」

「…「おおー！」「」」

アルルの掛け声と共に、全員が踏みだそうとした次の瞬間……

(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ………)

背にした石戸が開き、其処には優しい表情のリュカが立っていた！

「リュ、リュカさん！！」

「やあ…あれえ！？やっべえ…ピンチじゃん！」

そう言いながらも表情は変わらない。

「リュカさん！？来てくれたんですね！リュカさんが来てくれれば、ピンチなんて吹き飛びますよ！」

現金な事にウルフがはしゃぎ出す。

しかしリュカの後ろから大量のモンスターが迫ってきている！

「喜んでいるところ悪いんだけど、僕も大量のモンスターに追われてるんだ！黄金の爪を持って来ちゃったから…テヘ？」

リュカは肩を竦め笑いながら話す。

「………」

「『テヘ？』じゃねえー！！そんな物置いてこいよー！！」

ウルフの突っ込みは尤もだ！

ピンチを脱し、更なるピンチに陥ったアルル達…

しかしリュカが側に居るだけで、こんな状況でも生き残る希望が心に灯り、絶望的だった思いが消え去ってしまうのだった！

「リュカさん！この部屋の奥から、新鮮な空気が入って来てます！間違いなく出口が存在しますよ！」

「そうか……では戻るより進んだ方が早いね！目の前の敵を突破するぞ！」

「……おお……！！」

リュカの力強い言葉に、皆力が漲る！

<ロマリア>

アルル達はリュカのお陰でピラミッドから脱出し、リュカが用意しておいたキメラの翼でロマリアまで戻ってきた。

ロマリアの宿屋へ着くなり、みんな泥のように眠ってしまった。…リュカ以外…

その間リュカは、自身のルーラをコッソリ使い、アルル達に内緒で

一汗かくのだった！

丸一日休み、今回の反省会と称しリュカの部屋に集まるアルル達…使用した形跡のないベットが気になるも、リュカにお説教を受けている一行…

「……………ともかく、今回は運良く助かったけど、僕が現れなかったら死んでたんだよ、みんな！わざわざ罫を発動させるなんて、正気の沙汰とは思えないね！」

「でも…冒険に役立つアイテムが…見つかるかもしれへんやんか！」「エコナ…じゃあ聞くけど、役立ちそうなアイテムはあったの？」

「……………そ、それは……………」

「この黄金の爪だって、使いこなせる人が居ないじゃないか！売ったって6000ゴールド…大変な思いまでして得るモノはあったのか？」

「……………」

皆黙る…

「あるわけないよな……………まあいい…魔法の鍵は手に入った事だし、明日ポルトガへ向けて出発だね！」

リュカはお説教を切り上げ、今後の予定を確認する。

「は、はい！魔法の鍵で関所の扉が開けばですけど…」

落ち込みモードから脱してないアルルが、ネガティブ発言を力無くする。

「開かなかつたら、ぶっ壊しちゃおうぜ！もうめんどくせーよ！」

「そんな事したらダメですよ！モンスターの行き来を阻害する為に設置されているんですから！」

リュカの無責任な発言に突っ込むアルル…少しだけ元氣が出てきた様だ。

「あはははは！じゃあ開く様に祈らないとね！」

明るく笑い、話を切り上げるリュカ…そして懷から綺麗なリングを3つ取り出し、アルル・ハツキ・ウルフに手渡した。

「リュカさん…これは？」

リングを受け取ったウルフが訪ねる。

「うん。それは『祈りの指輪』と言って、魔法力を回復してくれるらしいんだ」

「それは本当ですか！？」

食い入る様に訪ねるアルル。

「って、言ってたよ」

「誰が！」

思わず突っ込むウルフ。

「え」と…くれた人…」

「くれたって…2500ゴールドって値札が付いてますよ！これ、何処で買ったんですか！？」

指摘するハツキ。

「入手先なんてどうでもいいじゃん」

「ウチにはくれへんの？」

ねだるエコナ。

「エコナは魔法を使えないじゃん！意味無いじゃん！」

「……………リュカさん……………もしかして昨日はエルフの里に行ってたか？エルフの女王様が、こんな指輪をしていた様な気がするんですが……………」

「……………そうだったけ？知らないなあ……………」

アルルの鋭い観察力を見くびっていたリュカ。

「と…ともかく、それがあれば安心でしょ！魔法力が尽きても、回復できるから保険にはなるでしょ！」

「…ありがとうございます。でも、リュカさんが何時も一緒に居てくれる方が、安心なんですけど…」

ハツキが上目遣いでリュカに迫る。

幼い頃からよく知っているウルフですら、ドキッとしてしまう様な仕草で…

「それは断る！僕は常に自由に居たいから…僕の自由意志を阻害す

る者は敵だ！」

相変わらず我が儘である。

しかし、大好きなリュカからのプレゼントに、心を躍らせる3人。唯一プレゼントを貰えなかったエコナが、甘えた風にリュカへ迫る。「なあリュカはあゝん！ウチもリュカはんから、プレゼントほしい？」

その大きな胸を押し当てて、リュカを誘惑する。

だがリュカは、そんなエコナを押し離す。

「エコナはダメです。欲張りだからダメです。ピラミッドでは欲張りすぎて、みんなを危険にしたからダメです」

数日間、肉欲に溺れる生活を送っていた為、ちよつとやそつとの色仕掛けでは落ちなくなつたリュカ。

《うそ！？あのリュカさんが色仕掛けに動じないなんて！今回の件相当怒っているのかしら？私もパーティーリーダーとして気を引き締めないと…》

事実を知らない者には、効果てきめんだつたらう…

ポルトガ

<ポルトガ>

アルル達は海風香る港町を、ポルトガ城へと歩いている。

この世界でも屈指の造船技術を誇る国だけあり、この港町は活気に溢れている。

それでも、この国の人間に話を聞けば、10数年前より衰退していると答えるであらう…

「しかし、頑丈そうな船がいっぱいあるねえ。1隻くらい貰える
と良いね！」

「そうだよな！世界を救う為に過酷な旅を続ける勇者一行なんだから、船ぐらくれても罰は当たらないよなあ！」

リユカの無責任な願望に、ウルフが本気で同意する。

「また馬鹿な事を…そう簡単に船なんかくれるわけ無いでしょ！」

「せやで！アルルの言う通りや！きつと『面倒な問題を解決したら、
考えてやる』的な事を言われるで！」

「ええ…………めんどくせえ…………」

それ程高くないリユカのテンションが、極端に下がったところで、
一行はポルトガ城へと辿り着いた。

ポルトガ城謁見の間控え室で待つ事数10分…

長時間待たされる事を覚悟していたアルル達だが、予想に反し待つ
ことなく謁見が叶った。

「うむ。面を上げよ…お前等が勇者一行だな。」

謁見の間の玉座に座るポルトガ王に対し、片膝を付き恭しく頭を垂
れるアルル達。（さすがのリユカも、まだ恭しくしている）

「は！私はアリアハンより魔王バラモスを討伐するべく、旅立ちましたアルルと申します。この度はお目通りを賜り、感謝致します」
アルルが形式的（常識的？）な挨拶をし、話を進めていく。

「そんなに畏まる事は無い！もう少し楽にして良いぞ」
ポルトガ王はある種の禁句を言ってしまった。

すかさず立ち上がり、体を揉みほぐすリユカ…（案の定…）
そんなリユカの行動を見て、胃を押さえるアルル達。

「ふぉ～ふぉふぉふぉ！ロマリア王の言った通りだ！お主がリユカだな！何でも、ロマリアの王位継承を断つたと聞くが！本当か？」

「つまらない事を知ってますねえ王様は！ロマリア王とは親しいのですか？」

家臣達が怪訝な顔で睨む中、涼しい顔で会話を続ける…
行く先々の王室で、家臣や側近達に敵意を芽生えさせる男！

「まあ…お互い王だから…ある程度は親しいな。少し前にロマリア王から書簡が届いてな…お主達の事を高く評価している様だぞ！その書簡に船を与えてほしいと、熱心に嘆願が書かれておった」

「そうなんツスよ！船を1隻貰いたいんですよ！バラモスを倒す為には必要なんですよ！王様も平和になつてほしいでしょ？」

「リユカさん…お願いだから言葉を選んで下さい！」
堪らずにアルルが小声でリユカに注意する。

「良いのだ勇者アルルよ！何者にも媚び諂わないのが、その男の良さだ！側近達にも言い聞かせてある…激怒し襲いかかる愚行はせぬよ。イシスでは襲いかかった男を、吹っ飛ばしたと聞いているぞ！？本当か？」

「レイチエルとも知り合いですか？やはり書簡が？」

「うむ！あのお嬢ちゃんがお主の事をベタ褒めしておるぞ！どうやら惚れた様だな！やるのお～色男！」

「いやぁ～イケメンですから！」

《何なのこの2人！同じ波長で話してる！！この国、大丈夫！？》

「しかしなあ……そう易々と船はやれんよ！我が国の船は丈夫で値が張るからなあ……」

「ええ……マジッスかあ……」

「マジマジ！だから頼みを聞いてくれんか？」

「ええ……面倒事ッスかあ……ヤダなあ……」

「そう言うなよ……余とお主の仲だろ！」

「う……じゃあ、しょうがないッスね！」

《どんな仲よ！今日会ったばかりでしょ……！》

思わず突っ込みそうになるのを、我慢するアルル……しかし我慢できなかった者も居た。

「どんな仲ですか……！今日が初対面でしょ、リユカさん……！」
ウルフである！

これが若さか……

「ナイス突っ込みウルフ君！」

「良い仲間が居るなあ……余の部下は、碌な突っ込みも出来んよ！」

「使えないッスね！」

家臣達が拳を握り締め、ワナワナ震えている！

「あ、あの王様……王様の頼み事とは……？」

耐えきれなくなったアルルが、泣く様に訪ねる。

「うむ。実はな、アッサラムの東の山脈を越えた地に『黒胡椒』

なる珍味があるのだが……それを買ってきてほしい！」

「え！？マジで、そんな物と船を交換してくれんの？」

「うむ。マジマジ……！」

「やった！ちょ……簡単じゃあ……ん！ラッキー！」

「そりやムリやでリユカはん！」

今まで黙って傳っていたエコナが、慌てて発言する！

「アッサラム東の山脈は険しすぎて、人間には超えられんはずや！せやから船が無いと東の地には行けへん！」

「ええ……そうなの……じゃあ船が先じゃん！船頂戴！」

「そう慌てるでない！方法はある！アッサラムより東へ半日程行

った所に、洞窟があつてな、そこに『ノルド』と言うホビットが住んでおる！この手紙をノルドに渡せば、抜け道を教えてくれるだろう……」

そう言つて懷から手紙を取り出したポルトガ王は、リュカに手渡す。「ふゝん……そこまで準備出来てたんだ……じゃあ、いっちょ頑張りますか！」

リュカは手紙を受け取ると、軽く片手をあげて挨拶し、ポルトガ城を後にする。

アルル達はポルトガ王へお辞儀をして、慌ててリュカの後を追う！ポルトガ王の優しい眼差しと、家臣達の厳しい眼差しを背中に感じながら……

ポルトガ城下町の宿屋……

何時もの様にリュカの部屋で今後の方針を話し合う。

「まあ……明日になったら、キメラの翼でアッサラムへ……そしたらノルドさんを訪ねて東の地へ……って事でいいよね！」

「ええ……それで構いません……」

力無く答えるアルル。

「どうしたのアルル？元氣ないね？お腹痛いの？オツパイ揉んであげようか？」

「どうしてお腹痛いとオツパイ揉むんですか！？関係ないでしょ！」

「イヤ……僕が揉みたいだけなんだが……ダメ？」

額に血管を浮き上がらせる程イライラするアルル。

「リュカはん！そない洗濯板より、ウチの爆乳があるやん！」

「な……！！？せ、洗濯……私だつて大きいですよ！リュカさん以前褒めてくれたじゃないですか！何時でも良いですよ、私！」

エコナの無礼な発言に、アルルが激怒するがハツキのアピールに阻まれ取り残される。

「アルル…気にするなよ…その内大きくなるよ！」

（ゴッ！！）

やり場のない怒りを、ウルフにぶつけるアルル！

かなりの力で、ウルフの脳天に拳骨を落とした！

「いいってええええ…俺、フオローしただけじゃん！」

頭を押さえ、蹲るウルフを無視して、アルルがリュカに詰め寄った！

「そんな事よりリュカさんに言いたい事があります！」

「何でしょう？アイラブユーですか？」

「違います！！いい加減、王様相手に軽口を叩くの止めて下さい！」

「なぐんだ…そんな事かあ…あはははは！…いい加減慣れてよ」

「慣れるわけないでしょ！」

アルルの怒りは収まりそうに無いが、夜も更けてきたので、今宵の

会議は解散となった…

王様の我が儘の為…黒胡椒を求め新たなる地へ…

アルルのストレスは止まる事は無いだろう…

バーンの抜け道

<ノルドの洞窟>

日が最も高い位置に登った頃、アルル達はホビットのノルドが住む洞窟に到着した。

今まで探検してきた洞窟とは違い、モンスターも気配が全く無い。

そんな洞窟を奥へと進むアルル達…

かなり奥へ進んだ場所に、小柄で筋肉質な男性が一人、この洞窟内で暮らしている。

質素だが、とても洞窟内とは思えない程、整頓された部屋でくつろいでいる…

「お前さん方…いったい何用かね？私はホビット族のノルド。見ての通り人間ではない…お前さん方に危害を加えるかもしれないぞ…そうなる前に、出て行くが良い！」

静かだが、力強い口調で威圧するノルド…

「あ、あの…私た「僕達しがないメッセンジャー！君はノルドさんですか！」

人外のホビット族を前に緊張しているアルル。

そんなアルルを遮り、リユカが軽い口調で話し出す！

「君に手紙を持って来ました！取り敢えず読んで下さいな！」

ポルトガ王より渡された手紙を、ノルドに押し付けるリユカ…

怪訝そうな表情で手紙を読むノルド…

しかし手紙を読んだ途端、笑顔になる！

「お前さん方はこの手紙を読んだかね？」

「失礼な！人様の恋文を読む程、落ちぶれちゃいない！」

「別に恋文ではない！これはポルトガ王からの手紙だろう？」

「は、はい…そうです！」

ノルドはケラケラ笑いながら、手紙を見せてくれた。

「ノルドんへ　コイツ等ちよゝ良いヤツだからあ、バーンの抜け道を教えてあげて。　　　　　親愛なる　ポ　より」

「……………これ……………リュカさんが書いたんですか？」

「アルルは時々失礼だな！……………僕の字はこんなに汚くない！」

「イヤ……………そうじゃなくて、内容の話なんですが！」

「お嬢ちゃん、安心したまえ！その字は間違いなくポルトガ王の字だ……………内容もヤツのものだ！」

そう言うて楽しそうに手紙を読み直すノルド。

「あの男が信用できると言うのなら、間違いないだろう。では、ハーンの抜け道へ案内しよう……………付いて来なさい」

ノルドはアルル達を、洞窟内のある場所へと誘う……………

「あのお……………ポルトガ王とノルドさんって、どういった仲なんですか……………」

ノルドの後を追いつながら、気になった事を訪ねるハツキ。

「ふむ……………ヤツとはな、王位を継ぐ前の若い頃……………一緒に連んでヤンチヤした仲でな……………ヤツの奇抜な行動に、何時も胃を痛めていたものだよ！……………当時の懐かしいなあ……………」

《それって殆どリュカさんじゃない！！私にも今が懐かしくなる時が来るのかなあ……………？》

「ノルドさんはポルトガ王と仲が良かったんですね！それじゃあ何でこんな所で暮らしているんですか？ポルトガに行けば、良い暮らしが出来るんじゃない……………」

「私はホビット……………ヤツが良くても、他の人間が忌み嫌う……………ポルトガの為にヤツは王位を継ぐ事になった……………その日から私は此処で暮らしている。ヤツの邪魔にならぬ様にな……………」

無邪気なハツキの質問は、ノルドの心に悲しみを思い出させてしまった。

「……………ごめんなさい……………私……………」

「な……………に……………気にする事は無い……………もう慣れたのでな……………」
それでも悲しそうに俯くノルド……………

「しかし変な世界だな此処は！僕の居た世界では、エルフも、ホビットも、人間も…みんな仲良く暮らしているのに！僕になんか、人間の奥さん以外に、エルフとホビットの愛人が居るからね！みんな仲良くやっているからね！」

悲しそうなノルドを、励ますかの様に明るく自分の世界の事を話すリユカ…が、内容が…

「何で結婚してるのに、愛人が居るんだよ！」

「バカだなあウルフ君は！結婚したから愛人が出来たんだろ！結婚してなかったら、みんな恋人だよ！」

「そう言う事じゃねーよ！」

「お前さんは別の世界から来たのかな！？」

「そーなんツスよあ…向こうで楽しくやってたのに、いきなりこの世界へ放り出されちゃって…あゝ…ビアンカに逢いてえゝ！！」
「そうか…戻れると良いな…」

洞窟内の変哲もない岩壁の前にやって来ると、ノルドはアルル達の方へ振り返りにこやかに話し出す。

「此処の岩壁を崩せば『バーンの抜け道』だ！ちよつと待ってなさい！」

そう言うとノルドは、岩壁に向けて肩からタツクルを行った！

（ドン！…ドン！……ドガンー！！！）

「さあ…遠慮せずに通いなさい。洞窟を出て、南に行くと『バハラタ』だ」

「あ、ありがとうございます！」

アルル達はノルドに深々と頭を下げ、バーンの抜け道へと進んで行く。

新たな土地…新たな冒険を思い、洞窟を突き進む…

<バハラタ地方>

洞窟を抜け平原を歩いていると、アントベアや腐った死体・メタルスライムなど…これまでに戦った事のないモンスターが襲いかかって来る！

しかしピラミッドでの度重なる戦闘が、アルル達を大幅に強くした！ウルフの『ベギラマ』や『メラミ』で敵を弱らせ、ハツキの『ルカナン』で防御力を落とし、アルルとエコナが連携してトドメを刺す！……因みにリュカは歌っている！

曲目は『Beauty & Stupid』

もはや誰もリュカに突っ込みを入れない。
言うだけ無駄な事は分かっているから…
そんな時だ、不思議な事件が起こったのは…

気持ちよさそうに歌うリュカの後頭部目掛け、天から『愚か者はお前だ！』と言わんばかりに腕輪が落ちてきた！！

(ゴツ！！)

「いつてええええ！！何だ！？いつたい何だ??」

涙目になりながら頭を押さえるリュカ…

ハツキは落ちてきた腕輪を拾い、不思議そうに空を見上げる。

「大丈夫ですか！？何処から落ちて来たんでしょうね？とても綺麗な腕輪…」

「ほんまや！綺麗な腕輪やね！天からの思し召しかなあ？」

「ずいぶん痛い思し召しなんだけど……ん？…ちよつと見せてそれ！」

痛みで半べそをかいていたリュカだが、ハツキの持つ腕輪を見て、何やら顔を顰める…

「これ『星降る腕輪』じゃん！何で空から落ちて来たの？」

「リュカさんは、これの事を知ってるんですか？」

「うん。これは『星降る腕輪』と言つて、装備者の素早さを上げるアイテムって言われてる…でも僕が装備した時は素早さが上がった気がしなかった！」

「それってリユカさんの素早さが、既にMAXだったからなんじゃ…」

ウルフの突っ込みを無視し、腕輪を眺めるリユカ。

「だからさ…仕事の時に書類が飛ばされない様、ペーパーウェイトとして使つてたんだ！……それが何故ここに？」

「そんな凄いアイテムを、文房具代わりに使ったから、罰が当たったんじゃないですか？」

「おかしいなあ？…この世界に飛ばされる直前は、確かに机の上に在ったんだけどなあ？」

アルルの突っ込みも無碍にする。

「ほな、やつぱりリユカはんに意趣返しに追つて来たのとちゃう？」

「うん。その腕輪はハツキにあげる！大事にしてね」

リユカに冷たい3人を無視して、ハツキに向き直る。

「ちょ、何でハツキなんや！？ウチには？」

「ハツキだけが僕を心配してくれたからね！ハツキにあげちゃう！」

そう言いながら、ハツキの腕に優しく装着するリユカ。

「くっ！しくじったわぁ…ウルフとアルルが良い突っ込みを入れるから、ノってしもた！ハツキはするいわぁ…指輪も貰つて、腕輪も貰う！ウチは何も無しやで！」

一人ふて腐れるエコナを無視して、また歌い出すリユカ。

そして戦闘に巻き込まれる一行！

素早さが倍になったハツキは、敵の懐に入り込み、聖なるナイフで切り裂いて、直ぐさま間合いを空ける戦い方を披露する！

バーンの抜け道（後書き）

星降る腕輪が落ちてきた理由は、何れ『別世界より？』で書きたい
と思います。

過度の期待はせずに、少々の期待で待っていて下さい。

hideさんがお亡くなりになってから13年も経ちますね…
好きだったのになぁ… 未だに残念です！

バハラタ

<バハラタ>

美しく大きな川の畔で、営みを続ける町バハラタ。

アルル達は、この町の特産品である黒胡椒を求め、町人達から情報を集めている。

そして集めた情報を頼りに、1軒の店の前にやって来た…

「…………… 此処で…間違いないよな…」

「わ、私に聞かないでよ!」

「きつと此処ですよアルル。ほら看板があります!」

そうハツキが指差した所には【黒胡椒直売所】と看板が…

「……………でも店閉まつてるやん!」

「でも中から人の声が聞こえるよ」

そう言つてリユカは勢い良くノックする。

(ゴンゴンゴン)

「すんませえ〜ん!黒胡椒をくださいなあ〜」

暫くすると中から老人が一人顔を出し、警戒しながら訪ねる。

「…あの…お客さんですか?」

「あれ?もしかして耳が遠いの?」

リユカは小首を傾げると、大きく息を吸い、

「そうでえ〜す!!お客さんですよー!!」

と、かなりの大声で老人に話しかけた!

「うるさーい!!聞こえとるわい!!耳は正常じゃ!」

老人も負けずに大きな声で怒鳴り返す!

・
・

「いや…失礼しました！少し立て込んでおりまして…」

暫く店先で叫び合っていたが、互いの状況を理解する為、店内へと移動し状況を聞く事になった。

「いえ…こちらこそ申し訳ありません…」

耳鳴りが治まらないが、平静を装って謝罪するアルル。

店内には先程、怒鳴り合いをした店主の老人『ターゲル』と、店員の『グプタ』の二人が神妙な面持ちでアルル達を見つめている。

「あの…何か問題事でも…？」

「……………実は…私の孫娘のタニアが盗賊に誘拐されてしまいました…莫大な身代金を要求されております…」

「わお、一大事！じいさん、その孫娘は美人か？」

「え？…ええ…まあ…」

リユカの緊張感のない質問に、思わず呆れ頷くターゲル。

「ターゲルさん！こんな誰か分からない旅人に、話す事はないでしょう！タニアは僕が助けます！」

リユカの態度にグプタが怒る。

「そツスよ！他人に言う事じゃないツスよ！……………でも美人なのかあ…今頃、むっさい盗賊共に。。。な事されて、。。。になっただろうなあ。。。や。。。を。。。されて、。。。で。。。なんだよ、きつと！こう言う時、美人は損だよ！ま、ヤツらにしたら女だったら何でもいいのかな！？」

「うわー！！！タ、タニアー！！！」

リユカの無責任で無慈悲な発言を聞いたグプタは、泣き叫びながら店を出て行ってしまった！

「あ、行っちゃった！まあいいや。…そんな事よりじいさん、黒胡椒を売ってくれよ」

「ちよつと、『行っちゃった』じゃないだろ！あの人タニアさんを助けに行っただんじゃないのか！？」

「あはははは、まさか！だって居場所が分からなきゃ「タニアは此

処より北東の『バラタ東の洞窟』に囚われております！」

何処までも無責任なりユカの発言を打ち砕く様に、ターゲルは説明をする。

「居場所が分かっているのに、何故助けを出さないのですか？」

「もちろん助けは出しました！町の警備や傭兵団を雇い……しかし全て返り討ちに合い、全滅しました……」

ハツキの疑問に、ターゲルは力無く答える……

「へー……じゃ、ヤベーじゃん！アイツ一人で行っちゃったよ。まあいつか！それより黒胡椒売ってよ。それがあれば船を貰えるんだよね！そうしたらバラモス討伐に、また一歩近付くんだ！」

「バ、バラモス討伐……！貴女方は勇者様ですか！？」

リユカの言葉にターゲルは瞳を輝かす。

「ま、まあ……建前は……」

アルルが辟易した表情で肯定する。

「ど、どうか勇者様！タニアとグプタを助けて下さい！あの二人は恋仲なのです！故に私はグプタにこの店を託すつもりだったので……しかし二人が居なくなってしまうては、こんな店………どうか……どうかお願いします！二人を……」

ターゲルはアルルの手を握り、涙ながらに懇願する。

《ち、近い！顔、近いから！！》

「わ、分かりましたから……その……は、離れて……」

「おお……どうか頼みますぞ！」

ターゲルは満面の笑みで頷き続ける。

「あのお………黒胡椒は？」

しかし全く空気を讀まないリユカは、黒胡椒の事しか気にしてない。………二人が無事戻って来れば、好きなだけお譲り致します！ですから、どうか……」

「うん。そう言う事なら、早速行かないと！あの突っ走り小僧がぶっ殺される前に、追いつかないと大変な事になっちゃうね！」

「そ、そうね……ターゲルさん、その洞窟は遠いのですか？」

「大人の足で半日くらいです…しかしグプタの事だから、きっと馬を使って向かっているでしょう！どうか急いで下さいませ！」
それを聞きアルル達は慌てて出発する！

「しかし、あのガキ突っ走りやがって！迷惑だな！」

「リュカさんの所為でしょ！酷い事言うから…」

「だあって…盗賊なんて馬鹿な事やってる連中がやりそうな事でしょ？」

「ほら！リュカさんもウルフも…喋ってないで走るわよ！」

アルルが皆に走る事を指示する。

「ええ…走るのお…めんど」は・や・く・す・る！！」

人命救助という使命を前に、妙に迫力を増したアルルに逆らえず、みんな大人しく走り出す。

「いい、正面に立ちただかる敵だけを相手にして！他は無視よ…そうすれば追いつけるはず…彼はモンスターを避けながら進むはず…馬を使ってもモンスターを避けてじゃ、そんなに早くは進めないはずよ！私達は最短距離を突っ走るわよ！！」

そしてアルル達は走り続ける…

若者を救う為…

恋人達を助ける為…

そして、黒胡椒の為…（リュカのみ）

闇

<バハラタ周辺>

アルル達は直走る！

愛しい女^{タニア}を助ける為、町を飛び出したグプタを救う為！

アルル達は走り続ける！

眼前に立ちはだかるモンスターのみを切り捨て、残りは無視し！

アルル達は体力の限り走る！

最も体力のないウルフが遅れたした為、リュカが小脇に抱えて！

暫く走り続けると、無惨にもモンスターに殺され、食い散らかされた馬を発見した。

「この馬の死骸は、まだ新しいな！きつとグプタってヤツの馬かも！？… 此处で馬を無くしたって事は、結構近くに居るぞ！」

リュカは立ち止まり、馬の死骸からグプタとの距離を予測する。

「はあはあ… じゃ、じゃあ止まってないで… はあはあ… 早く… はあはあ… 行きましよう… はあはあ…」

アルルは息も切れ切れに、前進を促す。

今、リュカ以外の思いは1つになっていた…

《何故リュカさんは息が切れてないんだ！？全然疲れた様子もない！？》

そして一行は洞窟の入口へとやって来た！

「はあはあ… グプタはんと… はあはあ… 合わへん… はあはあ… かつたな… はあはあ…」

「きつと洞窟の中に居るんだよ。ほら、其処に真新しい血痕が落ちてるだろ」

リュカは洞窟入口を指さし、エコナの疑問に答える。

「はあはあ…すーはあー……………で、ではグプタさんも怪我をしているのですね!？」
ハツキは大きく深呼吸して、乱れた呼吸を整え、状況が切迫している事を確認する…リユカ程ではないが、結構凄い体力だ!
「うん。急いだ方が良いね」

<バハラタ東の洞窟>

アルル達は洞窟内へ入り、血痕の後を追う。
洞窟内は幾重にも分岐しており、かなり複雑そうな造りになっている。

ある程度進むと、リユカが血痕とは違う道を指し、進むべき方向を提示する。

「きつとこつちだよ」

「何言ってるんですか!血痕は向こうへと続いてますよ!グプタさんは向こうに居るんですよ!」

「うん。彼はそつちかもしれないけど、彼女はこつちだよ」

「彼女って、タニアさんの事ですか?何でそんな事が分かるんですか!？」

リユカの主張に思わず訪ねるアルル。

「うん。美女の匂いがする!」

「匂い……………じゃ、怪我しているグプタさんはどうするんです!」
リユカは至って真面目なのだが、他人から見ると巫山戯ているのか思えない発言に、怒り心頭のアルル…リユカの事を理解するのは難しい様だ。

「じゃあさ、僕は美女を助けるから、みんなは野郎を助けてあげて
「べ、別行動って事ですか……………」
アルル達に、不安が広がる…

「だって僕、男より女の子を助けたいしい」

「でも怪我している人を、先に救出しないと…」

「でもさ、彼氏の方を先に救出した為に、盗賊共に僕等の事がバレて彼女が殺されるかもしれないじゃん！」

「…………じゃ、じゃあ無事助け出したら、直ぐに私達と合流して下さい！いいですね！？」

「ほーい」

緊張感無く答えたリュカは、一人で美女が囚われている（リュカ曰く）奥へと進んで行く。

アルル達はリュカが居ない不安に怯えながら、血痕を辿り奥へと進む。

リュカと別れたアルル達は、血痕を辿り暫く進むと、盗賊団の一味らしき数人の男達を発見する。

盗賊等はまだアルル達に気付いてなく、談笑しながら酒を飲み交わす。

アルル達は、そっと物陰に身を潜め、状況の把握に努めている。

《あそこにグプタさんは居ないみたいだけど…………》

「しかし、あのガキがナイフを隠し持つてるなんて驚いたぜ！」

「ぎやははは！おめー、ダッセーな！不用意に近付いて切られてやんの！」

《この血って、あいつの？失敗したわ！こっちじゃなかったのね！？》

アルルはウルフ達に目で合図し、リュカと別れた所まで戻る事に…

その頃リュカは、見張りと思われる4人の盗賊達と対峙し、にこやかに挑発している。

「やあ、不細工過ぎて区別の付かない盗賊団の皆さん！美女はこの奥かな？」

「何だテメーは！？どつから入ってきやがった！？」

「あはははは…どつからって…入口からに決まってるじゃん！ばっかじゃねえーの！？」

みんな不細工で区別の付かない同じ顔に青筋を立てて激怒する！

「テメー、ぶつ殺されてーのか！！」

「何でお前等みたいな輩は、同じ台詞しか言えないんだ！？………まあいい…人質は無事なんだろうな？エツチな事してないだろうな！？」

「ああ？テメーはあのジジイに雇われた傭兵か！あのジジイも懲りねーなあ…誘拐つてのはビジネスなんだよ！攫った商品に手を出したら、金が入らなくなる！…そう言ってカンダタ親分に釘を刺されちまったよ！！」

「……カンダタ……」

リュカの瞳に静かな闇が灯る…

当然ながら盗賊達はそれに気付く事はない。

「でもよ、さつきあの女の彼氏が、たった一人で乗り込んで来やがってよお…ボコボコにされてたぜ！……なあ！」

「ああ！アイツは商品じゃねーからな！隠してたナイフで切られたジエイブが、ブチ切れてボコボコにしてたっけ！…もう死んでんじやねえーの？ぎやはははは！」

リュカの顔から笑みが消える…

「この奥に居るのか……？」

「ああ！この奥で、虫の息だよ！」

「よお…もうそろそろ、身代金の支払期限が切れるだろ！？そうしたらあの女は商品じゃねえ…あの小僧がくたばるまで、目の前で犯し殺してやろうぜ！…おい、にいちゃん！テメーにも死ぬまでの短い間、最高のシヨーを見物させてやんぜ！ぎやははははは！」

調子に乗った盗賊達は、情報をベラベラ提供し、そしてリュカの怒りを煽っている。

「そんなシヨーは遠慮する…俺の趣味はそんなに悪くないんでな…」

リュカが低く呟き、盗賊共に手を翳す！

「バギクロス！」

アルル達がリュカに合流したのはその時だった！

「バギクロス！」

リュカのバギクロスが4人の盗賊共を、細切れにする！

狭い空間に置いてあった椅子や机も細切れにし、土色の岩壁を真っ赤に染め上げる！

「リュ、リュカさん！！」

思わず叫ぶアルル。

「ん？」

「……………」

振り向いたリュカの瞳の闇に驚き、言葉が出ない…

「早かったね…どうやら、こっちが正解みたいだよ。2人とも居るってさ！」

直ぐに何時ものリュカに戻ったが、この状況を見てしまいたじろんでしまうアルル達。

リュカは気にすることなく、血と肉で汚れた部屋を奥へと進み行く…

「リュカさんやっぱり怒ると怖い…」

「バ、バギクロスまで使えたんですね…私なんか、そよ風みたいなバギしか使えないのに…」

怯えながらだが、アルル達はリュカの後を追う…

そしてアルルは思う…

リュカの為に、今後はリュカを単独で行動させてはいけなないと…

闇（後書き）

久しぶりにリュカの『俺』という一人称が出ましたねえ…
マジギレすると、本当に怖いんですねえ…

命乞い

<バハラタ東の洞窟>

狭い通路を進むと、通路は丁字に別れており、その左右が頑丈な牢屋になっている。

リユカは早足で進み、片方の牢屋を覗き込む。中には1人の女性が蹲っているのが見えた。

「貴女がタニアさんですか？ 貴女の爺さんに頼まれて、助けに来ましたよ。もう安心ですよお。………ところで、どうやって開けるの？」

リユカは最大級の優しい口調で話しかける。

「ほ、本当ですか！？ お祖父ちゃんが……」

「本当ですよお。こんなイケメンが悪人わけないでしょう！」

タニアは合格レベル（リユカ基準）らしく、リユカは優しい笑顔で話し続ける。

「ああ……良かった……その壁にレバーがあります！ それで牢屋の戸が開きます！……あの……向こうの牢屋には、大怪我をしたグプタが閉じこめられて居ます！ 助けて下さい……！」

タニアの話を聞いたアルルが、レバーの位置を確認し、操作して解錠する。

（ガチャッ！！ ガラガラガラガラ！！）

牢屋の戸が開いた途端、タニアは飛び出し反対側の牢屋へ入って行く。

「グプタ！ グプタ！ しっかりして！ お願い、死なないで……！」

タニアの後を追うように、アルル達も牢屋の中へと入って行く。

其処に居たのはボコボコに殴られたグプタの姿だった！

何もない牢屋の床に置き晒され、手当などはされていない。

顔は殴られて腫れ上がり、腕と足も骨折している。

腹部もかなり殴られた様で、見たところ内臓も幾つか損傷している様だ。

「酷い……」

「グプター！お願いしつかりしてー！！」

タニアがグプタに抱き付き泣き叫ぶ。

「うつ……」

しかし動かされると激痛が走るらしく、タニアに抱き抱えられたグプタは苦痛の声を漏らした。

「タニアさん、退いて下さい！急いで治療しないと……」

ハツキがタニアを押し付け、グプタの身体をそつと診る。

そして骨折箇所へ手を当てて、グプタに優しく囁く。

「グプタさん聞いて下さい。これより骨折でずれた箇所を、力ずくで元の位置に戻します。かなりの激痛ですが我慢して下さい！」

（ゴリッ！）

言い終わるや力ずくで骨を正常な位置へと押し戻す！

「うつ~~~~~~~~！！！！！！」

言葉にならない叫び声でグプタは悲鳴を上げる。

「ベホイミ！」

すかさずハツキはベホイミを唱え、グプタの身体を治癒させてく……

「ベホイミ！ベホイミ！」

ハツキのベホイミでグプタの傷が治癒していくが、怪我の程度が酷い為、思う程効果が現れないでいる！

「ハツキ……ちよつと退いてごらん……」

見かねたリュカが、ハツキに変わりグプタの身体へ手を翳す。

「ベホマ」

グプタの身体が淡く光り、忽ち傷が治癒されて行く！

「リュカさんは『ベホマ』までも使えたんですか！？」

驚きの声を上げるハツキ……

「ん？………まあ……ね……」

リユカはグプタをゆつくりとタニアの前に立たせる。

「グプタ！」

「タニア！」

互いの無事を喜び抱き合う二人。

「喜んでるとこ悪いけど、早く帰ろうよお……僕、こっぴつ湿気ばい所嫌いなんだ！」

「ああ、そうだよ！あまり長居すると、他の盗賊共と鉢合わせしちゃうかもしれないぜ！まだ洞窟内には、盗賊団らしき連中が居たかな！」

ウルフが先程、別の場所で見ただ中の事を思い出す。

「その中には『カンダタ』は居たか？」

「カンダタ？……奥の方までは見えなかったけど……居なかったと思うよ……何！？この盗賊団ってカンダタ一味なの！？」

リユカの真面目な質問に、ウルフだけでなくアルル達も驚いている。「……さつき、そんな事を言っていたヤツが居たんだ……あっちの生臭い部屋に……（クスッ）もう何処にも居ないけどね」

リユカの冷たい笑いに、背筋が寒くなるアルル。

「で、では早く退散しましょう！何も今カンダタとやり合う必要は無いわ！」

アルルは慌てて、町へと戻ろうとする。

「な、何だこりゃ！？」

しかし遅かった様で、アルル達は血生臭い部屋でカンダタと鉢合わせをしてしまった！

アルルはグプタとタニアを庇う様に立ち、剣を構える！

「ん！？テメー等……その人質をどうするつもりだ！？」

人質二人を守るアルルに向け、カンダタは殺気を漲らせる。

「バカかお前は！？人質を救出しに来たヤツに向けて『どうするつもりだ！？』は無いだろ！どうするもこうするも、救出するんだよ、バカ！！」

必要以上にカンダタを挑発するリュカ。

「げっ！お前は…シャンパニーの塔の…」

リュカを見るなり、急に怯み出すカンダタ…

彼は盗賊ではあるが、武の道を歩んだ者としての実力も持っている。リュカを一目見た時から、自分との実力差を感じ取っており、シャンパニーの塔では全力で逃げに徹したのだ！

「テメー！ふざけてんじゃねえーよ！！」

しかし実力のない手下にはリュカの強さを知る術もなく、何時もの様に息巻くのだった。

「人質を返して欲しかったら、金持って来な！！それと、そのガキが俺の腕を切った慰謝料として、その3人の女を置いてきな！そっちでは金を取らねーよ！身体で払ってもらうからよー！！」

腕に不格好な包帯を巻いた男が、リュカの前で下品に笑いながら恫喝している。

「お、おいジエイブ…よせ…」

カンダタがジエイブと呼ばれるこの男を、止めようとした瞬間…

リュカが振るった杖により、ジエイブの頭が吹き飛び、大量の血液が低い天井へ噴き出した！

「ま、待て！待ってくれ…お、俺の降参だ！アンタと戦って勝てるとは思ってない！人質は返す…だ、だから…俺も、子分達も…助けてくれ！…頼む…！」

カンダタは慌てて武器を捨て、リュカに頭を下げて頼み込む。

「う…ん…この間、うっかり逃がしちゃったら、誘拐事件を起こしてるしなあ…お前等、死んだ方が良くない？」

優しい口調、優しい笑顔で近付くリュカ…

「ち、違っんだ！俺達、足を洗う為に最後の仕事として誘拐をしたんだ！」

「はあ？矛盾しない？」

「き、聞いてくれ！俺達の様な人間が、全うに生きるのは難しいん

だ！だが纏まった金があれば、悪事をせずに生きて行く方法が見つかるかもしれない！だから、最後に人を殺さないですむ、誘拐を起こしたんだ！その証拠に人質の女には、手を出してないだろ！食事だつて与えてたんだ！そりゃ大した物じゃ無いけど……」

「じゃあ何で、グプタが瀕死の状態だったんだよ！」
リュカがグプタを指差し、問いつめる。

「はあ？そんなヤツ知らねーよ！誰だよそいつ！？」

本気でキョトンとしているカンダタに、そつと手下の一人が耳打ちする。

「…親分…実は…ジエイブが……」

どうやらグプタの件は、カンダタが出かけている間に起きた様で、本当に知らなかった様だ！

真っ青になるカンダタ。

「ほ、本当に知らなかった！本当なんだ！！俺が居る時なら、そんなに酷い事はさせなかった！ジエイブは短気なんだ！本当だ！許してくれよ……！」

しかしリュカは、もう目の前で微笑んでいる。

カンダタだけではない、他の手下も恐怖で震えている。

「うゝん……………やっぱりダメ！死んだ方が世の為だよ」

「そ、そんな…お願いします！どうか命だけは……！どうか助けて下さい……！」

カンダタは顔を涙と鼻水でグシャグシャにし、リュカに縋る様に助命を乞う。

「お前等は、そんな風に命乞いをした人々を、何人殺してきたんだ？立場が変わっただけだろ…今更後悔するなよ！」

「そ、そんな……………」

そしてリュカがゆっくりと杖を振り上げた……………

罪

<バハラタ東の洞窟>

「お前等は、そんな風に命乞いをした人々を、何人殺してきたんだ？立場が変わったただけだろ…今更後悔するなよ！」

「そ、そんな……………」

そしてリュカがゆっくりと杖を振り上げた…その時！

「止めて下さいリュカさん！！」

アルルがリュカとカンダタの間に割り込んできた！

リュカだけではない、ウルフ達も…そしてカンダタ達までもが驚いている！

「アルル…どうして？」

リュカは何時もの様に優しく問いかける。

「歯向かう気の無い人を殺したら、彼等が行ってきた事と変わりますせん！先程の男みたいに、敵意や害意を見せてるのなら分かりますが、彼等にはそれがありません！」

「しかしそれは今だけだろ？此処から無事逃げ延びれば、また人々に災いを撒き散らすかもしれない…」

「でも足を洗うって…それを信じるのかい？」

リュカとアルルは互いに真剣な眼差しで見つめ合う！

「今回の誘拐は失敗した…纏まった金を手に入れられなかった…コイツ等は、また別の町で同じ事を繰り返すかもしれないだろ！」

「そ、そんな事しねー！もう悪さはしねーって！本当だよ！」

「た、確かに…彼等は無条件で信じる事は…私にも出来ません…」
言葉に力を無くすアルル…

「な…本当にしねーよ！信じてくれよお」

「でも私は、リュカさんに無駄な人殺しをしてほしくありません！」
それでも退かない！

リユカに人殺しをさせない為に！

「無駄じゃ無いよ。今後の為に意味はあるよ……」

「私にはありません！私から見たら、意味なんてありません！」

「じゃあ見るな！目を閉じて見なければいい！」

「そう言うわけにはいきません！私はリユカさんの瞳に灯る闇を、これ以上放置する事が出来ないんです！」

「……瞳に……闇……！？」

アルルの言葉にショックを受けたリユカは、自分の目を押さえ後ずさる……

「シャンパニーの塔でも、此処でもリユカさんの瞳に灯る闇が、私は怖いんです！だから……お願いだから、人を憎まないで下さい……罪と人は別です……」

暫くの間、誰も喋らなかった……

時間だけが静かに流れる……

そしてリユカが口を開く。

「じゃあ……そいつ等をどうすれば良い？アルルだって信用してないんだろ？」

「それは……」

答えに困るアルル……

しかし何かを思いついたカンダタが、少し興奮気味に話し出す！

「そうだ、俺はアンタ等に協力するよ！アンタ等が何を目的にしているのかは知らないが、世界中を旅してるんだろ！？だったら俺もついて行くよ！子分達には、世界中の情報を集めさせる！な！？それだったら、アンタ等も俺達の事を見張れて安心だろ！？」

「……それは良いアイデアですね！それなら貴男達も見張れるし、盗賊の情報網を利用できる！」

カンダタの提案にアルルが飛び跳ねてはしゃぐ。

「バラモス討伐の勇者一行に、世間を騒がせた大盗賊が居たら、何かと拙いだろ！？」

「そんな事ありません！世界を救う為に立ち上がった勇者に感化され、改心して協力する元盗賊って思わせます！」

「どうやって!?」

「そりゃリユカさんと仲良しの王様や女王様の力を使って、世界中に噂を流してもらいます。」

「協力してくれると思ってるのか？」

「はい、もちろん！少なくともイシスは………そうですね…取り敢えず女王様に直接会って、お願いと同時にリユカさんを1週間程預けます。その間私達は、のんびりと休暇です」

「ぐっ……………!!」

リユカが言葉に詰まっていると、嬉しそうにカンダタが喋り出す。

「アンタ等世界を救う旅に出てんのか!? だったら丁度良い！早速アンタ等の力になる事が出来るぜ！」

そう笑顔で言っていると、カンダタは懐から綺麗な緑の宝玉を取り出した。「これはなグリーンオーブって言って、価値の分らないヤツからしたら、ただの綺麗な宝玉だが、実はとてもねーお宝なんだ！」

「何だ？ そんなのを7個集めたら、ギヤルのパンティーでも貰えるのか？」

1人はしゃぐカンダタを見て、リユカが不機嫌に言い放つ。

「ギヤ、ギヤルのパンティー…何だそれ？ そうじゃねーんだ！ 確かに似た様な物を集めるんだが、数は6個！ 全てを集めて、『レイアムランドの祠』に奉ると、伝説の不死鳥『ラーミア』が復活するんだ！」

カンダタ1人が興奮する中、他は誰も感動していない…

「そんな鳥どうでもいいんだよ！ それともナニか？ その鳥を焼いて食えば、精力ビンビンか？ だとしたら不要だ！ 僕は何時でも何処でも主砲発射OKだ！」

「まあ聞けって！ アンタ等バラモスが何処に居るか知ってるのか？」
カンダタの問いにアルルが俯く。

「それを探しながら旅をしてるんだ！ 空気読めバカ！」

珍しく苛ついているリュカが、カンダタにきつく当たる。

「じゃあ教えてやるよ！バラモスは『ネクロゴンド』の奥地に居城を構えている！でも其処に辿り着くのは難しい！険しい山に囲まれているから船ではムリだし、城の周りを湖が囲ってあるから、徒歩でも不可能だ！」

「じゃ、じゃあもしかして……」

アルルが瞳を輝かせカンダタを見る。

「そうだ、お嬢ちゃん！ラーミアが居れば、上空からバラモス城へと突入できる！」

「キヤー！それ凄い！！ラーミアが居れば、バラモスを倒しに行けるのね！カンダタさん、それを私達にくれるんですか！？」

「あげるも何も、俺を仲間に入れてくれれば、このオーブは必然的にアンタ等の物だぜ！」

カンダタは巧みに自分を売り込んでいる。

アルルは気付いてはいるが、カンダタと一緒にするのはしゃいで見せる。

「リュカさん！カンダタさんのお陰で、私達は明確な道標を手に入れました！まずバハラタへお二人を帰したら、イシスへ行って女王様にお願いをします！その後ポルトガへ戻り、船を手に入れてオーブ探しの旅に出ます！良いですね！」

「ああと、その前にお嬢ちゃん『ダーマ神殿』に寄ってくれないか！？此処より北に行った所に、職業を司る『ダーマ神殿』があるんだが、俺は転職しようと思ってるんだ！」

「転職！？」

今まで黙って成り行きを見ていたハツキが急に反応した。

「ああ……そこで俺は盗賊から戦士に転職しようと思う。俺は見ての通り、力があるから打って付けたと思うんだ！それに噂を流してもらっても、盗賊のままじゃ改心を疑われちまうからな……」

「じゃあ……まずはバハラタ……次にダーマ神殿……そしてイシスにポルトガ……この順番で行きますからね！良いですねリュカさん！」

アルルは胸を張り、リュカに今後の予定を力強く指示する。

「……………その前に一つ聞きたい事が…」

「な、何ですか…？」

リュカの真面目で怖い表情に、アルルは少し怯んでしまう。

「聞きたいのはカンダタにだ…」

「な、何だ!？」

「そのグリーンオーブはどうやって手に入れた? 誰かを殺して奪った物ではないのか？」

リュカは低く重い声でカンダタに問いかける。

「ち、違う! これはネクロゴンドの南西にある『テドン』って村で手に入れたんだ…そこはバラモス城から近い為、大分前に滅ぼされたんだ! シャンパニーの塔でアンタ等から逃げた俺は、船でバハラタまで来たんだ! その途中でテドンに立ち寄り、白骨死体が抱き締めていたオーブを戴いたんだ!」

「死体から盗んだのか…!？」

リュカが顔を顰めてカンダタを睨む。

「ま、待ってくれ! 俺はこのオーブが凄いアイテムなのを知っていたんだ! 足を洗った後で何か役に立つかもと思ったんだ! それにアンタ等だって何れはオーブを探す事になるんだ…その時に死体が抱えていたからって諦めるのか? 1個でも揃わないと、ラーミアは復活しないんだぞ!？」

焦るカンダタは、自分の正当性を主張する。

「……………分かった…悪かったよ…そんなにムキになるな…」

リュカは渋々だが納得し、洞窟を出口に向けて歩き出す。

「ふう…良かったわねカンダタさん。これで私達は仲間よ! これからよろしくね」

アルルはカンダタに向け、手を差し出した。

カンダタはその手を握り、

「アンタが勇者でリーダーだろ!? 俺の事はカンダタでいい! 『さん』なんてくすぐったいから付けないでくれ…」

そう言い、力強く握手を交わした。

そして子分達も散り散りに世界中へ旅立つ…

一人一人の力は小さい為、単独行動になれば悪事など出来ない連中…
しかし情報収集力は侮れない！

アルル達には、ある意味力強い味方が付いた事になる…

処罰

<バハラタ周辺>

洞窟を出ると、既に辺りは夜に覆われており、グプタとタニアを連れて町まで歩く事はムリとの結論に達したので、聖なる川付近の森で野営する事になった。

本来ならばリュカが野営の準備を率先して行うのだが、洞窟内で大量の返り血を浴びた為、アルルが「今日は私達が野営の準備をしますから、リュカさんは先に川で水浴びをしてきて下さい」との薦めに促され、一人水浴びをしている。

グプタとタニアはこれまでの疲れからか、二人身を寄せ木にもたれ座りウトウト船を漕いでいる。

その為野営の準備は、新たに仲間に加わったカンダタとアルル達が和気藹々行っている。

「しかしアンタ等…変なバランスのパーティーだよな！」

アルル達若者4人を見つめカンダタが不思議そうに呟いた。

「何や、その失礼な口調は!？」

「すまんすまん…ただリュカの旦那が居なく、アンタ等4人だけのパーティーだったら、俺はロマリア地方で盗賊稼業を続けて居たと思ってな…」

「それは俺達だけだったら弱くて、カンダタ盗賊団には勝てなかったと言いたいのか!？」

少し不機嫌な口調でウルフが問い返す。

「今のお前等なら分からねえーが、シャンパニーの塔で出会った時のお前等だったら、絶対に負ける事は無かったと言い切るぜ！」

リュカが居ないと、未だにダンジョン探索に恐怖するアルル達には反論が出来ないでいる。

「お前等を卑下する訳では無いんだが、お前等4人だけのパーティー構成なら、バランスが良いんだ。ただし、低レベルでのバランスだがな！……あの人はお前等みたいな低レベルのパーティーに、居るべき人じゃないと思う！何なんだ、あの人は？」

カンダタの言い分は当然で、疑問も当然である。

アルル達はカンダタに、リュカの事を大まかに説明した。

・

「……はあ……そんな凄い人生を送っている人なのか……」

「今の話はリュカさんから聞いた話で、ほんの一部だと思うわ。私達だってリュカさんの全てを知っている訳では無いのよ……」

カンダタの感嘆の溜息に、アルルが補足する。

「だが、これであの人がアンタ等と連んでいる理由が分かった！あの人にしたら、別にアンタ等じゃなくても、世界を旅するヤツだったら誰でも良かったんだな！お前等と組んだのは、偶然だったんだ……運が良いな、お前等！」

「そうね……運は良いわね……リュカさんが居なかったら、アリアハンで死んでいたでしょうからね……私達は……」

アルルの自虐的な言葉に黙り込むウルフ達……

「あれえー？どうしたのみんな黙り込んで……？ウルフのギャグが滑ったの？ダメだよウルフ！君は突っ込み要員なんだから……」
水浴びを終えたリュカが、明るい口調で戻ってくる。

「違うよー！！ギャグを言っていないし、滑ってもない！大体何だよ突っ込み要員って！リュカさんがボケるから突っ込んでんじやうんだろ！真面目にしてくれれば、俺だって突っ込まないよ！」

リュカの軽口に思わず突っ込むウルフ……

「ほら！完璧な突っ込みじゃん！」

「なっ……！！！」

言葉を失うウルフ…それを見て、アルルが腹を抱えて笑い出す。そして、それに釣られてハツキ・エコナ・カンダタも笑い出す。むくれていたウルフでさえ笑い出し、みんなの笑い声でグプタとタニアが目覚ましてしまった。

二人が起きた所で丁度食事となり、その日の夜は更けて行く…

<バハラタ>

「お祖父ちゃん!!」

昼にはバハラタに帰ってきたアルル達は、脇目も触れず黒胡椒屋へ入って行く。

そして中にいたターゲル老人へ泣きながら抱き付くタニア!

「おお…タニア!良かった…無事で本当に良かった!!」

「ターゲルさん…ご心配をお掛けしました…」

「おお、グプタも…お前達が無事で本当に良かった!!」

ターゲルとタニアとグプタ3人が、抱き合い・泣き合い・喜び合っている。

暫く喜びを噛みしめるとアルル達に向き直り、深々と頭を下げた礼を述べる。

「勇者様…誠にありがとうございます!貴女様のお陰で、私は2人を失わずに済みました。感謝に絶えません!」

「じいさん…まだ感謝には早い………もう一つ、やる事が残っている…」

何度も頭を下げるターゲルに、リユカが真面目な口調で感謝を遮る。

「ハツキ…ナイフを貸して…」

リユカはハツキから聖なるナイフを借りると、カンダタの首根っこを掴み力ずくでターゲルの前に跪かせる!

「ちょ、何だ「うるさい!お前は黙れ!」

カンダタの抗議の声を遮り、ターゲルにナイフを渡す。

「じいさん、この男が今回の誘拐事件の首謀者だ。コイツの言い分を信じれば、今回の誘拐で、孫娘に危害を加える事はしなかった様だが、誘拐した事実は変わらない。勇者アルルは、この男が改心したと思っており、今後の旅の仲間に加えるつもりだが…」

突然のリユカの行動に、誰もが声を出せないで居る。

「じいさん…アンタ等家族を苦しめた男は、今後も生き続ける…しかしアンタには罰を与える権利がある！その権利を行使するチャンスは今だけだ！アンタの心に悲しみを与えた男を罰したいのなら、そのナイフで喉を切り裂け…」

ターゲルの顔から血の気が引く…

リユカが冗談を言っている訳でないのが分かるから…

皆も息をするのを忘れ、固唾をのむ。

少しの間だが、沈黙が世界を支配した…

そしてターゲルが口を開く…

「お若いの…私には彼を罰する事は出来ないし、そんな覚悟もありません…タニアとグプタが無事に戻って来ただけで、悲しみも憎しみも消え去りました…彼への処罰は勇者様に委ねます…」

ターゲルは優しい顔で微笑むと、ナイフをハツキに手渡し、アルル達全員に頭を下げる。

「…良かったなカンダタ…ターゲルさんが優しい人で…命拾いしたな！」

カンダタの首根っこを掴んでいた手を離し、冷たい瞳で呟くリユカ…。

そして皆が一斉に息を吐き、安堵に包まれた！
カンダタだけは脂汗をかいているが…

「勇者様…これをお持ち下さい」

和やかな雰囲気になった時、ターゲルがアルルに大きめの袋を手渡した。

「お約束の黒胡椒です。もし足りないのであれば何時でもお越し下さい！今後一生、貴女様からは代金は取りませんので…」
「ありがとうターゲットルさん」

黒胡椒を受け取ったアルル達は、黒胡椒屋を後にする…

そして宿屋へと向かう中、ウルフがリュカに確認の為尋ねてみる…

「なあリュカさん…本当はターゲットルさんがカンダタを殺す事はないと思ったから、あんな事をしたんだよね!？」

完全に単なる確認だ…ウルフはそう信じてる。

「……………いや、きつと殺すと思ったんだけどねえ…予想が外れた。残念だったなあ」

何時もの軽い口調で嘯くリュカ。

多分嘘だ…ウルフの思いが正解であろう…

きつとそうに違う…はず…と思う…

処罰（後書き）

明日は映画を観に行く為更新できません。
なので、頑張って本日書き上げました。

ダーマ

<バハラタ>

取り敢えず宿を確保したアルル達は、荷物を置き町へ繰り出した。この町に来て直ぐに黒胡椒を探し、直後に誘拐騒ぎに巻き込まれた為、装備品等を買ひ揃えていないのだ。携行食などの必需品を買ひ、一行は武器と防具屋へと向かう。

アルル達6人が、さして広くない店内を物色するが、目新しい物は見つからない…

「この町は黒胡椒以外、碌な物が無いな！」

皆が思つた事だが、あえて口に出さなかつた事をリュカが大声で言う！

「おい、にいちゃん！聞き捨てならねーな！！この町は黒胡椒だけで成り立っている訳じゃねーぞ！」

店主の男が乱暴な口調でリュカに言い返す。

「へー………何処が？」

「ふん！店先に置いてないだけで、1点物のすげえアイテムだってあるんだよ！」

リュカの態度に憤慨する店主…どうやら本日の被害者は彼の様だ。

「へー………そんな物、何処にあんだよ！？」

「おう！見せてやろうじゃねえーか！見て驚くなよ！！」

「うん、分かつた。驚かないよ。早くして！」

「くっそっ！待ってる！！」

額に血管を浮き上がらせた店主が戻つて来たのは、3分程経つてからだ…

店主の手には少し小さめの盾が一つ…

「見ろ！これが当店で1つしかない盾『魔法の盾』だ！世界でもそれ程出回ってはいないアイテムなんだぞ！」

「こんな小さい盾が役に立つのかよ……」

「ふん！何も知らないからそんな事言うんだ！この盾を装備しておけば、敵から受ける魔法のダメージを軽減する事が出来るんだ！」

「へー…避けた方が早くね？」

「分かってねえーなー！前衛で戦う戦士系のヤツには、避ける事は簡単だろうが、後衛の魔法使い系には、敵の攻撃や魔法を避けるのは難しいんだ！」

「え！？つまり、その盾は魔法使いでも、装備できるって事！？」

店主の自慢に近い商品説明を聞き、ウルフが瞳を輝かせ食いついた。
「あたぼうよ！魔法使いが装備できるからこそ、『魔法の盾』なんて名が付いてるんだ！」

「お、おじさん！その盾は幾らですか！？」

「うーん…本当は5000ゴールドくらいはするんだが…お前さんみたいな、若くて将来有望な魔法使いに使ってもらいたいから、3000ゴールドで売ってやるよ！」

「じゃ、じゃあそのた「高い！いらん！！」

購入希望のウルフの言葉を遮り、リュカが勝手に拒絶する！

「ちよ、リュカさん！勝手に…」

「うるさい！ウルフは黙ってる！！」

「おい、にいちゃん！5000が3000になるのに高いわけないだろ！」

「5000が3000になるのが高いんじゃないやなくて、その盾に3000もの価値が無いから高いんだ！考えてみる…後衛の魔法使いが攻撃を受ける様なパーティーではダメだ！前衛が全力で後衛を守る様に戦うのが、正しいパーティー戦闘だ！」

「うぐっ…た、確かにその通りだろうが…しかし、万が一という事もあるだろ！？保険の為に防衛力の低い魔法使いの為に…」

先程まで無礼な物言いだったリュカに正論で攻撃され、弱気になる

店主…

「保険の為如きに3000ゴールドも出せるか！その3000で前衛を強化し、保険の必要を絶った方がよっぽどマシだ！」

リュカの正論に完璧に打ち負かされ俯く店主…

「……とは言え…確かに魔法使いを強化する事には意味があるなあでも3000はなあ……」

リュカの呟く様な言葉を聞き、瞳を輝かせ顔を上げる店主。

「だ、だろ！？じゃ、じゃあ…2500ゴールドならどうだ！？」

「1000ゴールドだよ……」

「おい…無茶言つなよ…じゃあ2300ゴールドなら……」

「うゝん……奮発しても1700ゴールドだな……」

「くう……で、では…2000だ！！これ以上はムリだ！」

「うん！2000ゴールドで買うよ」

結局ほぼ原価で売る事となった店主…

まあアツサラムの友達商人よりかはマシだろう…

「相変わらずの値切りやね……」

ガツクリと落ち込む店主を無視し、宿屋へ戻る道すがらエコナがリュカに、尊敬と呆れをブレンドした感情を吐き付ける。

「だつてさ…5000ゴールドがいきなり4割引だよ！絶対ボッタクロうとしてたんだよ！」

「旦那は俺等盗賊の天敵だけではなく、商人の天敵でもあったんツスねえ……」

「俺としては、リュカさんの天敵を知りたいですね！居るかどうかも不明ですが……」

カンダタとウルフの言葉に皆が頷く。

「そりゃ居るよぉ…僕にだつて……」

「本当ですかぁ？」

「アイシスって女なんだけどね……」

「え！？女なんですか！？あり得ないですか！？」

「…何だかアルルの台詞には、若干失礼な成分が含まれている様に感じるのだが…？」
そしてアルル達は、そのまま宿屋の食堂へと入り、和気藹々と雑談をしながら夕食にありついた…
カンダタとの仲は、随分と良好の様だ！

<ダーマ神殿>

アルル達一行は新たな戦力を得て、戦闘が楽になった様で、ダーマ神殿までは1日で辿り着く事が出来た。
とは言え既に夜の帳が付近を覆い、刻一刻と静寂が勢力を広げている。

「此処が職業を司るダーマ神殿ですね！…でもさすがに夜は転職出来ないみたいですね…残念！」

ハツキが悔しそうに呟く中、リュカがソワソワと周囲を見回している。

「リュカさん…どうしたんですか？」

「うん。何だかすごい美人が居る匂いがするんだ！何処だろう！？」

アルルの質問に周囲を見渡しながら答えるリュカ…本人は至って真面目である！

「…はあ…そうですね…じゃあ、頑張つて下さいね…今晚も私達は宿屋で一休みしますから…」

「そうか、宿屋か…！」

アルルが神殿2階の宿屋へ向かおうとすると、美女が居る事を疑わないリュカが、其処だとばかりに宿屋へと歩き出した！

「なあ…何か特別な匂いがするか？」

「いやあ…俺も盗賊として生きてきたから、鼻は効くんだが…」

リュカの言い分が気になるアルル達は、リュカの後を追う様について行く…

神殿2階…宿屋のロビーエントランスに着くと、其処には後ろ姿ながら美しさを醸し出すブロード女性が佇んでいる…

「お嬢さん！！今晚僕と相部屋などは如何ですか！？出来れば相ベツトも！」

早速口説きにかかるリュカ…

そのリュカの声に反応し振り向く女性…

振り向いた女性の正面姿を見たアルル達の反応は、皆同じだった。

男性2人はヨダレを垂らす程見とれ、女性3人は嫉妬できない程見とれている。

「…ほ、本当に…すごい美人…」

アルルの台詞に誰もが頷く…

しかしリュカの反応は少し…いや、かなり違っていた。

何時もなら、ナンパの手（口？）を休めず口説き続けるのだが、美女の顔を見た途端固まり、驚いてるではないか！

そしてリュカが、絞り出す様に発した台詞は…

「な……………何で…此処に居るの……………」

である！

別世界より？（前書き）

お久しぶりのグランバニア！

突如異世界へ現れた『星降る腕輪』の謎が今此処に！

別世界より？

<グランバニア>

此処グランバニア王執務室では、マーサが大量の文献に埋もれながら異世界へ飛ばされたリュカ王を救出するべく、日夜研究に没頭していた。

ティミーがマーサをグランバニアへ連れてきてから、既に数週間が経過している…

しかし一向に状況を進展させる事が出来ず、トイレと数日置きの風呂以外は、この部屋から出る事さえしていない…

見かねたティミーが思わず声をかける…

「マーサ様……どうかご無理をなさらないで下さい。焦る必要はございません。過去にこの国の国王不在が続いた年月を思えば、慌てる必要など何処にも無いのです…」

ティミーとしては国内の情勢に不安が無いわけでは無い事も理解しているのだが、マーサの体調の方が心配になってしまっただ…

「そうですよ、お義母様…物語を読む限り、リュカは無事の様ですし…」

「ティミー…ピアンカさん…ありがとう。……でもね…物語を読むと、一刻も早くこちらの世界へ戻さねば…と思ってしまうのよ！」

執務室に居る皆が例の本に視線を向ける。

今、執務室に居る人物は、マーサ・ピアンカ・ティミー・ポピー・マリィの5人である。

その誰もが不安気な表情で例の本を見つめている…

「……あの子…あの本の中で、好き放題やってるじゃない…私の息子があちらの世界に迷惑をかけていると思うと、ゆっくりなんて出

来ませんよ……！」

マーサ以外の4人が呆れ驚きマーサを見つめる。

「ああ……そう言う意味ですか……父さんの事が心配って事じゃなく……

ああ……そう言う……」

ティミーが脱力気味にマーサの言葉に反応する……

「ちよつと、誤解しないでよティミー！私だってリユカの事は心配です。でも、それ以上に向こうの世界の女性達が心配なんです！」

「うふふふ……父さんの事だから、私達に弟妹が増えてるかもよ……」

「ポピー……冗談でも止めてくれ！その可能性は非常に高いんだから……」

必要以上に楽しそうに危険性を語るポピー……

そして辟易するティミー……

「まあ！？じゃあ私に弟か妹が出来るんですね！！とても楽しみです……」

瞳を輝かせ胸の前で両手を握り嬉しそうにするマリ……

「はあ……居たら居たで面倒事を起こすのに、居なくなるともっと厄介な男よね……何で私は惚れちゃったんだろ……？」

左手で頭を押さえ手近な椅子に座るビアンカ……

「お母さん……いつその事、この機会にお父さんと別れちゃえば！お母さんの美貌なら、3人の子持ちバツイチでも引く手数多だと思うわよ」

「リユカ以外の男に、全く興味を持ってないから困ってるんじゃないの！貴女だってコリンズ君以外の男性なんて眼中に無いでしょう！？」

「そんな事無いわよ……お父さんに口説かれたら、喜んで股を開くわよ」

ポピーの台詞に言葉を失い呆れるビアンカ……

「この馬鹿女！マリィの前で下品な話をするな！」

マリィを抱き上げポピーを睨むティミー……

「……ともかく……一息入れましょう！お義母さま、お茶でも飲ん

でリフレッシュした方が良いでしょう」

「ふう…そうですね…少し息抜きしまようか…」

マーサ達は執務室を片付け、メイドが用意してくれた紅茶とクッキーを食しながら、雑談に花を咲かせている。

其処へ『メツサーラ』のサーラ入って来て、マーサに何かを目で伝えている。

「私にお客様ですか？」

断っておくが、サーラは一言も発していない。

それなのにマーサとサーラは会話が成り立っている。

リユカとの間でもそうだった…

そして会話は続いている…

「まあ…リユリユが来たのですか！？一人で？」

「え、リユリユが！？」

急にソワソワするティミー。

「……………」

「そう！？どうやって来たのかしら？まあいいわ…お通しして下さい」

小さく頷くサーラ…そして一旦退室する。

現在この部屋を管理しているのはマーサだ。

マーサの許可があれば、誰でも入室できるし、許可が無ければ誰一人入る事は出来ない。

従ってマーサに用がある者は、警備のモンスターを介しマーサに許可をもらう必要がある。だがサーラは、何一つ喋っていないのだが…

「マーサお祖母様、お邪魔します。…何か大変事になってる様ですね…」

「ふふふ…いらっしやいリユリユ。本当、貴女のお父さんは厄介事を巻き起こすわね」

不必要に落ち着きが無くなったティミーを無視して、マーサはリユ

リュと会話を続ける。

「いったいどうやって此処まで来たのですか？…確かルラフェンという町に、特殊な魔法を憶えに行っていたと思ったのですが？」

「はい、ルラフェンで新たな魔法を憶えました。そしてサンタローズに帰ったら、サンチョさんがこの状況を教えてくれたんです…それなので早速、新たな魔法を使ってグランバニアまで来たんです！」

「え！？その魔法って…もしかしてルーラ！？」

ポピーが驚いた様にリュリュに詰め寄る。

「はい！私、ルーラを憶えました！！これで何時でもグランバニアに遊びに来れます！」

「私は生まれつきルーラ適正があつたから自然と憶える事が出来たけど、普通の人は適正なんて無いから、凄い大変な思いをしないとルーラって憶えられないのよね！…前にお父さんから聞いた事があるわ！どんな事をしたの？」

「うん！お父さんが言ってたわ…『ものつそい大変だよ』って…本当に大変だった！もう2度とあんな思いはしたくない！思い出したく無いから聞かないで…」

リュリュは口元を押さえ、顔を顰める。

「でも凄いな…ルーラを憶えるなんて！さすがリュリュだね！」

リュリュを前にすると、最近頓に浮つく様になったティミー…重傷でだな。

「でもね…お父さんやポピーちゃんのように、大勢を移動させる事は出来ないの…効果があるのは私一人にだけなの…才能無いのかなあ

…」

悲しそうに俯くリュリュ…

「そ、そんな事無いよ！リュリュは凄いよ！才能もあるし、努力するから凄いと思うよ！以前マーリンから聞いたんだ…ルーラは本来、使用者しか移転できない魔法だって！つまり、大勢を移転させる奴の方が異常なんだよ！リュリュは正常なんだよ！だから凄いんだよ！」

ティミーは必死にリユリユを慰める。

「ちよつと！その異常な奴つて、アンタの父と双子の妹なんだけど！」

「ほら、異常だ！」

ポピーの憤慨を見向きもせず、リユリユの両手を握り慰めるティミー……そんなお前は正常なのかと聞きたくなる。

「あ、ありがとう……ティミー君……」

さすがのリユリユも引き気味だ。

「それでね、マーサお祖母様！実はもう一つ古代の魔法を教わつて来たの……上手くすれば、その魔法が今回の事件で役に立つかも！」

「本当ですかリユリユ！？そ、それは何という魔法ですか！？」

思いがけない所から状況打開の切っ掛けになるかもしれない事が……

「はい。その魔法は『パ・ル・プ・ン・テ』と言います！魔法を教えてくれたベネットさんが言うには、『何が起こるか分からない魔法』と言っていました……そして『太古の文献には、異世界から恐ろしい物呼び寄せる事もあったらしい』とも言っていました！これって上手くすれば、お父さん呼び戻せるかもしれないですよね！？」

「それは本当ですか！？では早速試してみしよう！仮にあの子を呼び戻せなくても、異世界への干渉を起こす事が出来るのなら、今後魔法を改造する事で、状況を打破できるかもしれません！」

早速マーサは準備を始める！

国王の執務机に例の本を開いて置き準備を整える。

周囲にはマーサ他、ティミー達も事の次第を見つめている。

そして例の本を挟む形でマーサの正面に立つリユリユ。

皆が緊張した面持ちで見つめる中、リユリユが魔法を唱えた！

「パルプンテ」

「……何も起きませんね？」

数秒の沈黙が続き、マーサが言葉を発した瞬間！

例の本の上に黒い穴が広がり、近くにあった書類などを吸い込みました！

「あ！星降る腕輪が！！」

書類の上にペーパーウェイトとして置いてあった星降る腕輪が吸い込まれそうになり、思わずティミーが手を伸ばす！

しかし時既に遅く、星降る腕輪は穴の中へ…

しかも不用意に近付いた為、ティミーまでもが吸い込まれそうになっている！

「ちょ、ティミー！！」

「お兄様ー！！」

ティミーの近くに居たビアンカとマリーが、慌てて手を差し伸べた！ティミーは辛うじて2人の手を掴む事が出来たのだが、それはむしろ最悪の行動でしか無かった！

そう、ティミーは吸い込まれ、手を掴んだビアンカとマリーまでも巻き込んでしまったのだ！

穴は書類を数枚、星降る腕輪を1個、そして3人を吸い込んだ所で急速に消え去った！

後に残されたのは、途方に暮れるマーサ達…

この先どうすれば良いのやら…

別世界より？（後書き）

こんな所でパルプンテ登場！
困った時にはパルプンテ！
ご都合主義とは呼ばないで！

愛しい女（ひと）

<ダーマ神殿>

「な……………何で…此処に居るの……………？」

「リュカー！」

リュカの驚きの声に、美女は笑顔で抱き付きリュカの名を叫ぶ！そして徐に唇を重ね濃厚で濃密なキスをした。

「母さん、どうかしまし……………うわっ！！」

あまりの出来事に驚き固まるアルル達の後ろから、16・17歳の金髪の美少年と6・7歳の黒髪の美少女が現れ、現状を見て絶句する！

「…ぷはっ…ティ、ティミー…それにマリーまで…どうして此処にいるの！？…っん！」

リュカは何とか美女の強烈なキスから口を離し、美少年と美少女に疑問を投げかけたのだが、再び美女にキスで口を塞がれ、それ以上喋る事が出来ないでいる！

「まあ素敵！お父様とお母様がラブラブですわ！」

「ちよつと母さん！こんな公衆の面前で…それに父さんに状況を説明しなきゃならないんですから…」

美少女はキラキラした瞳で二人に見とれ、美少年は辟易した表情で二人を引き離す。

「え？なに！？ピアノカ…どういう事？…ちよ…ティミー…説明してよ！…あれ？マリー…？何で君まで居ちゃうの？」

珍しく混乱気味のリュカとアルル達を、ティミー達が使用している部屋へ誘い、現状の説明を始める。

「…父さん…落ち着いて聞いて下さい…父さんは本に吸い込まれ、

物語の中に居るのです！」

「あゝ！？何言ってるの？大丈夫、お前…？」

「父さん…憶えてないんですか？本に吸い込まれた事を…」

「それは憶えてるよ！落書きしたら本のヤツが怒って、僕をこの世界に放り出したんだ！」

「そうです…そして父さんが行ってきたこれまでの冒険は、物語としてあの本の白紙のページを埋めているのです！」

ティミーは重い口調で、これまでの状況説明をリユカにする。

「へー…じゃあ、この物語の結末は？」

「…いえ、まだ物語は途中で…」

ティミーとは対照的に軽い口調のリユカ…

「相変わらず頭が固いな、お前は！だから何時まで経っても右手が恋人なんだよ！」

「（イラッ）父さんこそ相変わらずですね！」

「いいかいティミー…此処は物語の世界ではない！僕等の住んでいた世界とは別ではあるが、此処も現実世界なんだよ。あの本に書き綴られているのは、いわば伝記の様なモノだ…しかも現在進行形で綴られる…」

「た、確かにそうですが…表現の違いでしょう！状況は変わりませんよ！」

「違うね！物語だったら、基本ハッピーエンドになるだろうが、現在進行形の伝記は何が起るか分からないんだ！この先、死ぬ事だってあるかもしれない…スタンスが変わるんだよ！」

「くっ…で、では…尚のことこの世界から抜け出さないと！」

「うん。そうだね…で、君達はどうして此処に来ちゃったの？」

やっとこの世界へ飛ばされた経緯を話し始めるティミー…

・
・
・

「…………と、言うわけで僕が吸い込まれ、助けようと手を差し伸べ

てくれた二人と共に、この世界へと放り出されました…」

「な！！こ、この馬鹿野郎！！」

（ドカツ！！）

急にリュカは激怒し、ティミーを拳で殴りつけた！

「お前、助かりたい一心でビアンカを巻き込んだのか！？よりによつてビアンカを！！」

「リュカ！許してあげて…ティミーは悪くないの！私が手を掴んだからいけないの…」

「お父様ー！お兄様を叱らないで下さい！不幸な事故なんですう！リュカに殴られ、口から血を流すティミーを庇う様に、ビアンカとマリーがリュカに抱き付く！

「お前にとってビアンカは只の母親なんだろうが、俺にとっては命より大切な存在なんだ！…それなのにこんな危険な世界に連れてきやがって！手を捕まれたとしても、振り払うぐらいしろよ！」

「…も、申し訳ありません…父さん…」

口の血を手で拭い、項垂れるティミー…

体を震わせて怒るリュカに、アルル達は声を出す事が出来ない。

そんな状況を打破してくれたのは最年少の少女だった！

「酷いですわ、お父様ー！お母様の事は心配するのに、私がこの世界へ来てしまった事では怒らないんですのね！」

頬を膨らませリュカを睨むマリー。

「あ、いや…違うって…マリーの事でも怒ってるよお…」

「でも私の名前は出ませんでしたわ！」

「いや…それは咄嗟だったから…」

「お兄様も咄嗟の事でお母様と私の手を掴んでしまったんですわ…」

お父様と同じです！もう許してあげて下さい」

さすがのリュカも反論できなくなる…

リュカは目を瞑り深く深呼吸をする。

そして目を開けティミーに近付き、切れた唇に手を当て『ホイミ』を唱えた。

「あ、ありがとうございます…でも、これくらいでしたら自分で治せますから…」

「僕が付けた傷だ…僕が治さないとね…………娘に嫌われたくないし…」

「どうやら家族間の傷も治った様だ。」

「さて…ビアンカがこっちの世界に来ちゃったという事は…アルル、悪いんだけど…僕はこれ以上旅を続ける理由が無くなっちゃた…」

「はあ…！？い、いったい何を言ってるんですか？旅をしながら元の世界へ戻る手立てを探すんでしょう！？」

リユカの信じられない言葉に、みんなが驚き睨む！

「うん。僕が元の世界へ帰れたかった理由はビアンカなんだよね。」

大好きなビアンカが、向こうの世界に居るから帰れたかったんだけど…！ここに来ちゃったからねえ…！帰る理由が無くなっちゃった！もう王様なんかやりたくないし…！ビアンカとこっちの世界で、イチヤイチヤ平和に暮らすのもありじゃね？」

「ありじゃありません！仕事はどうするんですか！？現在、国は大変な事になってるんですよ！」

「じゃティミーがアルル達に付いて行つて、元の世界に帰ればいいじゃんか！ついでに王位を継いでよ！そうすれば僕が帰らなければならぬ理由も無くなるし！うん。そうしよう！…頑張つて、ティミー国王陛下？」

「いい加減にして下さい、リユカ国王陛下！グランバニアの国民は、貴方の情けない息子の事より、貴方自身を望んでいるんですよ…！たった数年で国力を倍にした貴方を…」

「ちょ…！ちよつと待ってよ！え！？何？国王…陛下？リユカさんが…？嘘…マジ…！？」

リユカ親子の会話に割り込み、ウルフが話を脱線させる。

「前に言っただじゃん…王様してた事…忘れちゃった？」

「た、確かに…言ってた…け、けどさ！」

「ウルフ君！悪いんだけど、後にしてくれないかな…確かに父さんは、いい加減で、チャランポランで、不真面目で、女誑しで、トラブルメーカーだけど…これでも立派な国王なんだ！嘘みただけで、国民の支持が極めて高いんだ！だから説得の邪魔をしないでくれ」

「ご、ごめんなさい…」

「いや、謝る事はないよ。…それに君達にも死活問題なのでは？…確かに父さんはトラブルを引き寄せるし、戦わず歌を歌い傍迷惑だけど、危険な旅路では生存率を上げる効果もあると思うんだ！」

「わあ…息子の言葉から、父への尊敬の欠片も見つけられない…」

「何を今更…大分前からでしょ」

「ええええ！マジッスかビアンカさん！気付かなかったなあ…」

アルルはイチャ付く夫婦に詰め寄り説得をする。

「リュカさん！元の世界に帰らないのは構いませんけど、この世界を平和にする旅には来て下さい！まだ私はリュカさんから学びきってません！」

「え…危険な事は嫌いなんですけど…」

「何だよ！リュカさんどうせ戦闘しないんだからいいじゃんか！」

「どうせ戦闘しないんだから、行かなくてもいいじゃんか！」

「…くっ！」「…」

ティミー・アルル・ウルフが説得するも、揺らがないリュカ。

そしてビアンカが、マリィにそつと目配せをする…

「お父様…お父様とお母様が帰らないのなら、私もこの世界に残ります！…でもアレですよ…この世界ってどこかしこも治安が不安定で、私みたいな幼い少女は攫われちゃうかもしれませんよね…攫われちゃったら、あーんな事や、こーんな事をされちゃうかも…平和な世界かあ…まあ私はお父様とお母様が居れば幸せですけどね！」

「マリィを出しに使うなんて…ズルイよ！」

「ふふふ…ごめんなさいリユカ。でも、勇者様が2人も居る旅なのだから、そんなに危険じゃ無いわよ…それにアルルちゃん達も強くなってるじゃない」

「……………僕等の勇者様の装備が情けないんだけど…コイツ、グランバニアの剣しか装備してないよ!」

「仕方ないじゃないですか!僕はグランバニアの兵士なんだから!それにこの剣はザイル君が作ってくれた特注品ですよ!」

憤慨するティミーを見てビアンカも援護に回る。

「そうよりユカ!ティミーはもう一人前なんだから…装備は関係ないわ!…それに私は帰りたいわ…お父さんが向こうの世界に居るのだから…」

ビアンカの一言が決め手だったのだろう…と言うか、最初からビアンカが説得していれば早かったのに…

「分かったよ!ビアンカにお願いされたら、断るわけにはいかないじゃんか!」

辛うじてリユカの随行が決まり、安堵する面々…

そして、やっと互いの自己紹介が始まった…

飛ばされてから…

<ダーマ神殿>

「さて…みんな自己紹介も終わったし、まだティミーには聞きたい事があるのだが…」

「何ですか？」

自己紹介も終わり和気藹々と雑談を始めた所で、リュカがハツキを引き寄せティミーに質問をする。

「これ！『星降る腕輪』は、僕の机にあった物だよね！？ティミー達が本に吸い込まれた時に、一緒に吸い込まれたんだよね？」

ハツキの腕に装備された『星降る腕輪』を指差しながら、リュカがティミー達に腕輪の経緯を訪ねる。

「はい。穴が空いた瞬間、一番最初に吸い込まれましたから…それがどうかしましたか？」

「…と言う事は、ティミー達はこの世界へ数日前には来ていたんだよね？今まで何してたの？………は！まさか…僕の愛しの奥さんに手を出しちゃったりした？」

「………命が惜しいのでそう言う事は致しません！父さんと一緒にしないで下さい！」

ティミーはリュカの言葉に疲れ切った表情で返答する。

「じゃあまさか、妹フェチエだか「怒りますよ！」」

自分の事をからかう父に激怒するティミー。

「今まで怒って無かったのかよ………じゃあ何してたのさ！？嫁さん捜しか？」

「父さんを探してたんですよ…何処にいるのか分からないし、此処が何処なのかも分からなかったですからね！」

こんな状況で嫁さんを捜せるのはリュカぐらいであろう…

「何だ！？モンスター蔓延る危険地帯を、3人で当てもなく彷徨っ

てたのか!？」

「いえ…さすがにそれは…母さんだけならともかく、マリーを連れて危険な場所へは赴けませんから…母さんとマリーは此処で待機してもらってました。父さんが現れるかもしれないから…」
ティミーはこの世界に来てからの数日間を語り出す。

吸い込まれる際に足掻いた為か、星降る腕輪とはかなりズレた場所に…つまり此処ダーマ神殿の裏手に落ちた事…

この場所がダーマ神殿であるのは理解したが、リュカ達が何処に居るのか…どちらの方角に居るのかさえ分からなかったので、此処ダーマ神殿を拠点にした事…

戦闘の出来ないマリーを連れ回す訳にはいかない為、ピアン力を残しティミーだけで付近を探索した事…

ダーマ神殿より少し北に行った所にある『ガルナの塔』を探索した事…

ティミーはそれらをゆっくり丁寧に、リュカの横やりに突っ込みを入れながら、みんなに説明していった。

「はい、質問です!」

「何でしょうかアルル」

「ティミーさんは何故『ガルナの塔』へ行ったのですか?」

「それはですね…父さんが居るかも…と思ったからです」

「ぷふー!!相変わらず無駄が多いなあ…」

リュカが小馬鹿にした様に笑い、ティミーを指差す。

《ム力つく!1発殴ってやりたいが、絶対当たらないから尚ム力つく!》

「た、大変でしたね…でも凄いです!お一人で探索するなんて!」

「何か収穫はあったのか?可愛い嫁さん見つけたとか…」

「ぐっ…ざ、残念ながら嫁さんは見つけれませんでした!…その代わり『悟りの書』なる物を手に入れました」

「ほう！すげーなあ、にいちやん！そりゃ、かなりの価値があるアイテムだぜ！」

リユカファミリーから醸し出される強者のオーラに当てられて、大人しくしていたカンダタだったが、珍しいアイテムを見せられた為、思わず身を乗り出しリユカ達の会話に割り込んでしまった。

「カンダタ、お前これが何なのか知ってるのか？悟りを開く為の書物だから…エロ本か？」

「何でだ！！何で悟りを開くのにエロ本なんだ！」

「ふわあ…さすがティミーさん…長年リユカさんの突っ込みをしてきただけはある…俺なんか足下にも及ばない…」

「ウ、ウルフ君…そう言う感心の仕方は止めてくれ…」

半泣きのティミー、憧れの眼差しのウルフ。

「だ、旦那…エロ本で悟りを開けるのは、旦那くらいなもんですぜ

……その本を読み、理解し、悟りを開いた者は、このダーマ神殿で『賢者』に転職出来るんですぜ！」

「何だ『賢者』って!？」

「リユカさん…『賢者』ってのは、『僧侶』と『魔法使い』の両方の魔法を憶える事が出来る、魔法のスペシャリストの事なんだ！…な、なあ…是非、俺に使わせてくれないか…」

ウルフがリユカ達に『悟りの書』を説明し、そして媚びる様に懇願する。

「…僕に言うなよ…僕はそんな事どうでもいいんだから…アルル達に聞いてよ！」

何時もの様に無責任に丸投げするリユカ。

それを見て呆れるティミー。

「私はウルフが賢者になる事に反対はしないわ」

パーティーリーダーのアルルが賛成すると、

「ウチは魔法に興味ないから勝手にいいや」

とエコナも賛成。

「新参者の俺には反対する理由は何もないぜ、魔法のスペシャリス

トになんなボウズ！」

カンドタも賛成。

「私も賛成よ。ウルフは賢者になって、このパーティーの強さの底上げに尽力してね」

ハツキも賛成を示す：

「本当にいいのか…ハツキだって賢者には憧れてた事があつたろ…」

「ふふふ…気にしないで良いのよウルフ。私ね『武闘家』に転職しようと思ってるの！」

「な、何言ってるんだハツキ！武闘家あ…よりによって？魔法使いなら分かるけど…」

「聞いてみんな…私はこの冒険を通じて一つ気付いた事があるの…私の魔法力は大したこと無いって！私のバギじゃ敵は倒せないし、ベホイミで命を救えないの！」

「ハツキさん、それは違うよ！君はこの男と比較して、自分の魔法力が弱いと感じて居るだけだ！この男は能力は人外なんだ！この男と比較してはいけない…もっと自分に自身を持つて！」

ティミーはリユカを指差し力説する。

「わあ…息子に酷い事言われてる気がするう…」

「そうじゃないんですティミーさん。リユカさんと比較したからではなく、自分の道を見つけたからなんです！」

「自分の…道…」

「はい。自分の身体能力を生かし、敵の懷に潜り込んで打撃を与える…これが私の進むべき道なんです！」

皆、啞然としている…かける言葉が思いつかない…

「へー…まあ、ハツキが良いって言うなら、それで良いんじゃない？」
相変わらずの無責任発言リユカ。

「じゃあエコナ！黄金の爪をハツキにあげれば！？」

「な、何であげなきゃならんねん！これはウチの物やで！」

「だってエコナ使えないじゃん！それ武闘家用の武器でしょ！？」

「せ、せやけど…」

リュカは洪るエコナを抱き寄せて、徐にキスをする！

「……………お願いエコナ…それ頂戴」

そして耳にキスをしながら囁くリュカ！

「あっ…ふっ…ん……………わ、分かった…しゃあないから…エ、エコナにあげりゅん…」

エコナはリュカの愛撫を受け、吐息混じりで譲渡を約束する。

「リュ、リュカさん！お、奥さんの前で、そう言う事は謹んで下さい！」

アルルの激怒に不思議そうな顔をするリュカ。

「アルルちゃん、ありがとうね…でも、これがリュカなのよ…毎日こんな感じなの…」

そうは言いながらも、リュカを引き寄せ濃厚なキスをするピアンカ！私が妻であるとの主張だ！

「……………んぷはっ！それと、星降る腕輪は正式にあげるね！」

何とかピアンカから口を離してハツキに話しかけるリュカ。

「え！？良いんですか貰っちゃって！？」

「うん。僕には不要な物だから…ハツキが役立ててよ」

ハツキは嬉しそうに腕輪を撫でリュカを見つめる。

「ありがとうございます！じゃあ…婚約腕輪として貰いますね？」

「何でやねん！」

凄まじい勢いで突っ込むエコナ！

先程のリュカの愛撫の余韻が吹っ飛んでしまった様だ！

「良い突っ込みだなあ……………ティミーもウルフも頑張らなきゃ！」

「…何でだ！！」

転職

<ダーマ神殿>

「うるっさいんだよアンタ等!!」

翌朝、ダーマ神殿の食堂に集まり、ティミーが開口一番に発した言葉!

肌艶が良くなり、ストレスが吹き飛んだ様子の母親と、心地よい脱力感を体に纏った父親に対して、睡眠不足気味な表情で怒りを露わにする息子が此処にいる。

「神聖な神殿で、明け方まで盛り^{さか}やがって!」

よく見ると、この食堂にいる誰もがティミーの様な寝不足気味の表情である。

宿屋は安普請な造りの為、音声がダダ漏れだった様だ…

「しょうがないじゃん!夫婦なんだから…こうやって君は産まれたんだよ?」

「うつさいよ!久しぶりの再会だし、1・2時間くらいなら我慢もするさ!だが一晩中って何だよ!馬鹿なんじゃないのかアンタ達!」

「親に対して『アンタ』って…酷くないッスかビアン力姉さん!?」

「そっねえ…育て方間違えちゃったかしら…?」

リユカが絡まなければまともな人なんだが…この夫婦には何を言っても無駄である。

各人が朝食を終えると、ダーマ神殿のメイン機能…転職に皆が赴く。予め必要事項を記載した書類（名前、性別、前職業や希望の職業、等々…）を持ち、大神官が居る祭壇へと長蛇の列が出来上がる。

1時間程順番を待つとカンダタの番になる。

大神官に書類を手渡し眼前で大人しく待つカンダタ。

「転職の地、ダーマへようこそ。カンダタは盗賊から戦士へと転職を希望ですね？」

「は、はい！俺、心を入れ替えたんです！その証明の一つとして戦士になろうと思ってます！俺みたいな悪人でも転職できますか…？」
大神官に懺悔をするかの様に転職を切望するカンダタ…

「大丈夫です。悔い改める気持ちがお有りなら、貴方にも転職は可能ですよ。しかし戦士としては1からの再出発になります…どうか焦らずに自身を成長させて下さい」

「は、はい！！」

カンダタの返事を聞くと、大神官は天を仰ぎ祈りの言葉を唱え出す。そしてカンダタの体が光に包まれ、その光がカンダタの中へと吸い込まれて行く。

「…これより貴方は戦士カンダタです。新たな人生に幸あれ！」

少し離れた所で転職希望者の列を眺めているアルルとティミーの元に、カンダタが自信に満ちた表情で戻ってくる。

「これで俺は盗賊とはおさらばだ！全うに生きる第1歩だぜ！」

「おめでとうカンダタ…でも、待たされた割には、あっけなく転職出来るんだね？」

ティミーの感想に思わず苦笑いするカンダタ…
そして付近を見渡し…

「リュカの旦那は？…報告しておきたいんだが…」

カンダタの質問にティミーは辟易した表情で、右肩越しに右手親指で指差す。

「あっちでイチャついてる…」

ティミーの指差す方へ目を向けると、其処には壁を背に座り込むリュカと、リュカの膝の上に座るピアノ力が…

膝の上に座るピアノ力を後ろから包み込む様に抱き締め、時折胸を揉むリュカ…

そして嬉しそうに微笑みながらリュカの唇や耳たぶへキスをするピアンカ……

「お父様とお母様はラブラブなんですよお！素敵ですう……！」

「ティミーさんも大変ですね……」

「ありがとうアルル……それと僕の事はティミーで良いよ。『さん』付けはいらない。……しかしこの数ヶ月、父さんが迷惑をかけた様で……本当にごめんね……」

「い、いえ……」

アルルとティミーは共に深い溜息を吐き、リュカとピアンカを見つめ眺める。

「ピアンカさんて……何時もあんななんですか？」

「……さすがに母さんはまともな人なんだけど……この数ヶ月、父さんと逢えなかったのが寂しかったんだろっね……その反動で……普段はまともなんだよ！父さんと違って……！」

昨晚の寝不足と相まって疲れ切った口調でティミーが呟く……丁度其処へハツキが転職を終えて戻ってきた。

「お待たせしました。無事、武闘家になる事が出来ました！皆さんのお役に立てるよう頑張りますので、これからもよろしく願います……！」

「お疲れハツキ……期待してるわよ……！」

ハツキが合流し、挨拶もそこそこにイチヤつく夫婦を眺め続けている……

「しかし何で誰も注意しないんですかね？幾ら何でも神官が神殿内では慎む様言いそうですけど……」

そんなハツキの疑問にティミーが答えた。

「……みんな……怖いんだよ……」

「……怖い？何がです？」

「母さんの事が怖いんだよ……」

「はあ？何言うてんの？ピアンカさんの何処が怖いねん」

エコナだけではなく、皆が不思議そうにティミーを見る。

「…あそこの壁を見てごらん…」

リユカとビアンカがイチヤついている所の反対側の壁を指差すティミー。

「何か…真っ黒に焦げてるなあ…」

ティミーが指差す壁は10メートル近くある天井までが、真っ黒に焦げている…この空間に入った時から皆が気になつてはいたのだが…

「あれ…母さんがやったんだ…」

「はあ？どうしてビアンカさんは、ダーマ神殿を燃やそうとしたの！？」

「いや違うんだ…聞いてくれアルル！別にダーマ神殿を燃やそうとしたんじゃないんだ！この世界…まあ、僕等からしたら異世界へ着いて早々に、母さんはナンパされたんだ…僕達はこのダーマ神殿の裏手に落ち、情報収集の為に色んな人々に話を聞いてただけ…母さんに寄ってくるのは、盛りの付いたオスばかりで…碌な情報を提供しないクセに、しつこく口説いてくるから…その…イラついたらしくて…メラミを…」

「メ、メラミでナンパ野郎を黒こげにしちゃったんですか！？」

「してないよ！誰も傷つけてないよ！誰も居ない壁に威嚇として放つたんだ！あの焦げ跡はその時のなんだ！」

「はあ…そんな事が…それで皆さん、恐れてるんですか…」

「それにしても、メラミであんなでかい焦げ跡が出来るのか？メラゾーマじゃないのか？」

高さ約10メートル・幅約6メートル…

そんな焦げ跡を指差し、カンダタが異を唱える。

「メラゾーマだったら、この神殿は廃墟になつてるよ…母さんの魔法力は桁違いなんだ…」

「お、怒ると怖いのは…夫婦そっくりなんですな…」

「ははははは…」

アルルの力無い感想に、力無く笑うティミー。

そこへリユカ達が合流し、アルル達に突飛な提案を提示した！

「なあティミー、アルル………ちよつとムラムラしてきたから、1時間程宿屋へ行つてくるよ！」

「はあ！？何馬鹿な事を言い出すんです！もうちよつとでウルフ君も合流しますよ！」

「そうですねリユカさん！みんなが揃つたら、イシスに向けて出発するんですから……無意味に宿を取らないで下さい！」

常識人のティミーとアルルが、非常識星人のリユカに食つて掛かる！

「だからさ、ウルフが合流するまでの間で良いからさ……チャチャつと済ますから……」

独特な思考回路で物を言うリユカ……

そこへ賢者になったウルフが合流した。

「皆さんお待たせしました！賢者ウルフの誕生です！」

「なんだよ……空気読めよ……使えないなあウルフは！もう一回並んでこいよ！」

意気揚々と合流したウルフ……

しかしリユカの予想外の言葉に泣きそうになっている……

「ごめんねウルフ君。この男は常人とは違う思考回路で生きているから、気にしてはダメだ……そんな事よりおめでとう！君なら偉大な賢者として、この世界を平和に導けるよ！」

「ええ！ウルフには期待しているわよ！ハツキが武闘家になった今、回復面でもウルフは重要な存在になるんだから！」

「あ、ありがとう……ティミーさん……アルル……」

リユカを無視する様に話を進めるティミーとアルル……

さて新生勇者アルル一行の今後の旅はどの様になるのか……ムラムラしちゃったリユカは、落ち着く事が出来るのか……

転職（後書き）

クリスマスらしい出だしを用意してみました。
10ヶ月後にはサンタさんからプレゼントがあったりして。

深慮遠謀

<ダーマ神殿前>

「さてアルルちゃん！さつきイシスへ行くって言うってたけど…イシスって砂漠の国よね？魔法の鍵を手に入れたのに、また砂漠になんか行くの？」

カンダタ・ハツキ・ウルフが無事転職を終え、アルル達と合流した為、ダーマ神殿から出て行く一行。

そして外へ出た所でビアンカがアルルに、次の行き先の事で質問をする。

「ああそつか…ビアンカさん達には説明がまだでしたね……………」

アルルはビアンカ達に事の経緯を説明し、今後の予定を報告する。

・
・
・

「……………なるほど…この悪党の所為で、面倒事が増えた訳ね…」

「あ…姐さん、ひでえッス！」

「でもアルル…マリーちゃんに砂漠はきつくないか！？」

「せやね！ウチ等の足でも2週間にかかるしね…」

ウルフとエコナが幼いマリーを気遣い、今後の予定に疑問を持ち始めた。

「それなら大丈夫よ！ルーラで行けば良いのだから！」

しかしビアンカがアルル達の心配を気にせず、勝手な事を言い出した。

「ビアンカさん、何言ってるんですか！？私達の中にルーラを使える人は居ませんし、それにルーラは術者しか移転できないんですよ！キメラの翼も同じです…イシスに言った事のないビアンカさん達には効果がありません！」

背中まで届いてたストレートヘアを、三つ編みで纏め動きやすくしたハツキが、ピアノカにルーラやキメラの翼の事を説明する。

「あー…みんなごめんね。僕から謝るよ！実は父さんはルーラを使えるんだ！」

申し訳なさそうにティミーがみんなに謝る。

「何や…やっぱリユカはんはルーラを使えたんか！まあそうじゃないかとは思ったけどな！ちよくちよく何処かへ行ってた様やし…」

しかし誰も驚きはしない…

「いや…真の謝罪は別にある……父さんのルーラは、大人数を同時に移転できるんだ……しかも船ごと！」

アルル達は怪訝な表情でティミーとリユカを交互に見る。

「は、ははははは…ティミーさん…大丈夫ですか？疲れている上に寝不足かもしれませんけど…大丈夫ですか？」

誰も信じていない…

リユカは凄い人物だと分かつてはいるが…誰も信じていない！

「あはははは！やだなあティミー！変な事言っちゃってえー！やっぱりもう一晚、ダーマに泊まって行こうよ！みーんな疲れてるんだよ！」

リユカがピアノカの肩を抱き、ダーマへと踵を返す。

「父さん！どの様な意図で出し惜しみをしたのかは分かりませんが、今後は止めて下さい！マリーも居るのですから、負担が少なくなる様、協力して下さい！」

しかしティミーがリユカのマントを掴み、真面目な表情でリユカに詰め寄る！

「リユ、リユカさん…本当に…そんな事が出来るんですか！？私達全員をルーラで移転させる事が出来るんですか！？」

「ん…まあ…一応？」

リユカの答えに皆が驚愕の表情をする！

「な、何でそれを黙ってたんですか！？リユカさんのルーラがあれば、私達の旅はもつと楽になってたんですよ！酷いじゃないですか！」

体を震わせ怒るアルル：

ウルフ達も言葉にしないが、同じ様な感じだ。

「アルルはこの旅での最終目的って何？」

「何ですか今更！？魔王バラモス討伐です！」

「うん。そうだね。アルル達の旅の目的が、ただ世界中を巡る事だったら僕はルーラを使ってたさ！でも違うだろ。アルル達はバラモスを倒す為に旅をしてるんだ。楽をしたらダメだよ！」

「楽をしていたのは父さんだろ！」

「相変わらずだなお前は。いいか良く聞け！僕にもお前にも、この世界を平和にする義務は無いんだ！世界を平和にする為、旅立ったのはアルル達なんだ！僕はバラモスと対峙する時までこの世界に居るとは限らない。アルル達には旅の。冒険の苦勞を、身を以て体験して貰わなければならない！僕が手を貸すのは簡単だ。だが想像してみろ。アリアハンからずっと僕が全てを行っていたらどうなるか。戦闘はもちろん、移動は全てルーラで。きっとアルル達は成長しないだろう。アリアハンを出た頃と変わらないままバラモスと戦うんだ！もちろんバラモス戦も僕が戦えば良いのかもしれないが、果たしてその時点で僕はこの世界に居るのだろうか？」

先程まで憤慨していたアルル達だが、今は神妙な面持ちでリユカの言葉を聞き続ける。

「もしバラモスに、僕を元の世界へ。いやあ、元の世界じゃ無くてもいい。別の世界へ飛ばす能力があったらどうする！？アリアハンを出た頃と、何ら変わらないアルル達だけで魔王と戦わねばならなくなる！勝てると思うか？」

…誰も答えない。答えは決まっているから…

「リユカ。貴方の言い分は分かったわ！でもこれからはルーラを

使ってもらわよ！マリーの為に……」

沈黙が一行を包む中、ビアンカがリュカの頬を両手で押さえ、瞳を見つめて説得する。

「……分かった……ルーラは使うよ……でもビアンカもティミーも、アルル達の成長の妨げになる事はしないでほしい！この世界に平和をもたらすのは僕等じゃ無い、アルル達なんだから！」

「うん、分かった。みんなが危なくなるまで、手は出さないわ……」
リュカの瞳を見つめ誓うビアンカ。

神妙な面持ちで頷くティミー……
互いを見つめ頷き合うアルル達……

ビアンカはリュカの首に腕を回し、耳元に口を近付け囁く様に問う……
「本音は？」

「……めんどくさいから」

夫婦が他に聞こえない声で会話する。

ティミーやアルル達からは、深慮深いリュカと、それに感銘するビアンカが抱き合っている様にしか見えない……

イヤな夫婦である！

「さて……じゃあルーラを使いますか！」

「でも……本当なんですか……？複数人を同時に移転させるなんて……」

「ああウルフはしっかり見ておく事だ！偉大なる賢者に転職したんだから、ルーラを憶えた方が見栄えが良い！」

ある種、師弟関係のリュカがウルフにルーラを手解く。

「うん！是非とも憶えたいからね……ゆつくりお願いします！」

「ゆつくりって……エッチする訳じゃないんだから……カリーもそんな事言ってたなあ……」

「は！？今、何って言いました！？『カリー』って言いました！？」
囁く様なリュカの台詞を、聞き逃さなかったのはアルル。

「ゲフンゲフン！……何にも言って無いよ。空耳だよ。ぼ、僕は

ルーラへのイメージで忙しいから……」

《やっぱりこの人エルフにも手を出してた！後々、問題にならなければ良いけど……奥さんが合流して、こう言った事が無くなれば良いけど……本当にティミーは血の繋がった息子なのかしら……》

「じゃあいくよぉー！……ルーラ」

アルルが色々と考えている間にリユカはルーラを唱える。

こうしてダーマ周辺には静けさが戻った。

神官や転職希望者の心に恐怖心を植え付けた美女が立ち去ったから……勇者アルルは、ダーマの人々の心を救ったのだ！

深慮遠謀（後書き）

手を抜く事に関してはスペシャリストなりユカ。

言い訳もスペシャルである！

政を行う者としては、この口の巧さは重要だろう…

役に立って無さそうだけど…

子煩悩

<イシス>

目の前に砂漠の国イシスが広がる。

アルル達一行はリュカのルーラを使い、ダーマから此処イシスへと訪れた。

「…す、すげえ…本当に複数人を同時に移転させちゃった…」

ウルフのリュカに対する尊敬の念は天井知らずだ。

「やっぱり腹立つ…こんな便利な魔法を隠してたなんて…」

「まあまあアルル嬢ちゃん…旦那はみんなの事を思ってた隠してたんだから…」

「お！カンダタは良い事言うね！よし『リュウ君ポイント』を1ポイントあげよう」

「…何スカ、それ？」

「うん。10000ポイント貯めたら、頭をナデナデしてあげる！」

「わぁ…心底どうでもいいツスね…」

「馬鹿な事言つてないで行くわよ！女王様に謁見しないと…」

呆れたアルルは先陣を切って町へと入って行く。

「え…！？今から…今日は遅いし宿屋へ行こうよ…」

「まだ昼前ですよ！遅くはないでしょう！サッサと行きますよ！」

愚図るリュカの右手をアルルが、左手をティミーは引っ張り一行はイシス城へと進む。

謁見の間控え室で順番を待つアルル達。

「どうやら今日は女王様が居るみたいね」

入れ替わり謁見の間へと出入りしている他の人々を見て安心するア

ルル。

「ふふ…そう言えば読んだよ…前は謁見出来なかったんだよね」
ティミーが壁に寄りかかり、控え室を眺めているアルルに話しかける。

「そうなんですよ…まさか女王様が城を抜け出して、遊び歩いてると思わないじゃないですか！…しかもリュカさんと！」

「ははははは！普通の国ではそうだよね…」

「………もしかしてリュカさんは…」

「…ああ…抜け出さない日の方が珍しい…」

「リュカさんらしいですね…」

マリーを抱き、窓から砂漠世界を眺めるリュカを見て溜息を漏らす二人…

「やつぱりリュカさんて結構子煩悩なんですね…あんまり子供を叱る姿って想像できません。…だからティミーを殴った時は驚きました！」

視線をティミーに戻し、尋ねる様に感想を述べるアルル。

「いや…父さんに殴られたのは初めてだ！叱られた事だつて無かったよ…」

「それ程ビアンカさんの事を愛してるんですね」

「ああ…其処まで愛しているのに、何で浮気するんだろ？僕には考えられないよ…」

《ティミーって本当に真面目な人なんだ…リュカさんが言ってた通りね…》

「なあ…飽きてきたんだけど…帰ろうよお！」

長時間の順番待ちに耐えられなくなってきたリュカが、また身勝手な事を言い出した！

「また馬鹿な事を…仕方ないじゃないですか！他の皆さんだって順番を待ってるんですから、大人しく待ちましょー！」

アルルがリュカを宥める。

「みんな僕達の順番を抜かしてるよ！順番待ってないよ！僕達、係の人に故意に除外されてるよ！」

「え！？」

アルルはリュカに言われ、慌てて周りを見渡す。

《本当だ！今、謁見の間から出て行った人は、私達より後に来た人だわ！》

「くっ！…リュカさんの所為ですよ！お偉いさんを怒らせるから！意趣返しされてるんですよ！……我慢して待つしかないでしょう…」

諦めた口調で呟き、そのまま壁際へ蹲るアルル。

「えゝ！ちよつと文句言つて来る！」

「くくくえ！？」「くくく」

リュカは突然謁見の間へと歩き出し、勢い良くドアを蹴り開ける！

「たのもー！」

「げっ！…ちよ、ちよつとリュカさん！」

慌てて止めようとしたアルル達だが、間に合わずなだれ込む様に謁見の間へ入っていった！

「リュ、リュカ！？どうしました！？」

リュカ達の乱入に目を見開いて驚くレイチエル！

《うわぁ…美人だ…相変わらず父さん女性の趣味は良いなあ…》

レイチエルを見て思わず見とれるティミー…

「用があつて、謁見の順番待ちをしてたんだけど…もう待ってられない！昼前から待ってるんだよ！」

「リュカ…いくら貴方でも順番は守って下さい！待つのが嫌だからつて…」

呆れた様に話しかけるレイチエル…

「順番守ってねえーのはそっちだろ！何で僕達より後に来た人が、僕達より先に謁見してんだよ！」

「え！？どついう事です？」

・
・
・

「……………と言っわけで、明らかに作為的に順番を抜かされ続けてたんだ！」

「…真ですかイプルゴス！」

レイチエルはイプルゴスと呼ばれる大臣を睨み付ける。

「い、いえ…その…こ、これは偶然…その…」

「小せえ男だな！何だあゝ、レイチエルの事を狙ってたのか？そんな僕に嫉妬したか？」

口籠もる大臣に容赦なく罵声を浴びせるリュカ。

「だ、黙れ！貴様なんぞ認めんぞ！」

「ぶはははは！いいもんねゝ、認めてくれなくても！ばゝか！」
大臣は血管が切れそうなくらい顔を真っ赤にしている。

「わ、私は…女王様が幼い頃より仕えてきたのだ！女王様がお幸せになれるのなら…そう思い日夜仕えてきたのだ！それなのに貴様の様な浮ついたろくでなしが、女王様を汚しおつて！」

ついには泣き出す大臣…

「イプルゴス…泣かないで…私は幸せよ。頼りになる家臣に囲まれて…素晴らしい国民に恵まれて…そしてリュカに出会えた……………だから泣かないで…そしてリュカを許してあげて！」

レイチエルは玉座から立ち上がり、リュカの元へ近付くと、そつと胸に抱き付いた。

家臣の誰もが、その光景を複雑な思いで見つめている。

そして誰もが、涙を飲んで女王様の幸せを見守ろうと思い始めてる…

しかしリュカは、抱き付いてきたレイチエルを優しく抱くと、その違和感から硬直した！

いち早くリュカの変化に気付いたのはビアンカ…

リュカの前に回り込み、表情を観察する。

そして次に気付いたのがレイチエル…

不思議に思い、リュカに問いかける。

「リュカ…？どうか…しましたか？」

「……………レイチエル…彼氏出来たのかな？」

「リュカが彼氏になってくれるなら、出来たと言えるけど…それ以外では…リュカ以外の男性に興味が持てなくなったしね」

大量の脂汗をかくリュカ…

「リュカ…もしかして…またなの…？」

覚えのある不安に、漠然とした質問をするピアンカ。

二人のやり取りを見たティミーが、頭を抱えて蹲る。

「父さん…またですか……………しかも、こつちの世界で…」

家族だけの会話について行けないアルル達。

果たして何がリュカの身に起きたのか…

……………謎でもなんでもないのですけどね！

子煩悩（後書き）

一体何が起きたのか！？

リユカを取り巻く状況に、大いなる変化が訪れる！

魔王を討伐するよりも、この男を討伐する方が先なのか！？
次回、

『種馬男 VS 女勇者一行』
を、お送り致します。

当然ウソ！

鎡

<イシス>

「ちよつとリュカ！どうすんのよ！？」

目が泳ぎまくつてるリュカの顔を、両手で押さえ詰問するビアンカ。
「ちよつと！リュカに馴れ馴れしいですけど、貴女は誰です！？」

リュカとビアンカの間に立ち塞がり、ビアンカを睨むレイチエル。

「あゝ…どうしよう…何から説明すれば混乱が少ないだろうか…」
かなり動揺しているリュカ…何をどうして良いのか分からないで居る。

「女王様…色々込み入ったお話がございます故、後程で構いません
からお時間を頂けませんかでしょうか？」

ティミーが一時、混乱を落ち着かせる。

「…貴方は？」

「は、私の事も後ほど説明させて頂きます。今は勇者アルル一行の
一員とご理解下さい」

「……………分かりました…では別室で待っていて下さい…」

そう言つとレイチエルは、側近の一人に手で合図し、アルル一行を
別室へと誘つ様指示する。

別室では重い沈黙の中、皆の視線がリュカへと集まる…

そして妻ビアンカが、不機嫌な表情で机を指で叩きながらリュカを
睨んでいる。

その圧力が、皆の口を開かなくしている…誰も喋らない…喋れない
で居るのだ！

（ガチャ！）

「大変お待たせしました！随分と込み入った話と言う事ですが…どうしました？皆さん暗いですね？」

重い雰囲気も頂点に達し、アルル達の胃も悲鳴を上げ始めた所でレイチエルが現れた。

「お時間を戴きありがとうございます。まず最初に自己紹介をさせて頂きます…私はティミー。リユカとは血の繋がった息子でございます」

「まあ！？随分と大きな息子さんが居るのね！？」

「で、でしょお…凄いイケメンだし、レイチエルの彼氏にどう？」

「うふふふ…私は息子さんよりも、お父さんの方に気があるんですよ？」

やり取りを見ていて、アルル達は胃を押さえてる…

「じよ、女王様…続いてご紹介しますは、私の妹のマリーです。…そして此方が、私と妹の実母であるビアンカでございます」

続いて紹介されるマリーとビアンカを見て、顔色を変えるレイチエル。

「…あら…私とは結婚できない事を、改めて分からせに来たのですか！？」

ビアンカを見据えて、冷たく言い放つレイチエル。

「いや…今日来た理由は違うんだ！…アルル！ほら、お願いしなよ！！」

話を変えたいが為に慌ててアルルに振るリユカ。

アルルも此処に来た用件を思い出し、レイチエルに懇願する。

・
・
・

「…なるほど…分かりました。アルルの為、私に出来る限りの事は致しましょう」

レイチエルは力強く頷き、カンダタの噂を広める約束をする。

「いやあ、ヨカッタネ！無事カイケツダネ！！じゃあ帰ろうかあ

！」

勢い良く立ち上がり、扉へ向けて歩き出すリュカ。

「まだでしょ！座んなさい！」

リュカのマントを掴み睨み付けるピアノカ。

「そうよリュカ！先程は妙なやり取りをしてたでしょ！？その説明を！」

「いやぁ…別に大したことではないから…説明する事も…」

「リュカ！女王様は知る権利があるのよ！」

皆の視線がリュカに集中する…

《何度体験しても居心地が悪いなぁ…本人より先に分かっちゃうつても問題だよなぁ…》

「はぁ…」

リュカは大きく息を吐き、真面目な表情に切り替えレイチエルに向き直る！

「レイチエル…お願いだから落ち着いて聞いて欲しい」

レイチエルは黙って頷く…リュカの瞳を真っ直ぐ見ながら。

「…僕には特殊な特技があるんだ。…それはね…妊娠してる女性に触れると、その人の中にある新たな生命の暖かみを感じる事が出来るんだ！」

……………

誰も何も言わない…

皆、理解出来てない様だ……………リュカファミリー以外。

「はぁ…今一意味が分からないんですけど…本人が気付いてなくても、リュカには分かっちゃうって事？」

「うゝん…ま、そう言う事だ「あ！ま、まさか…リュカさん…」

やっと思いが纏まったアルルが、リュカの台詞を遮り驚き叫ぶ！

「アルル…」

ティミーが静かにアルルの名を呼び、目で答えを告げる。

「さ、最悪な男ね…」

謁見の間でのティミーと同じように、アルルも頭を抱えて俯いている。

「え！え！？な、何？何なの！？…ねえリユカ…もうちょっと分かりやすく説明してくれない？」

「うん。つまりねレイチエル…君のお腹には子供が居る。…やあ、めでたいね！父親はさっきの大臣のオッサンって事で…」
リユカが最大限明るい口調で結論を告げる。

しかし後半の台詞と相まって、軽薄にしか聞こえない。

そんなリユカをアルルが白い目で睨む…

アルルだけではない…ビアンカもティミーも…カンダタですら…

誰もが呆れて何も言わない中、マリーが瞳を輝かせ喜びだした！

「きゃー！私に弟妹が出来るのですね！私がお姉様になるのですね！！！」

それを見たレイチエルも一緒になって騒ぎ出した！

「そうよ、マリーちゃん！私、ママになるのよ！！リユカの子のママになるのよー！」

レイチエルとマリーは抱き合い、ダンスを踊るかの様に舞っている。

しかしアルル達は対照的に暗い面持ちでリユカを睨んでいる。

「どうすんねんリユカはん！」

「え？どうするって？」

「リユカさんは元の世界に帰るんでしょ！それなのにこの世界で子供作ってどうするんですか！？」

正直エコナとハツキも、今のレイチエルの立場になろうと画策していたのに、先を越された為リユカにきつく当たっている。

「……………どうしよつかねえ…困ったねえ…」

まるで他人事の様な口調で話すリユカ…

（バン！！）

リユカの態度に見かねたティミーが、勢い良くテーブルを叩き立ち

上がり、レイチェルに全てを打ち明ける。

「女王様！父は貴女に話してない事があります！それは……………」

・
・
・

「……………」と言うわけで、我々はこの世界の人間ではございません！父は…リユカは、元の世界に帰り、国王として国を統治せねばなりません！身勝手ではございますが、それを了承して頂きたい！」
ティミーは誠心誠意事実を伝え頭を下げている。

リユカはそれを見て「頭下げる事ないのに…」と、小声で呟いていたが、それを聞いたビアンカに頭を押さえられ、一緒に頭を下げている。

「…なるほど…私と結婚して王位を継げないのは、こう言った理由だったのね…」

「違う！違う違う！！それは違うよレイチェル！」

寂しそうに呟き見つめるレイチェルに、リユカは近付き手を握り締め答える。

「結婚出来ないのは、僕には既にビアンカが居るからなんだ！国王だからでも、異世界人だからでもない！それに王位を継ぎたくないのは、本気で国王なんてやりたくないからなんだ！も、辞めたいんだけどさあ…辞めさせてくれないんだよねえ…」

不意に近付かれ手を握り瞳を見つめられ、顔を赤くするレイチェル。
「うん。分かったわ…でも、可能な限りイシスに帰って来てね。その時はフリーパスで私の元に来て良いから！」

「うん。そうするよ」

丸く収まりつつあるのだが、少し納得のいかないエコナが余計な事を呟いた。

「不憫やな…父親の顔も知らんで育つなんて…」

言わなくて良い一言が、更に言わなくて良いリユカの発言を呼び込んだ。

「じゃあ…コイツあげる！」

そう言うとき、ティミーをレイチェルに突き出すリュカ。

「イケメンだし、真面目だし…まあ、何かの役には立つんじゃない？」

…弟か妹か分からないけど、『パパ』って呼ばせちゃえよ！」

（ブチ！！）

さすがに切れたティミーが、剣を抜き放ちリュカへと振り下ろした！

「おわ！あぶねえ！！…当たったらどうすんだよ！…たく…真に受けんなよ！」

しかしそれを余裕で躲すリュカ。

「あ、貴方って人はあ……………」

怒りの収まらないティミーは、尚も斬りかかるが掠りもしない。

ティミーの剣技はレベルが違いすぎて、アルル達には止める事すら出来ない…

そしてそれを余裕で躲すリュカが、化け物の様に見えてきたのだ…

二人を止めたのは、妻であり母であるビアンカだ！

「いい加減にしない！！！」

強烈な叱咤を受け、男二人が大人しくなる…

そこから延々とビアンカの説教を聞く事になる二人…

この時アルル達は納得した…

リュカを押さえられるのは、この女性だけなのだ…

謎（後書き）

サブタイトルは「カスガイ」と読めます。

血統

<ポルトガ港>

「うゝみゝは広いゝなあ、でつけゝなあゝ」

ポルトガ王に黒胡椒を渡し、船と交換したアルル達…

ついでにカンダタの噂も流して貰える様頼み込み、早速船に乗り込んだ。

しかしアルル達は船の扱いに不慣れで、ビアンカとティミーを中心に出港の準備を進めている。

「旦那も手伝ったらどうですかい？元の世界じゃ、船を扱った事あるんでしょ！」

マリーを膝に抱き、甲板上で優雅に歌っているリュカに文句を言うカンダタ…

「無駄よカンダタ！リュカは船では何もしないと決めてるの！『船では優雅に過ごすのが僕流』って事らしいわよ！」

「何なんだよそれ！………しかし人手が足りなすぎるぜ！」

「仕方ないでしょ！さすがにポルトガから、水夫を派遣して貰うわけにもいかないし…私達の旅は危険な物だから…」

アルルが宥める様にカンダタに説明する。

「ほな、自腹で水夫を雇うしかないやん！」

「雇うったって…そんな金銭的余裕はありません！」

「せやったら、アルルが体で払ったらええやん！」

「アンタ馬鹿じゃないの！アンタこそ体で払いなさいよ！その無駄にでかいオツパイで！」

忙しさと相まって口論を始めるアルルとエコナ…

「お父様あゝ…何時になつたらお船は出発するのですかあゝ？」

「うん。今アルル達が一生懸命出発の準備をしているから、もう少し待ってようね」

二人の口論を見て、不思議そうに尋ねるマリー。

そんな少女を見て、くだらない口論を慎むアルとエコナ……

本当なら『リユカさんも手伝いなさいよ！』と、怒りの矛先を向けたいのだが、ある種マリーを人質に取ってる為、文句すら言えないで居る。

食料や水などの必要物資を買い出しに行っていたティミー・ウルフ・ハツキが戻り、とても現状では航海など不可能ではとの意見に達した為、リユカの周りに集まり話し合いが始まった。

「やはりこれ程しつかりした船を、この人数で扱うのは無理だと思います」

「それは分かるけどティミー……私達に人を雇うお金はありません！」「ティミーさんもアルも落ち着いてよ！確かに俺達だけじゃ大変だけど、動かせない事はないと思うぜ！」

「違うのよウルフ君。ティミーが無理と言ってるのは、海上で戦闘になったときのことなのよ……船を操作しながら戦うのは、かなりの労力が必要なの！」

皆が真剣に話し合う中、まるで他人様の様にやり取りを眺めているリユカとマリー……

「皆さん難しいお話をされてますね……」

「そうだねえ……僕等は邪魔をしない様にしようね！」

「父さんも少しは話し合いに参加して下さい……！」

額に青筋を浮かび上がらせたティミーが、怒りを抑えてリユカに話し合いへの参加を乞う。

「え……！何で？何を僕に期待してんの？」

「まあまあ……ティミー落ち着いて！旦那に何を言っても無駄なのは、ティミーが一番分かっている事だろ……！」

「……………カンダタには何か解決策があるんですか？」

リユカへの鬱憤がカンダタへと向かうティミー……

「……正直あまりおすすめじゃねーが、一つだけ解決策がある……」

強烈な殺気を向けられて、怯みまくったカンダタが思わず口にした言葉…

カンダタ自身は、この提案だけはしたくなかったのだが…

「本当に！？それはどんな事なの？」

アルルが瞳を輝かせカンダタに詰め寄った！

ティミーやウルフ達も大きな期待に瞳を輝かせている。

「あ、ああ…此処ポルトガから南西に行くと『サマオンサ』と言う国があるんだが、その国の南の端に俺の知り合いの海賊のアジトがあるんだ…其処へ行つて海賊共を味方に引き入れる…… ってのはどうだろうか？」

「盗賊の次は、海賊かよ！どんだけ勇者様一行の名を、貶めれば気が済むんだ！？そんなクズはお前だけで十分だ！」

「何にもしねえ旦那が文句言つなよ！船の扱いにかけちゃスペシャリストなんだぞ！ヤツらに船を任せれば、海上でモンスターに襲われても、俺達は戦闘に集中出来るだろ！」

皆がカンダタの提案を噛みしめる様に吟味する。

「確かに…方法としては良い提案ですが…… 海賊が私達に協力してくれませんか？」

「それは分からねえ…直接交渉してみねーと……ただ、ヤツらは俺と違つて義賊なんだ！弱者から金を巻き上げたりはしねえ…何時も狙うのは悪党だけだ！」

「……他に…方法はないですし…取り敢えず海賊のアジトを目指しましょう！」

アルルの一声により、一行の進路は決定した。

可能な限り敵に遭遇しないよう、海賊のアジトを目指す事に…

「ねえリユカ…お願いがあるのぉ…」

リユカの膝の上からマリーを退かし、ピアノカが跨る様にリユカへ抱き付き、甘えた声でお願いをする。

「海賊のアジトまでだけで良いから……歌わないで？」

そつ…今回の船旅では死活問題のリユカの歌…

それを封じる為、ビアンカはリュカに甘えお願いをする。
そのままビアンカを抱き上げ、船室へと下りて行くリュカ…
残された他の者は、出港の準備を再開する…
マリーですら、ティミーから教わり船の扱い方を憶えようとしている。

<ポルトガ沖>

進路が決定してから半日…
船内に響くビアンカの甘い声に我慢しながら準備を進めたアルル達。
何とかポルトガ港から出ることが出来た様だ。

ビアンカの献身的なお願いが功を奏し、リュカも大人しくマリーと戯れている。

「やっとポルトガから出港出来たね」

「ティミーのお陰です！私達だけだったら、何をしても良いのかも分からなかったですから」

出港し穏やかな船旅が続く中、余裕が出来てきたアルルとティミーが笑顔で会話している。

「ほおら、見てごらんマリー！お兄ちゃんとアルルお姉ちゃんは、とってもお似合いな男女だよねえ… やっとお兄ちゃんにも彼女が出来るのかな？」

「私アルル様の事、大好きですう！是非お兄様の彼女になってほしいですわ？」

今はまだ本人達にその意志はないのだが、外野が勝手に二人の仲を期待している。

「ちよつとリュカ、マリー！あの二人は貴方達と違って、ウブで真面目なんだから、そう言う事言つて変に意識させちゃダメよ！見守つて行くのが大事なんだからね！」

勝手な夫婦である。

そんな穏やかな雰囲気は、モンスターの襲来により打ち消された！
海のモンスター『マーマン』と『大王イカ』である！

海での戦闘に不慣れなアルル達は、効果的な攻撃をする事が出来ず、
ティミーとビアンカがメインで戦う事に！

「大変ですう！アルル様達がピンチですわ！お父様、私達もお手伝い致しましょう！」

「いやいや…私達もつて…マリーは戦う事なんか出来ないだろ？」

「そんな事ありませんですわ！私、ポピーお姉様に魔法を教わりましたから！」

そう言くとマリーは、敵の群れに向けて両手を翳し魔法を唱えた！

「イオナズン！」

「……え！？」「……」

マリーから放たれた魔法は敵陣で大爆発を起こし、モンスターを全て吹き飛ばした！

同時に大量の海水を大量に巻き上げ、巨大な津波を引き起こす！

「げえ！！！」

慌ててリュカはマリーを抱き上げ、手近な柱へとしかみ付く！

「みんなー！何かに捕まれ！津波に飲み込まれるぞー！！！」

リュカの声を聞き、皆が慌てて何かにしがみ付く！

次の瞬間、一行は津波に飲み込まれ揉みくちゃにされた！

「おゝい…みんな無事かー…？」

津波が去り、穏やかさを取り戻した船上で、びしょ濡れのリュカがみんなの無事を確認する。

流石は世界に誇るポルトガ製の船…

あの大波に飲まれても、転覆する事はなかった……が、乗っている人間は別だ！

「私とティミーは無事よ！」

ビアンカが自分とティミーの無事を告げる。

「俺も何とか生きてるぞー！」

「私もです！」

カンダタとアルルが疲れた表情でリュカの前に姿を現す。

「俺は大丈夫だけど、ハツキが気を失ったままだ！」

気絶しているハツキを背負い、ウルフが姿を出した。

「……………あれ？エコナは？」

皆が互いを見つめ周囲を見渡す。

「……マジで！？エコナ、流されちゃった！？ヤベーじゃん！！」

リュカとビアンカの血を引くマリーのイオナズンは、他者の想像を遙かに超える代物で、その影響でエコナは海へと投げ出されてしまった！

今更助ける事も出来ない一行は、沈痛な面持ちのまま、次なる目的地へと船を進めて行く……

今はそれしか出来ないから……

血統（後書き）

海でイオナズンを使うと、
こうなる様な気がするんだよね…

海の女

<海上>

「ごめんなさいお父様…私…私……………」

皆が沈痛な面持ちの中、責任を感じたマリーが泣きながら謝っている…

「マリーちゃんの所為じゃないわ…私達がもっと強ければ、こんな事にはならなかったのよ…」

「アルルの言う通りだよマリー。マリーは悪くない！だって初めて使ったんだる魔法を！？」

アルルとティミーがマリーを優しくあやしながら宥めてる。

「はい…ポピーお姉様がお嫁に行く前に、私に教えてくれたのです…グランバニアに居た頃は使う事が無かったので、今日初めて使いました…」

「そっか…じゃあ憶えておきなさい…魔法は状況に合わせて使うのだと…」

リユカがマリーの涙を拭いながら優しく諭してる。

「魔法は二次的効果も考えて使用する物なんだよ」

「二次的効果…？」

「そう…さっきのイオナズンで言えば、一次的效果が敵を吹き飛ばす事…二次的効果は大津波を引き起こした事だ！……………もし此処が狭い洞窟内だったらどうなったと思う？」

「……………どうなってたんですか？」

「狭い洞窟内だったら、壁や天井を崩し僕等は生き埋めになっていたんだよ…」

「こ、怖いですう…私もう魔法を使えません…」

「違うよマリー！状況に応じて魔法を使い分ければ良いんだ！さっきの場合だったら、イオナズンじゃなくてイオラ…も、凄そうだな

「イオ！そう、イオを使えば被害がなく、敵を倒す事が出来たんだ！威力の調整も必要な事なんだよ」

リユカは魔法の存在の恐ろしさに怯える娘に、優しく使い方を手解きしている。

「そうよマリー！威力調整さえ出来れば、貴女の魔法の才能なら直ぐに大魔道士になれるわ！」

「で、でも……」

胸の前で両手をモジモジさせながら、マリーは俯き呟く。

「私……イオナズンしか教わらなかったんです……」

一瞬にして全員の表情が固まった。

普通は威力の低い『イオ』から憶え『イオラ』『イオナズン』と上位魔法へと移行していくのだが……

マリーは行きなり最上級位の『イオナズン』を憶え、しかもその威力は通常の4・5倍ある……

とてつもない存在である事に驚くと同時に、漠然と『イオナズン』のみを教えた彼女の姉に対して怒りが湧いてくる！

「あ、あの馬鹿女あゝ……！！」

「ティミー落ち着け！ポピーも何か考えがあったのかもしれないだろ……？」

父親としてこの場に居ない娘を、一方的に非難するわけにもいかず、ブチ切れそうになっている息子を珍しく宥めている。

「あの女にそんな深慮があると思いますか……？」

「いやあゝ父親としては答えにくい質問だなあ……」

「じゃあ兄として答えてあげます！アイツにそんな深慮はありません！面白半分でイオナズンのみを教えたんです……その所為でエコナさんは津波に攫われてしまったんです！」

此処に居ない女性の事で憤慨するティミーを見て、小声でビアンカにポピーの事を尋ねるウルフ……

「ビアンカさん……ポピーさんってどんな娘さんなんですか？」

「うーん…あの娘もね、複数人を同時に移転させるルーラを使えるのよ。しかも生まれつき…魔法の天才ね」

「すげえ…」

「でも…性格が…父親に似ててね…その…身勝手なのよね…あの娘！」

「うわあー！」

ウルフのその一言が、ポピーという存在の感想を全て表している。

「ティミーもみんなも落ち着いて！…波に攫われたとしても死んだわけではないわ！生きて…何処かに流れ着くかもしれないじゃない！希望は捨てちゃダメよ…世界を旅していれば、また再会する事だってあり得るわ！だから今は気持ちを切り替えて、次の目的地へと進みましょう！」

アルルがリーダーらしく皆を鼓舞する。

悲しみが拭えた訳では無いが、やる事がある以上何時までも浸っている訳にもいかない。

皆アルルの言葉に従い、次の目的地に向け船を操作する………リュウ力ですら！

そして皆が叫ぶ…

「貴方は何もしないで下さい！！」

<海賊のアジト>

たとえ悲しみに暮れる航海であっても、日没は平等に訪れる…

日も沈み周囲が漆黒の世界に変わる頃、アルル一行は次なる目的地へと到着する。

其処は遠くから見ただけでは普通の建物だが、中に入ると世界が変わる！

中には荒くれ者を絵に描いた様な厳つい顔の男達が、所狭しと闊歩している！

皆、日に焼けた浅黒い肌をしており、不精髭を生やし清潔さとは縁遠い存在だ。

「うわぁ…俺、こつ言う人達は苦手だなぁ…」

ウルフは海賊達の悪人面を見て恐怖し、リュカの影に隠れる様について行く…

「僕も苦手だなぁ…こつ言う不潔そうな連中は！………何より臭いよ此処！」

リュカなどは不衛生な出で立ちに嫌悪し、遠慮することなく文句を付ける！

そして大勢の極悪人面に一斉に睨まれるのだ。

「おう！何処の貴族様が迷い込んだのかと思つたら、カンダタじゃねえか！！聞いたぞ、おめえ心入れ替えて、勇者様一行と共に世界を救う旅に出たんだってなぁ…がはははは！おめえが正義の味方になれるわけねえだろ！何勘違いしてんだぁ！？」

一人の海賊がカンダタに近付き、侮辱して大爆笑する。

カンダタ自身は、それに文句を言うでもなく、愛想笑いでやり過ごそうとした。

そんな海賊に怒りを感じたアルルが、カンダタに変わり文句を言おうとした瞬間！

「お前！口臭いから、こつち向いて笑うなよ！て言うか息するな！」
リュカがお得意のナチュラルな挑発を行った！

咄嗟に反応したのはティミーとビアンカで、マリーを抱き上げリュカから離れる！

安全な距離まで避難して、振り返った時にはリュカを中心に大乱闘になっていた！

そして巻き込まれるアルル達…

「お前達いい加減にしな!!」

奥から現れた威勢の良い女性が、大声でこの場を収束させる!

しかし立っていたのはリユカやアルル達...それと海賊が数人だけ...しかも無傷なのはリユカのみ...乱闘に巻き込まれなかったティミー・ビアンカ・マリーはもちろん無傷。

「カンダタ...一体どういう事だい!?いきなり乗り込んできて...アタイ達を壊滅させるつもりかい?」

「いや違っただモニカ!先に手を出してきたのは、アンタ等の方だ!...まあ、こっちの旦那も口が過ぎたのは認めるが...」

アルル・ハツキ・ウルフをベホイミで治療するリユカを指差し、謝る様にモニカと呼ぶ女性に話しかけるカンダタ。

「ふん!そいつ等かい?勇者様ご一行つてのは!?!」

「初めまして海賊さん!私が勇者としてバラモス討伐を目指しておりますアルルです!以後お見知りおきを...」

少しトゲのある口調で自己紹介をするアルル...

手荒い歓迎にご立腹の様子だ!(リユカの所為なのだが...)

「ほ...う...こんなお上品な嬢ちゃんか勇者様ねえ...アタイがこの海賊団の頭、モニカだ!」

「まあ!お上品と言われたのは始めてね!貴女達から見ると、私はお上品に見えるんですか!??光荣と喜ぶべきですかね!?!」

海では仲間を失い、先程は乱闘に巻き込まれ...その所為か、かなり苛ついてる様子のアルル。

これから彼女等の力を借りようと、交渉しに来たのだが...果たして上手く行くのだろうか...?

海の女（後書き）

出ました女海賊モニカさん！
声は「天地無用」で！

酒と女と男の話

<海賊のアジト>

勇者アルルと女海賊モニカが暫くの間睨み合う！

「……………ふふふ…随分と言う娘だねえ…まあいい…付いて来な！」

モニカは不敵に笑うと顎で奥の部屋を指すと、アルル達を誘った。

「おいバチエツト！アタイの部屋に酒を有りつ丈持つて来な！」

モニカは気絶せず立ち残っていた数少ない海賊の一人に、酒の指示を出し奥の部屋へと入って行く。

「お、俺一人でかよお…」

バチエツトと呼ばれた海賊が愚痴を漏らし倉庫へと進み行く…

「僕も手伝いますよ！」

それを哀れに思ったのか、乱闘に巻き込まれなかったティミーがバチエツトの手伝いを申し出た。

「あ！俺も手伝います！」

するとウルフまでもが、乱闘に巻き込まれた被害者感覚から、手伝う事を申し出る。

「若者は頑張るなあ…」

乱闘の発端である男は、へばっている海賊達を気にする事なく踏んづけ、モニカが誘う奥の部屋へと入っていった。

部屋に入るとモニカはテーブルに座り、正面の席をアルルに薦める。そして幾つかのショットグラスと酒瓶を取り出し、全てのグラスに溢れる程テキーラを注ぎ、自身のグラスのテキーラを煽ると叩きつける様にグラスを置き、話を始める。

「…で、正義の勇者様が、悪の海賊共に何の用だい！？」

更にテキーラを飲み続けながら、アルルに問いかける。

「…………私達はバラモスを討伐する為、ポルトガ王より船を賜りました！しかし、ただ船を操るだけならともかく、海上で戦闘を行いながらの操船は不可能に近い為、海のスペシャリストである貴女達に協力をお願いしたく、此処まで訪れました」

モニカは薄ら笑いを浮かべながらアルルを見据え、アルルは実直に見つめながら交渉を行っている。

「アタイ等みたいな悪党と手を組んだら、勇者様の名前に傷が付くんじゃないのかい？」

「カンダタから、貴女達は義賊だと聞きました！それに…例えば名前に傷が付いても、世界を平和に出来るのなら、気にする必要はありません！」

「ふん！名より実を取るってかい！？…………甘ちゃんだねえ…女の考えそんな事だ！アンタみたいな甘い女に、世界を救う事なんか出来るのかい！？」

アルルを見下した口調で突き放すモニカ…

しかしアルルは怯むことなく語り出す。

「確かに…私一人でしたら、世界どころか小さな村すら救えないでしょう…ですが私には仲間が居ます！信頼出来る仲間が…………その仲間の一人…カンダタから、貴女達の事を聞きました。だから此処へ来たのです！」

「ははははは…カンダタみたいなクズが、信頼出来る仲間あゝ！？

…………笑わせてくれるねえ、お嬢ちゃん！女のクセに勇者などやってないで、男見つけてガキでも産んでな！それがアンタの為だよ！」
大声で笑うモニカ…だが瞳はアルルを見据えて笑ってない。

するとアルルは、目の前に置かれたテキーラ入りのショットグラスを掴むと、一気に飲み干し咽せながら言い放つ！

「ごほ…ごほ…あ、貴女こそ女だてらに海賊なんてしてないで、男見つけて違う人生を歩んだ方が良くないじゃないですか！？私達のような女子供に、ケンカを吹っ掛ける様な手下しか居ないんじゃない、お頭の程度が知れてるわよ！」

アルルの手元にある空のグラスに酒を注ぎ、自らのグラスの酒を飲み干すと、悲しそうな瞳でモニカは語り始めた。

「アタイだってねえ…惚れた男と共に生きようと思った事はあるさ…」

アルルはモニカの話聞きながら、テーブルに置かれたテキーラのボトルを手に取り、モニカのグラスへと溢れるまで注ぐ。

「ロマリア地方で盗賊をやっていたその男が、下手打ってロマリアを逃げ出した時に、私と共に海賊をやらないかと誘ったんだ……でもその男はバハラタに着くなり、何も言わず私を置いて出て行っちゃったんだ！海賊をやりたくないならそれでも良い……でも互いに愛し合った仲さ…私に『俺と一緒に来るか？』とでも言ってくれても良かったろうに！」

モニカは更にテキーラを煽り、瞳に涙を浮かべてカンダタを睨む！空になったグラスに酒を注ぎながら、アルルは女として女のモニカに尋ねた。

「…もし…一緒に来る様言われたら…手下の人達を捨てて、その人と共に生きましたか？」

「……………分からない…アイツ等はろくでなし揃いだ、根は良いヤツばかりだからねえ……」

アルルの問いに少し考え、優しくアルルを見つめて答えるモニカ。するとビアンカが手近な椅子に座り、テキーラの注がれたグラスを手に取り飲み干した！

「ぷはあ！貴女、男の趣味が悪いからそんな苦勞をしちゃうのよ！そんな男諦めて、別の男を見つけなさい！」

「ビアンカさん、自分の男の趣味の悪さを棚に上げて、言いたい事言いますね！？」

アルルもテキーラを煽り、話に加わったビアンカに苦言を呈した。

「ビアンカさんは男の趣味は悪くありません！リユカさんと結婚出来たのだから、むしろ男の趣味は良すぎます！私だって愛してます

もん！」

ハツキまでもがテキーラを煽り、話に加わって来た。

「お頭！お待たせしやしたあ！」

丁度そのタイミングで、バチエツトと共にティミーとウルフが大量の酒樽と酒瓶を抱え、モニカの部屋へと入って来た。

「バチエツト！良いタイミングで持ってきた！アタイはコイツ等が気に入ったよ！今夜は飲み明かすよ！…おら、カンダタ！ポケットと突っ立ってないで、絶世の美女達に酒を注ぎな！」

カンダタは尻を蹴り上げられ、慌ててアルル達のグラスに酒を注ぎ始める！

そして女達を中心とした、色っぽさとは懸け離れた酒盛りが始まった！

酒の嫌いなリユカは、何時の間にやら部屋から逃げ出しており、同じく部屋から逃げ出す事の出来たティミーに、娘の行方を問いただす。

「あれ？マリーはティミーと一緒にじゃなかったの？」

「え！？乱闘騒ぎの時、抱き上げて巻き込まれない様に避難しましたが、母さんと一緒に居ると思ってました…」

「こんな荒くれ共が屯する所に、マリーちゃん一人きりって拙くないですか！？」

ウルフの言葉を聞き、血相を変えるリユカとティミー！

先程の乱闘で、意識を失いやつと目覚めた海賊共の襟首を掴むと、脅し紛いに娘の行方を尋ねるリユカ！

しかし目覚めたばかりの人間に、そんな事知る由もなく、碌な情報を出さない海賊達を、苛立ち任せに突き飛ばす！

ティミーは父の非道な行為を止めるでもなく、自らも父と同じように海賊を脅し、突き飛ばしまくる！

この親子を止める事が出来ず、慌ててマリーを捜し回るウルフ！
マリーさえ見つければ、冷静さを失っている親子を止める事が出来るだろうと、アジト内を走り回っている！

ほぼ全ての海賊達の心に、拭い去れない程の恐怖心を植え付けた頃、アジトの外からウルフの叫ぶ声が聞こえてきた！

「リュカさん！ティミーさん！マリーちゃんが見つかりましたー！！外へ出てきて下さーい！」

二人とも、別の海賊の襟首を締め上げていたが、ウルフの声を聞くと海賊を投げ捨てて、はぐれメタルも驚く様なスピードでウルフの元へと駆け付けた！

ホッと胸を撫で下ろすウルフと海賊達…

この件で海賊達は、ウルフに感謝を覚え、今後一際優しく接してくれる様になるのだった…

そして騒ぎの元凶の少女は、外で一体何をしていたのか…
騒動を巻き起こす体質は、やはり遺伝なのかもしれない！

酒と女と男の話（後書き）

今年最後の更新です。

新年最初の更新は、1月1日を予定しておりますが、書き上げられない可能性もありますので、過度の期待は禁物です。

年明け早々、彼等・彼女等の受難が続きます。

平和なのはリユカだけでしょうね…

ご愛読頂き誠にありがとうございます。

また新年も見放さずに、ご愛読頂ければ幸いです。
よろしくお願い致します。

正しい男女関係（前書き）

明けましておめでとございます。

新年1発目からバカ話を披露させていただきます。

正月という事もありますので、正月らしい内容………にはなっておりません！

正月気分を害したく無い方は、お読みにならない方が………
い、いや…読んでほしいんですよ！

私としては皆様に読んで頂きたいのですが………

ま、まあ………こんな感じで今年も突き進みます。

正しい男女関係

<海賊のアジト>

「マリィー！！無事か！？何か変な事されてない？」

マリィを抱いているウルフに、凄い勢いで近付き引つたくる様にマリィを奪うティミー！

「マリィ、心配したんだよ！こんな獣だらけの所で、勝手な行動しちゃダメじゃないか！」

リュカはマリィの瞳を覗き込み、海賊達を脅してた男と思えない程優しい口調で娘を叱る。

「お父様、お兄様…ごめんなさい……………皆さん忙しそうだったから、一人で探検してましたの！」

マリィを見つけ安心したリュカとティミーは、彼女の話聞きながら室内へと入って行く。

「あのね…外の地下室で、こんな綺麗な物を見つけたんですよ！」
懐から赤い宝玉を取り出し見せるマリィ。

「わぁ、綺麗な宝玉だね！冒険をして見つけたんだから、それはマリィの物だね」

マリィに対し、親馬鹿ゲージMAXのリュカ…

「あー！それは俺達がこの間手に入れたレットオーブじゃねえーか！」

大切なお宝を、隠し金庫に仕舞っておいたのに、勝手に持ち出され奪われそうになり慌てる海賊達。

「あゝ！！！？俺達？……………この建物の外にあったのに、何でお前等の物なんだあ？外に落ちてたのなら、誰の物でもないだろう！拾った者勝ちだ！」

「い、いや…落ちてたんじゃなくて…地下室にあったって言ったよ

ね？それって「バギ」

(ドゴッ！)

クレームを付けていた一人が、リュカの風だけのバギで吹き飛び壁に叩き付けられる。

「海賊さん達に質問！この宝玉は誰の物ですか？」

「……………そちらのお嬢さんの物です……………」

「はい。よろしい！」

一方的な論理と、圧倒的な強さで、強引に話を纏めるリュカ……

《ひどい……》

海賊達に同情してしまうウルフ。

騒動も収まり（リュカ達視点）空腹を感じだした彼等は、海賊達の食料庫を勝手に漁り、食堂で遅い夕食を始めた。

海賊達の嘆きの表情を無視して……

其処にバチエツトが悲鳴に似た叫びをあげリュカ達の前に現れた！

「あ、アンタ等……な、何勝手に食ってんだ！？」

「何だよう……飯ぐらい食ったって良いだろ！ケチくさい事言つなよお……」

リュカは食事の手を止めることなく、泣きそうなバチエツトに文句を言う。

「そ、そうじゃねえーよ！食料庫の食い物、全部食いやがって……頭に『つまみを持って来い』って言われたんだよ！なのに何も残って無いじゃねえーか……！」

「残ってるだろ……此処に……！」

そう言うリュカは、テーブルの上に広げてある食料を指差す。

「全部食いかけじゃねえーか！んなモン持ってたら、殺されるだろーが……！」

「じゃ、お前……アレだよ！『食べ物が無くなっちゃったので、僕の子。コを摘んで下さい』って言えば良いじゃん……！」

「お前バカなのか！？今すげえーんだよ！頭達、酔っ払いまくって

すげえー状態なんだよ！あん中にお前の嫁さんも居るんだろ！何とかしろよ！」

「え………やだなあ……」

もはや泣いているバチエツト……

すると奥から、モニカが大声でバチエツトを呼びながら近付いてきた！

「くおらーバチエツト！つまみはまだなのかー！おせーぞテメー……」

「す、すみません頭！こ、コイツ等が（バリント！）ぐはあ……」

言い訳をしようとしたバチエツトに、モニカが酒瓶を投げ付け、それが頭にクリーンヒットした！

その場に倒れ気絶するバチエツト……

「つまみも碌に用意出来ないのかあ！」

さらに奥から、両手に酒瓶を携えたビアンカが、下着姿でやってきた！

「な、なんて恰好をしてんだ……ちょ、服着てよあ……」

リュカは慌ててビアンカに近付き、酒瓶を奪うと自分のマントをビアンカに羽織らせ、他者の目から妻を守った。

「リュカさ……私も優しく包んで下さ……い！」

そして酔っ払ったハツキも奥から現れリュカに抱き付く……下着すら着けていない恰好で……

「うわあ！何で裸なの！？」

慌ててビアンカに羽織らせたマントの中に、ハツキも押し込むリュカ……珍しくテンパっている様だ！

「ねえ……リュカあ……エッチしようよあ………私……準備万端なの……」

リュカのマントから抜け出て、夫に抱き付く妻。

「ああ……ん！私もリュカさんとした……い！」

それを見たハツキもリュカに抱き付き裸を露わにする。

「わ、分かった！分かったから……べ、別の部屋へ行こう！此处は拙いって！」

リユカは二人の体を隠す様に抱き上げ、海賊達に裸を見られない様、別室へと逃げ込んだ！直後、二人の女性の喘ぎ声が響き出す！

それを聞いたモニカは不機嫌な表情になり、カンダタの胸ぐらを掴むと…

「アタイ等も負けてらんないよ！」

と言い残し、カンダタと共に別室へと消えて行く。

後に残るは啞然とした表情のティミー達と海賊達…

そして3人の女性の喘ぎ声が響き渡る…

「そ、そう言えばアルルはどうしたんだ！？」

4人の女性の中でアルルだけが姿を現さなかった事に気付き、酒盛りを行っていたモニカの部屋を覗くティミー。

すると其処にはアルルの姿が…

パンツ一枚で酒瓶片手に床で眠りこける少女の姿が…

「うわぁ！ちょ…ア、アルル…風邪引くよぉ…」

見てはいけないと思いつつも放っておく訳にもいかないので、なるべく裸を見ない様に気を付けながら抱き上げ、側にあるベットに寝かしつけるティミー。

すると突然目を覚ましたアルルが、ティミーに抱き付きベットに押し倒した！

「くおら！やっぱりお前も父親と同種かティミー！裸の女を見たら押し倒すのか！？」

例に漏れず酔っ払っているアルルは、ティミーの上に馬乗りになると、手にした酒瓶から勢い良く酒を飲み、下にいるティミーに絡み出す！

「ち、違う！誤解だよ！僕はアルルをベットに寝かせよ「うるしやい！」

アルルは叫ぶと、状況を説明するティミーの口に酒瓶を突っ込み、無理矢理酒を飲ませた！

「男はみんな野獣だろ！お前も野獣らしく酒を飲めえ！」

酒瓶に半分以上残ってた酒は、無理矢理ティミーの体内へと入って行く！

初の飲酒となるティミーにとって、この酒は非常に強すぎる様で、飲み終わると同時に意識は彼方へと飛んで行った！

そしてアルルも眠りに付く…ティミーの上で…

しかも途中寒くなったのか、ティミーの服を無理矢理剥いで…ベットのの上には半裸の男女が…

ティミーが襲われる(？)のを見ていたウルフは巻き添えを恐れ、二人の馴れ初めを見る事無く逃げ出し食堂へと戻っていった…

「アルルがあんなに酒乱だったとは…女ってこえー！」

まるで他人事の様に呟くウルフ…しかし彼にも受難は訪れる！

食堂に戻って最初に目に入ったのは、テキーラをラツパ飲みしているマリーの姿だった！

しかも例の如く半裸で！

「げえ！な、な、な…」

あまりの出来事に言葉が出ないウルフ！

何がどうして、どうなったのか？

受難は続くよ何処までも…

正しい男女関係（後書き）

今作品での勝手に設定

各キャラの年齢（凡そ）

リユカ約27歳

ビアンカ約27歳

ティミー17歳

マリー7歳

アルル16歳

ハツキ17歳

ウルフ13歳

エコナ18歳

カンダタ25歳

モニカ24歳

実はリユカより年下なカンダタ…

最後に…これはフィクションです。

未成年の飲酒は法律で禁止されております。

良い子も悪い子も、酒豪も下戸も、真似してはいけませんからね！

未成年の飲酒は禁止です！

<海賊のアジト>

「（ゴクツゴクツゴクツ…）ぷはあゝ！このお酒キクうゝ！！体が
ポカポカしてきましたあゝ！！！」

体に凹凸が無く100%幼児体型の7歳児が、120%オッサン臭
い振る舞いで酒瓶を空にして行く。

「だ、誰だ！？子供に酒を飲ませたのは！！？」

遠巻きに眺めている海賊達を睨むウルフ。

先程までは厳つい顔に恐怖をしていたのだが、彼女の父と兄の恐ろ
しさの方が勝り、この状況を引き起こしたと思われる海賊達を恫喝
している！

「ち、違う！！俺達は何もしてねえー！あのこえー男の娘に近付く
わけねーだろ！…その嬢ちゃんが勝手に飲み始めたんだ！」

「うわぁ…最悪じゃん！リユカさんやティミーさんにバレたら殺さ
れる…」

慌ててマリーの服を集め着せようと試みるウルフ…

「いやあゝ！！暑いのおゝ！」

しかしマリーは拒絶し、最後の1枚まで脱ごうとパンツに手をかけ
た！

「ぎゃー！！ダメ、ダメ、ダメー！！！！それ以上脱がないでー！！
こんな状況を見られたらマジでヤバイから！」

彼女の父兄の突然の登場に恐怖したウルフは、マリーとマリーの服
を抱き抱え、脱兎の如く空いている部屋へと逃げ去った！

慌てて扉を開けた部屋は、既に先客が居た。

モニカとカンダタが組んず解れつ男女の格闘を行っていた！

「こ、ごめんなさい！！間違えました！」

慌てて扉を閉め、隣の部屋を開ける！

しかし其処はリユカ達が使用していた！

1本しかない剣を取り合う様な男女のファイティング！

平時時であれば扉の隙間から観戦するのだが、現在彼は爆弾を抱えている！

しかもその人は爆弾の製造者の為、気付かれる前に逃げ出すウルフ！更に隣の部屋へ慎重に入るウルフ！

やっと空き部屋を見つける事が出来た様だ！

ともかくマリーを寝かしつけようと思い、ベットへと連れて行くウルフ…

そして気付く！

最後の1枚が無くなっている事に！！

例えばリユカの娘でも、ポピーやリユリユの様な大人の女性なら、この状況を我慢は出来ないであろうが、相手はマリーだ…

7歳の幼女相手に理性が吹っ飛ぶ事などウルフには無い！

慌てて最後の1枚を探しにその場から離れようとするウルフ…

しかし、更なる受難は訪れる！

突然マリーがウルフに飛び付き、キスをしてきた！

それだけなら問題は無いのだが、勢い良く飛び付いて来た為、それ程筋力のないウルフは押し倒される形となり、床に勢い良く後頭部をぶつけ気を失うのであった！

この後、二人に何があったのかは分からない…

マリーのキスまでで記憶が途切れたウルフには、何が行われたのか知る由もない…

酔っ払った幼女のする事など想像も出来ない…

分かってしている事は、翌朝この部屋で全裸の男女が目を見ました事くらいだ………

激しい頭痛が響く中、1晩を過ごした部屋から抜け出し、静かに食堂へと赴くウルフ……

しかし隣の部屋の扉が開き、最も遭遇したくない男と遭遇してしまった！

「お！？おはようウルフ！昨晚はどうだった……お前……ロリコンだとは思わなかったぞ！」

「な、何を言うんですかぁ！違います……そう言うんじゃないです！あれは違うんです……！」

声を裏返ししながら、言い訳にならない言い訳をするウルフ。

「だってお前……昨日、裸のマリーを抱き抱え寝室に入って行ったら？ほら、僕の使っていた部屋に落ちてたぞ！」

そう言つてマリーのパンツを手渡すリュカ。

リュカは知らない……マリーが泥酔状態だったことを……

だからお互いの同意の上で励んだものだと思っている……

「まあ……マリーが選んだのなら、お前の性癖は気にしない……だが娘を泣かせたら絶対に許さないからな！」

《拙い！妙な誤解されてる……！でもマリーちゃんの飲酒がバレた方が怒る様な気がする……『お前、子供に酒飲ますって、なにやってんだ……！』って……アンタこそ何やってんだ……！って言いたいけど、

絶対そんな事関係ないし……そんな常識通じない人だし……》

マリーのパンツを握り締め、俯き考えるウルフ……

其処にマリーが部屋から出てきて、何時もの様に可愛らしく挨拶をする。（もちろん服は着ている）

「お父様、ウルフ様、おはようございますう」

「おはようマリー。昨晚はどうだったのかな？」

「やだぁ……お父様……！ちよっとだけ痛いですう」

「がつつきやがってコノヤロー！少しは手加減しろよな！あはははは……」

マリーの痛みは100%二日酔いによる頭痛の事なのだが、盛大に勘違いをするリユカ。

そして2人の勇者を捜しに、その場を後にする…

ノックもせず各部屋の扉を開けまくるリユカ…

そしてモニカの私室を開け、歓喜の声を響かせる！

「わぁお！とうとうヤツたか我が息子！！」

其処にはパンツ1枚で、抱き合う様にベッドで眠るティミーとアルルが…

そして二人は目を覚ます…激しい頭痛を伴って…

「イッテテテ…何なんだ…この頭痛…わぁー！！」

隣で寝ているアルルを見て驚き叫ぶティミー！

「つと…うるさいですよ…大声出さないで…ええええええ！！」

互いの裸と状況を見て、叫び喚く若い男女！

「ごめんね…パパ氣が利かなくて…この部屋に誰も入らない様に見張ってるから、ごゆっくりどうぞ！時間はたっぷりあるからね！」

そう言つて扉を閉めるリユカ…

残された二人は互いを見つめ思い出す…裸であることを！

慌てて服を着るティミーとアルル。

「ご、ごめん…ち、違つんだ…」

「ヤダ…嘘…違つたのよ…」

互いに支離滅裂な事を言いながら、背中を向け合い服を着る二人。

服を着終え、少々の冷静さを取り戻し、ティミーとアルルは昨晚の事を話し合おうとする。

「えーと…僕の憶えている事を説明するね！」

「ええ…お願いします…」

「えーと…えーと…憶えてる事は…憶えてる事は…何にも憶えてない！！何で僕裸だったんだ！？」

そしてまた混乱に陥る二人…

悲鳴に近い叫び声を上げて身悶える…

部屋の外で待機しているリュカが、ニヤケながら呟いた…

「激しいなあオイ！」

こつちでも勘違いをしている幸せな父親…

この混乱は収まるのだろうか？

男の責任

<海賊のアジト>

昨晚の食べ残しを朝食代わりに食するリュカ…

その横には、互いの顔を見る事が出来ず、頭痛と自己嫌悪で俯く二人の勇者。

その隣には、リュカの動きにビクつくウルフと、妙にイチャついてくるマリーが…

そして其処にビアンカとハツキが現れる。

二日酔いによる頭痛と吐き気と互いの気まずさを纏いながら…

「……ねえリュカ…私達…何があつたの？」

自分とハツキを指差しながら、恐る恐るリュカに尋ねるビアンカ。

「いやぁ…僕の口からは言えないなぁ…こんな大勢の前では…」

目覚めると裸で抱き合つて寝ていたビアンカとハツキ…

これ以上ないくらいの最悪なシチュエーションに、今にも吐きそうな二人…

誰も何も喋らない…リュカとマリーだけが楽しそうに鼻歌交じりで食事をするだけ…

他者の表情に気付く事もない…最早自分の事で一杯の様だ！

リュカも我が子の事を話題に出さない…気の利くパパのつもりの様だ。

そしてこのアジトの主が、大柄な男を伴い姿を現す。

「おう、おはようさん！……何だぁ、随分と暗いじゃないか！」

するとリュカ以外の全員が、頭を押さえて文句を言う。

「声が大きい…」

「何だぁ…二日酔いかぁ！情けないねえ…」

やれやれと言った表情で、アルルの正面にカンダタと共に座るモニカ。

「アルル…昨日の話だけど……協力するには条件がある！」

急に真面目な表情で話し始めるモニカ…

「条件…ですか…？」

慌てて座り直し真面目に問いかけるアルル。

「ああ…と言ってもアンタにじゃない！カンダタに対してだ…」

そう言うとな隣に座るカンダタに視線を移すモニカ…

皆の視線がカンダタへ集中する。

「この冒険が終わり、世界が平和になったら…ア、アタイと…け、け、結婚してほしい！！」

モニカが耳まで真っ赤に染め上げ、恥ずかしそうにカンダタにプロポーズをする！

そして不安気にカンダタを見つめるモニカ…普段男勝りでも、こう言う時は可愛らしく見える。

しかし中々返答しないカンダタ…

「ダ…ダメ…？やっぱアタイじゃ…」

「そ、そうじゃねえ…そう言うんじゃねえーんだ！」

カンダタはモニカに向き直り、正面から瞳を見つめると本心を語り出す。

「俺は以前…ロマリアから逃げ出した時に、悪党から足を洗うと心に決めた…そんな時にお前から海賊に誘われ、答える事が出来なかった！かと言って『海賊を辞めて俺に付いて来い』とも言えない…お前には、お前を慕う手下が大勢居る…そいつ等まで路頭に迷わすわけにはいかない！……だからあの時は黙って姿を消したんだ……だが、お前の気持ちはよく分かった！だから俺からも条件を出す！」

「じよ、条件…？」

「ああ…俺と結婚するのなら、海賊から足を洗う事だ！」

「海賊を…辞める…」

モニカは呟き、昨晚同様遠巻きに眺めている手下達を見る。

「…どうした…やはり手下達の為に、海賊業を辞める訳にはいかな
いか？」

即答出来ないモニカに、優しく声をかけるカンダタ…

「頭あゝ…俺達の事を気にする必要はねえーですぜ！」

すると海賊の一人がモニカを気遣い語り出した。

「俺等もそろそろ海賊から足を洗おうと考えてたんですよ！…なん
せつい最近、海賊っただけで俺等をボコボコにする親子が現れたも
んで…もう嫌気が差したんでさあ…」

海賊達がリユカ親子を見ながら、辟易と語る…

「そうですわ！悪党に人権なんてありませんのよ！ね、お父様！」

「そうだね」

《ひでえ…やつぱりリユカさんの娘だよ、この娘……俺、手を出
した事になっちゃってるよ…どうしよう…》

ウルフがたん瘤が出来てる後頭部をさすりながら、哀れみの目で海
賊達を見渡す…

「で、でも良いのかい…アンタ達、海賊辞めた後、食っていけるの
かい！？」

「そ、それは………」

モニカが最も気にしている事…それが解決しないと、モニカは海賊
を辞める事が出来ない…

暫く沈黙が包む。

皆が幸せになれる方法を模索して…

「………こんなのはどうでしょう…」

最初に口を開いたのはウルフだ…

「俺達の旅が終わった後、俺達の船は海賊…イヤ違った、この人達
に譲渡するのは………あの船を使って、海運業とかを行えば…」

パーティーリーダーのアルルに尋ねる様に提案するウルフ。

「うん…良いんじゃない！旅が終われば、私達に船は不要ですもんね！」

「素敵ですう！さすがウルフ様あ！！格好いいですう！」

愛らしくはしゃぐ少女は、先程『悪人に人権は無い』と言った少女とは同一人物に思えない…

そんなマリィに抱き付かれ、疲れた表情で力無く笑うウルフ…

それを見て嬉しそうに微笑むリユカ…

ウルフはもう逃げられそうに無い…

「カンダタ！アタイ…アタイ……っん！」

モニカが歓喜の言葉を言おうとするのを、カンダタがキスで遮った！

「……その先は俺から言わせてもらおう！…モニカ…俺と結婚してくれ！」

その言葉を聞き、海賊…いや元海賊達から喜びの歓声があがる！

その喜びの叫び声を聞き、二日酔いチームの面々が頭を抱えて蹲る…

喜びと苦痛が同居する中、カンダタとモニカは長く濃厚なキスを続ける！

他人の色恋に興味がないリユカは、詰まらなそうに二人を見つめ不要な発言をした…

「…にしても、男の趣味が悪い女だ！」

「あんだとこの野郎！ぶっ殺すぞコラ！！」

カンダタとの長いキスを打ち切り、リユカに向かい乱暴な言葉を吐き続ける！

カンダタに押さえられて無ければ、襲いかかっていただろう！

「あはははは！取り敢えずはおめでとうカンダタ。とっても手のかかりそうな奥さんだね！」

そんなモニカを見て、爆笑しながら祝辞を述べるリユカ…

「旦那…ありがとう！でもまだ夫婦じゃねえーよ！婚約しただけさ…結婚は世界が平和になつてからさ！」

カンダタとモニカは互いを見つめ頷き合う。

「気にする必要無いのに…僕なんかはプロポーズから2日後に結婚式を挙げたんだよ！周囲の人達が『お前は放っておくと浮気する！さっさと結婚しろ！』って言われてさ。…まあ、あまり関係なかったけどね！」

リュカが笑いながら自身の事を語る…

「笑い事じゃないだろ…それ！」

呆れるカンダタ…リュカなりの祝の言葉なのだろうと、勝手に思う事にした…

望む望まざるに拘わらず、新たに3組のカップルが誕生したアルル達一行。

この先の旅に影響はあるのだろうか…
きっと影響あるのだろうと思われる…

男の責任（後書き）

ティミー君とウルフ君は、どう責任を取るのか！？
つーか責任取る必要あるのか？

援護

<海上>

アルル達一行はポルトガの北に浮かぶ島国『エジンベア』へ、船で向かっている。

新たに仲間に加わった元海賊モニカとその手下達の情報と、カンダタが各地へ向かわせた元盗賊の情報を加味して、次なる目的地を『エジンベア』へと定めた。

カンダタの元盗賊情報によると、アリアハンの西にある『ランシール』と言う町には大きな神殿があり『地球のへそ』と言うダンジョンで勇気を試す試練が行われている。

その試練に参加してダンジョンを探索すると、ダンジョン内には『ブルーオーブ』が奉られていると言われている…

しかしモニカの元海賊情報によれば、その神殿に入る為には『最後の鍵』を入手する必要がある、それがこれから赴くエジンベアに奉られているらしい…

『最後の鍵』に関しては、エジンベアの城に奉られているだろうと言う以外、城の者ですら何処にあるのかを知らないそうだ…

「何だそのいい加減な情報は!？」

リユカなどは、元とは言え盗賊も海賊も信用していない為、情報の信憑性に疑いを持ったのだが、他に行く当てもなくどうする事も出来ないのです、その情報を頼りに動く事となった…

「お父様…例えば情報が間違っても、新たな情報が見つかるかも知れませんか」

愛娘の一言によりリユカも大人しく従うのであった。

そんなアルル達一行の前に、巨大なイカのモンスター『テンタクルス』が3匹現れ、アルル達を攻撃している！

「メラミ」

魔法使い時代に憶えたウルフのメラミのお陰で、1匹のテンタクルスは倒したが、まだ2匹残っている。

テンタクルスは海中に潜り、魔法の威力を軽減させ攻撃を仕掛けてくる。

「くっ！厄介ねえ…直接攻撃が届きにくいわ！」

テンタクルスは海から頭（？）を出すと、その長い触手を使い攻撃をしてくる。

そして直ぐに海中へと身を隠すのだ！

アルルもメラやギラを使つては居るのだが、如何せん威力が低すぎて決定打にはならない。

しかしアルル達も成長してきたのだ！

黙つてやられているばかりではない！

海中から姿を現した瞬間を狙い、ハツキが船から勢い良くジャンプして、テンタクルスの頭（？）へと強烈な蹴りを食らわせる！

そして蹴りの反動を使い、器用に甲板へと着地する。

「ナイス、ハツキ！これであと1匹よ！」

華麗に舞ったハツキに向け、左手親指を立てて祝福するアルル。

だがその隙を付いて残りの1匹が、船に乗りかかりアルルの足を払った！

船が傾いた事も相まって、バランスを崩し倒れるアルル…テンタクルスは間髪を入れずアルルに襲いかかってくる！

皆がバランスを崩し援護にいけない中…

「ア、アルル！！…ライデイン！！」

咄嗟に動いたのは別世界の勇者ティミー…

勇者のみが使える魔法『ライデイン』でテンタクスルを1撃で葬り

去る！

そしてアルルの元へ近付き抱き起こすティミー…

「あ、ありがとう…ティミー…」

「あ、いや…その…危なかったから…つ、つい咄嗟に…」

互に見つめ、顔を赤らめる二人。

あの晩の事もあり、互いに意識しているアルルとティミー…

純情と真面目が服を着ている様な二人にとって、裸で抱き合って寝ていただけで、別次元の事まで意識してしまっている様だ。

そんな二人はカンダタや水夫等に、囃し立てられ仲間達の元へと戻る。

ハツキやウルフだけでなく、ピアンカやマリーもニヤつき眺めている…が、リユカだけが眉間にシワを寄せて二人を…と言うよりティミーを睨んでいる。

「あ、あの…リユカさん…どうしました…？」

不安に思いアルルが尋ねると…

「………ティミー………次もお前が戦うのか？」

珍しく苦しそうに問いかけるリユカ。

「………」

何を言いたいのか理解したティミーは、黙る事しか出来ない。

「アルル達の中に『ライデイン』を使える者は居るのか？」

「………」

リユカの問いには、もちろん誰も答えない。

「確かに先程アルルは危険な状態だった…助けたくなるのは分かるよ。でも…アルルの成長の妨げにしか見えない！…ティミー…お前は『スクール』が使えるのだから、さっきは防御力の強化だけで良かったんじゃないのかなあ？お前が倒す必要は無かったんじゃないのかなあ？」

リユカの口調は優しい…

しかし表情は苦みを帯びている。

その意味を理解しているティミーは苦しくなる…自分のした事の意味に。

そんなティミーが哀れに見えたのか、又は助けてくれた恩返しなのか、アルルがティミーの援護に回りリユカに突っかかる。

「じゃ、じゃあ私がライデインを憶えます！…私だって勇者です。私がライデインを憶えて、今後ティミーが前戦に出ない様にしますから！目の前で見せてもらったから直ぐに憶えてみせますよ！それで文句はないでしょ、リユカさん！」

そう言つとティミーの手を取り、船首へと向かうアルルとティミー。水夫の邪魔にならない船首で、ティミーに魔法を教わる様だ。

「リユカさん…ちょっと言い過ぎじゃないですか…？咄嗟の事だったのだから…思わず攻撃呪文を唱えちゃったんだと思いますよ…」
多様な場面でティミーに共感する事の多いウルフが、リユカの苦言に意見する。

「仲間を救つたのだから、父親として褒めてあげるべきでしょう！」
「…救つた…？確かに今は救つたよ…でも、未来はどうだろうか？何度も言うが、今急に僕等が元の世界へ戻ったら、君らはどうなる？さっきのイカが、また現れたら…今のウルフ達だけで倒せたのか？みんな無事で戦闘が終わつたのか？」

「そ、それは……………」

リユカは首を左右に振り溜息を吐く。

「ウルフだって偉そうな事言つてられないんだぞ！」

「え！？お、俺が何ですか！？」

リユカの言葉に目を丸くして驚き怯む。

「さっきみたいな場面では、魔法が頼りなんだ！なのにメラミで1匹倒した程度…先程の戦闘で活躍したのは、ハツキ一人だ！己の身体能力を最大限に駆使して、華麗に舞い敵を倒した！それに引き替えウルフ…君はメラミを放っただけ…せめて3匹に大ダメージを与

えられるベギラマくらいは唱えられないと……」

リュカの落胆な口調に言葉が出ないウルフ……

「お、お父様！そうは言いますが、ウルフ様のメラミは凄かったですわ！1発でテナクルスを倒したのですから！」

正確には1発ではない！

それまでにアルル等の魔法で、ダメージを与えておいた結果である……しかし最終的に敵を倒したのは、ウルフのメラミである事に違いはない。

「マリィ……お前に戦闘の何が分かる……？」

皆が、溺愛する娘の言葉でリュカが怯むと思っていたのに、渋い表情のまま苦言は続いた。

「今、お前達には守る者がある！この船と、船を動かしてくれている水夫達だ！誰かを守りながら戦うという事は、非常に難しい事なんだ。負ければ自分だけでなく、守ろうとした者の命も失う事になる……『頑張りました』じゃ意味がないんだよ」

マリィとウルフだけでなく、聞いていた者全員が俯き黙る……

「マリィは魔法の威力が強すぎて、味方に被害を出しかねない……逆にウルフは威力が弱すぎて、味方を危険に晒してる……」

短時間の沈黙が辺りを過ぎる。

そして瞳に涙を浮かべたマリィが、リュカを睨み言い放つ！

「じゃあ、私とウルフ様で魔法の勉強を致します！そして私は威力調整を……ウルフ様は強力な魔法を……それぞれマスターしてみせますわ……！」

そう言い、袖で涙を拭くと、ウルフの手を引き船室へと走り去って行く。

甲板にはリュカ・ビアンカ・ハツキ……そしてカンダタ・モニカと幾人かの水夫達。

皆が居たたまれない気持ちで作業をしている。

それに気付いたビアンカが、付近に先程リュカに叱られた4人が居ないのを確認し、リュカに本音を話させる。

「相変わらず……人を操る事が上手いわね……」

「……真面目なヤツ程操りやすい!」

夫婦の表情は笑顔だ……いや、人の悪い笑顔だ!

「え!?!、どういう事ですか!?!」

まだまだ若いハツキが問う。

カンダタとモニカも身を乗り出して真相を聞きたがる。

「リュカは別に怒ってなどいないのよ。ただチャンスを利用しただけ……」

「「チャンス?」」

「そ!テイミーとアルルちゃんは、お酒の勢いで急接近したらしく、妙に意識し合ってるから、上手くいく様に切っ掛けを与えたのよ!」つまり……魔法の個人授業を介し、男女の仲を進展させようとしたのだ!

「じゃ……ウルフとマリーちゃんは?」

「あっちも同じよ……何があったか分からないけど、何かがあってマリーがウルフ君の事を気に入っちゃてるから、この親馬鹿男はマリーの手助けをしてるのよ!」

皆が驚きと呆れの混ざった表情でリュカを見つめる……

「アイツ等に喋ったら殺すぞ!」

そしてリュカは人の悪い笑顔で皆を脅す……

誰も喋らない……喋りたくないのだろう。

この男に拘わりたくないから!

援護（後書き）

リュカの人の悪さは天下一品？

そんなリュカを最も理解しているのは妻のピアンカ！

さすがラブラブ馬鹿夫婦！

傍迷惑この上ないですね。

この夫婦の被害者である若者4人に、励ましのお便りを！

田舎者

<エンジンベア>

元海賊の操る船は、危なげもなく目的地の地『エンジンベア』へと到着した。

高い城壁に囲まれた町は広くはないが、どこことなく上品な町並みに感じる穏やかな造り。

そんな町の中央にそびえる城に向かい歩くアルル達…モニカ以下元海賊達に船を預けて。

「な、なあ…俺達…浮いてないか？」

「はあ？ちゃんと地面を歩いてるよ。浮かび上がってないよ」
場違いな雰囲気には怯むカンダタ。

「そう言う事じゃねえーよ！場違いじゃねえかって言ってるんだよ！」

「？」

今一ピンとこない表情のリユカ…小首を傾げ不思議そうにカンダタを眺める。

「…さつき思い出したんだけどよお…以前、俺の知り合いの商人が此処に行商に訪れたんだが…『田舎者は帰れ』って言われ、城に入れなかったみたいなんだ…」

「変な国！グランバニアじゃ誰でも入れるのにね！？」

「…それはそれで拙いでしょ！」

控えめなウルフの突っ込みに不満があつたが、今日は我慢し城へと向かうリユカ。

何も考えて無いかの様に、皆の先頭をビアンカと共にイチャつきながら歩いてく。

「はあ………悩みとか無さそうな人よね！」

アルルの呟きに、ティミーやウルフ・カンダタまでもが頷いた。

城門を潜り、城の正面入口へ進むアルル一行。

しかし扉の前には頑固そうな門兵が1人…

リユカは気にせずすり抜けようとするが、門兵は両腕を広げて進入を阻止する。

「止まれ！此処は由緒正しきエンジンベア城！貴様等の様な田舎者が入って良い場所ではない！立ち去れ！！」

門兵はリユカ達を見下す様な目で睨み付ける。

「い、田舎者………？」

門兵の言葉に反応したのはビアンカだった。

「あ！拙いなあ……」

呟く様なビアンカの一言に、些かの恐怖を感じるリユカ。

体を震わせ、怒りのオーラを放つビアンカ…

「田舎者って私の事言ってるの！？」

そんな妻を見て、宥める様なジェスチャーで門兵とビアンカの間立つリユカ。

「まあまあ！落ち着いてビアンカ……君の事じゃないよ！こんな絶世の美女を見て田舎者なんて言うヤツ居ないよ！………ね！？」

一生懸命ビアンカを宥めるリユカは、同意を求めるかの様に門兵に問いかける。

今まで門兵には、リユカの体が邪魔をしてビアンカの事がよく見えなかったのだが、同意を求める為、リユカが振り向いた時に絶世の美女を見る事が出来た。

その姿は怒気を孕んでおり、両手には紅蓮の炎が宿っている…
素人目にも分かる途轍もない魔法力だ！

辺りは絶世の美女から沸き上がる炎のお陰で、温度が上がりかなりの暑さになってるのだが、門兵は青くなり震えている。

「ビアンカ…ビアンカ！…落ち着こうよ…こんな所で彼を消し飛ば

しても、何の解決にもならない！むしろ問題が増えるだけだ！だから落ち着いて！」

殺意を帯びた瞳で睨みながら、門兵へと一歩踏み込むビアンカ……

「ま、間違えちゃったあゝ！ぼ、僕……寝不足で寝てたみたい！……何か変な寝言、言っちゃいましたか？ご、ごめんねえ……あ、あは……あはは……あはははは……」

門兵は通路の端で小さくなり、うわずった声で一生懸命言い訳をする。

「そ、そうだよね！寝言だよね！大変な仕事だもんね……寝ちゃうよそりゃ……」

そう言いリュカは、門兵を庇う様にビアンカを城内へと進ませる。門兵とすれ違う際ビアンカは、魔王も怯む視線を投げ付け先へ進む。アルル一行が城内へ入ったのを見届けた門兵は、力無く蹲り呟いた……

「この仕事……こんなに怖かったけ？」

重い沈黙の中、城内を暫く進むアルル一行。

入口から離れ、誰も居ない空間に來るとリュカが蹲る！

「……くっ……うううう……」

「リュカさん、どうしました……！」

アルルが心配で思わず声を掛けた……

「くっくくく……あはははははははは……！」

リュカは腹を抱えて笑い出す！

「ふふふ……あははははは……！」

それを見たビアンカも同じように笑い出した！

状況の理解出来ないアルル達……

「この夫婦……最悪だ……」

状況の理解出来たティミーとマリィ。

笑いの収まったりリュカに、マリィが確認の為問いたです。

「お父様…お母様…先程のご立腹は、お芝居ですの？」

「うん。だってカンダタがさ、『田舎者は城に入れない』って言ったじゃん。しかも『俺達見た目が田舎者』とも言ったじゃん。門前払いを喰らう可能性があったからさ、ビアンカと相談したんだ！」

リユカは妻を抱き寄せ、爽やかにキスをする。

「そうなの！リユカがね、『田舎者』って言われたら、両手にメラを灯して怒って見せようって……どうだった、私の演技は？」

そして夫に抱き付きイチャイチャ始める馬鹿夫婦。

そんな夫婦を見て、胃を押さえるアルル…

ティミーはアルルの肩に優しく手を乗せ、常備薬の胃薬を渡した。ウルフとマリィは声を揃えて呟いた。

「「酷い…」」

城内を暫く探索すると、地下に異様な空間を見つけた。

そこは、それ程広くない通路に大岩が3個…

少し奥の床には、かなりの重量がなければ反応しないスイッチが3つ…

「何だ此処は？」

リユカが不思議そうに周囲を調べる。

「お父様、きつとパズルですわよ！3個の岩に、3つのスイッチ！この岩の重みでスイッチを押すんですわ、きつと！」

マリィが瞳を輝かせ、この仕掛けの謎を解いた。

「何そのめんどくせー仕掛け！？何処の馬鹿だよ、こんなの造ったヤツは！」

「そ、そうは言いますが…結構大変ですよ…この岩、重いですから！」

ティミーが一生懸命岩を動かそうと押している…

それを見てアルルやカンダタも一緒に押すが、あまり動かない…

「…やれやれ……めんどくせーなあ…」

そう言いリュカは、手近な岩を両手で挟み、いとも簡単に持ち上げた！

「『え！？』」

「何で異世界まで来て、奴隷時代を思い出さなければならんだ！？」

そう愚痴りながら、普段歩くのと同じペースで岩を運ぶリュカ。それを啞然と見つめるアルル達…

「だからムカつくんだよ、あの人！こんだけ凄い人なのに、普段は何もしない…」

ティミーが小声で父親に悪態を吐く。

妻は夫の凄さを再確認し、瞳を潤ませ更なる恋へと落ちて行く。

3つのスイッチを3つの岩で作動させると、更に奥へと続く隠し通路が現れた。

一行はリュカを先頭に奥へと進む。

其処には古ぼけた奇妙な壺が1つ…

「あれえ？これが『最後の鍵』？壺じゃないのこれ！？」

リュカは壺を手に取り、中を覗き壺を振る。

「中にも鍵は入ってないよ」

「どういう事ですかねえ…？」

アルルが壺を受け取り、不思議そうに小首を傾げる…

そんな彼女の仕草を見て、胸が高鳴るティミー…

そしてそれを嬉しそうに眺めるリュカとビアンカ…

果たして最後の鍵は手にはいるのか…

勇者カップルの恋は実るのか…

ウルフとマリーも気になりますね！

田舎者（後書き）

消え去り草いらず！

リユカがあんな物、手に入れたら碌な事に使いそうにないので…

それに美人って、マジ切れすると本当に怖いよね！

あの門兵さん、この日を境に「田舎者」って言えなくなったそうです。

物語に関係ないけどね。

スー

<スーへと続く大河>

今アルル一行は、『スー』と言う村へと続く大河を、上流へと船で進んでいる。

エンジンベアで見つけた壺の価値が分からず途方に暮れていたのだが、マリーが『エンジンベアの王様に聞いてみましょう！』と常識的な提案をしたので、王様への謁見を敢行した。

しかも、よく考えたら他国の城へ来ておいて、王様への謁見を行わず、勝手に家捜ししていた事に後から気付いたのだ。

本来なら失礼の極みなのだが、エンジンベア王は気さくな性格な為、怒られる事もなく直ぐに目通りが叶った。

どうやら門兵が皆を追い返す為、王様は暇を持て余しているようだ。

エンジンベア王に『最後の鍵』の事を話し、城内の地下に壺が隠されていた事を告げると、「うむ…ワシは先代から『乾きの壺があれば最後の鍵を手に入れられる』としか、聞いてはおらぬ…その『乾きの壺』は元々『スー』と言う村の部族の宝でな…先代が勝手に持ってきてしまったので、ワシにはよく分からのだよ！『スー』は此処より西の山奥じゃ。行ってみると良い」

と言う事で、早速船に乗り込み、西の『スー』へと向かうのであった。

モニカ達は以前、スーに行った事があり複雑に入り組んだ大河でも迷うことなく目的地へと進む事が出来た。

それでもモンスターは襲ってくる！

またもや3匹の『テンタクルス』に襲われたアルル達。

ティミーなどと思わず身体が動いてしまったのだが、それを手で制

しアルルが『ライデイン』を唱える。

稲妻が1匹のテンタクルスへ直撃をし絶命すると、ウルフが『ベギラマ』を唱え、残り2匹に大ダメージを与える。

最後にマリーが『イオ』を唱え（『イオ』と言う発声が無ければ『イオラ』と思う様な威力）敵を葬り去った。

アルルを始めウルフ・マリーは確実に成長している。

そんな自分たちの成長を『どうだ！』と言わんばかりに、リュカの
前へ姿をさらす……が、当のリュカは妻とイチャついており、戦
闘を見てはいなかった様だ。

「……な！？」

あまりの悔しさに言葉が出ない3人……

そして何時か認めさせてやると心に誓い、更なる成長へと修練を重
ねて行く……

リュカの行動がワザとである事に気付かず……

<スー>

一言で言えば『田舎』……

今まで見たどの田舎より田舎……

それがスー族の村『スー』である。

そんな田舎に辿り着くや、アルル達は村人に奇異の目で囲まれた。

「旅人、旅人！」

「珍しい、此处、旅人来る……お前等、何用？」

皆、外からやってきた客に興味津々の様だ。

「あ、あの！『最後の鍵』についてご存じの方は居ますか！？もし
くは、この『乾きの壺』の事でも良いです！」

アルルが壺を掲げ、寄ってくる村人達に質問をする。

すると一人の老人が前に出てきて…

「そんな事、知らん！そう言う事、酋長に聞け！それより、お前に聞きたい！この村の東、新しい町、あったか？」

「え？この村の東に……いえ、無かったと思いますけど…」

アルルが丁寧に応えると、老人は寂しそうな瞳で語り出した。

「昔、新しい町、造る、言って、この村、出て行った、男居る！やっぱり、無理…」

そして老人は去っていった…

アルル達も気にはなったのだが、先に用件を済ませる為、村の奥の酋長の家へと向かう。

其処では、年老いた酋長がアルル達を快く迎え入れてくれた。

アルルは今までの経緯を話し、壺の事を尋ねる。

「うむ、その壺、我が村の！昔、エジンベア、盗んだ！でも、ワシ等、怒らない！ワシ等、心広い！」

「では…最後の鍵の事については…」

「うむ、知ってる！村から西、海の真ん中、浅瀬ある！そこで使う！鍵、手に入る！」

大雑把ではあるが、最後の鍵の情報を手に入れたアルル達。

酋長宅より退室しようと見回すと……リユカが居ない事に気が付いた。

あのトラブルメーカーが野放しな事に気付き、慌てて探し回るアルル達！

案の定、村で女性をナンパしているリユカを発見する。

「父さん…何やってるんですか！！」

ティミーの大声に、リユカと楽しげに会話していた女性が驚き、逃げ出してしまった。

「あ！あ…もうちょっとだったのに………」

「何がもうちょっとですか！…最後の鍵の情報も手に入れた事です

し、行きますよ！ナンパなんかしている場合じゃありません！」

そう言うティミーとアルルにマントを引っ張られ、みんなの元へ合流するリュカ。

合流し、リュカの行動を皆（妻）に報告するアルル。

ビアンカのお小言が炸裂すると思っていたアルル…

だが…

「もう！私が居るでしょ！」

と、リュカの頭を自分の胸に抱き、イチヤイチヤし始める。

啞然とし息子であるティミーに目で問いかけるも…

目を閉じ黙って首を左右に振るだけ。

どうやら言っただけ無駄との事だ。

モニカ達が出発の準備をしてる中、夫婦の甘い声が船内へ響き渡る。苛つく心を抑えつつ、モニカ達の手伝いをするアルルとティミー。

マリーなどは「ラブラブで羨ましいですう」と言い、ウルフへ擦り寄ってくる。

色々な恐怖から、無碍にも出来ないウルフは、マリーにされるがままの状態だ。

カンドタは、夫婦に当てられ高ぶったのか「俺達も…」とモニカに言い寄り「出発の邪魔だよ！」と股間を蹴られ蹲る。

それをハツキが不機嫌な目で見下し「馬鹿じゃないの……………」と…

……

アルル達みんなの心の苛つきは、全てリュカの所為である事は言うまでもない。

事を終え、爽やかに皆の前に姿を現したリュカに、更なる苛つきを感じたアルル達…

次の目的地を告げるのも忘れ、船は動き出した…

船長のモニカも、目的地を聞き忘れている。

短時間だが、アルル達に迷走航海が続く…
リュカの一言まで迷い続けるのだから…

やり甲斐

<海上>

スーからの大河を抜け、左側に陸地が見える様進むアルル一行：不意にリュカがモニカへ質問する。

「…今、何処に向かっているの？」

「何言つてんだ、お前！？何処つて………何処？」

呆れた口調でリュカを見下したモニカだが、自分も行き先を知らない事を思い出し、間抜けな口調でアルルに問いかける。

「何だよ…船長が目的地を把握してないのかよ…陸沿いを進んでるから、てつきりあの爺さんの言っていた場所へ向かっているのかと思つた…」

「何だい？あの爺さんの言っていた場所つてのは？」

リュカがモニカに懇切丁寧に説明する…それを見ていてカンダタがハラハラする…更にそれを見たマリーがワクワクしていた事は内緒である。

・
・
・

「…そんな町、知らないねえ…アタイ等も何度かこの辺りには来たけど、町なんて無かつたよ！平原に変な爺さんが一人居るだけだねえ…」

モニカは水夫等と顔を見合わせ、リュカ達に持っている情報を提示した。

「じゃあ、その爺さんが町を造りたがっている人なのかなあ？何か僕等に出来る事はあるかな？もし元の世界へ帰れなかった時用に、町造りの手伝いをしておいた方が、後日優遇されるかも！」

こうして不純な動機で目的地が定まった…

アルルとティミーは「そんな無駄な事してないで、先を急ぎましょー！」と進言したが「無駄とは限らないだろ！何れ重要な事へと繋がるかもしれないだろ！」とリュカに言われ、従わざるを得なくなる…

口の上手いリュカに敵うわけ無いのだ…

<スーより東の平原>

其処には小さな小屋が1軒あり、池を挟んで向かい側には建設中の建物がある、奇妙な場所にアルル一行は辿り着いた。

「以前来た時は、あの小屋が1つあるだけだったんだ」

モニカが小さな小屋を指差し説明していると、その小屋から1人の老人と1人の若い女性が姿を現した。

「あー！も、もしかしてリュカはん！？やっぱりそうや！リュカはんやー！」

なんと女性はエコナであった！

マリーの起こした津波に攫われ、はぐれてしまったエコナが元気な姿で此処に居る！

エコナは勢い良くリュカに抱き付き、徐にキスをする。

誰に見られようがお構いなしだ！

「…んつぶは！エ、エコナ…無事だったんだね！？」

エコナのキスから口を離し、彼女の無事を確認する。

「ご心配掛けて申し訳ない…でも、ウチはこの通り元気や！この近くの海岸に打ち上げられたのを、この爺さんに助けられ介抱してもらたんや！」

「「エコナー！」」

叫ぶ様な声でエコナの名を呼び、泣きながら抱き付くアルルとハツキ。

「無事で…本当に良かった…！」

「ありがとうな…アルル、ハツキ…ウチはメツチャ元気やで！」

「あ…あのう…エコナ様……ごめんなさい…」

アルル・ハツキ・エコナが抱き合い喜んでる側で、マリーが泣きながら謝る。

「私の所為で…ごめんなさい！」

「マリーちゃん…気にする必要ないねんで！ウチは無事やったんやから…泣かんとして」

エコナはマリーを胸に抱き、優しく慰める。

「それにウチ、感謝してるんやで！」

泣いていたマリーが顔を上げ、不思議そうにエコナを見つめる。他の皆も同じ様な顔をしている。

「ウチな…此处で町を造るんや！あの爺さんに協力して、ウチが町を造るんや！…波に攫われてなかったら、こんなチャンスには巡り会えへんかったんやで！！」

「え！？どういう事？…この爺さん、エコナの旦那様？」

「何でやねん！何でこんな枯れ果てたEDと結婚せなあかんねん！！」

「エ、エコナさん…落ち着いて！」

リュカの一言に、暴言吐きまくりで突っ込むエコナ…それを宥めるティミー。

「ワシ、エコナ、見つけた！海で…ワシ、思った。エコナ、出来る！町、造る事、エコナ、出来る！！」

老人が必死でアルル達に訴える。

「………そう言うわけや。ウチ、この爺さんに助けられ話を聞いたんや…そんでチャンスやと思ったんよ！…せやからごめんなアルル！ウチ…これ以上は一緒に冒険出来んねん！此处に残って町を造るから………」

俯きながらも自分の気持ちを言い切るエコナ。

「気にしないでエコナ…貴女は自分の夢を見つけたのだから…それに向かって頑張って！」

申し訳なさそうなエコナに対し、優しく笑顔で励ますアルル。
エコナが無事だった事もあり、皆晴れやかな心で祝福している。
そんな中、マリー一人だけが不安気な顔でエコナを見つめる。

「あ、あの…エコナ様…無理をされてはダメですよ！」

「どうしたん、マリーちゃん？ウチ、無理なんてしてへんよ」

「そうじゃないんです…町を造るって、大変な事だと思いますう。」

エコナ様は凄い人だから町造りの先頭に立って、活躍されると思いますう…」

「ありがと、マリーちゃん…」

「でも町を造るって、一人じゃ出来ません！町が大きくなればなるほど、大勢の人が協力し合い町を発展させて行くと思いますう！そんな時、無理をしてはダメですよ。漁ってはダメですよ。休む事も必要なんですから…」

必死に何かを訴えるマリー…

やはり津波を起こし、海を漂流させてしまった事を気にしている様だ…

「良い子やなマリーちゃんは！さすがリュカはんの娘やね。息子とは血が繋がっているか疑問やけど、マリーちゃんは間違いなくリュカはんの娘やね！」

エコナはマリーを抱き締め、チラリとティミーの事を見る。

「…マリーが良い子なのは同意する！まったくその通りだ！…だがイコール父さんの娘ってのが気に入らない！母さんの血を引くから、マリーは良い子なのであって、父さんの血は邪魔だ！」

「ビアンカさん、聞きました！？貴女の息子は日に日に父親に対して態度が酷くなりますが、どういった教育をされてらっしゃるの？」
ティミーの発言を聞き、リュカが卑屈にビアンカに訴える。

「私の教育は間違っていないわ！きっと父親の影響よ。…血筋って怖いわあ…」

エコナを始め不安気だったマリー、カンダタまでもが大爆笑する！
リュカは苦笑い…ティミーは憮然とした表情で父親を見る…

一頻り笑いアルルがエコナに一時の別れを告げようとした時…

「みんな！ウチ…必ずこの町を立派にしてみせる！せやからちよくちよく遊びに来てや！」

「うん！楽しみにしてるからね！エコナ…頑張ってね！」

アルルとエコナが握手を交わす。

「ところエコナ…町の名前は？」

素朴な疑問をウルフがぶつける。

「よくぞ聞いてくれた！『エコナバーグ』や！この町は『エコナバーグ』や！！世界中に広めておいてや！『エコナバーグ』の名を！」

「スピルバーグみたいな名前だな…」

「何やそれ？」

リユカが思わず口にした言葉に、皆が不思議がっている。

「ああ…気にしないでいいよ。言ってみただけだから…」

リユカの不思議な発言があつたが、改めてエコナに別れを告げて、再び船で最後の鍵を求める一行。

心からエコナの成功を祈り、彼女の為に世界を平和にしようと、改めて心に誓うアルル…

何時の日か皆で祝杯を交わせる日まで…

やり甲斐（後書き）

皆さん吉報です！

エコナさんは無事でした！！

良かったですねえ。

でも此つて、吉報なのか？

父親と息子（前書き）

今回、結構真面目なりユカさんです。

何だかとても違和感あるけど、彼だって真面目になる時があります！

極希に！

父親と息子

<海上>

朝の潮風香る大海原…

アルルは割り当てられた自分の船室で目を覚まし、身支度を調べ甲板へと上がる。

しかし甲板では激しい剣撃の音が響いている！

アルルは慌てて剣に手を掛け、周囲を警戒するが……

ティミーがリュカ目掛け剣を振るっていた！

それを見た全員が、リュカが毎度の如くティミーを怒らせたのだろうと呆れるのと同時に、この二人が本気でやり合ったら周囲に被害が出かねないので、ビアンカに止めてもらおうと彼女を目で探す。しかしビアンカも甲板におり、剣撃を交わす二人を柔和な表情で見つめている…

一体何があつたのだろうか？

30分前　甲板

ティミーは悩んでいた。

真面目なティミーは悩み、誰かに助言を請いたいと思っていた。

しかし悩みを打ち明けるべき人物が居ない……いや、居る事は居るのだが…

一般的に少年が悩み、人生の壁に阻まれたら、父親に相談するのが最善だろう…

彼も父に相談すれば良いのだが、困った事に彼の父親はリュカなのだ！

彼の悩みは、もっと強くなりたい事だ…

最近アルルに魔法を教えているのだが、彼女の成長は著しく、教える側として嬉しい反面、自身の成長に関し、このままで良いのかと悩んでしまう…

父に相談出来ないのであれば、自分より強いと思われる人物に相談すれば良いのだが…

残念な事に、それもリユカなのだ！

他人がリユカにこんな相談をしたら、ティミーはその人に『何であの人に相談したの？意味ないのに…』と言うだろう。

だが…それでも誰かに相談したい…打ち明けてスッキリしたい…そんな思いでリユカに相談を持ちかけた。

「父さん…ちよつといいですか？」

「ん？…どしたの？」

・
・
・

「…と言うわけで、父さんに剣術の御指南を戴きたいのです！」

ティミーは『えゝめんどくさゝい！』とか『そんな事して何になるの？』とか『アルルの前で、恰好つけようとしてるんだあゝ』とか…そんな事を言われるのを覚悟で悩みを吐き出した！

しかしリユカの反応は予想に反し、真剣な眼差しでティミーを見据え、静かに問いかけてきた。

「一つ…聞きたい。強くなりたい理由は何だ！？恰好を付けたいのか？…それともアルルを守りたいのか？」

「……………勿論、アルルを守りたいからです！」

本来こんな質問は無意味である。

ティミーの性格上、『恰好を付けたい』等と言うはずなく、答えは決まっている…

しかしリユカはあえて質問をし、そしてティミーもそれに答えた。
リユカは静かにドラゴンの杖を構え、ピアノ力を下からせる。
それに合わせティミーも剣を抜き、リユカに向かい構える。

二人は同時に踏み込んだ！

（ギンッ！！）

鈍い金属音が辺りに響く！

重いリユカの攻撃に、剣を持つ手が痺れる。

しかし一々怯んではいけない！

リユカの連撃の合間を突き、ティミーは反撃を仕掛ける。

しかしリユカは紙一重でそれを躲し、流れる様に攻撃を仕掛けてくる！

「魔法を使って構わないぞ！」

リユカの一言にティミーは遠慮せず、ライデインを唱えた！

ティミーの唱えたライデインは、リユカの頭上に落ちると思われたが、寸前で放り投げたドラゴンの杖に阻まれ、杖と共にリユカより離れた位置へ落下する。

だがティミーはチャンスと思い、武器を手放したリユカへ突進する！

「バギマ」

一瞬ティミーは怯んだが、リユカのバギマは自分に向かって来なかった為、勢い良く踏み込んだ！

しかしリユカはバギマをドラゴンの杖に当て、風の力で杖を手元に吹き飛ばしたのだ！

ティミーが気付いた時には手遅れで、リユカの手には杖が収まっている。

そして勝負は着いた。

ティミーの剣は後方に弾かれ、リユカの杖がティミーの腹部で寸止めされる。

「ま…参りました…」

ティミーがリユカとの鍛錬を終え、弾かれた自分の剣を鞘に収めると、アルルが心配気に近付いてきた。

「大丈夫ティミー……一体どうしたの、急に？」

ティミーは既に息も上がり顔が上気しているのだが、自分の事を氣遣い近付いてきたアルルを見て、更に顔が赤くなる。

恰好を付けたいと思った事はない……しかしアルルに恰好の悪い所を見られたくないとの思いはあるらしく、父にとは言え負けた所を見られたのが恥ずかしいらしい。

「……最近、生意気なんだよね！パパに対して楯突くんだもん、この子！だからお灸を据えてやったんだ！『オメエーなんか、まだまだだ！』ってね？」

リユカはチャライ口調で、ティミーの頬を杖でグリグリ突きながら、自分の強さをアピールする。

「呆れた……大人気ないわね……！楯突かれたくなければ、父親らしく振る舞えばいいじゃない！」

緊張感無くヘラヘラ笑うリユカを見て、ティミーの擁護に回るアルル。

「ティミー……疲れてるとこ悪いけど、私にも稽古をつけてくれる？」

「アルルう……稽古なら僕がつけてあげるよ……！何ならベットで実践式に！」

サムズアップをし爽やかな笑顔で言い寄るリユカ。

「引っ込んでて下さい！リユカさん、デイン系を使えないでしょ！」

私には勇者ティミーの指南が必要なんです！それに私は何処その女王とは違い、貞操を守る主義なんです！」

手の甲の上に『シッシ』とばかりに手を振るアルル。

「それは不敬罪なのでは？」

「貴方に言われたくありません！」

そう言い残し、ティミーの手を取り船首の方へと行くアルル。

そしてアルルとティミーの組み手が始まる……

意識してしまっているのか、ティミーの動きが若干鈍い……

「さすがリユカ！見事な誘導ね…アルルちゃん、自然な形でティミ
ーの手を握ったわ」

「あの二人…上手くいくと良いね」

「そうね…ティミー、純情だから…心配ね」

「うん。僕にそっくりだよ、あの子！」

「…それ…ギャグよね？」

そこで夫婦の会話は途切れた…

リユカの一言がギャグなのか、確認する事が出来なかった…
多分ギャグだろう…

もし本気でそう思っているのなら…重傷だ！

父らしく、父らしくなく

<海上>

辺りが闇に包まれ、甲板では夜番の水夫数名のみが作業している中、ティミーが漆黒の海を見つめ物思いに耽っている。

「よう、我が息子！悩む姿が板に付いてるな！」

そこに陽気な声でリュカが現れた。手にはワインと、2つのグラスを持って。

「い、いえ……悩んでいる訳では……」

生真面目に返答するティミー……彼らしいと言えば彼らしい。

そんな息子を見て苦笑しながらグラスを渡すリュカ。

「と、父さん！お酒は………」

自らのグラスにワインを注ぎ、軽く一口飲むリュカ。

「まあ付き合えよ……僕の父さんは息子と酒を飲み交わすことなく他界したんだ……僕だって、何時ベットを共にした女性に刺し殺されるか分からないんだからさ」

「ふふふっ……そうですね」

二人とも笑いながらワインを少しずつ飲み、甲板の手摺りにもたれ海を見つめてる。

「……アルルは……良い娘だ。僕は彼女のお陰で救われた……」

「救われた！？」

「うん……バハラタ東の洞窟でカンダタに再会し、アイツが命乞いをした時に……僕はアイツを憎み、殺してやりたい気持ちでいっぱいだった！シャンパニーの塔でアイツ等盗賊団の悪行を目の当たりにして、許せなくなっていたんだ……」

「そんなに酷かったんですか……改心するなんて言葉、信じられるわけですね……」

「いやティミー…それは違うんだ。もし何らかの確証があり、カンダタが改心する事が現実であつても…僕はあの時殺してやりたかつたんだ！」

「父さん……………」

「今なら自分でも分かる。あの時、自身の欲求の為にアイツを殺そうとしたんだ！…誰の為でもなく…」

珍しく苦しそうに語るリュカに、ティミーは言葉を掛けられない…
「だからお前がアルルの事を好きになったと知った時、嬉しかった…自分の事の様についての言い過ぎかもしれないけど、本当に嬉しかったんだ」

先程とは一転して明るい表情になるリュカ…しかし直ぐに眉間にシワを寄せ悩み出す。

「でもねティミー…ある思考に達したら、喜んでられなくなつたんだ！」

「え！？何ですか急に！？…まさか身分の壁とか言わないですよね！？」

「あゝ！？ぶつ飛ばすぞコノヤロー！身分とかそう言うの、考えた事も無い！」

ピアノ力を巻き込み、この世界へ連れてきた事に激怒した時と同じ口調で怒るリュカ。

「す、済みません…」

「ふう…そうじゃなくてさ！お前の性格の事なんだよ…」

「はあ？…僕の…ですか？」

「うん。お前は『バカ』が付く程真面目な性格だから、互いの住む世界が違うと言って、諦めちゃうんじゃないかって…」

「住む世界って…やっぱり身分の事じゃ…」

「リユカは思わずティミーをヘッドロックする…が、力はそれ程入れてない。」

「物理的に違う世界に住んでいるだろ！此処は僕等の住んでいた世界じゃないんだ！元の世界に帰ろうとしているだろ…まあ、帰れな

くても良いかなって思っではいるけど」

「ああ…そう言う意味ですか…済みません…」

「はあ…お前、本当に頭堅いね…まあいい！そこで考えた…息子の為に何が出来るか…」

リユカは其処で言葉を句切り、グラスのワインを飲み干す。

「最終的な決断はお前とアルルに任せるが、この世界に止まるも良し…元の世界に連れて帰るも良し…二人で相談して決めろ！」

「？」

ティミーはどうやらリユカの言葉を理解しきれてない様だ。

「察し悪いヤツだな…つまり、お前が自分の気持ちをアルルに伝えようとした時に、住んでいる世界が違うからと諦めないで良いように、二人同じ世界に住めば良いと言ってるんだ！」

「………はあ………そりや同じ世界に住みますけど………」

ガックリと頭垂れるリユカ…珍しい光景だ。

「…お前さあ…希望はともかく、王位を継がなきゃいけないと思ってるんじゃない？」

「ええまあ…分かってている限りで、父さんの息子は僕だけですから…」

「じゃあさ、アルルがグランバニアへは行きたくないって言ったら、どうするの？」

「え！？そりや無理強いは出来ませんよ！」

「（イラッ！）お前バカなの？」

普段とは反対で、リユカがティミーに苛ついている。

「父さんにバカって言われたくないなあ…」

「お前がアルルに思いを告げて結婚するでしょう！」

「あ…はい…」

「グランバニアへ帰らないと王位は継げないよな！？でもアルルはアリアハンで暮らしたいって言ったらどうする！？結婚だけして、離れ離れで暮らすのか！？それともどうせ結ばれぬ運命と諦め、思

いを告げずグランバニアへ帰るのか!？」

「……………あ！イヤですよ！僕はアルルの事が好きなんです！諦めたくないし、離れたくもない！」

「やっと理解してくれたか…疲れた…」

リユカはワインをグラスへ注ぎ、煽るように飲み干す。

「だからさ…無理に王位を継がないでも良いって言ってるの！」

「でも…グランバニアはどうするんですか!？」

「僕個人の希望を言えば…アルルと共にグランバニアへ帰り、ティミーに王位を継いでもらいたいよ!…でも父として、息子の幸せを優先する!…僕もビアンカもまだ若いし、頑張って跡取り息子を作るのも手段の一つだし…娘の誰かを女王にするのもありだよ…何だったら、血筋なんか気にせず、やりたいヤツにやらせるのも手だと思うね!」

「そんな無責任な…」

「確かに無責任だが、お前が気にする必要は無いって事だよティミー!」

リユカは優しく微笑み、ティミーのグラスへワインを注ぐ。

「お前は自分の幸せを掴むんだ!何としてもアルルのモノにしる!」

「が、頑張ります!!」

顔を真っ赤に染めて決意を語るティミー。

「まあ…告白が成功したらの話だけだね!振られるなよティミー…

『ごめんねティミー!私、貴方の事は眼中に無いの!』とか言われたりして!」

「や、やめて下さいよ!…そうならない様に、その道の達人としてアドバイスはありませんか?」

「えー…僕のは参考にならないと思うけどなあ…」

「……………自覚は…あるんですね…」

「「ふふふっ……………あはははは!」」

思わず笑い合う親子…

リュカは、まだ8割残っているワインボトルをティミーに渡し、船室へと戻って行く。

「ちょ、父さん…僕、こんなにいらないですよ!」

「酔っ払った振りして押し倒しちゃえよ!もしくは酔わせて押し倒しちゃえよ!」

「出来るわけないでしょ、そんな事!」

酒の恐怖を身に染みて分かっているティミー…

アルルに飲ませるなんて恐ろしくて出来ないだろう!

この晩の語らいは、ティミーの心に残る事になる。

父と初めて酒を飲み交わし、恋の助言をしてもらった事を…

父が、父らしくない事をしてくれた事を…

父らしく、父らしくなく（後書き）

今回、サブタイトルに悩みました。

息子と酒を飲み交わすのって、父親にしたら夢でしょうから……
リュカは幸せ者ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6325x/>

ドラゴンクエスト? そして現実へ...

2012年1月13日22時48分発行